文學博士 佐佐木信綱
文學博士 五十嵐力
文學博士 吉澤義則
文學博士 高野辰之
文學博士 本間久雄
共著

題簽・吉澤義則

裝幀・小林古徑

日本文學全史刊行の辭

文學はあらゆる意味で、一國文化の象徴である。それはその國の一般民衆が、その時代々々に於て、何を惱み、何を憧れ、何を苦しみ、何を求めたかを、最も端的に表示したものだからである。一國の文學史は、この意味に於て、あらゆる歴史の精髓であり得る。吾等は、實にこれを學ぶことに依つて、始めて最も妥當に、直截に、その國民の精神生活の跡を辿り得るのである。

今日の我が日本が、將來に於て更に一層の飛躍と發展とを敢てする爲には、何よりも先づ、過去三千年に亙る我が文學の歴史を精細に檢討することを以て、その急務の一つとする。かくすることによつて日本文化の眞髓を把握することなしには、一切の飛躍も發展も、つひに空疎に終ることを免れないからである。

吾等が、日本文學研究の領野に於て、現代日本の持つ最高權威者たる五先生の熱心な援助の下に、ここに『日本文學全史』の刊行を企てた微意亦こゝに存する。卽ち重ねて云ふが、吾等はこれに依つて、日本文化そのものの相を最も正當に認識し、その現れを最も豐潤に鑑賞し、その本質を最も的確に把握し、そして又、かくすることに依つて、吾が當來文化建設についての誤らざる批判と、輝かしき希望とを贏ち得ようとするのである。

願はくは吾等の意のあるところを諒とせられ、絶大の同情と聲援とを賜らんことを、文藝家各位、敎育家諸彥、並びに日本文化に關心を持たれるあらゆる知識階級に向つて、衷心希ふものである。

昭和十年五月

株式會社 東京堂

内容及執筆者

日本文學全史　**卷四**

平安朝文學史　下卷

五十嵐　力著

藤原隆能筆　源氏物語繪卷　東屋　（徳川美術館藏）

序

およそは上卷の序に讓つて、こゝには特に繰返したい事、及び新たに加へたいと思ふ事をほんの一つ書きに、書き記すことにする。

本卷もまた徹頭徹尾悉く著者の筆に成つた。

著者は常に「新」「完」「警」の三義を標準として、取捨し、選擇し、說明し、批評した。

著者は「史」としての役目を重んずるところから、思想及び樣式の變遷發達に關して、常に有機的徑路を辿らうと努めた。創作心理や時樣の推移に對して、時折史家らしからぬ空想的の夢物語を試みたのも、その爲めである。

著者はまた作者及び作物について、第一にその文學的本領の一面を記述し、文學史に入つ

て文學を見失ふの遺憾なからしむるやうにと努めた。

源氏物語以後を端折つたことは、著者に取つて、實に慚愧に堪へぬところであるが、事情御諒察を願ひたく、尙ほ、その部分を精叙した補講の一卷を公にし得る日をお待ち下さるやうに御願する

本卷掲載の圖版については、特に堀江知彦、田中重久、兩君の御骨折を煩はした。また增山新一君の諸方面にわたる御執勞に對しては、殆んど感謝の辭を知らぬところである。特にこゝに記して、三君に謝意を表する

最後に讀者諸君の久しいお待ちわびに對して、特に甚深の御禮を申上げねばならぬ。著者の心でも、昨年の晩秋位までには、無論完了のつもりであつたが、鈍感と遲筆と思ふに任せぬ外境とが、遂に此の心外なる延引を餘儀なくせしめたのであつた。これが爲めに、八方に御迷惑をかけたことは、實に御申譯の無い次第である

著者はこの非常時局に甲斐々々しい銃後の出來ぬのを、常に恥かしく思つてゐたのである が、同時に常に、源平の爭亂をも知らずに過ぐしたと云はれる比叡の學僧寶池坊證眞の心意氣を偲びつゝ、この小著の筆を執つた。お蔭によつて、とにかく長き愛着の王朝文學上下兩卷を取り纏め得たのは實に難有いことである

昭和十四年六月三十日

五十嵐　力

目次

序

目次

第十五　『源氏物語』の二大先驅……………………………………一―九四

『宇津保物語』と『落窪物語』とは、『竹取』『伊勢』『大和』と『源氏』との間に出でたる幾多の小說群の代表として殘存したる名作なり――『宇津保』『落窪』の成立年代――『宇津保』先づ出でて『落窪』次げるならん――二者に於ける骨格の對立――『宇津保物語』の作者――源順說と藤原爲時說――恐らく源順か――『宇津保物語』の趣向の骨子――人物の系統――『俊蔭』の梗概――『藤原の君』の梗概――『忠こそ』の梗概――王朝の物語に於ける構成上の三形式――『竹取』『萬葉』式――『伊勢』の櫛の齒式――『宇津保物語』の二重襷き式――二重襷式の完成は『宇津保』にして、『源氏物語』はその完成者なり――『宇津保』に於ける二重襷き式一部讀切式の併說――『宇津保』の作者の創作心理――長く面白く複雜に――『宇津保』の三段組織――神怪不可思議の冒頭部戀愛競演の中

『古來風體抄』――彼れが和歌批判の標準――彼の特色は主觀的沈潛によつて、題詠に美しき餘情の生命を與ふるにあり――彼れが語感の鋭敏――頓阿が見たる俊成の歌の玄の又玄なるもの――流行を超越した淡々たる彼れの名歌――當時の代表名歌――平安朝の和歌は俊成、西行を有することにより、他のあらゆる文學の衰頽したる末期に於いて、掉尾の偉觀を見せたり――一代の歌人等が俊成と共に空想の虛構に主觀の迷彩幻影を與ふるを事とする間に在つて、西行はその實見と實感と實行とを歌ひたり――西行の歌の中心特色は道心と花月風流の情と世間關係の俗情との深く絡み合ひたる奧床しき味ひにあり――西行の和歌は禪定の修行なり――彼れの代表名歌――彼れは佛教よりも和歌を愛し重んじたるならん。

第十九　源氏物語以後……………………四九四―五六三

『源氏物語』以後を端折るについての御わび――『源氏物語』の影響は物語、日記、歷史、和歌の殆んどあらゆる方面に及びたり――その影響を受けざりしもの、恐らく『今昔物語』唯だ一つのみ――物語小說系の文學――源氏以後の主なる小說は『狹衣物語』『濱松中納言物語』『夜半の寢覺物語』『堤中納言物語』『とり

圖版目次

挿畫目次

平安朝文學史 下卷

第十五　源氏物語の二大先驅

宇津保物語と落窪物語

一

『竹取』『伊勢』と『源氏物語』との間には、可なりに多くの物語が出來たのであらう。『落窪物語』や『枕の草紙』『源氏物語』などの中にその名を擧げられ、もしくは話題とされたものは、『交野の少將物語』を始めとして、『住吉』『音聞き』『空穗』『殿うつり』『月待つ女』『梅壺の大將』『人目』『國讓』『うもれ木』『道心すゝむる』『松が枝』『駒野』『正三位』『からもり』『かはほりの宮』『こやのとじ』『芹川』等の十數篇に過ぎぬけれども、『宇津保』とほゞ同じ時代に書かれたと思はれる『蜻蛉日記』の冒頭に、

世の中に多かる古物語の端などを見れば……

と書いてあるのを見、また『源氏』の螢の卷に、六條院の女房達が物語の讀み書きに執心する有樣を記して、『御方々繪物語などのすさびにて明し暮らし給ふ』『明け暮れ讀み書きい

となみおはす、「此方彼方にかゝる物どもの散りつゝ御目に離れねば」などと繰返して書いて居るところを見ると、圓融、花山兩朝の餘程以前から、長短いろ〳〵の物語が數多く書かれて、當時の宮人達の、殊に上流女性の心を惹きつけてゐたのであらう。けれども筆寫以外に傳播の道を持たなかつた時代の作品は、時のさいなみに容赦なく篩ひ落されて、片端から忘れられ、捨てられ、やがて散逸して其の影を失つた。而して『竹取』『伊勢』『大和』と『源氏』との間を繫ぐ物語は、唯だ此の『宇津保』『落窪』の二篇のみとはなつたのである。

かくして『宇津保』『落窪』の二篇は『源氏』以前の小說群の中に於ける稀有の好運者として、殘存することとなつたが、しかしながらそれは單に好運の爲めではなくして、その優越した資格の爲め、忘られ得ざる價値の爲めであつたのであらう。『宇津保』と『落窪』とは前代の『竹取』『伊勢』を繼承して、一種の進化發展を遂げたものである。また前後の失はれたる小說群を蹈まへて彼等を代表する資格を持つてゐたものであらう。殊に何よりも貴いのは、大作『源氏』の先驅をなして、その大成に貢獻してゐることである。若し樹木の群の幾つかを取り纏めて一つの大森林と見、山嶽の群立を綜合して大連嶺と見るやうに、數十年にわたる數篇の作を取り纏めて、一つの連續した小說の集團と見ることが出來るならば、吾等は『宇津保』『落窪』を序分の先鋒とし、『源氏物語』を正宗分の牙營とし、而して『濱

宇津保物語　（前田侯爵家藏）

松中納言』『狹衣』を流通分の殿と見て、こゝに一條朝を中心として數十年にわたる小説の一大連鎖の横はるのを見ることが出來ると考へる。

二

『宇津保物語』は圓融天皇の天祿二年（一六三二）以後に書かれたものである。『落窪物語』は一條天皇の長保元年（一六五九）以前に出來たものである。二篇の中のいづれが先に出來たかは明らかでないが、恐らく『宇津保』が先づ出でて『落窪』が之れに次いだのであらう。而して『落窪』は『宇津保』に對立する意氣を以て書かれたものであらう。『宇津保』が手を廣げ過ぎたのに對して、『落窪』は緊縮をつとめたかのやうに見える。『宇津保』に於ける文體の雜駁放漫に對して、『落窪』は純粹合法を心がけたかのやうに見える。『宇津保』の無道徳的傾向に對して、『落窪』は一種の道徳を暗示してゐるかのやうに見える。約していふと、廣きに對して縮りを、放漫に對して合法を、無道に對して有道を、後者の『落窪』に見る是等の特色は、いづれも先行の『宇津保』に對する一種の進歩と見るべきもので、殊に無節制に擴大された前者に對して無駄の無き統一を見せたところが、『落窪』の後

出を證明するやうに見える。

『宇津保物語』の作者については『河海抄』が疑ひながら傳へた源順說と、細井貞雄が『玉琴』で想像した藤原爲時說とがある。源順は同時に『落窪物語』の作者とも傳へられて居るが、この二篇が同人の筆に成らぬことは、右に述べた違つた特色の對立が證明するのみならず、二篇の筆致が大體その趣を異にして、例へば『宇津保』に於いて幾度も〳〵繰返されてゐる「甚だ畏し」「事もなし」「に鑿したる如く」等の詞癖が、『落窪』には一度も現はれてゐないを見てもわかる。『宇津保』に繰返された煩瑣な儀式の記述や、和歌の夥しい連記が、『落窪』には殆んど試みられずして、のみならず、「事どもいと多かれど書かず」「委しく書かず、思ひやるべし」などと斷りつゝ省略してゐるのを見てもわかるであらう。然らば『落窪』の作者とは同じくないとして、さて想像された二人の作者、源順と藤原爲時の中の、いづれがそれらしいかといふと、恐らく源順の方が合理的の作者らしさを、より多く具へてゐるであらう。漠然たる言傳であるにしても、とにかく言傳への古いことが、其の一つである。「國讓」の卷に於ける激烈な立太子爭ひが、藤原氏出の皇太后の恐るべき苦肉の御助勢があつたにかゝはらず、遂に源氏を外戚とする貴宮の皇子の勝に歸したことが、何となく此の物語の作者の源氏なることを暗示するやうに見えるのが、その二つである。作の本質、文體

等から見て源順說を證明すべき要素は、まだ全く見出だされないが、以上の理由によつて、吾等は暫らく源順朝臣を『宇津保物語』の作者と假定したいと思ふ。

三

宇津保物語古寫本（帝國圖書館藏）

『宇津保物語』は他の王朝の物語と同じく、情と美との世界に遊んだ當時の貴族男女の生活を空想本位に描いたものである。『源氏物語』の約五分の三にも達する二十卷の大作で、その內容は非常に錯雜なものであるが、作者の趣意の骨子は、恐らく音樂の無上味と女人美の大魅力とを二大中心として、他の多くの興味を、その周圍に纏綿せしむるに

あつたのであらう。人物の二大系統は、皇族の方面では嵯峨、朱雀、今上、東宮の御、四代にわたり、人臣の方面では、琴の天才血統で代毎に優れて行つた清原俊蔭、その女、仲忠及び幼き犬宮の相つぐ四代が、之れに呼應して居るかのやうに見える。第一卷を「俊蔭」といふ。次ぎはその梗槩である。

むかし嵯峨院の御代に清原俊蔭といふ人があつた。文も讀まされず、物も敎へられぬに、心の賢きこと限りなく、七歳にして高麗人と詩の贈答をなし、その後度々題を賜はつてその才を試みられたが、度毎に試問の碩學を驚かし、十六歳にして遣唐使に選ばれた。父母と涙の別かれをして、さていよ〳〵船出したが、唐土にやがて着かうといふ間際に、大時化に遭つて、波斯國に漂着した。

渚に吹き寄せられて、便りなさに觀音を念じてゐると、鳥獸も見えぬ浪打際に、忽ち立派な鞍を置いた白馬が現はれた。そして俊蔭の傍に寄りそつて其の背に乘せ、飛ぶやうに馳せて、瞬く中に涼しい梅檀の木蔭へ伴つた。そして其處に俊蔭をおろすと、やがて消え失せた。樹蔭には三人の仙人が虎の皮を敷いて、琴を彈いて遊んでゐたが、彼等は異國の少年俊蔭を迎へて、さま〴〵に痛はつた。彼等は始終琴ばかりを彈いて居た。俊蔭は日本に居た時か

藤原信實筆　源順像（舊佐竹侯爵家藏）

ら已に琴の技に達してゐたので、久しからずして、三人から一手をも殘さず習ひ取つた。

それから彼れは花の露、紅葉の雫を嘗めて日日を送つてゐたが、翌年の春頃から、遙か西の方で、木を伐り倒す斧の音がするのを聞きつけた。程が遠いのに音が高く、しかもそれが我が彈く琴の音に通ふ所を見ると、これは名樂器を作るべき名木に相違ないと考へた。居ること三年、彼れは遂に仙人に暇を乞うて斧の聲を慕つた。急ぎに急いで、海、川、谷、峰を越えては進む中に、その年が暮れ、翌くる年も亦暮れた。そして三年目の春になつて、やつと見出だしたのは、天に冲つた大山の深い谷底に根をおろして、梢は空につく樣な桐の大木であつた。木の下には斧を揮つて樹幹に切り込んで居る者がある。

頭の髪を見れば劍を立てたるが如し。面を見れば餘もゆるが如し。足手を見れば鋤鍬の如し。眼を見れば金碗の如くきらめきて、いみじき嫗翁子ども、孫など率て、頭を集へて木を切りこなす。

それは業によつて此の大谿谷に封ぜられ、近づく生物鳥獸を食することを許されて、運命の木を伐りつゝある阿修羅であつた。彼れはやがて阿修羅に誰何された。「日本國王の使清原俊蔭と申す。此の木を尋ねて山河を跋渉すること三年、どうぞ倒された木の片端を賜はつて琴を作り、日の本の老いたる父母に聞かせて孝養することを許して下さい」と云つて哀願した。阿修羅は眼を車の輪の如くに見くるめかし、牙を劍の如く喰ひ出して、大きに怒り、おはや俊蔭を喰まうとすると、晴天忽ち霹靂して車の輪のやうな雨が降りしきるその間を、龍に乘つた童子が下つて來て、黄金の札を阿修羅に渡した。札を見ると、

木の下段三分の一を、日本の衆生俊蔭に施せ。

とあつた。阿修羅はびツくりして、七度俊蔭を禮した。「あな尊と、扨は天女の御子でおはしましたか。此の木の下の段は音聲によつて天下の寶となるべき部分で御座りまするぞ」と云つて、荒木取りをして居ると、そこへ天稚御子が降つて來て、三十張の琴を立派に造つて昇天した。

やがて俊蔭はそこから西にあたる梅檀の林に移つて、唯だ一人琴の音を試みたが、三年目の春、そこへ七人の天人が天降つて來た。そして「御身は、琴によつて世を爲し家を興すべき天命の人である」といひ、三十の中で、殊に聲の優れた二つに「なん風」「はし風」の名を與へ、この二つの琴をば人間には聞かせるな。此の二つの琴の音のする所には、何處にでも必ず訪ねて行くであらうぞ」と云つて別かれた。

俊蔭はそれから西を志して波斯の國に行き、ついで日の本に歸朝した。途中に川があれば孔雀が出て來て負うて渡り、谷があれば龍が現はれて渡してくれた。三十の琴は、難儀に出逢ふ毎に、旋風が起つて、捲きあげては無事に志す彼岸に吹き届けた。彼れは其の途中で、宿縁の山の主七人に逢つた。彼等は十張の琴に、りうかく風、ほそを風、やどもり風、山もり風、せた風、花園風、かたち風、みやこ風、あはれ風、おりめ風の名を與へ、手首の血をあやして、それぞれの琴にその名を書きつけた。彼れは此の七人に無名の琴七つを與へ、先に琴を教はつた三人の仙人にも三つを贈り、波斯の帝、后にも各々一つを獻じ、殘れる琴十二を携へ、交易の船に乘つて、二十三年目に、三十九歳で日の本に歸朝した。それは父が亡くなつて三年目、母が亡くなつて五年目であつた。

彼れは覆奏して身に餘る恩寵を蒙つた。その中に一世の源氏を娶つて一人の女兒を生

ませた。その子聽明無双で、四歳の夏より琴を教へたが、十歳前後にして、父が彈く手を、一つ殘さず習ひ取つた。俊蔭は波斯國から將來した十二の琴の中、なん風、はし風の二張をば、ひそかに邸内の西北の隅に埋め、りうかく風を娘に與へ、ほそを風を我が料にして、その他をば帝、后、東宮、大臣等に奉つた。帝はそれらの琴どもを試みさせられた序に、俊蔭に命じてせた風を彈かせられたが、彼れが大曲一つを彈くと、

大殿の上の瓦碎けて花の如く散る。今一つ仕るに、六月中の十日の程に、雪ふすまの如く凝りて降る。

帝は驚歎遊ばされて、東宮の琴の師となれ、納言の位を賜はるであらうと仰せられたが、俊蔭は固く辭し奉つて再び朝廷に仕へず、三條京極に廣く面白い家を作つて、暮ると明くと、ひたすら娘に琴を習はせた。

さる程に娘が十五歳の二月に母が亡くなつた。つゞいて俊蔭も病の床に臥したが、自ら起たざるを知つて、娘を枕もとに呼び、屋敷の隅の土中に深く二張の名琴を埋めておいたことを語り、「此の琴ゆめ〳〵人に見せるな。幸、禍、いづれにてもその極に達した時、もしくは虎狼の餌食になり、匪賊の兇刃にかゝらうとした時に此の琴を鳴らせ。若し子があつて、その子の十歳以前に異常の才器を認めたならば、此の琴を預けよ」と遺言して亡くなつた。

乳母もつゞいて亡くなつた。

あとに殘つたのは嵯峨野といふ下使の老媼たゞ一人で、二人は貧しきまゝに、有りあふ家財を賣りしろして存へたが、その中に或日太政大臣が賀茂詣の爲め、その前を通ることがあつて、その若小君の兼雅といふが、ふと列にはぐれて、此の邸に迷ひ込んだ。そして彷徨ふ中に此の娘をかいま見て一夜を契つた。

大臣家では驚き騷いで、八方に手を分けて若小君を求めた。そして翌くる日、茫然として街頭にたゝずむ若小君を見出したが、その後の嚴重なる監視は、長く若小君の一寸の外出をも、文のたよりをも不可能ならしめた。

俊蔭の女は一夜の夢で、たゞならぬ身となつた。家は唯だ荒れに荒れる。やがて賣代すべき物も無くなつたが、その間にも嵯峨野は甲斐々々しくかしづいて、無事に產をさせた。生れたのは玉の樣な男の子で、これが後の主人公仲正である。此の子が五歲の秋に嵯峨野が亡くなつた。それから此の子は川に出でて魚を釣り、後には山に入つて薯蕷野老を掘り、木の實を拾つて來ては母を養つたが、或日山の奥で、四本の大杉が抱き合つて室内の形をなしてゐる大きな空洞を見出たし、母を伴つて住ませようと思つてゐると、大きな牝熊牡熊が出て來て、彼れを喰はうとした。子供は泣いて詫びた。一山の王我れを助け給へ、我れもし

山の王助け給へ　萬治版（早稲田大學圖書館藏）

空しくならば母も徒らになられるであらう。

己が身の中に、親を養はむに益なき所あらば、施し奉るべし。足なくはいづくにてか歩かむ。手なくは、何にてか木の實かづらの根をも掘らむ。口なくは、いづくよりか魂通はむ。腹胸なくは、いづくにか心のあらむ。此の中に徒なる所は、耳の端、鼻の峰なりけり。これを山の王に施し奉る。

といふと、熊どもは猛き心を失ひ、空洞の住所を子供に讓つて立ち去つた。子はやがて母を伴つて此の大杉の空洞に移つた。さて埋められた二張の琴に、他の琴をも携へて來て、それから子供に琴を習はせると、

熊、鹿、猿、狼が此の物の音をめでつゝ群集して、山の產物を採り集めて來ては、母子に奉仕した。かくして猿どもの供養を受けつゝ、人なき世界で、母は每日幼き子供に琴を習はした。子の技は、いやが上にも進んで、やがて母にも優つて來た、その中に彼れが十二歲の頃である、東國の武士等が都に攻め上つて、此の山に入り込んだ。そして鹿猿が群集するのを見て、此の空洞に迫つて來た。母は運命の窮まりと觀念し、父の遺言に從ひ、なむ風を取り出したが、一聲かき鳴らすと、

大きなる山の木擧りて倒れ、山さかさまに崩る。立ち闘めりし武士、崩るゝ山に埋もれて、多くの人亡せぬれば、山さながら靜まりぬ。

母子が大難を遁れてほッとして居ると、その日帝は北野に行幸あつて、此の山の麓を通らせられたが、供奉してゐた右大將は昔の若小君であつた。彼れは遙かに聞こゆる琴の音を慕つて、母子に逢ひ、やがて都に迎へ取つて三條堀川の綺麗を盡くした新邸に住ましめた。

俊蔭の女はやがて兼雅の愛を獨占して、一條の御殿に住ませた多くの妻妾は全く顧みられなくなり、院の帝の女三ノ宮までが俄かに空閨を喞たれるやうになつた。子は十六歲の二月に元服して名を仲忠といつた。やがて殿上を許され、十八歲にして侍從となつて、帝、東宮の上もなき寵遇を賜はる身となつた。かくして仲忠母子は上下に敬愛せられ、殊に二人

の琴に對する憧れは上流一般の最大關心となつた。帝(朱雀)は、彼れの祖父俊蔭が「只今大臣の位を賜ふとも、此の琴は得傳へ奉らじ」と奏して仕を辭した琴の音を、是非孫の仲忠から聞きたいと所望された。仲忠の母に對しても、

「暫し參らせ、職の曹司の方などにや住ませ給はぬ。さらば渡りて聞きてむかし。」

「一寸の間お前の母に宮中住みをさせてはくれぬか。もし中宮職の室などに來て泊つてゐてくれるならば、そこへ往つても聞けるであらうに」とまで御憧れ遊ばされた。

或年の八月、兼雅が三條堀川の邸に相撲の還饗の催しがあつて、管絃の賑はひが面白く引きつゞいたが、左大將正賴が、仲忠に琴を所望した。仲忠は容易に肯かなかつた。彼れは父の兼雅から强ひられても猶ほ頷かなかつたが、最後に正賴が「では、今宵の御祿に秘藏の娘(貴君)を奉らう」と言ふと、仲忠はやッと納得した。そして彈いたのは、曾て帝の御前で彈いた曲よりは遙かに面白いものであつた。その夜正賴は家に歸つて、北の方にその事を話した。

「貴宮のお蔭で、えらいものを聞いて來ましたよ。」

「何で御座いました？　まあお羨ましい。」

「…仲忠の侍從が、待てども〳〵出て來ん。待ちくたびれて居ると、やッと出て來ましたね。

すかさず摑まへて、「さあ例の琴を聞かせよ」と言うたが、ウンと云はん。父右大將（兼雅）が、見かねて、内に入つて、手づから名器の琴を持つて來て、「折角の仰せだ、さあ仕れ」と云つて勸めたが、やッぱり從かん。おれッたくなつて、「是非聞かせなさいよ。祿には秘藏の娘を上げる」といふと、あの仲正、すぐに下りて舞蹈したが、無類の調子に調べて、いろ／＼彈いて聞かせましたよ。いやその面白さ。父の右大將もすッかり感に入つて、涙を落してゐました。實にえらいものだ。とても他人の眞似られることではない。是非お前にも聞かせたいと思ふが。」

「どうしたら、聞けるでせう。」

「さあ、好い加減のことでは彈きませんよ。琴を前に据ゑて、陛下がお責めになつてさへ、手も觸れぬといふ男だからな。今夜も色く逃げられるところを、そこは功を經たおかげで、油斷なく、抑へて責めたから、のがれかねて到頭彈いたといふわけさ。」

「では貴宮をだしにして、どうぞ是非！」など言つたら、彈きませうか。」

「それなら、彈きませう。いづれ折を見て。」

と、御夫婦で話し合はれた。あとは次ぎ／＼の卷で。」

と、これが俊蔭の卷の最後の一節である。

四

以上が『宇津保物語』の代表部分とも視られ、またこの一卷のみ引き離しても愛讀された「俊蔭」の梗概であるが、讀者は之れによつて、その傳奇的、空想的、誇張的、超自然的傾向が主相を成して居ることに氣づかれたであらう。そして此の卷から次ぎなる「藤原の君」の卷への推移には、傳奇的、超自然的の世界から自然的、人間的の世界に移る趣のあることを見出だされるであらう。もう一つ、此の一卷を一纏めにして、次ぎの一卷に飛び移るべき興味の連絡に腐心した跡を見出だされるであらう。

横山由清書入本（帝國圖書館藏）

第一巻から第二巻の「藤原の君」へ推移する趣向、それは、左大將正頼を楔子として衆人渇仰の焦點となつた男性仲正から、同じく衆人戀愛の焦點となつた女性貴宮へ移ることである。此の巻の梗槩は左の通りである。

むかし藤原の君と呼ばれた一世の源氏があつた。名を正頼と云つた。顔貌、心魂、學問、遊藝すべてに優れて天下の輿望を集めてゐた。彼れに二人の北の方があつた。一人は太政大臣の一人娘で、一人は嵯峨の上皇が、「彼れの將來が頼もしい、我が皇女をも取らさう」と云つて賜はつた皇女、女一の宮である。この二人の腹に生れたのが男十二人、女十四人、その中で最も優れたのは、男では宮腹の七郎なる侍從仲澄、女では同じく宮腹の九の君貴宮であつた。正頼の家は三條大宮にあり、四町の處を四つに分けて輪奐の軒を並べ、そこにあらゆる男女の子等を住ませた。またあらゆる女子の婿を迎へて、更に外住をさせなかつた。そして「大きなる家なれば、わが世の限りは、かくて住み給へ。外へおはせむは我が子にあらず」と云つてゐた。

貴宮は十二歳にして裳着したが、その輝く美貌は多くの男の心を惹きつけた。最初に彼女に懸想したのは源宰相實忠であつた。彼れは貴宮を戀ひ始めてから、全く妻子に引き別

れ、やがて成らぬ戀に泣きつゝ、うらぶれの身を山林に隱したが、晩年朝廷の御憫みによつて再び魂の拔けた殘骸を禁中に現はした。第二に思ひを運んだ色好みは仲正の父なる右大將藤原兼雅であつた。子の仲正も亦切なる戀をつゞけた一人であつたが、一たびは女の父の正頼に許されながら、到頭その志を遂げることが出來なかつた。その外に平中納言正明があつた。兵部卿宮、彈正宮があつた。殊に珍らしいのは同母兄なる侍從仲澄の身も世もなき戀であつた。異性の愛が人倫を超越した事を寫して、時代相の極限を暗示したのであらう。彼れは母より、父より、戀する妹より、淺ましがられ、悲しまれ、而して痛はられつゝ、遂に成らぬ戀に悶死した。風變はりな一人は上野の宮といふ古皇子で、これは陰陽師、巫覡、博打、賣僧、京童、大學の衆と、あらゆる時の奸智を集めて謀を問ひ、東山のさる寺に大供養會を催して、物見に詣で來た貴宮を奪はうとしたが、まんまと其の裏を掻かれた。正頼は年若く容貌好き下臈の女に美服させて、「お前は果報者だ、貴君のお蔭で、宮樣の奧方になれるぞ」などと戲れて送り出したが、宮は正眞の貴宮と思ひ込んで、一心にかしづかれた。こゝにまた賤しき腹に生れた皇子の、姓を賜はつて人臣となつた三春高基といふ極端な吝嗇家があつた。彼れは大臣にもなつたので、獨身も通し難く、「我れ物食はぬ女得ん」と云つて、徳町といふ金持の町女を娶つたが、貴宮の美を聞くと、「家の內になき物はなし、時の上達部も貧

しきものなり」などと云つて、その富を誇りつゝ、財を抛つて貴宮の愛を求めた。良岑行政は唐船にかどはかされて彼土に渡り、學藝の蘊奥を窮めて八年目に歸朝したが、正頼の子達の師匠として、正頼の家に住む中に、いつしか現心で懸想文を書く身となつてゐた。さて又參議太宰帥滋野眞菅は年の程六十歳ばかり、都に上る途中で妻を失つたが、貴宮の美を聞き、手を變へ品を變へて戀の成就を急いだ。「ある限りの財を使ひ盡くすとも、女を得ずにはおかじ」と、仲媒にいふと、「然なり、世界は凡べてが金にて侍り」などと合槌を打たれては、欺かれ賺されして、徒らに財を費した。そして

翁をし彼の女人にあはせ給べらば、何物かは乏しからむ。……やもめにて捨て置き奉るよりは、翁の片庵に率てまして、食べむ物は初穗ごとに取り、夜晝魚を食はしめてこそはかしづき置けらめ。 莊物らは只だ身一つに奉り、御衣器物まで乏しくてあらじやは。一面嚇ましして人の見奉るべくあらば、國王の一の妻になり給べらむにも劣らじをや。

など誇りつゝ、甲斐なき煩悶をつゞけた。

この間にあつて焦慮の片鱗をのぞかせられたのは東宮で、或は七月七日に「今日さへ、淺ましくねたく覺ゆれ」と消息され、「聞くことの樣々なるこそ甲斐なけれ」など云つては言ひ寄る戀人の多きに聞き惱ましつゝ、はツきりしない戀の雲行にいらノ\された。

かくて七月の晦日に東宮、實忠、兼雅、正明、兵部卿宮、彈正宮、仲澄、行政の八人より、貴宮に歌の音信があり、最後の五人に對しては、「聞き入れ給はず」「いらへ給はず」「御返しなし」のけんもほろゝで、此の一卷が終はつて居る。

此の卷の趣向は、父なる藤原の君正頼の名に攝して女主人公貴宮の生立を寫し、それに對して先づ思ひを焦がした主なる十幾人の戀愛振を、總括的、併記式に略叙したのであらう。而して此の卷を是れで切り上げ、今度は更に風がはりな高僧一人の特殊なる戀路の迷を寫さんが爲めに、先づ其の世に背くに至る徑路を寫して、それのみを一卷としたのであらう。

五

第三卷を「忠こそ」といふ。「こそ」は今日の「や」「公」「坊」などにあたる、人の名の末につける當時の親愛の接尾語で、左はその梗概である。

こゝに嵯峨の帝の御時に右大臣橘千蔭といふ人があつた。一世の源氏を娶つて一子忠こそを擧げた。此の子玉光るばかりに美しく、父母限りなく撫でいつくしみ、殊に母君は

頂の上を蓬萊の山になさむとも、掌の内に黄金の大殿を造らむといふとも、忠こそが言はむことは違へじ。

と云ふほどに鍾愛したが、此の子の五つになる年に、母君が病んで亡くなられた。

已れにかはり、腹ぎたなき人につきて、惡しき目見せ給ふな。 腹穢き人ありて、惡しき事聞こゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ。 すべて我が子の爲め惡しからむ事をば、水の上にふる雪、砂の上におく露となし給へ。」

と遺言して。

それから千蔭は女といふ者を近づけずに忠こそを愛撫したが、その中に故左大臣の未亡人、一條の上から切なる戀を寄せられるやうになつた。 千蔭は女に恥を見せることも出來ずに、折々は通つたが、男は三十餘り、女は五十餘歳、若く美しかつた亡き人を偲ぶ身には、此の老いて醜き深情に面が背けられて、足がおのづから遠のくと、女は富めるに任せて山々に戀成就の祈禱を行はせつゝ、珍味を揃へ、綾錦を飾り、琴琵琶を調べては、其の心を惹かうとした。それでも千蔭がとかく離れがちなる素振を見せる、その間に、その頃十三四歳の忠こそが、早熟の色好みで、この一條の上の家に居る故左大臣の姪なるあこ君に通つて來た。 若い二人の親しい様子は、彼女の羨望心を刺戟した。 而して忠こその容姿を賞づる心と、千蔭の疎々

しさを恨む心とは、遂に彼女を驅つて、忠こそに言ひ寄られしめた。忠こそは避けて遂に應じなかつた。かくして彼女は子供に恥を見せられた腹立たしさから、報いをしようといふ心になり、千蔭が傳家の寶とする石の帶を密かに取り出して、無賴の甥に奸計をさせ、到頭千蔭をして、忠こそが盜み出して賣つた事を信ぜしめた。忠こそは過失の覺えもなく、あまつさへ父がこの年月、

天を逆さまになすとも、百の兵士して親を射るとも、汝が咎にはとがめじ。

などと口癖に言はれたのに、何故の御不興かと、且つ恐れ且つ恥ぢた。そして悲觀の結果、父の參內して不在なるに乘じ、家を出でて再び父には見えまいと決心した。

丁度そこへ鞍馬の行者が來て、陀羅尼を讀みつゝ忠こその門邊に立つた。忠こそは堅き決心を告げて山への同行を乞うた。そして年頃手馴れた名琴、俊蔭から父の右大臣に奉つたをりめ風を出して名殘の一奏を試み、臨岳に「ひく人も空しくならば」といふ、悲しい歌を書きつけ、暮るゝを待つて父のゐぬ父の家を出た。そして山に入ると、すぐに頭をおろし、戒を受けたが、やがて師法を受け盡くして大智大德の行者となつた。

忠こその家出は人々を驚かし悲しませた。朝廷でも御使を四方に分かち遣はして求めさせられ、父は大願を立てつゝ手を分けて搜したけれども、行方は全く不明であつた。そし

てそれからの千蔭は全く一條の上を忘れ果てた。上は千蔭を迎ふること七年、その間にあらゆる財產を使ひつくして、あとに殘つたのは、俊蔭が奉つたかたち風の名琴唯だ一つとなつた。そして最後にこれを時の大將に萬石に賣つて、從者にも見離されたさびしい生活を支へた。

それから、千蔭は比叡の山里に隱れ棲んで、忠こそを戀ひ泣いたが、或時誦經の料に忠こそが手馴れの品を取り出して、その中に、琴に書きつけた名殘の歌を見出だした。見るのも心苦しく、佛を刻ませようとて、多くの力者を集めて割らせようとしたが、少しも疵がつかぬ。もてあまして居ると、俄に天地が眞暗になつて、大雨が降り大雷が鳴るその間に、一團の黑雲が風に誘はれて、降りて來て、忽ちこの名琴を大空に捲き上げた。千蔭は忠こその行方を尋ねわびて、到頭佗び死にに亡くなつた。

これが一忠こそ一の梗概である。かくして憂き世を離脫した眞言大德の忠こそが貴宮をかいま見て、戀の山路に踏み迷ふ事は、次ぎの次ぎなる一梅の花笠一の卷に精しく描かれてある。

六

讀者は『宇津保物語』の最初を飾る以上三卷の梗概を見て、その各〻がほゞ獨立した一篇の物語を成してゐることに心づかれたであらう。而して各卷がおもなる人物の名によつて美しく標示され、締め括られてゐることを見出だされたであらう。かやうに各〻の卷が風雅な標題を持つた讀切の短篇小説の形を成してゐること、而してそれらの卷々が集合され、順序づけられ、統一されて一大組織の小説をしてゐること。これが『宇津保物語』の始めて試みた形態であつた。吾等は前卷に於いて、筋の開展を最初から最後まで引きつづけて構成する國文小説の開祖を『竹取物語』に見出だして、之れを葛藤式の小説と名づけた。また同一人に關する離れ〴〵の説話をころ〴〵並べにした小説の元祖を『伊勢物語』に見出だして、之れを櫛の齒式の小説と名づけた。是等に對して『宇津保物語』は、各卷が、切れたるが如くにして切れず、卷毎に纏められつゝ、更に大なる統一を成してゐる點から見て、切不切、統更統式の小説とも云はるべきであらう　また小統更大統式の小説とも、或は更に簡單化して二重纏め式の小説ともいはるべきであらう。『竹取物語』の形式を最初

に試みたのは、恐らく弘法大師の『聾瞽指歸』で、最も大仕掛に之れを試みたのは曲亭馬琴の『八犬傳』、而して明治時代の小說家、紅葉氏、露伴氏等の作の如きは、概ね此の流れを汲んだものである。『伊勢物語』の形式を奉じて、その理想的具現を見せたのは井原西鶴の浮世草子で、殊にその『好色一代男』であつた。『宇津保物語』の形態を取つて、之れを理想的に磨き上げたのは、『源氏物語』である。

古活字本　（早稻田大學圖書館藏）

桐壺の帝と更衣との間に生れた源氏が加冠に至るまでの生立を一卷に纏めて『桐壺』の名に約し、青年源氏が同味の一友、二先輩から聞いた女人の品定と最初にぶつかツた一條の戀愛とを一卷に纏めて『帚木』の名に約し、六條の御息所に通ひつゝ、五條半蔀の一女人を熱愛して、御息所の生靈の爲めに女を奪はれたる物語を一卷に纏めて『夕顏』の名に約したのは、恐らく

『宇津保』が始めて描く試みた此の一部讀切式を襲いで、巧みに完全に磨き上げたのであらう。『榮華物語』は『源氏』に次いで、此の形態を、いさゝか描く史實記載の上に試みたものであつた。その後に、此の形態を簡單に無邪氣に試みたものは、江戸の草册子で、その後に至り、之れを大仕掛に爭ひ用ゐて一代の流風を成したのは大正昭和の長篇小説である。吾等は今日行はるゝ此の組織法が誰れによつて始めて試みられたかを知らぬが、暫らく流行本位に見ると、中里介山氏の『大菩薩峠』などが、少なくともその主なる魁の一つであらう。その後に出來た大衆小説、のみならず藝術的小説の大部分までが、少し長篇のものになると、先づ突然筆を起こして叙述を進め、事が結末に近づいて凡そ前途が見えて來ると、また突然最後をぼかして、その部分を片づける、而してかやうに纏められた讀切式の幾章かが、後に大規模に纏められて、一部の小説を成す、といふ風に出來てゐるのを見出だす。現代の小説家は無論、國文學史上の淵源を知つて、溯つて之れに據つたのではあるまい。また中には諸外國に於ける類似の形態の作から暗示を受けたのもあるであらう。けれども、とにかく、此の、一部分を讀切にして、ぽかりと書き始め、最後をぼかし、而してその讀切式に纏まつた部分々々を關聯せしめて長篇の大作を作り上げるといふことは、非常に面白く、非常に新らしく見える形態であるが、これが平安朝の九百年前に於いて、可なりに整つた美しい形で試みられ

たといふ事は、我が『宇津保物語』に創始の名譽を與へ、同時にその文學の價値を高めるものであらう。

『宇津保物語』が、作者に心あつて一部讀切式に趣構したものであることは、第一に、有りのまゝなる各卷の內容と形式とが證據立てるところである。第二には、「俊蔭」「藤原の君」「忠こそ」「藏開」「國讓」「樓の上」といふやうな標題を、それ〴〵に與へたことが、その部分を前後と切り離して粒立たせる爲めの工夫であつたであらう。第三に、『枕の草子』に

物語は住吉、空穗の類、殿うつり、月待つ女、……國ゆづり、埋れ木……

とある、此の「國ゆづり」は古來『宇津保』の中の卷名であらうと想像されてゐるが、「殿うつり」についても、四條本、鈴鹿本等には、

住吉、空穗の殿うつり、國讓はにくし。

とあるといふことで、これが原形であつたとすると、「殿うつり」は「藏開」或は「樓の上」などの別名であつたので、かやうに總名の「空穗」をも擧げ、重ねて部分名の「殿うつり」「國ゆづり」をも併せ擧げたのは、『宇津保』の各卷が切り離して書かれ、同時に切り離して讀まれたことを證するものであらう。第四に、「俊蔭」の一卷が引き離して讀まれ、『宇津保』の別名ぐらゐにも思はれたのは、それがたとひ後世の事であるにしても、此の作の豫

め企てられた讀切性を證するものであらう。第五には、各卷相互の關係にも此の企圖を證明するものが、處々にあるやうに見えることである。例へば、最初の「俊蔭」の卷で、藤原兼雅の生立閱歷を細かに記して居りながら、次ぎなる「藤原の君」の卷で、

かくて又、右大將藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世の中に心憎く覺え給へる、限りなき色好みにて、廣き家に多く屋ども建てゝ、よき人々の女、方々に住ませて、住み給ふありけり。

と、いかにも始出らしく書いてゐる所がある。これは第一卷藤原の君、第二卷俊蔭と、順序を引直す說の根據ともされる所で、また作者の記述の稚拙な例とも見らるべきものではあるが、第一の理由は、やはり、作者が本來一册一册を別々に讀ませようとしたからで、必ずしも讀者が先づ「俊蔭」を讀んで、後に「藤原の君」を讀むとは期待しなかつたところから來た現象であらうと思はれる。言ひかへれば、「藤原の君」の讀者が、他の部分の存在に氣を配らずに、その卷だけをも落ちついて讀めるやうにする心じらひが作者にあつたからであらうと思はれる。また「俊蔭」の卷に、

昔千蔭のおとゞの唯だ一人子を、繼母に謀られて、今は音にも聞こえずとなむといふなる。

と、千蔭、忠こそ父子の關係を、遙かに遠き昔の事の樣に云つて居りながら、次ぎの「藤原の君」「忠こそ」の卷に於いては、千蔭や忠こそを現在の人とし、彼等の言行を現在の事實として委しく書いてあるのも、同じく卷々を引き離して讀ませようと企てた上の趣向であらうと思はれる。

殊に卷分けにして讀ませる作者本來の意圖を、明らかに證據立てゝ居るらしく見えるのは、「嵯峨の院」「菊の宴」二卷に於ける文章の重複再出である。「菊の宴」の最初の部分（該の卷の約四分の一を占める）と「嵯峨の院」の末部（該の卷の約三分の一を占める）とには、大分長い範圍に亙つて同文の重複して居るところがある。その文章は殆んど同樣と云つてもよいが、處々に違ふ所もあつて、大體に於いて、後なる「菊の宴」の文が「嵯峨の院」のよりも整つて解りよくなつて居るやうに見える。また「嵯峨の院」と「菊の宴」との間には「梅の花笠」「吹上」「上」「祭の使」「吹上」「下」の四卷が入つて居るが、「吹上」の下卷に朱雀の帝が源涼に貴宮を賜はり、藤原仲忠に一の内親王を賜はる事を書いたところがある。而して事前を寫した「嵯峨の院」には無論此の勅諚が書かれてゐないが、「菊の宴」の方には、右大將正賴が東宮から貴宮を要められて

仲忠の朝臣に一の内親王、涼の朝臣に正賴が九にあたる女（卽ち貴宮）賜ふべきよし、宣旨

下りにしことなむ侍る。

と云つて、當惑の旨を啓上したことが書いてある。思ふに是れは、「嵯峨の院」の卷の時分には、まだ此の事實が無かつたが、中間なる「吹上」の下卷に、此の宣旨の一條が出てゐるので、同じ文章を再錄しながら、「菊の宴」には特に此の事を加へたので、要するに「菊の宴」をば、讀者としては「嵯峨の院」を參考し、繰返して筋を辿るなどの面倒なしに讀めるやうに、而して作者としては、前卷の文章の大部分を再錄するが如き、作全體としての不整理、不統一の譏などをば一切考へずに、讀者が此の「菊の宴」一卷を切り離して讀むものと考へつつ、その便宜を計つたのであらう。而してその結果がかやうに長い同事同文を繰返し、またその時次第に局部々々の文章をも事柄をも變へ改めたのであらうと思はれる。また序ながら「吹上」の卷を上下に二分して「祭の使」をその間に挿んだのも、この讀切意識の現はれであらうと想像される。

七

『宇津保物語』の作者の創作心理を想像するに、恐らく彼れは考へたであらう。「我が國の

物語の先祖の一つ『竹取』は、章段も切らずに、初めから終り迄ひた續けに書いて居る。あれはあれで面白い。もう一つの先祖の『伊勢』は、說話の一つ〳〵を百餘り、悉く離れ〳〵に書き並べて居る。これはこれでまた面白い。但しこれらの二つは、いづれも短い物語だから、それでよいが、自分の今企てゝ居る物語は、和漢古今に比倫を絕した、すばらしい長編である。（『宇津保』と『源氏』との長さの比較は、大體千五百頁對二千三百頁位で、『宇津保』の一に對する『源氏』の一、五といふ割合である。）これを竹取式ののべつ幕なしにつゞけては、とても見られぬものとなるであらう。されぱと云つて『伊勢』のやうに、ばら〳〵な細切のひた並べでは、うるさくて仕樣があるまい。これは二つの樣式を取り合はせるに限る。即ち、一つの主要なる說話を中心として、小さい說話を從屬させつゝ、之れを讀切式に取纏めるのである。しかし、かくして纏められたものの前後に唯だ隔てを置くだけでは面白くない。また第一、第一上、中、下、などいふが如き、唯だ次第を指示するだけの見出を附けるのも能のないことである。これは一つ、その主要說話の性質により、或はおもなる人物の名前により、或は場所により、事柄により、歌により、とにかく卷の持つ主要特色をつかまへて簡單な風雅な名を負はせ、その名の下に一卷を引き締め引き締めつゝ進んで、卷また卷を重ねるのである。かういふ讀切の卷が、全體で二十卷……といふと、『竹取』や『伊勢』の幾十倍、また『宇津保』の以前も

しくは同時代に現はれた、卽ち『枕の草子』の「物語は」の條に列擧されたやうな『住吉』『交野』『梅壺』などいふものに比べても、少なくとも數倍の分量を持つてゐるもの、のみならず「雲隱」以後なる宇治十帖の一團を除いた『源氏物語』の本部全體に凡そ匹敵するものであるが……この二十卷といふ未曾有の長篇を纏め上げるのだと思へば、源順朝臣もさすがに胸の高鳴を禁じ得なかつたことであらう。

かくして『宇津保物語』の作者の先づ考へたことは、その作を長くすることであつた。而して其の方法として、年代に於いては、皇室の方面をば嵯峨、朱雀、今上、東宮の御四代にわたらせ、人臣の方の中心人物をば俊蔭、その女、仲忠、犬宮の四代に亘らせて、その間に複雜な交渉を持たせることを考へたであらう。結構では、最初の序分に於いて、異國に渡り、鬼神と伍し、靈界に遊び、不思議を現ずる、思ひ切り浪曼的な一卷を設け、中心の正宗分に於いては、一人の麗人を繞つて、あらゆる上流の選手の男子十數人がうつゝ心に狂ひまはる戀愛現象を叙し、最後の流通分に於いては戀に勝つた人及び敗れた人達の後日物語を添加し、更に音樂による神祕世界を描いて、遙かに浪曼的なる第一卷に呼應するといふ廣大振、變化對照振を見せたであらう。一世を風靡した戀愛現象、外戚政策による政權爭奪現象の外に、音樂神祕の靈力を全篇に漲ら

せ、殊に海外異域の靈境から齎らされた十二の名琴の働きを全篇に浸み込ませたのも、此の目的達成の主なる手段であつたであらう。

貴宮に對する戀愛の競爭者を十數人にしたのは、恐らく〝竹取〟のかぐや姫に對する六人を增員したのであらうが、〝宇津保〟の作者が長篇完成の祕術の一つは、數量を加へることにあつたらしく、その傾向の殊に著しく現はれたのは、歌の列擧である。事ある每に戀人達の贈つた歌を數多く並べることが、此の物語の慣例になつて居るが、甚だしきは二十七首（藤原の君）三十八首（梅の花笠）、いづれも一二行の地の文を交へつゝ、殆んどべた並べに並べてあるのは、恐らく作者がこの增量祕術の意識が不用意の間に現はれたものであらう。また〝竹取〟が一所に一首だけ、或は贈答の二首だけを掲げ、〝落窪〟が大抵は一首だけ、つゞけて擧げたのは唯だ一回、屛風繪の歌十三首のみであるのと比べて、〝宇津保〟の作者が作を長めることに如何に苦心したか、またその長め方の或物が、いかに幼稚であつたかを知ることが出來るであらう。

八

四代にわたる筋の開展、神怪不可思議本位の冒頭部、戀愛競演の中央部、餘意呼應の收結部と次第した三段組織、藴琴による筋の統一、是等はいづれも此の作の趣向に對する作者の容易ならぬ苦心を說明するものであるが、作者の趣向に對する苦心は非常に細かい處にまで行きわたつて居るやうに見える。超自然的描寫に次ぐに人間の戀愛を以てしたのも、その一つであらう。特殊の風變はりな戀物語や催物の委しい記述を一つ試みては、その度每に多くの戀人等の贈答歌を挾んだのも、その一つであらう。また一つの事件の記述にも、大分思ひを凝らしたものがあるらしく、例へば「藏開」一に、仲忠が祖父俊蔭が荒れ果てた舊棲の祕庫を開いて見出だしたる奇書を、朱雀の帝の御前で讀誦する條に、帝が餘りの面白さに退出を許されずして、宮中に泊りつゝ、書に次ぐに夜を以てし、夜に繼ぐに日を以てして、長誦三日にわたつたが、その折に、仲忠が家に居る北の方女一の宮に愛の手紙を送ると、北の方が之れに對してまた愛の手紙を報いる、それを帝が密かに覗き見ては、ほゝゑみながら、わが皇女と仲忠との琴瑟相和を悅ばせられるといふ趣が書いてある。また仲忠の父兼雅が、久しく疎くしてゐた愛人等を迎へて一所に集めることを企て、仲忠が父の命によつて、父の愛人達の居る一條殿に行くと、一人の女は彼れに柑子を投げつけた。一人の女は橘を、もう一人の女は大きな栗を投げつけた。仲忠が拾ひ取つて、歸つて父の前に披露する。兼雅が不思議に

思つて、三つの木の實を割つて見ると、中には色紙に歌を書いたのが入れてあつた。兼雅は涙を雨霰と流して、これは誰れ、これは彼れと、三人を指して、それ〴〵の關係を說いた上に、三つの木の實に、今度は黃金を一ぱい入れて、歌を添へて贈り返したといふことが書いてある。『宇津保』の作者が趣向に關する能力と苦心とは、これでも推察することが出來るであらう。

九

聯想に引きずられて、つい梗概のつゞきを辿ることを忘れてゐた。「忠こそ」の後につゞく卷々は「嵯峨の院」「梅の花笠」「吹上」(上)「祭の使」「吹上」(下)「菊の宴」「貴宮」「初秋」「田鶴の村鳥」「藏開」(上、中、下)「國讓」(上、中、下) 及び「樓の上」(上下) の十七であるが、その後新に貴宮に對して思ひを焦した人々は、左近少將源仲賴、忠こそ法師、紀伊國牟婁郡神南備種松といふ大長者が子源凉(すゞし)、勸學院の學生藤原季英(藤英)等であるが、貴宮は彼等の凡てを失望させて、遂に東宮に參られることとなつた。これは『竹取』のかぐや姬が帝の仰せにも從はなかつたのに對した趣向で、當時として極めて自然の歸趨であるが、後に『源氏物語』が是等の前例を向うに廻して、夕顏の遺子玉鬘の夫定(さだ)めに破天荒の歸結を與へた、絕妙の趣向を、豫め考

へおくべきであらう。

貴宮の春宮入りを見て、あらゆる戀人等はかねて期したる絶望の慘苦を、一層痛切に味はつた。兄の仲澄は泣きつ、死につ、又生きかへりつ泣きつして、到頭果敢なき戀死を遂げた。仲頼は泣き惑うて山にこもつて法師になつた。物語には

> 山に籠りし日より、穀を絶ち、鹽を絶ち、木の實、松の葉を食きて、六時間なく行ひて、涙を海とたゝへ、なげきを山とおほして、歎きわたる。

と書いてある。滋野眞菅は貴宮のために家を造り、調度を設けて、迎へ取るべき吉日を待つてゐたが、之れを聞くと、絶望の激怒に亂心して、太刀を拔いて子達を追ひまはし、また

> 冠を後ざまにし、上の袴をかへさまに着、片脚に脚二つをさし入れ、夏の袍に冬の下襲を着、靫負ひて、飯匙を笏に取り、帝の南殿に出で給へるに立ちて、白き髪鬚の中より紅の涙を流し

つゝ憂文を奉つて、遂に伊豆の國に流された。三春高基は所有の家々を片隅から燒いて奥山に籠つた。

「貴宮」の卷を境として、その次ぎに貴宮の限りなき時めきぶりと失望した戀人等の後日譚とが詳細に書かれてゐる。貴宮の父正頼は殘りの娘達を失望した人々に與へて、彼等を

慰めつゝ我が家に住ましめた。

さる程にその後、俊蔭の孫右大將仲忠は荒るに任せた三條京極の舊邸を修理したが、嚴重に封ぜられた寶藏を開いて、俊蔭が遺愛の珍書群を見出だした。それは唐土に於いてさへ人の見知らぬ貴重な書物で、外に俊蔭の文集及び異域往來の旅行記などがあつた。仲忠は勅命によつてそれらを選誦したが、限りなく叡慮に叶つて、三日も退出を許されなかつた。

七八枚讀みて、やがて一度は訓に、一度は聲に讀ませ給ひて、面白しと聞召すをば誦せさせ給ふ。

夜更け行くまゝに、文讀む聲、誦する聲も、いと哀れに面白し。上は琴の琴かき合はせつゝ、誦せさせ給ひつゝ、聞召す

「一たびは訓に一たびは聲に」古寫本（帝國圖書館藏）

そして「晝は酒こそはやせ」と仰せられて、御酒を賜はつては夜も晝も讀ませられ、面白いところは再び節をつけて讀ませ、絶好の處々は御親ら琴を搔き合はせて聞召した。そして讀み了へた時には、御祿として、またと世に無き石の帶を賜はつた。それは貞信公の佩用されたもので、關白小野宮實頼が遺愛の品であつた。序ながら小野宮實頼の薨じたのは、圓融天皇の天祿二年（一六三〇）である。物語には、此の帶を傳へた者が院に奉り、院がまた今上に傳へられた事などを書いて居る所を見ると、無論これは小說家の架空ではあるが、とにかく此の物語が實頼薨後數年を經たる後に成つた一種の證左となるであらう。また此の物語の作者をかりに源順朝臣とすれば、朝臣の歿年は永觀二年（一六四三）であるから、此の物語の成立は貞元、天元（一六三六―四二）の交であつたとも想像される。

「國讓」の上中下は、立太子に關する見苦しき爭の委しき記錄を中心とした三卷である。貴宮所生の皇子の立坊は、宮の父左大臣正頼が源氏たるの故を以て、藤原氏方の妨害に逢つた。殊に藤原氏の出なる院の女御の執念深き苦肉の計策に逢つて、正頼は悉く失望した。而して失望の餘り夫婦共に塗籠に入つて、もう競爭者の勝利の報告を聞くまいとした。

……明日になりぬといふ。君たちは萬に聞こえ給ふをも、正頼「すべて我れこの爭聞かじ、人も言ふな」と宣ひて、その日の早朝、塗籠にさし籠り給ふ。大宮「我れも何せむに

かゝる日を見るべき」とて、もろ共に入り給ひぬれば、君達は、左右の戸口に並み居たまひて、泣きまどひ給ふこと限りなし。

けれども周圍の事情と帝の情ある御裁きとは、貴宮の皇子の立坊を決定して、それから正賴一家の勢力はいやが上にも盛んになつた。第二卷「藤原の君」の冒頭に

昔藤原の君と聞こゆる一世の源氏おはしましけり。

とある。「一世の源氏」は即ち正賴のことであるが、源氏を藤原の君といふのは、實に不可思議なる逆語であるが、或は源氏なる正賴の權力が藤原氏を制壓する意味を暗示したのでもあらうか。

俊蔭の血統は、父から子、子から孫と、段々優りに樂道の天才を發揮した。俊蔭の女は俊蔭に優り、仲忠は更にその母に優つた。而して仲忠の子犬宮のすぐれた天賦は、已に幼孩の時より明らかであつた。かくして仲忠は犬宮に祖父傳來の琴を傳へようとして、先づ三條京極なる俊蔭の舊邸に善美を盡くした樓を建てた。それは林泉の秀美を集めた間に、金銀珠玉、螺鈿、香木、綾錦を張り詰めた、華美莊麗を極めたもので、この樓で傳授したので「樓の上」とは名づけたのである。犬宮は丁度七歳のいたけ盛りであつたが、母君女一の宮の手から引き離し、あらゆる外緣を斷つて、懸命に瀉瓶の稽古をつけること、八月の十三日から翌くる

事に於いては廣く當時の支配階級の種々相に及んだ。

趣向の構へが大きく、變化曲折に富んでゐることも、其の一つに數へらるべきであらう。例へば地軸に根ざし、深澤より生ひ出でて天雲の中に冲つた桐の巨木を、阿修羅の眷族が伐り倒す、而して、靈樹の最も靈なる部分から三十の琴を製し、その十八を異域に殘し、十二を皇朝に將來し各所に頒布して、普く靈音の感化を布くといふが如きは、實に廣大、神祕、莊嚴、華麗なる構想で、靈器分散の點より見れば、その運用の如何によつては、『八犬傳』『水滸傳』の妙趣向をも構成すべきものであつた。超人間的なる靈界描寫の點より見れば、ダンテが『神曲』、ミルトンが『失樂園』の靈妙境をも現ずべきものであつた。不幸にして、作者にそれ迄の手腕が無く、また時早くして先例模範の據るべきものが無かつた爲めに、構想、筆致の兩面に於いて行くべきところまで行けなかつた遺憾はあつたけれども、あの時代に於いて、とにかくあれ程の構想と描寫とを見せたのは、實に破天荒の成功といはねばならぬ。

内容から云つても、麗人の影に擧る戀愛第一義の世相を始めとして、外戚權占據の競爭、いろいろの年中行事、產養、還饗、その他の優美な風俗、鬼神の世界、學生、僧侶の生活、文學書の朗讀振、別しては音樂の靈力に關する繰返しての描寫など、頗る多趣多樣であるが、文章の姿態の豐富もまた見遁すべからざるものである。その中最も著しいのは鬼神心靈の世界を寫す

筆致であらう。例へば、俊蔭が始めて阿修羅の伐木を見た光景を記して、

辛くして其の山に至りて見わたせば、千丈の谷の底に根をさして、末は空につき、枝は隣の國にさせる桐の木を倒して、割り木つくる者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し。面を見れば焔もゆるが如し。足手を見れば鋤鍬の如し。眼を見れば金椀の如くきらめきて、いみじき嫗、翁、子ども、孫など率て、首を集へて木を切りこなす。俊蔭定めて知りつ、我が身は此の山に亡ぼしつと思ふものから、いかしき心をなして阿修羅の中に交りぬ。

といへる、或は最後の巻の一樓の上一で、七月七日に、はし風、ほそを風、りうかく風の三名琴を、仲忠、その母及び八歳の犬宮が合奏する條を寫して、

……おもしろきに、聽く人空に浮かむやうなり。星ども騒ぎて、雷鳴らんずるやうにて、ひらめき騒ぐ。……夜いたう更けぬれば、七日の月今は入るべきに、光忽ち明らかになりて、かの樓の上とおぼしきにあたりて耀く。雷はるかに鳴り行きて、月のめぐりに星集まるめり。世になう芳ばしき風吹き匂はしたり。

と言へるが如き、漢文を和化した莊嚴な趣も見えて、丈の高い風致である。

作者は情愛の動きなどをも、可なりに冴えた筆で寫したやうに見える。宮内卿在原忠保

が、その女を源少將仲賴に許すところを、次ぎのやうに書いて居る。仲賴は高く標置して院の帝の三の宮が聟取の御望みにも應じなかつた男である。そして娘は東宮の御要めに對しても、宮仕を背はなかつた女であつた。

宮內卿いとわろきに、此の女かくめでたう、東宮にも、參らせよなど宣はすれど、え宮仕などにも出ださずなどしてありけるに、此の仲賴の少將、切によばふ　そのかみ父「かかる戲れ人と名はふるとも、我が女につきて世を盡くさむとも知らず。宿世をも見む、たとひ住まずといふとも、我れのみかゝる恥を見ばこそあらめ、院の帝の三の宮、大臣公卿の御女も、さこそ捨てられたんめるを見つゝ、こゝらの人の聟に取り給ふも、樣あらむ天下綾錦を敷きて飾るとも住まずは住まじ。わが此の葎の下藁芥の中に住むとも、宿世のあらば住みなむ。男は勞はるにもつかぬものぞ」などいひて、この女に聟取りつるに、思ふといへばおろかなり、婚はせし夜よりかい付きて、哀れにいみじき契りをす。

好笑の味をも加へて、心ゆくばかり面白く書いて居る。

『宇津保』の作者が漢文や佛典の趣致を取り入れたことは、

今も亦人の身を受けむことは難しといへども、今此の山に至りて佛菩薩を驚かし、懈怠邪見の輩に忍辱の心を起こさしむる故に、此の山の七人殘れる業を滅ぼして天上に歸

るべし。日本の衆生此の因緣に生々世々に佛に逢ひ奉り、法を聞くべし。……―と宣ふ時に、遊び人等禮拜し奉る。乃ち雲に乘り風に靡きて歸り給ふに、天地震動す。

といふが如き種類の文致によつて知ることが出來る。作者はまた日本の古典をも參酌して、その文致を雅にし豐かにしようとしたらしい。例へば忠こそが貴宮の美に打たれて、昔を思ひ出でる所に、

世の中になほあらましかば、今は高き位にもなりなまし、など思ふ。されどまた、こゝらの年頃、露、霜、草、かづらの根を供養しつゝ、或時には蛇とかげに呑まれむとす。佛のおほん事ならぬ事をば、口にまねばで、勤め行ひつる、佛のおぼさむこと恐ろしく、など思ひ返せども、せむかた知らずおぼゆ。（梅の花笠）

の―蛇とかげに呑まれむとす―の句法は、恐らく「竹取物語」に、車持皇子が蓬萊の玉の枝を求める爲めの航海難を述べて、

或時には風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さんとす。或時には糧盡きて、草の根を食物とす。

と云つた文致から暗示を受けたのであらう。上野の宮が大德宗變に貴宮を得る手段を教へられて、喜ぶところを寫して、

上野「我が聖の德に、なし給へらば・・・・」宗慶

いといたう喜び、立ち居七ただ拜み給ふ。

「何か仰す。この事御心にしみたんめり。いとよく叶へ奉りなむ。」

と云つたのは、『竹取』の阿部御主人が王卿の文を見て、

「何か仰す。今黄金少しのことにこそあんなれ。必ず送るべきものにこそあんなれ。嬉しくしておこせたるかな」とて、唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。

を模したのであらう。また俊蔭が渡唐の折にその父母が別かれを悲しむところを寫して、

父母眼だに二つあり と思ふ程に、俊蔭十六歳になる年、唐土船いだし立てらる。

と書いたのは住吉の浦の大荒れに、貫之が檝取に脅されて祕藏の鏡を投げ入れる所を、

いかゞはせむとて、眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉るとて海にうちはめつ。

と書いた『土佐日記』の筆致に暗示されたのであらう。趣向の方では、朱雀院が螢を放つて俊蔭の女を見られる光景が、『伊勢物語』で、天下の色好源至が螢を取つて女車の中に入れたことを書いた前典による工夫であることは疑ひのないことである。是等はいづれも前後に馴染む落着や、妥當性、自然性に於いて原作に及ばぬ嫌ひはあるが、とにかく『宇津保』の作者が新しき物語の創作を成すに當たつて、古典の涉獵をつとめたことを說明するものである。

『宇津保』の作者は、また自然の描寫に於いて拔群の技倆を見せてゐた。同じ時代の物語群が『宇津保』『落窪』の外全く失はれた後世に於いて、珍しい文學現象に關する創新の功名を此の二作のみ歸するのは、甚だ危險なことではあるが、現存する限りの資料について見ると、『源氏物語』の自然描寫及び情景の取合はせは、『宇津保』の達した程度に洗錬を加へたに過ぎぬやうにも考へられる。例へば、

前栽も山の木どもも紅葉し、櫨の紅葉今色づく、さま／＼に面白し。風やう／＼荒く、山の中より落つる瀧も、靜かなる所にて聞き給へば、よろづ物の音にあひて哀れなり。（樓の上）

夜よりいと高う降りて、御前の池、遣水、植木どももいとおもしろし。（樓の上）

の如き、引き離して見れば、少なくとも調子に於いて『源氏』の文と思ふ人もあるであらう。情景の取り合はせも亦同斷で、例へば、

心にしみて琴を彈き給ふ。月のいと明らかに、空澄みわたりて靜かなるに、山の木陰、水の波、やう／＼風涼しく吹き立てたるに、いとおとな／＼しう彈き合はせ給へるを、大將かんのおとゞも、折も心細くなりゆくに、涙落ちて、琴教へさし給ひて泣き給ふ氣色を、犬宮「まろを宣へど、宮戀しくおぼえ給ふべかんめり。母君も泣き給ふか」と、內侍のかみ

に聞こえ給へば、皆いとをかしくなり給ひぬ。

仲忠が母と共に七歳の犬宮に稽古をつける所を寫したので、「お母様に逢ひたくとも、我慢なさい」と云つて、だまし〳〵彈かせると、「僕の事を、お母様のお乳が戀しかろと仰しやるけれど、お父様の方が却つてお母様を戀しがつて入らつしやるんだ！　お母様もお留守居をして、泣いて入らつしやるか知らん？」と、お祖母様に尋ねて、皆を笑はしたといふ好笑の味であるが、此の邊になると、もう『源氏』の壘を摩すると云つてもよく、洗錬と妥當と浸透力とに於ける程度の差を除外すれば、二者殆んど同一と云つてもよい位である。

二

文章の風致で、もう一つ見遁すべからざるは、歌と地の文とが不即不離に引きつゞけられた風致である。歌と地との脈絡が切れたやうで切れず、歌から地へ、地から歌へ、滑るやうに連絡する味である。本來散文の間に歌を挿入する場合に於ける格式は、大昔は殆んどすべて「歌曰」と云つて、その歌を書きッ放しにする「書捨式」か、或は歌を書いた後を「と」で受ける「と受式」かであつた。例へば、『古事記』に於ける「八雲立」は前者で、

爾作御歌。其歌曰。夜久毛多都。伊豆毛夜幣賀岐。都麻碁微爾。夜幣賀岐都久流。曾能夜幣賀岐袁。

と極めて、新たに「於是喚其足名椎神告言」と言ひ起こしてゐる類ひである。『竹取』『伊勢』『土佐』にも此の例が多くある。

「と受式」とは、例へば

五月待つ花橘の香をかげば
　むかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りける。（伊勢物語）

ゆく人もとまるも袖のなみだ川
　みぎはのみこそぬれまさりけれ

となむ詠める。（土佐日記）

の類で、唯だ境目をつけて、上の歌を受けたといふだけのものである。

不即不離の「切續式」ともいふべきは、歌を擧げ放しにせず、また言ひ切つたものを「と」で承けもせずして、歌の末尾から地の文の頭へ文脈のつゞくやうにして、切りつゞけて續く様のつゞけ方で、『土佐日記』には唯だ二例だけ、『蜻蛉日記』には十三例だけ見出だされるゝも

のである。その最初の現はれがいづれの古典であつたかは明らかでないが、其の最も多く用ゐられて、同時に巧みを極めたのは『源氏物語』である。その趣は、例へば、「夕顔」の源「まだかやうなる事をならはざりつるを、心づくしなる事にもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけむ
わがまだ知らぬしのゝめの道＝

＝ならひ給へりや」とのたまふ。女はぢらひて、

山の端の心も知らで行く月は
うはの空にて影やたえなむ＝

＝心細く」とて、物恐ろしうすごげに思ひたり。

の類であるが、『源氏』以前に於いて此の修辭を屢〻巧みに用ゐたのは、『宇津保』と『落窪』とで、殊に『宇津保』の此の式には、しば〳〵『源氏』に迫るものがあつた。例へば東宮から貴宮に與へられた消息文に、かうある。

たゞ今の程はいかゞとなむ。かくてはえあるまじかりけり。何せむにまかでさせて。妬うこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれども

しづ心なき我が身なにぞも＝

＝さき〴〵いかでありへむとこそ。

貴宮が東宮に參つてから凡そ一年半を過ぎてのこと、許されぬお暇を强ひて願つて、里下りをした時に、追ッかけて東宮から賜はつた切なるお情のお手紙であるが、意味は一應は、たッた今お前に別かれたといふその今、もう戀しくッてたまらないのだ。お前は此の今の程を、どうして居られますか。これではとても生きて行かれませんよ。どうして暇をやッて、里下りなどをさせたらう。悔しくッてしやうがない。

外面の花を見ると、風に吹かれながらも、暢氣さうに見えるが、このそわ〳〵と落ちつかない今の我が身をどうしよう。＝

＝これから先きが、どう過ぐせるかと、それが……」といふのである

この地の文と歌との間に於ける不卽不離の切續式は、『枕の草子』『和泉式部日記』等、『源氏』と同時代の散文にも、わづかながら巧みに用ゐられ、また『源氏』以後の物語類にも用ゐられてゐる。而して王朝末期から段々廢れて、鎌倉時代には、またもとの「と受式」「書捨式」になつたことは、『平家物語』その他に於いて吾等の明らかに見るところである。とにかくこれは王朝の散文に於ける最も微妙な、最も凝つた文致の一つである、此の

文致に於ける度々の自由な使用は、『宇津保』の文章に對する評價を高めるものであらう。

二

『宇津保物語』は往を統べて、我が創試を加へつゝ、出來るだけ擴大して來者を待つた大作である。作者は結構に於いて毎卷讀切の二十卷を連ね纏めて廣大なる小說の世界を創造した。四代の御宇にわたり、大小の人事を巧みに趣向して、その間に、愛慾に溺れ、權勢にあこがれ、歌に耽り、樂に跪く當時の世態人情を描寫した。豐富なる表現の趣致を見せて、同時にそれ〴〵の趣致を可なりの程度に磨き上げた。而して是等もろ〳〵の點に於ける作者の抱負と成功とは、一種の未曾有であつた。若し偉大なる來者＝源氏物語＝が現はれなかつたならば、長く未曾有の記錄を保存することが出來たであらうが、その來者の出現、—自家の光輝を滅ずべく、彼れ自身登壇の手引をした大後至者の出現—は、物語道の至味、理想境を見せて、皮肉にも彼れの瑕疵と未熟とを明らさまに暴露したのである。

吾等の見る所によれば、『宇津保物語』の缺點は、形が徒らに大にして、その魂の之れに副はなかつた點にある。備ふるに急にして省くことを知らなかつた點にある。表面の華麗

誇大を悦んで妥當精錬に專念しなかつた點にある。『宇津保』の作者は、作の冒頭に於いて、俊蔭の父母が遣唐使に任ぜられた十六歳の俊蔭と別離を悲しむ光景を寫して、

朝に見て夕の遲なはる程だに、紅の涙をおとすに、遙かなる程に、逢ひ見むことの難き道に出で立つ。父母俊蔭悲しび思ひやるべし。三人の人、額を集へて血の涙を落して、出立ちて、遂に船に乘りぬ。

と云つて居るが、文章に落着かぬところがあり、過度の誇張は却つて眞情の玩味を妨げるやうに見える。また忠こその母君が忠こそを甚愛する情を寫しては、

頂の上を蓬萊の山になさむと、掌の内に黄金の大殿を造らむといふとも、忠こそが言はむことは違へじ、と養ひ給ふ。

と云つて居るが、如何に溺愛の描寫でも、内容の伴はぬかやうな誇張は、讀者の藝術的幻影を破るであらう。

琴に對する驚くべき愛情と熱心と尊敬とは、此の物語に高雅深刻なる風味を與へる新しい趣向ではあるけれども、俊蔭の一家が代々聞かせ惜しみをして、帝王の命をももどき、宋達をも、身命をも賭する意向を見せてゐるのは餘りの沙汰で、前後を對照して、辻褄の合はぬ氣味があり、また帝王が彼等の琴が聞きたさに、

今は國母と聞こえてまし。……私の后に思はむかし……清涼殿をも讓り聞こえむ。自らは屋陰に住むとも、御願の所はものせむ。（初秋）

仲忠がためには天子の位かひなしや。（吹上）

等の言葉を繰返させらるゝのも、誇張、輕卒の嫌ひがあらう。また樂の力を說くのは此の作の特色で、一種の威力、光彩でもあるが、

雲の上より響き、地の下よりとよみ、風雲うごきて月星騷ぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴りひゞく。雪衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。

といふが如き超自然的、超常識的なる非常語を繰返すのは、その威力の眞實性を殺ぐものであらう。

また此の作の迫力を殺ぎ、讀者に倦厭の情を催さしめるは、煩瑣なる列記、詳叙である。例へば貴宮と數人乃至十數人の戀人との歌の贈答の束ね書きは、幾度となく繰返されて居るが、その最も多きは三十八首、次ぎは二十七首で、名作でもないそれらの和歌が、一二行の地の文を挿んで、單調に並べられて居る如きは、讀者に取つて實に堪へ難き負擔であらう。之れについで讀者を辟易させるのは、儀式行事等に關する詳叙のうるささで、「樓の上」に於ける女一の宮の難產、京極の樓の建築設計の說明が、二つながら數枚の長きに亘れる如きは、そ

の最も甚だしいものである。　思ふに『宇津保』の作者は精細なる叙述を得意として、屢々之れを努めたのであらう。　殊に彼れは前代の物語を遙かに凌駕する大作をものすることを、一代の願望としたものらしく、而して其の大作の「大」を先づ形と量とに求めて、その形量の増加、擴大、延長の手段を列記と詳叙とに求めたものであるらしい。　彼れが屢々多くの短歌をひた並べに並べ、行事の説明を煩瑣にして飽くことを知らなかつたのは其の爲めで一面情の恕すべきものがあるけれども、嚴密にいへば、彼れは藝術的に見て、略すべきを略し、詳しくすべきを詳しくする、疎々密々の眞義を知らずして、委しくすべからざるを委しくしたのである。　而してその結果は、その形量を半減し、乃至三分一に壓搾して名作を成すべきものに、不要の夾雜物を添加して、不純雜駁なる形の上の大作とはしたのである。

特に『宇津保物語』の爲めに惜しまれるのは、多くの人物を出して個性のある人を寫さず、多くの事件を列記して、その間に緊密なる統一をつけず、屢々自然を寫しながら架空の風景を美しい詞に述べるに止まつたことである。『宇津保』に現はるゝ人物は凡そ二百餘人にのぼるであらうが、それらの男女は、單に嚴密なる意味の個性を有たぬのみにあらず、多くは王朝式の性癖を極端化して、之れに固有名を與へたやうなものであつた。　事を寫しても、常識事、非常識事、自然事、超自然事の辨別が無く、また超自然事を自然に感ぜしむる力倆が無く、

又事と事との間に自然の發展を辿らしめる條理を缺く傾きがあつた。琴の秘曲の家傳と威力とを高貴無上なる中心義と立てながら、代々聞かせ惜しみをして、その聞かせ惜しみをする理由がわからず、たま〳〵彈じては、月星を動かし、木を倒し、山を崩し、夏空に雪を降らし、晴天に雷を轟かすといふのみで、怪奇を離れた深い意味を傳へずまた物語の主要なる筋との間に奥深き關係の附けられぬのを見ても、此の意味が察せられるであらう。そも〳〵小說家に取つて最も主要なる仕事は、立派に人と事と景とを寫すにある。性格のある人間と、條理が立つて面白く開展する趣向と、風土、季節、人事等に相應した自然とを寫すにある。而して此の三事を優れた程度に仕遂げ得なかつた事は、『宇津保物語』に取つて實に悲しむべきことであつた。

しかしながら是れは『源氏物語』の出現を見た上での理想の論である。その現はれた時代について見れば、『宇津保』は實に未曾有、破天荒の大作であつた。思ふに『宇津保』の作家は磨かれざる天才であつたであらう。＝(之れに對して『落窪物語』の作家は磨かれたる常才であり『源氏物語』の作家は磨かれたる天才であつたであらう。)＝而してその結果は、題材に於いて、趣向に於いて、人物に於いて、文章に於いて、常才の考へ得ざる直觀と、奇想と、獨創と、一部の完成とを見せながら、之を連結し、統一し、精練して、內容形式のすべてが特色

ある生命に纏められた完全作を成すことが出來なかつたのであらう。

『宇津保物語』はすぐに讀まれ理解される單純さに於いて『竹取』『伊勢』に及ばなかつた。長篇の壯觀と、意義の深遠と、文章の精練微妙とに於いて『源氏物語』に及ばなかつた。而して先行者に優つた點は忘れられて、後至者に劣つた點のみが考へられた。新しい構成と趣向と文章とに於いて少なからざる範を垂れ、暗示を與へながら、自分に學んだ後生の名作の爲めに光を奪はれる！『宇津保』の逢つたこの皮肉な運命に對して、心ある者は一掬の涙を灑ぐべきであらう。

一三

『落窪物語』は『宇津保物語』の向うを張つて現はれた小說であるかのやうに見える。此の二つの物語の態度は多くの點に於いて對蹠的であつた。『宇津保』が卷々を續切にしたのに對して、『落窪』は切れ目なしのひたつゞけにした。『宇津保』が題材の多きを貪つたのに對して、『落窪』は出來る限り枝葉を削り去らうとした。『宇津保』が說話の筋を多元的に綾どつたのに對して、『落窪』は克明に、限られたる主要の線路を辿つた。『宇津保』

が相異した種々の文體を雜居せしめ、折々は破格違法の不純味を現はしたのに對して、『落窪』は合法合格の優美なやまと振で、始終を一貫した。 これらを綜合して考ふるに、『落窪』の作者は必ず感情よりは理智の勝つた人で、行き屆いた注意を以て、競爭の相手を見定めつゝ、主義を立て、構成を按排し、文體を整理したのであらう。 而してもし冒險的な想像を許さるゝならば、先行の『宇津保』を目の敵にして、意識して對蹠的もしくは對立的なる新作を試みたのであらう。

落窪物語古寫本（帝國圖書館藏）

『落窪物語』四卷、その筋は極めて合理的で、殆んど圖案的、均衡的に構成されてゐる。

昔中納言忠賴といふ人があつた。 今の北の方に男が子が三人、女の子が四人あつたが、外に王家筋なる亡き北の方腹の姫君が一人あつて、これが繼北の方からむごたらしい取扱を

受けた。そして寢殿つゞきの落ち窪んだ低い薄暗い一室をあてがはれ、あまつさへ、「落窪の君」と綽名されて、奴僕にも劣る待遇を受けた。

その待遇は言語に絶して殘酷なるものであつた。着物も食物も滿足には與へられず、課する事聽かずば出て失せよと罵られつゝ、裁縫を巧みにしたので、妹達及び妹の聟達の衣裳の仕立に、暇もなくこき使はれた。彼女に同情する者とては、阿漕といふ侍女唯だ一人であつたが、その中に三の君に通つて來た藏人少將の從者に帶刀といふ者があつて、これが阿漕と相思の仲となつた。帶刀の母は左大將の長子左近少將の乳母であつた。少將は東宮の御母なる女御の兄で、當世羽振第一の若人である。

緣は常に意外のところにある。或日帶刀が少將に落窪の君の事を語ると、少將は耳を欹て、やがて消息をことづけた。契りは遂に成立つた。かくして少將は度々通ふ中に、繼母の虐待ぶりに憤慨しつゝ、ます〳〵女の容姿と心ばせとに打ち込んだが、その中に繼母は少將の通ふ事を知ると、妬ましさに、彼女を酒魚などを蓄へるむさくろしい物置部屋に押籠め、剩へ、叔父なる色好みの老典藥頭に許して、その室の鍵を與へた。典藥頭は北叟笑んで夜毎に迫つた。彼女は、阿漕の助けによつて、一夜だけは、忌む日なり、胸痛しと偽り、溫石を求めさせなどして、辛うじて免れた。

「今は御代はりに、翁こそ病まめ」とて抱へて居り。君はいといたう惱み給ふに添へて、泣き給ふこと限りなし。阿漕、取りわきて、などしも物をかくいみじく思して。かゝらば、いかゞなるべきにかと思ひて、心ぼそく悲し。「御燒石あてさせ給はんや」と聞こゆれば、「よかなり」とのたまへば、阿漕典藥に、「ぬしをこそ今は頼み聞こえめ。御燒石求めて奉り給へ。阿漕がいはむに、よも取らせじ。これにてこそ、志のありなしは見え始め給はめ」といへば、典藥うち笑ひて、「さな

譯

「かうなれば、御代理に、この老爺が病氣をして上げたい位」など云つて、姬君を抱へて居る。

姬君はひどく氣を揉みつゝ、とめどもなく泣いて居られる。阿漕は「どうして、かう姬君の御身にばかり御心配事が重なるのだらう。かう御不運では、結局どうなられることかと思ふと、その悲しさ心細さと云つたらない。阿漕が

「溫石をあてゝ御覽になりますか。」

と尋ねると、

「よからうねい。」

と云はれるので、典藥に、

「賴みになる人は、現在お主ばかり。溫石を手に入れて來て、上げて下さいな。もう皆寢靜まつて、私などが賴んだつて、だめですよ。お主の志の有無も、先づこれで認められるんですから。」

なり、殘りの齡少なくとも、一筋に頼み給はゞ、仕うまつらむ。石山をもと思へば、まして燒石はいとやすし。思ひにさし燒きてむ」といへば、「同じくは疾く」とせめられて、いかゞはせむは、入り立ちたるやうなれど、いとやすし、心ざし情をも見えむと、行求めむとて立ちぬ。

といふと、典藥がにこ／＼して、

「その通り／＼、年寄つて弱りましたが、一筋に頼むと仰しやれば、やりませう。一念凝つては山をもといふ。それを思へば、燒石位は易いこと。焦るゝ思火でぽか／＼と燒いて來ませうぞ。」

「同じことなら、さ、お早く／＼。」

と促されて、「どうするものか。色な仕事を引受けたが、しかし、何、わけのないこと。これで此方の志も見て貰へるといふものだ」と思ひつゝ、燒石さがしにと出かけて行く。

次ぎの一夜は更に當惑の一夜であつた。姫も阿漕も有りたけの智慧を絞つて、隱し錠をさし、大きな唐櫃を遣戸口に置きなどして、「これ明けさせ給ふな」と神佛に願を立てつゝ、わなゝき／＼待つて居ると、やがて典藥がやッて來た。戸が明かないので錠を探つたが、どうしても探れない。

「あやし／＼　戸內にさしたるか、翁をかく苦しめ給ふにこそありけれ。人も皆許し給へる御身なれば、えのがれ給はじものを」といへど、誰れかはいらへむ。打ち叩き

押し引けど、内外につめてければ、搖ぎだにせず。いかにや〳〵と、夜更くるまで板の上に居て、冬の夜なれば、身もすくむ心地す。その頃腹そこなひたる上に、衣いと薄し、板の冷えのぼりて、腹こほ〳〵と鳴れば、翁「あなさがな、冷えこそ過ぎにけれ。」といふ。やがて鳴る腹を抑へつゝ、ぴち〳〵と出でかゝるのをこらへて惑ひ出でた。

文章はやまと振に整つて居る。際どい趣向を構へて、窮して通ずる出意表の味を見せてゐる。下がかッた下卑た趣味が折々覗く。一帶に整つて居りながら、何となく知識で纏められた文章といふ氣味があつて、高い意味の精練を缺き、氣魄を缺く、といふ此の作の特色と格式とは、これで凡そ察せられるであらう。

籠められた室

さるほどに危機は更に迫つて來たが、折よくも、翌くる日には、中納言の一家が總あげで、賀茂の臨時の祭見に出かけた。事は阿漕から帶刀を通ほして仔細に少將に報せられた。少將は

落窪物語繪卷（帝國圖書館藏）

時を移さず、多くの男共を率ゐて乗り込んで來た。やがて姫が救ひ出され阿漕が伴はれ、後には、北の方を苛々させる爲め、事の不成功を證據だてる典藥の文が殘されて、一同はやがて掃き清められた少將が別邸の二條殿に引上げた。

これが此の物語の第一部の序分、さいなみぬかれた落窪の君が救ひ出されるまでの大要である。

一四

第二部はさきの虐待に對する報復の連續である。

これよりさき、北の方は左近少將が落窪の君の夫なる事を知らずして、之れを四の君の聟に迎へようとした。少將は北の方の望みに乘じて、その裏を掻き、從兄弟の兵部少輔をわが身代りとして通はしめた。兵部少輔は世間交際も出來ぬといふ愚鈍の低能者で、容貌は醜怪を極め、顏の長く鼻のいらゝぐ故を以て、面白の駒と綽名された男である。

「いで、麿婚はせ奉らむ。いとよき人あり」とのたまへば、さすがに笑みたる顏、色は雪の白さにて、首いと長うて、顏つきたゞ駒のやうにて、鼻のいらゝぎたること限りなし。ひゝと嘶きて、引き離れていぬべき顏したり。

醜怪なる容貌に對する皮肉な誇張の描寫で、『源氏物語』なる末摘花の粉本となつたものである。少將と思つて迎へた中納言一家の悅びの夢は、三日目の露顯に破れた。四の君は恥ぢ呆れて途方に暮れたが、可哀相にもう因果の種を宿してゐた。のみならず藏人少將は、世の痴漢と相聟と呼ばれるのを恥ぢて三の君を捨てたが、その上の意外は、その藏人少將を左近少將が妹の聟として迎へたことである。中納言の一家は呆れて目を見張つた。これが報復の第一で、落窪の君を典藥に許した事に對する仕返しであつた。

その中に正月も末になつて、北の方は娘達を引きつれて忍びの清水詣をした。同時に少將も北の方と共に詣でたが、それと知ると、追ひ迫つて、礫を打たせ、路傍に押しのけて、片輪を

折らせ、「牛弱くは、面白の駒にかけ給へ」など罵らせて、先に立つた。堂に登つては、中納言の北の方の約束した局を占領して、北の方の一行六人をして一つ車の中に折重つて一夜を明かさしめた。これが落窪の君を狹い室に押籠めたのに對する報いで、作者は

いと狹くて身じろきもせず、苦しきこと落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし。

と云つて、作意を明らかに知らせてゐる。

やがて賀茂の祭の物見には、再び北の方の一行を散々に辱め、車を打ち壞した上に、抵抗した典藥頭を、死ぬばかりに踏みにじつた。これは典藥が姫に迫つた恨みに對する報いである。

最後の報復は落窪の君が亡き母から傳へられた三條の家の强奪であつた。中納言は落窪の君の行方が不明なので、もう我が物と信じ、立派に改築して引き移らうとした時、わたましをするといふ其の日に、少將は究竟の男等をあまた遣はし、まんまと占領して中納言の一家を呆れさせた。

第三部は前段の報復連發に對する償ひの慰めを以て滿たされてゐる。落窪の君は少將の執念深き報復に目をおほうて、しば〳〵其の中止を乞うたが、少將はあくまで報いて後に

あくまで悦ばすであらう、「思ひおきし事違へじ」と云つて聽かなかつた。而して奪ひ取つた三條の邸に移り住んで後、父の中納言を懇ろに招いで落窪の君を引き逢はせた。中納言は一切の恨みを忘れて、娘の無事と意外の出世とを悅んだ。之れを手始めとして、少將は落窪の君と相談して、中納言の爲めに、盛大なる八講を行ひ、次いで七十の賀筵を開き、最後には老病に惱む中納言の爲めに、奏請して宿願の大納言に加階せしめた。中納言の子達もそれ〴〵出世して、太郎越前守は播摩守から辨官となつた。三郎は中將となつて中宮亮を兼ねた。藏人少將に見捨てられた三の君は御匣殿となり、面白の駒に別かれた四の君は帥の中納言の北の方となつた。繼北の方は少將の報復にさいなまれた後、生みの子等から嚴しく非難されつゝ、それでも片意地の憎まれ口をつゞけたが、少將及び落窪の君からの打かさなる功德に、到頭我慢の角を折つて、立派な尼になッたことを悅び、

世にあらむ人繼子にくむな。繼子なむうれしきものにぞありける。

面白の駒にか

けたまへ

落窪物語繪卷（帝國圖書館藏）

と云ひ、死後も少將の顧みによつて立派な葬式を營まれた。

主人公なる少將道賴が榮華を極めたことは云ふまでもない。彼れは中將から中納言、右衞門督となり、大納言、大將となり、更に左大臣を經て太政大臣となつた。而して時めく右大臣の女をも顧みず、落窪の君唯だ一人を守つて、純潔なる一夫一婦の生涯を送つたが、その腹に生れた多くの子女は悉く出世して、一世の榮華がこの一門を繞つて輝くかのやうに見えた。落窪の君との仲介に肝膽を碎いた阿漕すら、出世に出世して典侍となつた。

むかしの阿漕は、今は典侍なるべし。典侍は二百まで生けるといふ。

これがこの小説の最後を飾つた遊情の文字である。

一五

吾等が『落窪物語』を讀んで先づ感ずるのは、その結構の合理的にきりッと纏められたことである。虐待の部、報復の部、慰藉の部と、三段三折返しの美しい對立均衡の趣致を見せたのは、その一つである。左近少將家對中納言家の葛藤を中心に、一切の事件を集注せしめて、いさゝかの狂ひをも見せなかつたのは、その二つである。主なる人物の波瀾ある一生を、併行纏綿せしめて、切り揃へたやうに首尾の兩端に亘らせたのは、その三つである。例へば、落窪の君は、繼母にさいなまれ、少將に救はれ、一旦報復の笞を加へられた里方の一族を十二分に顧みつゝ、太政大臣の北の方として幸福の生涯を了へた。中納言の繼北の方は落窪の君を虐待し、生みの子を溺愛し、やがて落窪を救つた少將から痛烈な仕返しを受け、最後に心痛きまでの厚遇を受けて、悔悟の一生を閉ぢた。少將は繼母の虐待から落窪を救ひ、一夫一婦の清淨な愛生活を完全につゞけつゝ、先づ中納言一家をいぢめぬき、次ぎに悦ばせぬいて、波瀾多き段々上りの一生を了へた。中納言は北の方の傀儡となつて、無意識のうちに落窪

及び他の子達に差別待遇を與へた結果、一たびは少將が報復のつらさに泣いたが、やがて温情の慰藉に悦び泣いて、薄志依存の長い生涯を閉ぢた。 帶刀は少將の爲めに落窪との仲介及び救出に盡力し、少將に引立てられ、左衛門尉、藏人、三河守を經て、左大辯に最後を飾つた。阿漕は帶刀と共に落窪及び少將に仕へて、衛門と稱し、掌侍となり、遂に典侍となつて、二百歳の長壽を樂しんだ。 この通り作の中に現はれた主要人物の成行が、相並んで開展しつゝ、常に合理的に錯綜し、纏綿して、最後まで少しの乖離をも見せてゐない。 是れが筋の上から見た『落窪物語』の姿であるが、かういふ整然たる筋の運びは、世々の小說の中にも極めて類の稀なるものであらう。 殊に隣接した先行の『宇津保』の筋が、あの通り多岐、散漫、低佪し彷徨して、滅茶々々な目まぐろしさを演じて居るのに比べて、『落窪』の筋の整然たる簡單化は、實にあざやかなる對照をなして居るが、おもふに『落窪』の作者は『宇津保』のだらしなき大風呂敷と締りのなき複雜とに對して、極度の緊縮と素性よき開展とを試みたのではなからうか。 但し是れは、さかさまに、先立てる『落窪』が小規模の統制振に物足らなさを感じて、『宇津保』の方が放漫なる大擴張を試みたとも見られぬことはないが、いろ〳〵考へ併せて、やはり『宇津保』を先とするのが穩かな觀察であらうと思ふ

序に是れは半ば文章の領分に屬することではあるが、『宇津保』の記事が精詳を極め、往

往煩瑣の弊を感せしめるのに對して、『落窪』の略叙は、先行の作に對する、心あつての試みではないかとも思はれる。例へば『宇津保』が二十首、三十首の短歌をひた續けに並列し、出産、産養、遊宴などの記事を際限もなく精叙したのに對して、落窪が「事どもいと多かれど書かず」、「我れも〳〵とし給へども、委しくは書かず、思ひやるべし」など言つて居るのは、恐らく競爭作と見た先行文學に對するあてこすりの暗示であつたのであらう。

『宇津保』の多岐放漫に對する『落窪』の緊縮は、寓意の上にも現はれた。『落窪』の作者は鬼神の世界を描かなかつた。音樂の幽玄を說かなかつた。外戚の抗爭を寫さなかつた。無論當時の世態を寫し、男女の戀愛を取扱はぬことはないが、それは世態、人情の味を見せる爲めでなくして、作者の持つ一種の興味を記述する爲めであつた。而してその興味は情的といふよりは寧ろ知的なる觀念とも寓意とも、教旨とも、イズムともいふべきものであつた。讀者は此の物語に於ける戀愛の中心第一ともいふべき少將對落窪の君の愛が、種々の危險を冒して、周圍に挑戰し、懸命に畫策し、世間を騷がし、人を痛めながら、何の爲めに戀したか、その戀がいかにして募つたかについて、深い細かい描寫を試みてゐないことを見出だされるであらう。試みたとしても、それは多く、歌や消息を贈答した、大雨を冒して深夜に訪ねた、裁縫の手傳をしつゝ、繼母への皮肉を云つた、宮寺詣でに伴つた、といふやうな、外廓的な事件本

位の記述で、知識的に掠つたことが多く、愛情活動の趣については、『源氏』にはもとより、『竹取』にも、『伊勢』にも、『大和』にも、『蜻蛉』にも、『宇津保』にも、遙かに及ばないことを見出だされるであらう。　思ふに『落窪』の作者の第一に覘つたのは、世態の眞相、愛情の開展を活き〳〵と寫さうといふことではなくして、むしろ一人の權力者が、逆境に沈んだ異性の弱者を救ひ出だして、弱い者いぢめをした横道者を懲らし、懲らした上に更に悦ばすといふ二重の痛快味を滿喫する、興味絶大の寓意を寫すにあつたであらう。　而して此の寓意を面白く表現する爲めに、母を喪つた中納言家の女が繼母に虐待されること、その女が少將に救ひ出されること、中納言家の誰れ彼れがそれ〳〵の報復を受けること、報復された上で、今度は更に意外の恩惠を施されることを書いたのであらう。　而して此の本筋の開展を面白くし、自然らしくする爲めに、帶刀、阿漕、和泉守夫婦、典藥頭等を點出したのであらう。　而して其の結果が何となく、情味を味はゝせられるよりは、むしろ一種の寓意、敎旨を吹き込まれる氣味があるので、その爲めに、從來の批評家から、或は繼子いぢめの物語の元祖と云はれ或は家庭小說、仇討小說、勸懲小說の開祖などと見られるやうになつたのであらう。　而してまた、かやうな根本趣意によつて書かれた結果が、自然にあの、事を描きて人を描かず、形を寫して心を寫さず、筋を作つて人生の必至を辿らず、概念を並べて神を寫さず、類型を描きて個

性を寫さず、要するに新らしい知的の試みが有り〳〵と、まざ〳〵と見えて、自然隱約の情趣に乏しいものとなつたのであらう。カントは、自然は人工に成れるが如く見ゆるに至つて美しく、藝術は自然に成れるが如く見えるに至つて美なりと云つた。吾等が『落窪』に對して、珍奇を感じつゝ、同時に『落窪』のために惜しむのは、この餘りに人工らしくして、自然に成つた趣の無い點にある。

一六

けれども、あれだけの目論見を立て、それにあれだけの骨組を與へ、あれだけの肉を與へ、血を注いで、あれだけの作に仕上げた『落窪物語』の作者の技倆は偉いものであつた。思ふに『落窪』の作者は大體、知識の人で技巧に富み、その上に諷刺性を持つた一種の理想家であつたであらう。彼れは常に罪なくして虐げらるゝ弱者に同情した。而してその弱者を虐ぐる惡性の强者に對する法界腹が客觀的に具體化されて、中納言一家に對する、あの報復とはなつたのであらう。また善良なる弱者を屈從せしめ、惡性の强者を橫行せしむる社會の制度習慣を憎むところから、その諷刺矯正に對する關心が、あの殘酷に近い、思ひ切つた報

復と、後の温情懐柔とに現はれたのであらう。王朝に行はれた惡習慣の最惡なるものの一つは、婦人に對する男子の横暴であつた。當時の男子は美人と見れば愛を求め、その愛を得れば、やがて第二に移り、第三、第四、第五に移つた。中には數十、百人に轉々して、これを一種の見えとも、弘誓濟度とも心得る者があつた。かくして彼等は、多數の女性に稀薄なる愛を振り分けた。或者は一部を捨て去り、或者は慕ひ寄る者をいぢめ拔いた。とにかく任意に多數の異性に接する事は、當時の身分ある男子の寧ろ誇りとする所で、同時に社會の公認する所であつたのである。これは『竹取』『伊勢』『大和』『かげろふ』等、すべての文學の專ら描寫した所で、その殊に甚だしいのは『宇津保物語』であつた。『宇津保』の作者は、一人の貴宮に對して、多くの男子に狂態を盡くさしめた。彼等の多くは位高くして妻子を有する者であり、また其の中には白髪の老翁があり、父子にして愛を爭ふ者があり、同母の兄にして其の戀の失望に死する者があつた—藤原の君—の巻には、已に太政大臣の娘を妻としてゐる源正頼に、嵯峨院が皇女を賜ふとて、三日目の夜に御土器を取つて、

　此處にかく物するとて、かの太政大臣の女を忘れず、ひとしく通ひたまはむ、よかるべき。

と仰せられたと書いてある。

最も甚だしいのは右大將藤原兼雅の婦人に對する態度であつた。彼れの愛人等の中、女

三、宮と、式部卿、宮の中の君と、仲賴、少將の妹と、右大臣橘、千蔭の妹と、彼れは此の身分の高い四人の女性を一條の邸に迎へ取つて、大切にかしづいてゐたが、（それをば「いたく時めかし給へる人々」と書いてある。）俊蔭の女を山中に見出だしてからは、全く忘れたるが如く、十年餘りも一條の邸を見舞はなかつた。彼れは老いて後、その子仲忠の諫めによつて、これらの四人を三條の邸に迎へたが、仲忠がその使に立つた時に、女君達に仕へてゐる女房は、

わが君をわびさせ奉る盜人の族！

と云つて罵つた。そして仲正が歸つて父に報告した時に、北の方は「それほどに愛された女君達がうち捨てられて、自分一人が大切にされたのかと思ふと、悲しくなつてつい泣いた。かく憎からず思ひける人々をおきて、かくありけると見給ふも悲しければ、うち泣き給ふ。

と書いてある。

兼雅が俊蔭の女（卽ち侍從仲忠の母）を得て後、今度は貴宮に思ひを焦して居た折のことである。彼れは或時北の方と共に桂の別邸に赴いた。そして其處から貴宮に文を寄せて、宮の返歌を得た。その時に彼れが北の方に對して言つたことに、「どうぞして此の君を得たいと思ふ。若し此の君を、お前と同樣に並べて愛したならば、どんなに世間が驚くことであらう。

一あの評判の貴宮を得ても、やはり捨てぬところを見ると、あの侍從の母の方が優つてゐると見える。同等ならば後口の珍しい方を、愛しまさるわけだからな。あゝけなるいわい！・などとわい／＼いふことであらう。」―といふと、北の方が―「さうなッたら、まあどんなに結構なことでせう。懇ろに申上げて、お迎へなさいな。わたしは、どうぞ入らッしやるやうにと思ひますよ。お仲間が澤山あッては、と云つても、そのお仲間次第ですわ。獨りぼッちでゐたことも、曾つてはあるのですからね。忘れてさへ下さらなければ、何も心配はいたしません。

いかで此の君もがな。わが君とひとしくてあらば、いかに人驚かむ。―いはゆる貴宮を率ても猶ほ絶えせぬは、この侍從の女こそまさるべけれ。等しきは珍しきをこそ思ひまさめ。心にくしや―などこそ罵らめ。―……北の方―げに、あらばいかによからむ。まめやかに聞こえ給へかし。こゝにいかで、さ物したまはなむとこそ思へ。……數多ありとも、ありがらにこそあらめ。然あらでこそありしか。忘れたまはずは、何をか思はむ。（梅の花笠）

と答へたと書いてある。また或時は此の北の方の髪の美しいのを賞しつゝ、もう大將にもなつた子の仲忠を前にして、

この御後手の廣ごりかゝるを見つきてこそは、我れは聖になりにたれ。よき人を家に多くする爲、使ふ人のよきを集めて、宮をば盜みもて來て、さるものにてする爲奉りて、人の妻などの許にも、到らぬ隈なくありきて、皆憎まれてこそありしか。今樣の人は怪しうまめにこそあれ。まろは、かしこき天が下の御門の御女を持たりとも、其のおとうとの御達、そのあたりの人の妻は、女御まで殘してましや。」と宣へば、大將（仲忠）「いとうたてあること！」

譯

「その綺麗な髮の美しく廣がつたお前の後妻に惹きつけられて、余は聖人になつたのだ。女漁りをしない聖者にはなつたのだ。わしは美しい人を澤山家に住ませ、召使も綺麗なのを選つて集め、宮樣をも盜んでお連れして來て、あの通り然るべき妻と定め、他人の妻君の許へも、行かぬところが無い位、親しく入り込んでは惡まれ者になつてゐたのだ。今時の人は馬鹿に物堅くなつたものだね。わしは畏れ多い天が下の御一人のお姬樣を妻に持つても、その御妹御や、近きあたりの人の妻君をば、女御なりとも殘すものかね。」

と、父の兼雅が言ふと、子の大將仲忠が

「これはひどい事を仰しやいますね」と云つた。

と、傍若無人に言つて居る。恐ろしい事を言はしたものである。かういふ病的の思ひあが

つた思想は、已に『伊勢』にその端緒を見たもので、『源氏物語』などの暗示によつて察すると、『交野』『駒野』等の失はれた物語は、恐らく此の種の放埒な情事を描いたものであらう。また實社會の事實にも之れに類したものがあつたのであらうが、それを大規模の文學にして、述懐にも、行爲の上にも現はしたのが『宇津保』で、心ある者は恐らく眉を顰めたであらう。而して之れを見て一種の義憤を感じたのは『落窪』の作者であつた。而して滔滔たる一代の流行を堰き止めることは、隻手の能くするところではないが、せめては世人の良心覺醒の一助にもと思ひ、少なくとも濁りに染まぬ一人の超越したる心境を諷刺の筆に託さうと考へて創造したのが、恐らく落窪の君一人を守つて一夫一婦の清い生涯を送つた少將藤原道頼であつたであらう。

何故であるか。

一七

少將が落窪の君を二條の邸に迎へ取つて暫らくしての事である。時の右大臣が其の一人娘を少將に妻はさうとして、その仲介を少將の乳母に託した。乳母は悦んで少將に傳へ

ると、少將は言下に拒絶した。

一人侍る程ならましかば、いとかしこき仰せごとならましを、今はかくて通ふ所（落窪いこと）あるやうにほのめかし給へ。

當時としては非常識ともいふべき破天荒なる正義の聲である。乳母は門閥なる妻の里方の後援を得るのを、若君の爲めと思つて、僞つて承諾の旨を答へた。

其の噂がやがて落窪の君の耳に入つた。君は何となくふさいで居る。少將は怪しんで理由を尋ねたが、答へない。少將は云つた。「何か氣にかゝる事があるのでせう。御容子でわかりますよ。世間の男は、美い女を見ると皆、「そりや愛してますとも。忘れなどするもんですか。あゝ死にさうだ。戀しい〳〵」などといひますが、私はそんな事は言ひません唯だどうかして、あなたに心配をかけまいと、初めからそればかりを思つてゐるのです。

まろは世の人のやうに、「思ふぞや、忘れめや、死ぬや、戀しや」なども聞こえず。唯だいかで物思はせ奉らじとなむ思へど、煩はしき御氣色の、この程見ゆるは、いと苦し。

彼れは戀の初めに女の機嫌を取ることをしないと云つた。そして初めから物思ひをさせまいとのみ念じてゐる、と云つた。

その中に乳母は右大臣家の準備が進んでゐることを傳へて、少將の飜意を迫つた。そし

て「立派な奥様のお里方から取持たれるのが當世風ですよ。たとひ愛人がおありになつても、それはそれとして、右大臣家の方へ御文を御あげなさい。いくら家柄だつて、「落窪」なんていふ綽名がつくやうぢや、仕様がありません。奥様の御兩親が揃つてもてなして下さるやうでなくツちやあ」と云つた。少將は答へた。

ふるめかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしき事もほしからず、おぼえもほしからず、父母具したらむをとも覺えず、落窪にもあれ、おがり窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。人の言はむことわり、其處にさへ、かくのたまふこそ心憂けれ。

譯

時代おくれの性質（たち）といふものだらうよ、わたしは當世ばやりの結構な事も、うれしいとは思はないのだ。また妻の里方からちやほやされようとも願はず、兩親の揃つた女をとも考へない。たとひ落窪でも、おがりくぼでも、忘れまい、捨てまいと思ふといふのだもの、何とも仕樣がないぢやないか。他人の彼れ是れ言ふのは尤も、お前までがさう言ふのかと思ふと、情なくなるね。

世間の流行を無視し、妻の里方を無視し、のみならず世の重んずる當の女の花やかな附屬資格をも全く無視したる、人物本位、愛本位、而して一たび愛すれば終生渝はることなき純愛の

表白である。 時代に對する反抗の意識がなくして、あの時代に於いて、その作中の人物に是れだけの事が言はせられるであらうか。

少將と乳母との對話を聞いて、乳母の子の帶刀惟成は母を詰つた。 そして母の言ひ爭ふのを聞いて、「お母さんが二度とそんな事を言つたら、私はすぐ坊さんになるよ」と言つて剃刀を出して身構へた。 正義の感化が周圍に及んだことを暗示して、かうは書いたのであらう。

かくして少將は、落窪の君の憂鬱が右大臣の娘の噂を聞いた結果であることを悟つた。そして二條院へ行つて、「御ふさぎの原因が、やつと解りましたよ」といふと、女君が「何でしたツけね」と云つた。「右大臣の方の事であつたんでせう」と云ふと「うそですわ、〳〵」と云ひながら、にこ〳〵して居られる。

物ぐるほし、御門の御むすめ賜ふとも、よも得侍らじ。……女の思ふ事は、また人まうくる事をこそ歎くなれと聞きしかば、その筋は絶えにたり。

譯

「狂氣じみた話！ 御門がお姫樣をやると仰しやツたツて、大丈夫いたゞきはしませんよ 女の始終氣にかけて居る事は、男が二號を作るといふことで、それが女の愁歎第一の種だと聞いて居るから、その方の事は、もうふッつりと思

人々とかう聞こゆとも、よもあらじとおぼせ。

ひ切つて居るのです。人が何彼とお耳に入れても、決して、そんな筈がないと御信じなさい。」

敢然として時流に逆らつた、實に立派な覺悟である。「御門のおむすめ賜ふとも」の一句は、或は『宇津保』に於ける兼雅が「かしこき天が下の御門の御女を持たりとも」の放言に對して報いた一矢かとも思はれる。要するに吾等は『落窪』に於ける少將が是等の言葉、生涯にわたる彼れの實行、及び此の物語の大體の調子が、作者の心中に於ける一夫一婦主義の根強き一念、——實際運動を開始する迄ではなくとも、少なくとも何等かの表現なしには止まれぬ男女の操守に關する熱意の所産と見るべきもので、また文學運動の史的因緣としては、隣接した前行の『宇津保』に關する反動の氣分で書かれたものであると思ふのである。而して此の觀點から『落窪物語』を見直すと、是れ程の實際氣分を、よくもあれ迄に藝術化して、婉曲に、非露骨に現はしたもので、上乘の文學としては、幾多の缺點がありながら、曲亭馬琴に見る一種の文學主張、乃至山東京傳やトルストイの後半生に見るが如き道義重要視の尊き一面を見ることが出來るやうに思ふのである。

一八

とにかく『落窪物語』の作者は道義に關して時代の水準を高く拔け出でたる關心を持つてゐた。その上に理知の勝つた文學的才能を具へてゐて、直前にあの、組織、文章、操守、すべてに於いて放漫なる大規模の『宇津保物語』を見たのである。その結果が、この短く纏まつて、理の詰んだ、文章の整つた、そして道義的に一種の見識を見せた『落窪物語』となるのは、理の當然といふべきであらう。

これらの特色を持つ自然の結果として、此の物語はしば〳〵第二義的の取扱を受けた。上田秋成が「伊勢、源氏の物語どもの、文にも歌にもたぐふべきものなく、さかしきはあれど、よく讀みてよく心得ずは、無下にうたてきわざも多かりなむかし。この物語なむ、ひとり聖だちたる文のつらにも取り加へてむに、益なきものぞとは、賢き人もいふまじかりけり。あないみじ、あなめでた」と稱へたのは、此の物語の道義性に見とれた、恐らく一種の横ぞれした過褒であらう。中村秋香が「文脈正しく、照應細やかにして、強くをゝしく、しかも言外に限りなき意味を含ましめたる上におきては、此の物語に超ゆるものあるべからず。されば

此の物語をよく讀み味はへて、文脈照應をはじめ、詳略の法を悟らんには、文章を綴る上につきて、いみじき益を得つべきなり」と云つたのは、その文章の合法性に見惚れた一種の過褒であらう。その他、繼子いぢめの物語といひ、仇討物語といひ、權勢小說といひ、勸懲小說といひ、理想小說といひ、手紙本位の小說といふ、いづれも此の物語を第二義的に見たもので、作者に取つて一種知己の言ではあらうが、同時に迷惑な特色づけでもあるであらう。

『落窪物語』は、やゝもすれば其の文學價値を低める傾きのある、かやうな第二義的の要素を少なからず備へてゐた。けれども作者はそれらの要素を可なりの程度に支配して、第一義の文學的光彩を發揮させてゐるので、そこが『落窪物語』の優れたところである。これは恐らく結構、寓意、文章、人物のすべてについて云はれることであらう。その中結構、寓意については、已に上に述べた通りであるが、文章についても、やはり同樣である。それは必ずしも中村秋香が推賞したほどのものではあるまい。例へば、

大方の心ざま賢くて、琴なども習はす人あらば、いとよくしつべけれど、誰れかは教へむ、母君の六つ七つばかりまでおはしおけるに、習はしおき給ひけるまゝに、箏の琴をよにをかしく彈き給ひければ、向ひ腹の三郎君、十ばかりなるに、箏心に入れたりとて、これに習はせよと、北の方ののたまへば、時々教ふ。

の如きは、違法破格ではないといふだけで、素直に連絡もせず照應もして居らず、いかに贔負目に見ても、穩雅とも整齊とも言ひ得ないものであらう。けれども會心のところ／＼になると、さすがにはずんだ味を見せて、讀者を惹きつけるものがある。中でも作者が得意にしたのは、危ない場合を際どく轉回させて行くユーモアの場面で、殊にその一端に下掛つた下品な洒落を織り込んだところであるらしい。例へば少將が新婚の第三夜に大雨を冒して落窪の君を訪ふ途中の樣子を、

我れは唯だ白き御衣一重を着たまひて、いと物憂げに引連れて、帶刀と唯だ二人出で給ひて、大傘を二人さして、門を密かに明けさせ給ひて、いと忍びて出で給ひぬ。つゝ闇にて、わぶ／＼道の惡しきをよろぼひおはする程に、前おひて、數多火ともさせて、小路ぎりに辻にさしあひぬ。いと狹き小路なれば、え歩み隱れず。片側みて、傘を垂れかけて行けば、雜色ども、「この罷る者ども、暫しまかりとまれ。かばかり雨もよに、夜中

足白の小盜人

落窪物語繪卷　（帝國圖書館藏）

にたゞ二人行くは氣色あり。捕へよ」といへば、わびしくて、暫し歩みとまりて立てれば、火をうち振りて、人々「足どもいと白し。盗人にはあらぬなんめり」といへば、「まことの小盗人は、足白くこそ侍らめ」とて行き過ぐるまゝに、「かく立てるは何ぞ。居侍れ」とて、傘をほう／＼と打てば、屎のいと多かる上に屈まりゐぬ。またうち逸りたる人、「强ひてこの傘をさし隱して、顏をかくすは何ぞ」とて、往き過ぐるままに、大傘を引き傾けて、傘につきて屎の上にを居たり。火を打ちふきて見て、「奴袴着たりけり。身貧しき人の、思ふ女のがり行くにこそ」など、日々にいひておはしぬれば、起ちて「衞門の督のおはするなんめ

り。我れを嫌疑の者と思ひて、今や捕ふると思ひつるにこそ、死にたりつれ。我れを足白き盗人とつけたりつるこそ、可笑しかりつれ」など、たゞ二人語らひて笑ひ給ふ。

と寫してある如きは、文句に多少の不熟はありながら、熱情を包んで愛人の懷ろへと急ぐ貴公子が、不意に起こる障礙を切り拔け〳〵進み行くをかしさを、見るやうに書いて居る。屎の臭身を、一度は歸らうと歎きながら、更に勇を鼓して愛人に麝香と嗅がるべく急ぐところなど、下卑た趣味に爆笑を賣つて、同時に之れを進一歩の足場とする趣があり、恐らく作者が文藝の純一境に立つて、破顔しつゝ運んだ筆であらうと思はれる。

もう一つ優雅な筆致で、『源氏』の壘を摩するやうに思はれるのは、消息に於ける贈答歌の前後のあしらひである。例へば、落窪を救ひ出して、二條に住ませて間もなく、少將が父母の本邸から落窪に送つた手紙に、

今の間いかに。後めたうこそ。内に參りて、只今歸り出で侍りなむ。‖

唐衣きて見ることのうれしさをつゝめば袖ぞほこ

譯

「どうして居られる？　今別かれて來たばかりなのに、もう君の事が氣にかゝつて仕樣がないのです　これから參内して、すぐに退出して、お側にまゐりますよ。

かうして自由に行つては逢へる今の身の嬉しさを、も

ろびぬべき』なか／＼つゝましくなむ、今日の心地は」とあり。御かへり、「こゝには

憂き事をなげきしほどに
唐衣袖はくちにき何につゝまむ―

と聞こえ給へるを、あはれとおぼす

し包んだら、袖が綻びてしまひませうよ』が、それでゐて前より却つてきまりが悪いやうに思はれますね。どうしたのでせう、今日のこの心地は！」

とあつた。落窪の君からの御返事は、「わたしの方は、

つらい事を歎きつゞけて來ましたので、着物の袖はすつかり朽ちてしまひました。もう嬉しさを、包むものがありません。

と書いてよこされたのを見て、可愛ゆい事をいふと思はれた。

文句が素直で、自然で、簡單で、情がこもつて、餘韻が豐かで、實によい。歌と地の文との間に於ける不即不離の關係など、何とも云はれぬ味である。『落窪』に於ける、文章としての第一妙處は恐らく此の種の文にあるであらう。『宇津保』も此の種の文に於いて、特に筆の冴えを見せたが、かういふ歌の前後のあしらひの曲味が『蜻蛉日記』あたりから、段々と工夫が積まれて、遂に『源氏』の玉成を見るやうになつたものと見える。

『落窪物語』の人物も、やはり同樣の傾向を持つてゐて、元來が理智的に捏ね上げられなが

ら、それでゐて一種の生きた命を備へたかのやうに見える。『落窪』のおもなる人物數十人の中、最も精しく寫され、同時に最も多く特色を持たせられたのは、落窪の繼母と少將とであらう。而して此の二人の性格は、共に徹底的に我意を通ほす所にあつた。而して女が此の執拗なる根本性を、素直で受身的な善良なる若き女性に加へて、一向專念に虐めぬいたのに對して、男は同じ根本性に氣の毒な愛人の恨みをも加へ、繼母の虐め振に對應する恰好な復讐の方法を考へ、剩へ抑揚二段の報復手段まで案出し、着々之れを實現して最初より最後に及んだ。同じ性格のかやうな變化ある對峙は、恐らく作者の秀でたる理智の考案によるのであらう。かやうに双方それ〴〵の興味を見せてゐるが、少將の方には知的の細工が加へられ過ぎた傾きのあるのに對して、繼母の方は『源氏』の弘徽殿を思はせる樣な所があつて、その一本筋のきび〳〵した活動振には、憎々しさと共に一種の愛嬌さへある樣に見える。

作者の性格を分前したかと思はれる此の男女二人の中心人物に添へられた二人の副人物も、亦恐らく作者の深き考慮の結果であらう。繼母に副へられた夫の中納言、少將に副へられた北の方落窪の君、彼等は殆んど意志といふものを持たぬ、善き意味の傀儡であつた。中納言は北の方次第のお人好しである。落窪の君も亦從順で、控へ目で、優しく賢いばかりで、特にこれといふ凛とした建前を持つてゐるのではない。この組み合はせは恐らく剛柔

各〻の特色を際立たせつゝ、本主人公をして親しき同伴者から、少しの制肘をも受けることとなく、十二分に手腕を振はせる爲めであらう。

中納言と落窪の君とは一對の類似性格者と見るべきものであるが、もう一對の他の類似性格者は阿漕と帶刀とである。彼等は共に利巧で、陽氣で、世話好きで、親切で、機轉があつて、同じく中納言家と少將家との双方に關係があつた。而して善に與みし、仕ふる所に忠實な所から、中納言家にも仕へつゝ、專ら少將と落窪の君との爲めに謀を構へて、彼等の多難なる愛を成就させた。作者は必ず同性格なる男女主人公の一對と男女副主人の一對とを考へた上に、仲介の役を勤むべき同性格なる男女の一對を設けんとして、此の花やかな從者夫婦を描き出だしたのであらう。而して最後に作全體にゆとりを持たせ、遊情のくつろぎを附けんが爲めに、若き面白の駒と老いたる典藥頭とを點出して、痴情の喜劇を演ぜしめたのであらう　これは悉く、われらの我がまゝな想像ではあるが、作者が諸人物の性格づけと配合とは、凡そ此の通りで、あとの人物はその時々に於ける穴埋め、場ふさぎに案出されたものであらうと思はれる。

かう見ると、人物性格の點より見ても、『落窪物語』の作者がいかに理智的に優れてゐたか、いかに理智的の考案をめぐらしたか、同時に理智に偏する傾きがありながら、その技倆に

よつていかに之れを藝術化したかを察知することが出來るであらう。

一九

『落窪物語』の現はれた時代は、はツきりしないが、『宇津保』の後に出來たらしい認定によると、早くとも圓融天皇御宇の末葉よりは上らぬであらう。また『枕の草子』の末部に、藤原成信の中將が雨の夜に清女が朋輩の兵部といふを訪ねて來た事を皮肉して、

落窪の少將などはをかし。それも昨夜も、一昨日の夜もありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞ憎く穢かりけむ。さらでは何か。

と言つて居る。無論少將道賴が大雨の第三夜に落窪を訪ねたことを暗示したので、そして是れが一條天皇の長保二年の出來事であつたことは、『落窪物語』が、その頃已に時人の話題に上る程度に流布してゐたことを證するものである。同時に『枕の草子』の「物語は」の條に「住吉、空穗の類、殿うつり、月待つ女……」と書き並べながら、『落窪』の名を逸して居る所を見ると、それは『落窪』がそれらよりも新しい故を以て、生々しい同時代の作に重きを措かなかつたのではなからうか。或は『落窪』が『住吉物語』の主要なる筋を取つ

たのに輕蔑の見識を見せて、その名を記さなかつたのではなからうか。 それに『落窪』に見える引歌が纂輯後の『拾遺集』から取られた點から、此の物語を一條天皇御宇の初期と、見る吉川秀雄氏の說もあり、彼れ是れ合はせ考ふるに、落窪は住吉、空穗等、『枕の草子』に列

古版本
（帝國圖書館藏）

記された物語群のいづれよりも後れて一條天皇御宇の初期に現はれたと見るのを妥當とすべきであらう。 吾等は松木琴園が村上朝以前說、賀茂眞淵が冷泉朝說はもとより、中村秋香の圓融花山以前說も、合理とは思はれないやうに思ふ。

『落窪物語』の作者は、その文章の風致により、人物の描寫、殊に男主人公少將道賴が性行の記述振によつて、一流の見識ある男子とは信せられるが、傳說の通りに、源順とは思はれない。 源順は『宇津保』の作者に擬せられては居るが、『宇津保』と

『落窪』との間に見える文學性の著しい對立は、二つの物語が同じ作家の手に成ることを許さぬであらう。また彼れが圓融天皇の永觀元年（一六四三）に七十三歳で歿してゐることも、此の傳説を否定して居るやうに見える。

『落窪物語』は、結構、詳略、人物の性格、配置、文章等、文學要素の殆んど全面に於いて、『宇津保物語』を向うに廻した作のやうに見える。而して二者の中心相違は、『宇津保』が八方に取り廣げた天才的の放漫な遣口に對して、『落窪』が敏感周到なる理智によつて、合理、緊縮統一及び理想具現を試みた點にあるやうに見える。尙ほ思ふに『落窪物語』は既存の『住吉物語』を種として換骨奪胎ともいふべき一種の模様替を試みたものであらう。而して『源氏物語』や『枕の草子』によると、『住吉』が、可憐な姫君が老若不明の主計頭にほと〳〵誤られんとした事に本づいて、『落窪』は、老いたる典藥頭が落窪を陰濕な物置室に襲ふことにしたらしく、また妻訪ひの第三夜に大雨を冒す滑稽は、『住吉』には全く無き新しい趣向であつたらしい。『落窪』が『住吉』を何處まで取つたか、また『住吉』をどれ程まで變へて新要素を注ぎ入れたかは、無論知るべくもないが、察するに『住吉物語』は唯だの繼子いぢめ物語で、その間に在來ありふれたやうな月並の戀愛要素を織り込んだのであらう。而して『落窪物語』は『住吉』の持つ内容の上に抑揚、苦樂といふ二段報復の趣

向を加へ、また更に主人公の一夫一婦主義による人道諷示の大義を加へたのであらう。即ち『落窪』の『住吉』に對する關係は、單なる模倣、添削、增減、轉換といふやうなものではなく、文字通り骨を換へたもの、胎兒を奪つて自家の本領による育て直しをしたもので、それは『源氏物語』が在來の古物語を利用し活用したのと、ほゞ同樣なる魂の入れ替へであつたであらうと思はれる。

結構に於いて、『落窪物語』は『宇津保』が卷々を圓成獨立せしむる方式に對して、卷々を緻密に連絡せしむる形式を取つた。

敍述の方式に於いては、『宇津保』の如く、無用の小枝を差させぬやうに、煩瑣な並敍、累記をせぬやうに、文章に於いては、合法の中に趣味を加へることを旨として法格を崩さぬやうにつとめた。

人物は各〻特殊の性格を具へ、相對立して、その特性を發揮するやうに、但し同時にその特殊性格が抽象的に露骨に現はれぬやうにつとめた。

これらの上に、當代の時勢に對して懷抱して居る一種の人生觀を盛らう、

これらが恐らく、『落窪物語』の作家が、作家として考へてゐたことであらう　無論まだ物語の作者などいふ分業もなく、貴族の詞人が筆の立つまゝに消閑の具を供するといふ世

に於いて、かやうな改まつた藝術の主義を持するといふことはなかつたであらうが、その胸中の一物を揉みほごして近代的に言ひ換へれば、彼れの所期はまさしくかうであつたであらう。而して彼れはその所期の大部分を實現して、短いものながら、長き『宇津保』に拮抗すべき意義深き創作を貢いだのであつた。

新しき藝術思想に燃えて、諸方面の要素を含められるだけ含め、卷々を讀切りに纏めては限りもなく叙述を延長した大作『宇津保物語』！　理智本位に、思想をも、事件をも、人物をも、文章をも、構案し、整理し、緊縮して、やゝもすれば智的、理的に仕組まれたる人生圖解とならうとした『落窪物語』！　彼等は今や左右から王朝物語文學大成の相反した神祕の鑰を捧げて、彼等を調和融合する大手腕の出現を待つて居た。

やがて大手腕が現はれた。紫式部である。而して彼女によつて豫期にも優る大調和大融合の大作が現はれた。『源氏物語』である。

第十六　偉大なる集成創建の『源氏物語』

一

『源氏物語』の作者が在來の文學に對する攝取融合の傍若無人振は、先づ第一帖「桐壺」の巻頭に現はれた

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに……

は、伊勢の御が歌集の冒頭なる

いづれの御時にかありけむ、大御息所と聞こえける御局に、大和に親ありける人さぶらひけり。

を取つたのであらう。巻頭の一句は作者の命に懸けて重んずるものである。しかも其の句は紫式部の繰返して讀んだに相違ない伊勢集の冒頭の句である。同じ桐壺の巻の中に長恨歌の御屏風の歌の作者として、貫之と並べて其の名を擧げた人の歌集、また同じ巻の中

に引いた宇多天皇の「明くるも知らで」の御製を擧げて居る歌集の冒頭の句である。彼女が公然と之れを引用したことに疑ひはあるまい。同時に創試の功は伊勢にあるにしても、もと一人の宮女の戀愛に關した單純な、一寸した思附であつた時代づけを、數多の后妃の君寵爭ひに關する宮廷悲劇の冒頭に應用して、此の大事件の起こつた時代のはツきりしない所に讀者の興味を釣らうとしたのは、目ざましき適切化、巧妙化といはねばなるまい。

同じ桐壺の卷に、源氏が七歳の時、お傅役の右大辨に伴はれて、鴻臚館に高麗の相人を訪うた事が書いてある。そして其の高麗人と詩を作りかはして激稱された事を寫して、

文など作り交して、今日明日歸りなむとするに、かく有り難き人(源氏)に對面したる悦び、かへりては悲しかるべき心ばへを、面白く作りたるに、御子(源氏)もいと哀れなる句を作り給へるを、限りなうめで奉りて、いみじき贈物どもをさゝげ奉る。

と書いてある。これは『宇津保物語』の最初に、清原俊蔭が早熟の才を寫して、

七歳になる年、父が高麗人に逢ふに、此の七つなる子、父をもどきて、高麗人と文を作り交しければ、おほやけ聞召して、怪しう珍しきことなり、いかで試みむと思すほどに、十二歳にてかうぶりしつ。

とあるのを少し變へたのであらうが、ませた子供が、父を出しぬき、父の名義で異國人と詩の

贈答をしたといふだけの孤立した早熟奇談を、大源氏の運命を定める一要因として極めて自然に利用したのは、同じ挿話の働かせ振に於いて非常な手腕の相違を示すものであらう。かく「いづれの御時」といひ、七歳の作詩といひ、彼れも是れも、語句の洗錬、用途の妥當、いづれの點に於いても、見違へるやうに輝きまさつて居るところを見ると、『源氏』の文の原作に對する關係は、模倣、追隨、借用ではなくして、寧ろ攝取であり、同化であり、移揚であり、また魂の入れ替へでもあつた。取る者は卑きものを高く輝かす心で取り入れ、取らるゝ者は甘んじて役立つことを悦ぶ奉仕の氣分を持つであらうと思はれる底のものであつた。

「桐壺」の巻だけについて見ても、此のほかに白樂天が長恨歌等、幾多の明示暗示があるが、『源氏』の作者の古文學攝取は、些細な字句や事柄のみならずして、作の眼目とも光彩ともなるべき重要なる趣向にも及んでゐる。例へば『落窪物語』の面白の駒を換質換位して末摘花としたるが如きは、絶妙なる攝取轉換の一つであらう　無論面白の駒は『落窪』の名趣向の一つであるが、『落窪』の

さすがに笑みたる顏、色は雪の白さにて、首いと長うて、顏つきたゞ駒のやうに、鼻のいららぎたること限りなし。ひうと嘶きて引き離れていぬべき顏したり。對ひゐたらむ人は、げに笑はではえあるまじ。

鼻うち仰ぎて、いらゝぎて、穴の大きなることは、左右に對建て、寢殿も造りつべく……

等を讀んで後に、源氏が始めて末摘花を見あらはした時の記述、

見ぬやうにて、外の方を眺め給へれど、尻目はたゞならず、いかにぞ、うちとけ優りのいさゝかもあらば、嬉しからむとおぼすも、あながちなる御心なりや。まづ居丈の高う、尾背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うち次ぎて、あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乘物とおぼゆ。あさましう伸びらかに、さきの方少し垂りて色づきたる程、殊の外にうたてあり。色は雪はづかしう白うて

譯

源氏の君は見ぬ振をして、外の方を眺めて居られたが、心の眼は始終後へに向けられて、一方ならず心を遣はれた、そして、どうであらう、はッきりと見て、想像したより少しでも優つてゐたならば、嬉しからうに、と思召すのも、無理な註文といふものである。いよ〳〵見られた、そして居丈の高いのが先づ目に着いたが、背中が恐ろしく長く見えるので、「それ見たことか」と、先づ胸のつぶれる思ひがされた。その次ぎに「これはひどい！」と見えるものは御鼻であつた。すぐ目につくのである。普賢菩薩は大白象に乘られ、その象の鼻は紅い蓮華のやうだといふが、その普賢菩薩の乘物らしく、恐ろしく高く伸びて、先の方が少し垂れ下つて、眞赤

眞青に、額つき此上なう晴れたるに、なほ下がちなる面樣は、大方おどろ〳〵しく長きなるべし。痩せ給へること、いとほしげにさらぼひて、肩の程などは痛げなるまで、衣の上だに見ゆ。何に殘りなう見あらはしつらむと思ふものから、珍しき樣のしたれば、さすがにうち見やられ給ふ。

になつてゐる所は、とても堪らないものである。顏の色は雪はづかしいばかり眞白で青味を帶び、額は大おでこで、見晴臺のやうに廣々としてゐるのに、それでも猶ほ下がちに見える所を見ると、此の顏よッぽど長いものと見える。それに痩せて居られることと云つたら、丸で干からびたやうで、肩のあたりなどは、着物の上からさへ痛さうに見えた。何の爲めに見あらはしたことかと悔いられながら、類のない珍しさに、やはり目を離すことが出來なかつた。

を讀むと、吾等は二者の趣味文品の著しく隔絶して居るのに驚かされる。『源氏』は『落窪』の男を女にした。兵部少輔を宮家の姫君とした。男の少將に操られて演ずる笑劇が、女の一家を鏖殺し恥殺して緣を切らしめる關係を、源氏が大輔の命婦の片言を過信して、相契つて後に呆れながら、その誠實をめでて長へに見捨てぬ趣向とした。これらはいづれも面白い駒對末摘花に於ける換骨の妙であるが、殊に優れたのは、中心興味の鼻の描寫で、その第一は、馬に見立てたのを象に轉じて、普賢菩薩をあしらふ事により、品位化し、同時に皮肉化した

ることである。第二は『落窪』がごッた並べにして、唯だ色が白い、首が長い、顔が白い、鼻が反つて、動いて、穴が大きいと云つて居るのに對して、『源氏』が心理經過の自然に從つて、顔の造作の順序立をしてゐることである。横目を使ひながら、先づ坐つた身體全體の居丈が目につく。次ぎには鼻の周圍に目を轉じて、先づ顔の色の白いこと、次ぎに額の恐ろしく廣いとを見出だす。そして顔全體の寸法を目分量して、最後に身體全體を、今度は深く觀察して、干乾びたやうな、醜怪なる痩せ身を見出だす。これは實に人間心理自然の進路を隙間もなく辿つた、活きた描寫ではないか。

第三は鼻その物の描寫に於いて、『落窪』が、「うち仰ぎて」「いらゝぎて」「穴が大きくて二棟三棟の大家屋も建てられる位」と、粗大なる事を漫然と並べて居るのに對して、『源氏』が普賢菩薩を乘せたい位、高く伸びて、先の方が垂れて、眞紅に色づいてゐる、と云つたことである。これならば、同じ長いにしても、一種の位があり、曲折があり、殊に尖端の眞紅は、この異樣の器官に中心を與へて、全體の描寫に愛嬌と締りとを添へたやうに見える。此の鼻端の紅色、恐らく此の一節の畫龍點睛であらう。吾等はこれを見て、甚だ似つかぬ比喩のやうではあるが、京都の二條城なる金碧燦爛の大廣間が、上段の床の前に垂らされた、幕を絞つた緋房によつて統一された偉觀を見るやうな心地がした。とにかく『源氏物語』が他の趣向

を取つて、之れを自然化させ、向上させ、かねて、魂を入れ替へる手腕は、之れによつて窺ひ知ることが出來るであらう。

二

吾等は『源氏物語』が他から取つた趣向の向上について、もう一つの例を引くであらう。それは螢の光によつて戀人を見る趣向である。

此の同じ趣向は『伊勢』『宇津保』『源氏』によつて三樣に試みられた。元祖はおそらく『伊勢物語』であらう。それは三十八段に出てゐる。崇子皇女の御葬儀の夜に、或男が女車に女と相乘りして出かけたが、天下の好色源至がその女車を見て、車中に螢を放つたといふ物語で、螢物語の部分は、左の通り極めて簡單なるものである。

天の下の色好源の至といふ人、これも物見るに、この車を女車と見て、寄り來て、とかくなまめく間に、かの至、螢を取りて、車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむと思ひて、消ちなむとす。さて乘れる男のよめる。

出でていなばかぎりなるべし燈つき

年へぬるかとなく聲を聞け

かの至、かへし、

月は入りがたの（桐壺）

いと哀れ泣くぞ聞こゆる燈火の
消ゆるものとも
われは知らずな

となむ返したりける。

至は女が乘つてゐると思つて螢を放ち入れたが、女は螢の點す火の光に見られるのかと、慌てヽ消さうとする、その間に、相乘した男が、「歸らぬ旅路への哀しい御門出ではないか。二十歳（はたち）にも足らぬお若い身そらで、御壽命の燈火（ともしび）が盡きさせられたとて、あれ〳〵、皆（みんな）の泣いて居る聲を聞け」と詠みかける。至は之れに對して、「泣く聲はいかにも哀れに聞こえる。しかし命は不

滅だ、燈火のやうに消えて了ふものと、自分は思はんよ」と云つた、といふので、單純な筋を續つて餘情は無限であるが、しかし螢物語としては極めて幼稚な、先づほんの芽生ともいふべきものである。

この芽を、最初に育て上げて、枝葉を生し、花を咲かせたのは「宇津保物語」であつた。それは、「初秋」の卷の中心興味で、朱雀院が俊蔭の女に執心なされ、女の子なる中將仲忠に、母を伴れて參内するやうに仰せられたが、女がどうしても命を奉じないので、仲忠は困つて、遂に母を欺いて仁壽殿に伴つた。院は女に舊情を訴へて、琴を御所望ある。女は遂に彈く。無論天下の名曲である。院は大きに御感あつて、卽座に尙侍の位を賜はり、

（平瀨本源氏物語）

御休所は、願ひに從ひて淸涼殿に時々なほ參り給へ。行末までも私の后に思はむかし。自らは屋陰に住むとも、御願ひの所はものせむ。をも讓りきこえむ。など仰せられたが、朧ろな燈火に滿足されず、螢を袖に包んで、その光によつて女を見られたといふのである。しかも、その螢の捕りかた、用立て方は頗る不自然なものであつた。本文にかうある。

上いかでこの內侍のかみ御覽ぜむと思すに、御殿油ものあらはにともせばものし、いかにせましと思ほしおはしますに、螢おはします御前わたりに、三つ四つ連れて飛びありく。上これが光に物は見えぬべかんめりと思して、立ち走りて、皆捕へて、御袖に包みて御覽ずるに、數多あらむはよかりぬべければ、やがて「童やさぶらふ、螢少しもとめよや、かの文思ひ出でむ」と仰せらる。殿上童夜更けぬれば、さぶらはぬ中にも、仲忠の朝臣は、承り得る心ありて、水の邊草のわたりにありきて、多くの螢を捕へて、朝服の袖に包みて、持て參りて、暗き所に立ちて、この螢を包みながら嘯く時に、上いとよく御覽じつけて、直衣の御袖に移し取りて、包み隱して持てまゐり給ひて、內侍のさぶらひ給ふ几帳のかたびらをうち懸け給うて、物など宣ふに、かの內侍の程近きに、この螢をさし寄せて、包みながら嘯き給へば、さる羅の御直衣にぞたゞ包まれたれば、殘る所なく見ゆる時に、內侍

「怪しのわざや」と、うち笑ひて、かく聞こゆ。

衣うすみ袖のうちより見ゆる火は
　みつ汐たるゝ蜑やすむらむ

と聞こえ給ふ。……心にくき人の、その容貌はた世に類なくいみじき人の、さる勞あるもの光に、ほのかに譬ふべき人なく、めでたく御覽ずること限りなし。

趣向は大分進展した。けれどもそれは唯だ複雜性を加へただけで、自然の風致に於いては、『伊勢』より退歩したとも見られる。朧ろなりとも既に御殿油がある。螢の光は恐らく、補ひばえがしないであらう。相手の女を前にしながら、帝が自ら立つて螢を追ひまはし、剩へ童子を呼んで、水邊の草叢をさがさせられるのは、不自然で、且つ待ち遠しいことであらう。頑是なき童幼に向つて車胤の故事の暗示は、わざとらしいであらう。螢を袖より袖に移すのは面倒である上に、袖に包みながら其の光をかざすのは、效果薄で不風流のやうに思はれる。「源氏」の作者は恐らく是等の諸點に氣づいたのであらう。彼女は晝の中に多くの螢を捕つて、紙に包んで用意して、隔ての几帳をかゝげると同時に、ぱツと空に放つ趣向とした。「源氏」の趣向は曲折に富んで複雜だが、同時に自然で、纏まりがあつて、眼目が光つて居る。

五月雨時分の一夜、源氏の弟親王の兵部卿宮が、源氏の養女の玉鬘を源氏の御殿の六條院に

訪ねられた。源氏は弟宮のなまめき振を窺ひ見たさの好奇心から、そのあたりに立ち彷徨うて居られたが、容易に見られぬを常とする戀女の姿を弟宮に見せて、その戀心を募らせようと思ふいたづら心から、螢を多く用意し置き、時分を見計らひ、間の几帳をかき上げて、ぱッと放たれた。原文は左の通りである。

何くれと言長き御答聞こえ給ふこともなく、思しやすらふに、寄り給ひて、御几帳の帷子を一重うちかけ給ふに、あはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。螢を薄き紙に、この夕つかた、いと多く包みおきて、光をつゝみ隠し給へりけるを、さりげなくとかく引きつくろふやうにて、俄にかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠し給へる側目、いとをかしげなり。おど

譯

兵部卿ノ宮の長い〳〵御挨拶がある、それに對して玉鬘姫は何の御返事もなく、思案に餘つて躊躇して居られると、源氏がつと立ち寄つて、二人の間の几帳の帷子を揚げて打ち掛けられたが、同時にさッと目を射る光！　一同は誰れが紙燭をさし出したのかと呆れた。これは源氏が、此の夕方澤山の螢を紙に包んで、光の見えぬやうにしておかれたが、何氣なく几帳の具合を直すやうな振をして居られる中に、か

ろ〳〵しき光見えば宮ものぞき給ひなむ。我が女と思すばかりの覺えに、かくまでのたまふなんめり。人ざま容貌など、いとかくしも具したらむとは、え推し量りたまはじ。いとよく好き給ひぬべき心惑はさむと、構へありき給ふなりけり。……宮は人のおはする程さばかりと推し量り給ふが、少し氣近き御けはひするに、御心ときめきせられ給ひて、えならぬ羅の帷子の隙より見入れ給へるに、一間ばかり隔てたる見渡しに、かく覺えなき光の、うちほのめくを、をかしと見給ふ。 程もなく紛らはして隱しつ。 されどほのかな

くだしぬけに光つたので、玉鬘はびツくりして、扇をかざされた、その横顏の美しさ。 源氏は思はれたであらう。 だしぬけに光が見えたら、弟の宮も必ず几帳の隙間から覗かれるであらう。 宮がかうまで熱心に言ひ寄られるのは、玉鬘を源氏の女と思ふだけの買ひかぶりからで、女の人品容貌がかうまで備はつて居るとは、よもや推量されまい。 これは一つ本物を見せて、首ッたけ迷はしてやらうと、かう考へて、それでかうまで工夫をしてあるかれるのであつた。

　宮は姫の居られる處を、凡そ此の位の距離と推量して居られたが、少し近くなつて來た樣子なので、胸の鼓動を感じつゝ、立派な羅の几帳の隙間から覗き込まれるその折しも、二間とは隔たらぬ直ぐ向うに、思ひもかけぬ光がほのかに射したので、意外の仕合せと悦ばれたのであつた。 すぐに騒ぎ立てゝ捕り隱しては了つたが、しかし螢の光に戀人を見る逸話

る光、艶なる事のつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに伏し給へりつる樣體のをかしかりつるを、飽かずおぼして、げに案のごと御心にしみにけり。

は、風流話の端くれに殘るであらう。おぼろではあるが、しかしすらりとした打解け姿の姫の美しさにすッかり見とれて、その面影が、果たして源氏の豫期の如く、宮の御心に燒きつけられたのであつた。

男二人に女一人の趣向は『伊勢』以來同樣に引きつがれてゐるが、戀する男が螢の光によつて意中の女を見ようとする前の二つの趣向が、『源氏』では、物好き心の兄たり親たる長者が、戀に燃ゆる弟に、餘り熱しない女を覗かせるといふ非常に複雜なものとなつて來た。而して其の手順は、螢を書の中に捕り集め、薄き紙に包んで隱しおき、男女の程よき距離に近づくのを待つて、隔ての几帳を揚げつゝ、女の面前に放つといふ、非常に自然なるものとなつて來た。文章の優れたことは言ふ迄もないが、その趣向のあしらひ振につき、『源氏』を見て後、溯つて前の二作を見ると、男が螢を捕つて女の車の内に放ち、女がそれを消さうとしたといふだけの『伊勢』は、餘りに稚く、燈火では物足らず、光を加へるのも事々し、螢の光によらうと思ひつゝ、帝自ら三四疋は捕られたが、數を多くしようとして、人の捕つて奉るのを待ち、袖に包んで女の室に歸り、その前にかざして殘る所なく御覽じたといふ『宇津保』は、やゝ

こしいばかりで、如何にも不自然であるが、『源氏』がそれらを蹈まへて、いかに曲折を豐かにし同時に自然にしたかは、上來の比較で明らかにされたであらう。而して源氏の前代文學攝取といふのが、たゞの模倣、假借、襲踏、乃至少變化を與へることにはあらずして、いかに高級なる換骨奪胎であつたか、移して以て遙かに其の價値を高揚する移ゝ揚的ゝ創造ゝであつたかが理解されるであらう。

三

和歌と前後の地の文との間に不卽不離の妙味あらしめるのも『源氏』が『宇津保』や『落窪』からお蔭を蒙りつゝ、同時に彼等を超越したものである。是等の例を細かに擧ぐれば限りがないが、『源氏』が彼等に取るところは、單にこれらの語句、事例、乃至一段一章に於ける光景のあしらひ振のみではなくして、物語全體の構造にも及んでゐた。先づ五十四帖に區分し、一帖々々を獨立させて美しき名を與へつゝ、全體としての大統一を完成したのは、『宇津保』の先例に倣つたのであらう。これは『宇津保』の卷の名「俊蔭」「藤原の君」「梅の花笠」「吹上」「菊の宴」「初秋」「藏開」「國譲」等を見て後に、『源氏』の「桐壺」「帚木」

源氏物語古註（葵）

「夕顔」「若紫」「花の宴」「須磨」「明石」「玉鬘」「初音」「胡蝶」「篝火」「野分」「早蕨」「宿木」「浮舟」「夢の浮橋」等を見れば、疑ふ餘地のない事であるが、前者の卷名十四稱と後者の五十四稱とを見比べ、更にそれらの名稱に統べられた內容の姿、匂ひ、響き、締りと、及びそれらが切れては續き、續きては切れつゝ、いつの間にか延長して大團圓に至る遠望の概觀相とを考へ合はせると、取り入れた方の『源氏』が、纏め振、續け振、離し振、轉じ振に於いて、いかに與へたる『宇津保』を、精錬し、移揚し、凌駕してゐるかが解るであらう。　此の讀切式の一團を續け〳〵行くこと

（海兵吉氏藏）

は、帝王の御宇四代に亘らしめる長年期の構成と共に、『宇津保』の作者が、あの空前の大長篇を續け行く祕術であつたであらうが、『源氏』の作者はその祕術を、人の知らぬ間に我が物とし、更に巧みに使ひこなして、更に長き雄篇を創造したのであつた。

序に組織構成の方面についていへば、『源氏』が帝王の御宇を桐壺、朱雀、冷泉、今上の四代に亘らしめたのは、おそらく『宇津保』が嵯峨、朱雀、今上、東宮と次第した四代繼續案に倣つて、更にこれを精錬し自然化したのであらう。また『源氏』が『桐壺』の大序に光源氏の一生、光源氏歿後の十三帖と、

三分の大區劃を立てたのは、これも恐らく、『宇津保物語』が、貴宮出現までの前期(俊蔭、貴宮に對する妻爭ひの中期、及び貴宮入内後の後日譚と、大體三期に分けたのに倣つたのであらう。或は同時に『落窪物語』が落窪君虐待期、對中納言家報復期、對中納言家愛憐期と三分したのに暗示を得たのでもあらう　とにかく物語の三大區劃は『宇津保』に始まり『落窪』『源氏』に繼承されたので、更に溯つての起原は六朝以來支郷佛教家等の間に遍く用ゐられた序分、正宗分、流通分の三分説から冥々の間に影響を蒙つたのでもあらうと想像される。要するに、豐富な收容力の藥籠、强烈な熱度の坩堝、それが『源氏』の作者の頭腦であつた。而して彼女は金銀珠玉はいふまでもなく、牛溲馬勃敗鼓の皮、あらゆる物資を掻き集め、之れを燃燒し鎔鑠して、見ちがへるやうな新しい物を創造したのである。

四

吾等は『源氏物語』の非凡なる古文學攝取の例として、最後に、文學價値の更に高い一事を引くであらう。「妻爭ひ」である。上代の神話傳説等は暫らく措き、物語文學で妻爭ひを主要なる興味としたものが、『源氏』までに三つあつた。その第一は『竹取物語』である。

『竹取』に於いては、妻爭ひがその骨子であり、同時に全體でもあつた。第二は『宇津保物語』である。『宇津保』に於いては、妻爭ひが骨子を成して約三分一を占めて居る。第三は『源氏物語』で、その妻爭ひは主なる興味の一つとして、五十四帖の中の唯だ十帖に亘つて居るのみである。 此の三者の同じ趣向に對する取扱振を比較して見ると、『竹取』は二人の皇子と三人の大官と、而して最後に時の帝とが赫奕姫に對して切なる愛を運ばれた事を寫したものであるが、その求愛行爲は一種の浪曼的冒險譚で、而して彼等各々の間には何等の交渉も競爭も無かつた。 而して姫は帝に對しては、さすがに謹愼の態度を取つたが、遂に御望みを容るゝ迄には至らなかつた。 卽ち『竹取』の妻爭ひは作り物語式であり男性相互間は全く無交渉で、結果は全部拒絶であつた。『宇津保』は『竹取』の趣向を賑やかに擴大したのであらう。 貴宮に對する求愛者は二十人に近く、東宮、皇子達を始めとして、部郎の諸大官より碩學、高僧等に及び、中には父子にして同時に愛を寄せ、同母の兄にして、許されぬ愛の苦痛に悶死したものもあつた。 けれども人物各々の間には殆んど何等の競爭もなく而して筋が緩慢に運ばれた後、勝は遂に東宮に歸した。 作者は多分『竹取』を目の敵にして、先づ單純なるを複雜にし、而して『竹取』が聖意に副ひ奉らぬのを非倫として、遂に東宮に參する趣向を構へたのであらう。

『源氏』は是等の後に出でて、五十餘帖にわたる長き趣向の進みの中間に、一種の妻爭ひを挿入した。吾等がこゝに謂ふ妻爭ひは、夕顏の遺兒玉鬘に對する競爭物語をいふのである。此の物語は第二十二帖の「玉鬘」に始まり、「初音」「胡蝶」「螢」「常夏」「篝火」「野分」「行幸」「藤袴」を終て「眞木柱」に終はつて居る。玉鬘が筑紫から歸つて來ると、源氏は之れを六條院に迎へた、そして實父の內大臣には祕密にして、之れを我が娘と言ひふらした。源氏の底意の一つは、かくして多くの若人達を釣つて、彼等に心を盡くさせるにあつたが、木乃伊取はやがて木乃伊に捕られて、源氏自らが追へども去らぬ煩惱の犬に苦しめられた。玉鬘に思ひを寄せた者は、妹と知らずして近づかうとした柏木や、(作者は恐らく『宇津保』の、貴宮の兄にして絕望の悶死を遂げた侍從仲澄に暗示を得て、之れを穩正化したのであらう)初め妹と思つたのが、後に事實を知つて言ひ寄つた夕霧や、紫の上の兄弟の左兵衛督や、その他にも多かつたが、二年に亘つて最後まで熱心なる交渉をつゞけたのは、冷泉の帝と、源氏と、源氏の弟の兵部卿宮と、髭黑の大將との四人であつた。此の四人には各〻特別なる境遇と性格とがあつた。而して其の境遇性格は『竹取』『宇津保』の架空的であるのに對して、いかにも世に有るらしい現實的のものであつた。帝は萬乘の御稜威に輝かせらるゝ、おとなしい消極質の御方である。源氏は當代男性の希求する理想資格を兼ね備へてゐて、空想的の

調戯を好みつゝ、同時におながちなるわざを爲し得ざる人である。兵部卿宮は北の方を喪つた風流の貴公子で、源氏に半ば許されながら、優柔不斷の態度をつゞけてゐる人である。髭黑の大將は妻子はありながら、北の方を厭つて去らんとしつゝある、美容なき武骨者で、帝寵と玉鬘の父内大臣の厚意とを賴みにして、ひたもの通ひつゞくる人である。彼等の間には一種の競爭と嫉妬とがあり、時としては、調戯と我れ自ら我が性格を如何ともなし得ざる煩悶とがあつた。その最も甚だしいのは源氏で、彼れが女に他の男性を薦めつゝ、同時に我が愛を成就せしめようとし、身に恥ぢ人目を憚りつゝ、言ひ寄つては煩悶し、內侍として帝にすゝめながら、猶ほ且つ其の關係を繼續しようとする趣は、人形を操る中に、いつしか人形の仲間になつて了つた傀儡師のやうに見える。彼等は少しも、赫奕姬や貴宮の戀人等が、女を獲んが爲めに、唐土に火鼠の皮衣を搜し、遠洋に龍の珠を求め、或は塔供養の騷ぎに乘じて女を奪ひ、財を費した揚句、わが家に火をかけるといふやうな浪曼的の冒險を試みなかつた。彼等の行ふところは、消息を通ずる、腰許の女房に取持を賴む、乃至近親緣者の助けを得て近づかうとする、而して機會を得れば直接に求愛する、唯だそれだけの平凡なもので、而してそれらの同じ手續の間に、より多く眞情を籠め、より多く對手を動かうとするだけであるが、此のありふれた愛行爲を追うて、寫實の筆を進むる中に、人物が粒だち、事件が進展し、時代が息

づき、人生が現前して來るのは、さすがに靈筆といふものであらう。

とにかく帝と、源氏と、兵部卿宮と、髭黑大將と、これらの最も主なる四人が手を盡くして競ひ合ふ中に、源氏の盡力によつて玉鬘は遂に尙侍となつて帝のお側に侍することとなり、戀人等は今更に慌てつゝ、入內の前に相逢ふべき方策を講じたが、玉鬘はいつの間にか、辨の御許の媒介によつて、髭黑の大將のものとなつた。かやうな幸運の望みがありさうには、當人にも思はれず、他の競爭者にも思はれず、讀者全部にも思はれず、作者自身にすら思はれなかつたやうに見える髭黑の大將の物となつて了つた。

不自然である。理不盡である。唐突である。讀者を馬鹿にしたやうでもあり、作者自らの信用を自ら傷けたやうにも見える。けれども此處が作者紫式部が、その高き藝術境を實證して見せたところであらう。而して前行の『竹取』及び『宇津保』の全部もしくは主要部を、そのほんの一部に取り込みつゝ、彼等を踏まへて、大飛躍の高揚した姿を見せたところであると、吾等は思ふ。

何故であるか。

四人はそれ〴〵に當時の選まれたる人ではあるが、それ〴〵の障礙がつき纏うて、玉鬘に取つて、側目もふらずに戀する相手としては一人もなかつた。但し、その中で、兵部卿宮と、源氏

と、帝とには、彼女の心を惹くものがなかつたのではない。兵部卿宮に對しては、求愛の初めに、源氏が

何かは。この君達の好きたまはむは、見どころありなむかし。もて離れてな聞こえ給ひそ。(藤袴)

譯

何の苦しいことがあらう、あの宮などの申入には、他とは違つて、必ず頼もしいところがあらう、かけ離れて無愛想なあしらひをするではありませんよ。

など言ひつゝ、味方になられて、玉鬘もさう思ひ込んだ折もあり、殊に最後の決定の直前には、女が他の人々を措いて宮にのみは返歌をさゝげ

心もて日かげに向ふ葵だに
朝おく霜をおのれやは消つ　(藤袴)

と云つて、私は心から進んで入内するのではなし、どうして君が夙くからの切なる愛を思ひ知らぬことが御座いませうと云つて、切々の情を見せた位であつた

源氏に對しては、養ひ親としての横戀慕に困りながら、若し此の心苦しい義理が無かつたならばと、床しく思ふことがないではなかつた。殊に琴を習ふやうになつてからは、一人の親しみを感ずるやうにもなつた。

帝に對する特別なる敬愛は「行幸」の卷の最初に見えて居る鹵簿の人々を順々に見くらべて行く中に、「裝束に競爭しぬいた人々の練つて行くところを見てゐると、赤い御衣を召して身じろきも遊ばされぬ帝の端麗な御姿に比べられる人は一人もない。父の內大臣なども、立派は立派だが、要するに人臣の立派さで、とても鳳輦の內から目を離すことが出來るまではない。まして容貌がよいの、きいれだのと云つて、若い女達にちやほやされる中將や少將などが、片端から光を失つて行くのを見ると、やツぱり無類絕對におはしますのであつた」と云つたのは、その心の端的な現はれであるが、その中に源氏にすゝめられて、遂に御身近く奉仕する身とは定まつたのであつた。

ところが髭黑の大將に至つては、髭黑の名が示す通り、此の女にめでられたところが殆んど無い。作者は、此の大原野の行幸の折にも、女をして、

色黑く髭がちに見えて、いと心づきなし。

と評させ、そして地の文には「若き御心地には見貶させ給ひてけり」とまで書いてある。決定のすぐ前なる「藤袴」の最後にも、それらしいのは、唯だ

この辨の御許にも責めたまふ。

といふ暗示の一語があるばかり、そして九月に入つて、大將から送つた消息には、

なほ頼み來しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心づくしに、

數ならば　いとひもせまし　長月に　命をかくる　ほどぞはかなき

譯

思はしくはないながら、それでもと、まだ頼みにはして來たが、昨今の容模様は、すぐ宮中に召上げられはしないかと心配なので、

わが身がもし人數ならば、忌月の九月に求愛の消息は、さしひかへもしませう、その人の忌むといふ長月に、命をかけて戀の成就を祈る、この哀れな心の程を察して下さい。

と、殆んど絶望的の泣言を云はせて居る。それが、時ではわづか一月、作の上では、唯だ二枚、十數行を隔てただけの、次ぎなる「眞木柱」の勝頭に於いて、玉鬘はもう立派に髭黒の大將の北の方となつて、讀者を驚かしてゐるのである。しかもその報告樣式の描寫が、前代未聞の皮肉と、空とぼけと、高揚りぶりとを見せてゐるのである。

内に聞召さむこともかしこし。しばし人にあまねく漏らさじと諫め聞こえ給へど、さしもえ包みあへ給はず　程ふれど、い

譯

「尚侍にまでなされて、まだ入内もなき中に、かういふ事がお耳に入つては、帝の思召も畏れ多し、出來た事は仕方がないが、暫らくは、廣く知られぬやうになさい」と、源氏

さゝかうちとけたる御氣色もなく、思はずにうき宿世なりけりと、思ひ入り給へるさまのたゆみなきを、いみじうつらしと思へど、おぼろげならぬ契の程哀れにうれしく思ひ、見るまゝにめでたく思ふさまなる御容貌有様を、よその物に見果てゝやみなましよと、思ふだに胸つぶれて、石山の佛をも、辨のお許をも、並べていたゞかまほしく思へど、女君の深くものしと思し疎みにければ、え交らはで、籠りゐにけり。（眞木柱）

は髭黑の大將に注意されたが、大將はさう／＼神妙には遠慮し切れずに、ぽつ／＼と通はれた。それから暫らくしたが、玉鬘はちッとも打とけた樣子を見せない、意外に情ない運命であつたと思ひ入つてゐるらしく、始終悒鬱いで居るのを見て、大將は堪らなくつらく思はれたが、深き宿緣によつて此の人と契つた事を、身にしみて嬉しく思ひ、また見るとそのまゝ引き入れられさうに美しい容貌を見るにつけ、もし石山の御加護がなくば、辨の御許の取持がなくは、あたら麗人を、よその物にしてしまつて、指をくはへて羨まねばならなかつたと思ふと、あゝ危なかつたと、胸のつぶれる思ひがして、石山の觀世音をも、辨の御許をも、一しよに並べて頂きたいとは思ふが、しかしかく佛樣並に拜まれる辨は、女君が此の女ゆゑに意外な男のものになつたと、ひどく疎ましく、目障りものにして居られるので、女君の御目通りに出ることも出來ず、暫らく里方に籠居してゐたのであつた。

蓋を明けての驚きは、讀者のみではない、また競爭者達ばかりではない。境遇の急轉に先

づ最も驚いたのは玉鬘自身で、取返しのつかぬ變化にびツくりし、がツかりして、愛する髯の目通りをも許さず、夫となつた大將にもいさゝか打ちとけた氣色を見せないのであつた。

さて此の「藤袴」の前後に於ける一大事の全的省略は、作者が刺戟性の大事を空白化する慣用手段を用ゐたのであらうが、それよりも大切なのは、此の「眞木柱」劈頭の種明かしが、作者が長き豫定の計畫であつたことである。此の種明かしは讀者に取つて、一種の出意表であり、背負投であり、闇の礫であるが、作者がどうして斯ういふ自然の展開を無視し、讀者の期待を裏切るやうな筋立をしたかといふに、その重大なる因由の一つは「竹取」及び「宇津保」の妻爭ひに對する移揚の效果を顯著ならしめる爲めであらう。「源氏」の作者はその主題に最も效果ある表現を與へんが爲めに、遍く乾坤を見まはして、資源を搜つたかの觀がある。而して彼女は取るべき材料は容赦なく取り入れたが、同時に常に之れを踏まへて其の上に出ることを忘れなかつた。之れを玉鬘の場合に見るに、玉鬘をして立派な戀人群の中の誰れ一人にも心から靡かせなかつたのは、六人の戀を卻けた「竹取」の妻爭ひに倣つたのであらう。尙侍となつて宮仕するやうにしたのは、遂に東宮に參じた「宇津保」の妻爭ひに倣つたのであらう。けれども紫式部が是等を取り入れたのは、模倣する爲めではなくして、自家の特色を發揮する足掛りとしてである。彼女は玉鬘が何人にも深入りせぬこ

を利用して、その最も愛せざる人の手に落ちることの素地を成した。宮仕の期限の迫つたとを利用して髭黑に急轉するの機會を作つた。かくして、玉鬘が御所參入の期が迫り、競爭者達の運動が急を告ぐる時機を利用して、理外の理とも、自然の惡戲ともいふべき意外の結果をば見せたのであらう。そも〳〵人の世は、とすればかゝり逢ふさ離るさである。駿馬は癡漢を乘せて走り、千丈の堤は蟻の穴から崩れる。氣象學者が科學知識を盡くして乾梅雨を豫言すると、あとから天明以後といふ百數十年以來の大長雨がやつて來る。紫式部は恐らく、こんな事を考へつゝ、思つたでもあらう。處女美を守つて靡かぬ『竹取』も、理想的の順理で面白い。最高貴に靡く『宇津保』も、自然的の順理でまた面白い。しかしながら一たび試みられた計畫が襲踏されてはならぬ。我れは兩方を取つて、之れを踏まへつゝ、當の女も、男も、世間も全く豫想し得なかつた「愛せざる者相契る」といふ、自然が稀に見せる皮肉を見せて、讀者を驚かすであらう。而して先づ讀者を、快く驚かして後、つゞいて起こる千波萬波の面白さによつて、更にその償ひをなすであらうと。後にして思へば、彼女は此の意外な急轉の舞臺を面白く迫り出す爲めに、前後の經過を、わざと大將に不利なるが如くに書き進めて來たのであつた。とても駄目とあきらめた大將の得意姿を大寫しに寫し出す爲めに、その運命急轉の事情を、わざと報告しないのであつた。

『源氏』の作者が對玉鬘の妻爭ひに於いて、前代未聞の不思議な筋立と描法とを試みたのは、恐らくかやうな創作心理によるのであらう。彼女は用語に於いて、句法に於いて、事例に於いて、筋立に於いて、趣意精神に於いて、傍若無人に廣く前代の文學を借用した、同時に周到なる注意と、精微なる加工と、强烈なる燃燒力とによつて、同じ資料を見違へるばかりに向上させ、或は別殊の魂を吹き込むことによつて、超越した新存在を現じさせた。これは吾等が『源氏』に親しんで後、前代の諸作を讀む毎に屢〻思ひ當たらせらるゝことである。また『源氏』以後の諸作が『源氏』を模倣する場合の跪拜屈從的態度と相對して、前代の諸作に對する『源氏』の堂々たる君臨的採集振は、二者を比較する者のひとしく仰ぎ視るところであらう。

『源氏物語』の前代文學攝取の力倆は、かくの如く超越的に偉大なるものであつた。しかしながら『源氏』は前代を攝取し向上させた點に於いてのみ偉大であつたのではない。『源氏』の偉大は寧ろ新しきものを創造した點にある。

然らば『源氏物語』の創造した「新」とは、何であらうか。

吾等は『宇津保』『落窪』との關係に心ひかれて、『源氏』の特殊部面に關し、餘りに早まつた長談義を試みたやうに思ふ。吾等はこゝで暫らく立ち止まつて、『源氏』の常識と概念とを說かねばならぬ。『源氏』が日本の文學の中でどんな位を占めて居るか、誰れが書いたか、何時出來たか、どんな事を書いたもので、國民からいかに視られ批評されて來たかを語らねばならぬ。

五

明治四十年のことであつた。米國ニューヨークのブルックリン・インスチチューションから、我が國史中の最大偉人七名の選定を、當時歸朝中の朝河貫一氏に依賴して來たことがあつた。それは歷史、法制、文化といふ三つの標準から見ての最大偉人七名を知りたいといふのであつたが朝野の名士百數十人＝吾等の記憶に殘つて居る人の中、物故した主なる數者を擧げると、その中に伊藤博文、山縣有朋、大隈重信、久米邦武、坪內雄藏、吉田東伍、星野恒、坪井九馬三、田中擧兵衛等諸氏があつた＝から、理由附記の投票を得た結果は、神武天皇、聖德太子、弘法大師、源賴朝、豐臣秀吉、德川家康及び紫式部に定まつた。紫式部は無論『源氏物語』の

作者として選まれたので、彼女及び『源氏物語』は、かくして我が上流知識の嚴選により、我が二千年の文學者及び文學を代表して、世界の大舞臺に立つこととはなつたのである。

かくして『源氏物語』を紫式部の作と見ることは、今や殆んど世界の常識となつて居るのであるが、この作と作者との關係は、嚴密にいふと、今日でもまだ確實に決定して居るのではない。古來の『源氏物語』作者論は、之れを大別して、一人說、二人說及び數人說の三種とすることが出來るであらう　一人說の本尊は無論紫式部であるが、この說の第一の强みは式部がその日記の中で三たびまで自己の作たることを牢記して居ることで、此の說の

紫式部供養塔（京都千本引接寺）

加擔者は古今無數であると云つてよい　二人說の第一は『宇治大納言物語』などの記すところで、式部の父越前守爲時が大綱を記し、細部を式部に書かせたといふのである　第二は『河海抄』の傳ふるところで、藤原行成筆の『源氏物語』に藤原道長が奥書して、『此の

物語世皆式部が作とのみ思へり、老比丘筆を加ふるところなり」と云つて居るといふ説である。第三は『花鳥餘情』に傳ふるところで、最後の十卷「宇治十帖」を式部の女大貳三位の作とする説である。又「藤裏葉」までを式部の作として、以下を大貳三位の作とする與謝野晶子氏の説もある。數人説は久米邦武博士が雜誌『能樂』の三號に連載したもので、此の物語は當代の選まれたる文才數人の筆に成つてもので、紫式部はその一部を擔當したに過ぎぬとするものである。數人共作説は古今に亘つて、恐らく此の一つであらう。

供養塔第一層（引接寺）

尚ほ他に式部の『源氏物語』は以前から有つた、源氏を主人公とした物語に手を入れて完成したものであるといふ説や、式部の原作が多くの人に加筆されて今日傳はつて居る『源

氏」の形を成したといふ説もある。

吾等は今日現存する文獻によつて、「源氏物語」の全部が紫式部一人の筆に成つたことを證明することは出來ぬ。 けれども數多たび繰返した上での感じによると、「源氏」は必ず全部分同一人の筆に成つたものであらう、而してそれは婦人の手に成つたものであらう字句局部の添加、削除、修整をも創作本部の中に入るゝならば、長篇の文學にして一人の筆に成るものは古今に通じて皆無といふことになるであらうが、とにかく、「源氏物語」には他の模倣を許さぬ一種の筆癖と、巧妙なる技巧と、獨特の神韻とがある。 而してその筆癖と技巧と神韻とは、「桐壺」から「夢浮橋」に至るまで連綿貫通して少しも變はるところがない。 世には、「宇治十帖」に入ると同時に、文章が目立つて拙劣になると説く人もある。 無論「源氏」の文章にも拙いところはある。 けれども「宇治十帖」に見る位の拙さは、宇治以前の「帚木」「夕顔」「須磨」「明石」等が悉く共有するところであり、宇治以前の諸巻の有する表現美も亦宇治の十帖の悉く共有する所である。 これは吾々實證し得る事であるが吾等は此の同じ文致が前後一貫してゐるといふこと、及びあらゆる作者説が皆紫式部を以て其の一員となし、特に重要なる一員となしてゐることによつて、此の物語が紫式部一人の作たることを推信することが出來ると思ふ。 また文體、筆致の細かしい癖に關する統計に

於いて、宇治以前と十帖とが全くその傾向と割合とを一にすることも、紫式部一人說を最も力強く支持するものであらう

『源氏物語』の成立は何時であつたか。吾等は前卷の最後に於いて「枕の草子の結尾と源氏物語の冒頭と、この王朝の二大作を折り重ねた光榮の長保期」と云つた『源氏』が長保期に書き始められたのは、凡そ疑ひの無い事であらう。けれどもその前後の伸縮については、少なからざる異同がある。鎌倉の初期に出來たらしい『無名草子』には、大齋院（選子內親王）から上東門院に物語の御所望があつたので、紫式部を召して何を差上げたものかと御尋ねなさると、御意にかなふやうな珍らしいものは、とてもありますまい、新しく作つて御上げなさいましと申上げた。「では、お前作れ」と仰しやつたので、畏つて作つたのが源氏物語である、といひ、もう一つ

いまだ宮仕へもせで里に侍りける折、かゝる物作り出でたりけるによりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたり。

といふ二說を並べて記してあるが、宮仕へして後、命を奉じて新に作つたといふ前說は、恐らく『紫式部日記』の記すところと兩立しない推し當ての噂であらう。宮仕以前に作つた

といふ後說は事實らしい穩かな說で、後世の所說は概ね之れに據つたらしく、『河海抄』には「寬弘のはじめに出來て」とあり、『明星抄』には「寬弘初造出之」と書いてあるが、式部の宮仕を寬弘の二年もしくは三年の十二月二十九日とすれば、その以前卽ち寬弘の一、二年頃には已に出來たといふので、三者まづ符節を合すると云つてよい。たゞ問題は宮仕以前に出來たのが、全部か、一部分か、五十四帖の中のどれ程の部分かといふことであり、そして此の三者いづれにも「作り出でたりける」「出來て」「造出」と、出の字があつて、それが作り始めた意にも、出來あがつた意にも取られさうであるが、語感から察すると、「作り出でたりける」は纏め上げて世に出したの意、「出來て」は世に現はれ出てての意、而して「造出之」は、造り上げて世に出したの意に取るのを穩正とすべきであらう。『紫家七論』の安藤爲章も、恐らく此のやうに忖度して、長保の末に筆を執りはじめ、寬弘の初めに完成したと考へたのであらう。

いかさまにも長保の末寬弘の初め、式部やもめずみにて里に侍りけるつれ〳〵に作りたるか。

といひ、更に比較的短年月の間に成就したるべきことを想像して、

式部三十歲前後にて作れるなるべし。大和もろこし共に、聰敏なる人は、何事によらず

不日に功をなすものなれば、此の物語も思ひの外たやすく書けるものなるべし。後の人にぶきつきを以て例する故に、奇妙不思議の思ひをなして、觀音の冥助或は父爲時が力を添へ、或は御堂殿の加筆など、さま〴〵の臆說を申すめり。皆式部を知らず、書を考ふるにおろそかなりといふべし、

と云つて居る。要するに是れは上の三說に書き始めの事を考へ加へて、脊筆のそも〳〵から擱筆に至るまでの經過を見通したので、大正以前の成立說は、先づこれに纏められて居ると云つてよいやうに思はれる。

大正以後になつて現はれた成立異說の中で、思ひ切つて繰上げたのは、佐藤仁之助氏の『平安文學史』に、

著作に手を着けたのは父の家にあつた時からで、宣孝の妻となつてからも、相當に彩管を揮つたものであらう。

と云つて居るのであらう。つまり長德から長保の初年にかけての數年間、作者が二十歲早早に書き始め而して書き上げたと見るもので、根據としては、主として、日記の中の、作者が漢籍を抜き讀みするのを見て、侍女等が陰口を利くことや、作者が只管佛道に精進する樣子を書いた部分やにより、かういふ環境にあり、心境を持つてゐた寡居時代に、小說は書けまいと

いふのであるが、最愛を喪はせられた帝の御歎きに筆を着けた「桐壺」の調子などから見ただけでも、此の論には妥當性が少ないやうに思はれる。

繰下げ說の劃期は手塚昇氏の『源氏物語の新研究』であらう。その繰下げには大體二つの根據があるやうに見える。一つは古今東西の大作は、多く長い年月間の苦心に成つたもので、例へばダンテの『神曲』は二十九年、ミルトンの『失樂園』は二十七年、ゲーテの『ファウスト』は五十七年、馬琴の『八犬傳』は二十八年を費して完成してゐるところを見ると、『源氏物語』も寡居時代の四年や五年間に出來たものではあるまいといふのである。他の一つはモデルにされたらしい史實との對比によるもので、例へば明石の卷に於ける朱雀の帝の御眼病は、三條天皇が御目を病ませられての御苦惱及び御讓位の史實によつたのであらう。さすれば『源氏』の此の部分は史實のあつた長和五年（一六七六、寛弘二年より十一年後）以前には書かれまじき筈で、かう見ると、『源氏』の完成は寛仁元年（一六七七）以後でなければならぬといふのである。

まことによい着眼で、また面白い說であるが、吾等は此のいづれにも考へる餘地があるやうに思ふ。先づ史實對比の方について見ると、最も有力なのは「澪標」の卷なる明石中宮誕生の折に源氏から御佩刀を送られた事を記して、

御はかし、さるべきものなど、所せきまで思しよらぬくまなし。

とあるのは、三條院の皇女、卽ち道長の次女姸子所生の禎子內親王御誕生の長和二年（一六七三）七月十六日に御劍を奉られた史實に據つたので、『榮華物語』「づぼみ花」の卷に、

例は女におはしますには御はかしなきを、何事も今の世の有樣は、さまぐ\の例を引かせ給ふべきにあらねば、これを始めたるためしになりぬべし。

とあるのが、之れを證據だてるといふのである。いかさま是れが事實ならば、動かぬ證據で、是れ一つだけでも『源氏』の此の部分が長和以後に書かれたるべき筈であるが、吾等が猶ほ安んじて此の說に左袒することが出來ないのは、さすれば五十四帖の中の第十四帖なる「澪標」の卷を書くまでに、寬弘の初年（一六六四）からでも最短十年を費したことになるからである。殊に『紫式部日記』の寬弘五六年の事を記した部分に於いて、已に一條天皇や、道長、公任等から、立派な『源氏』の作者として特別扱されてゐる高名の紫式部が、それ以來五六年の間に、わづか數卷しか書かぬといふのは餘りの緩慢といふべきであらう。また殊に不合理なのは、長和二年に、御佩刀の記事のある第十四卷の「澪標」を書いた作者が、それより三年後なる長和五年頃の史實なるべき三條天皇の御眼病に據つた朱雀院の同じ御病氣を、一帖前なる第十三卷の「明石」に書いて居ることである。順序の轉倒が已にをかし

いのに、此の兩巻の間で三年をぶら〳〵するといふのは、考へ難いことではなからうか。また更に不合理なのは、『更級日記』によると、作者菅原孝標の女が、父の任國常陸を出で立つ寛仁四年（一六八〇）以前に於いて、已に姉や繼母から「光源氏のあるやうなど、ところ〴〵語る」のを聞いたと書いて居り、また都に上つて後、伯母なる人から、

源氏の五十よ巻、櫃に入りながら

貰つて讀み耽つたと書いて居るところを見ると、長和五年（一六七六）に、やうやく第十三巻の明石を書いた源氏の作者が、それから二、三ケ年後の寛仁三年（一六七九）頃までに、殘れる四十巻を書き了へた筈になることである。かういふ處を見ると、明石中宮御佩の史實との對比は、誠に立派な發見ではあるが、禎子内親王の御佩拜受を以て最初の例とする事には、何等かの無理があるのであらう。例へば作者が、それ以前に行はれた例に據つたのか、空想の筆を行つたのか、それとも『榮花』の作者が苟且の斷言を敢てしたのか、その方面に暗き吾等の斷言を憚ることではあるが、何等かの事實歪曲がその間に潜んでゐるので、事實は要するに、明石の御佩が三條院の皇女のそれに據つたのでもなく、朱雀院の御眼病が三條天皇の御煩ひに據つたのでもないといふことに歸するのであらうと考へる。

次ぎには、長篇の大作を書くには長年月を要するといふことで、いかにも、道理ある想像で

はあるが、これも物により作者の筆癖によることであらうと思ふ。思ふに『源氏』の内容の性質は、『失樂園』や『ファウスト』や『八犬傳』の如くに、教義、史實、學說などの周到深邃なる調査を要するものではあるまい。無論和漢の前行文學の涉獵、自然の推移、世間の人事に關する觀察など、委曲を極めるに限りはあるまいが、源氏の作者がそれほどの手數を盡くしたとは考へられぬ。また生活の難易、身邊の閑忙、乃至、執筆の際に於ける精神統一の可能不可能なども、想像次第で、二人の遺兒をかゝへての寡婦暮らしは容易でなく、當世ぶりの交際や遊樂に心身を占領されることも多かつたであらうやうにも思はれるが、しかしながらとにかく、幾人かの女房を使ひ、『源氏』の外に幾篇かの短篇物語をも書いて、それらに時時筆を加へつゝ、娘を一かたの作文者に仕立てるだけの餘裕のあつたことを考へると、夫に別かれた當時の痛切な悲哀が、少しづつ薄らぎ和むと同時に、創作の爲めには寧ろ都合よき一種神往の氣分さへ加はつて、側目もふらず一氣直往の筆を進めることも出來たであらう。『更級日記』の作者が源氏を讀む時にしたといふ「晝は日ぐらし、夜は目の覺めたる限り」書きつゞけることもあり得たであらう。さらんに於いては、五十四帖中の短きもの、例へば「花散里」「關屋」の如きは、一日とも云はず、半日にして一卷を草し了へることも出來たであらうし、「夕顏」「須磨」「明石」程度のものは五日、七日で書きおほせたであらう。

上下に分けた除外例の長い「若菜」の卷といへども、恐らく二月とはかゝらずに書き終へたであらうと思はれる。總じて紫式部は早文、早書き、早趣向の三拍子を具へた急速度の文人であつたらしい。また太安萬侶が稗田阿禮を稱へたやうな「度目誦口、拂耳勒心」といふ聰明な資質を備へてゐたので、兄の惟規が苦心しても覺え得ぬ唐土の古典を、行きずりの耳觸れに年記して忘れなかつたといふ、その所動受目の敏捷さを、今度は能動創作の方面に應用したのであらう。吾等は「源氏物語」の文章が一々經營慘憺の餘りに成つたものとは思はぬ。無論時には一字一涙の苦吟もしたであらうが、大體は想の飛び筆の走るに任せたので、一たび書き上ぐれば、多くは讀み返さずに、先きへ〳〵と進んだのであらうと考へる。

彼女はその日記の中に、

局に、物語の本ども取りにやりて、隱しおきたるを、御前にある程に、やをらおはしまして、あさらせ給ひて、皆内侍のかんの殿(妍子)に奉り給ひてけり。よろしう書きかへたりしは皆ひき失ひて、心もとなき名をぞ取り侍りけむかし。

と書いて居るが、彼女の執筆振はおそらく神來奔放の逸氣に任せつゝ、ひた進みに書き進んで、一種の完了點に達したので、さてほとりを冷ましてこれから洗錬を加へようなどと思つてゐる中に、多くは本に羽がはえて世間を飛び歩いたのであらう。折角書き改めたのが顧

みられずして、もとのまゝに見落しの疵を帶びたのが世に行はれて、具眼者にけちを付けられる。彼女は始終これを氣に病みつゝ、持つて生れた天性、如何とも仕様がなかつたものと見える。第二卷「帚木」の中川の宿の條に、源氏が障子のかげで女達が自分の噂するのを聞くところがある。そして、そこに

式部卿の宮の姫君に朝顏奉り給ひし歌などを、少しほゝゆがめて語るもほの聞こゆ。

と書いてある。これは第九卷の「葵」の卷で、ほんの一寸ほのめかされ、第二十卷なる「槿」の卷で、結末をつけられる源氏の從妹の槿の姫君に對する戀の芽生を、ぽつんと引き離して點出したのであるが、思ふに紫式部はかういふ先走りの序景を點じては、七卷後、十八卷後の完了を急ぎに急いだことであらう。『源氏』の中には趣向に辻褄の合はぬことがあり、時々は三行四行の短い間にも、ひどく矛盾したことがある。例へば「夕顏」の卷に、女が四隣の亂りがはしさを恥づる所を寫して、

いと哀れなるおのがじしの營みに、起き出でてそゝめき騷ぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居のさまなんめりかし。されどのどかに、つらきも憂きも、かたはら痛き事も、思ひ入れたるさまならで、わがもてなし有様は、いとあてはかに兒めかしくて、又なく亂がはしき隣の用意なさを、いかなる事

とも聞き知りたるさまならねば、なか〳〵恥かゞやかむよりは罪ゆるされてぞ見え
ける。

と書いてある、周圍の猥雜を、恥ぢたのか恥ぢないのか、全く矛盾した斷定が隣接してゐて、更に要領を得ぬものとなつて居るが、是等は要するに先を急いで見返さぬ爲めの取殘しで、添削洗錬などといふまでもなく、一度振り返れば、すぐに目に留まつて辻褄を合はせ得べきことである。同じ「夕顔」の諸説紛々たる

皆秋の野らにて池も水草に埋もれたれば、「いと氣疎げになりにける所かな。別納の方にぞ、雜司などして、人住むべかんめれど、こなたは離れたり。氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども我れをば見ゆるしてむ」とのたまふ

なども、振返らぬ爲めに兩頭同語になつたのであらう。また「須磨」の巻の

一日も見奉れる人は、かく思しくづをれぬる御有樣を歎き惜み聞こえぬ人なし。

なども、行手に見とれつゝ躍進して脚下を照顧せぬ爲めに、此の不照應な文を書き放しにしたのであらう。要するに『源氏』の作者は聰明なる資質に惠まれ、博大なる薀蓄によつて醞釀された文想が、雲の如く湧くのに導かれつゝ、ひた走りに筆を進めたので、存外急速度にあの長篇の大作を完了したものであらうと思はれる。從つて吾等は安藤年山が「聰敏な

る人は何事によらず不日に功を成すものなれば、此の物語も思ひの外たやすく書けるものなるべし」と云つたのを、一種の卓見であると思ふ。吾等は曾て此の事について、坪内逍遙博士に教を乞うたことがある。博士は答へられた。

繰下げの事情は少しも知らん。また其のつもりで讀んだことはないが、源氏の内容題材が、さう長年月にわたる取調を要するといふものではないぢやないか。それに大宮人は暇あれやの時代で、夫を喪つた事は、考へやうによつては、後見の煩累を除くことにもなり、あの天才に對して却つて創作に邁往する便宜を與へたでもあらう。五十四帖といふと大層に聞こえるが、一帖々々に分けて見て、さう手間のとるのはあるまい。まあ四五年あれば大丈夫出來るだらうよ。僕ならば何ぞ四年五年を要せん、二年三年でも足れりと言ひたい位だね。

と云はれたことがあつた。大作家大作家を知る。吾等はやはり『源氏物語』を以て寡居時代の四五年間に成つたものであると想像する。

周圍の事情を觀ても、やはりさうで、『紫式部日記』には、十卷にも足らぬ端物語を作りかけた人とは見ずして、堂々たる大作を完成した文壇の凱旋將軍を迎へるやうな趣がある。彼女はまた日記の中に、

この頃反故も皆燒き失ひ、雛などの屋づくりに、この春し侍りし後、人の文も侍らず、紙には
わざと書かじと思ひ侍るぞ、いとやつれたる。

と言ひ、また

試みに物語を取りて見れども、見しやうにも覺えず。

とも言つて居る。これは無論人の書いた物語を讀むことであり、また例の謙遜でもあらうが、紙にわざとは書かじと思ひ、物語を見ても興味を感せぬやうに、藝術的にやつれた心では、大作の長い殘部の書き續ぎなどは覺束なからう。

傳紫式部筆　（福岡子爵家藏）

彼れ是れ考へ合はせた上で、吾等の結論はかうである。紫式部は長保三年（一六六一）の四月、二十七歳位で、夫宣孝を喪つた。悲哀の境遇を客觀視

し得る程度に感情が和(なご)められ、同時に名殘の哀傷感が創造的感興を盛んに喚び起こすやうになつた時分から筆を執り始めて、寛弘二年(一六六五)もしくは、三年の十二月二十九日に宮仕する以前に完結したのであらう。そして空前絶後の大作を大成しながら、やはり一文字をも知らぬげにして、御所参りをしたのであらう。而して其の事が轉々して、『無名草子』や『河海抄』に傳說化されたのであらうと。

六

『源氏物語』は、どんな事を、どんな風に書いたものか。縮約、梗概は今までも無數に繰返されてゐるが、この四朝、八十餘年にわたり、三四百人の人物の出入する、非常に長い、複雜な、のみならず文章、結構、寓意、いろ〳〵の方面に於いて藝術的技巧を極めた大作の面影を、梗概位でどうせ髣髴されることではなし、こゝには風を變へて、大摑み小づかみに此の大作の姿を點出して、原作鑑賞の栞としたいと思ふ。

『源氏物語』を遠方から眺めると、まづ桐壺の帝を頭とし、光源氏を胴體とし、薫大將及び匂兵部卿宮を兩脚とした、三部一體の作のやうに見える。この三段構は已に『宇津保』『落窪』

によつて試みられたものであるが、恐らく支那六朝の佛教學者に創始された序分、正宗分、流通分の文章三分說の影響を受けて、有意識に或は無意識に物語に試みられたものであらう。

とにかく「源氏物語」の序分卽ち頭部は、「桐壺」一卷で、帝が衆目嫉視の間に、天が下の惱みをも顧みずして更衣を寵愛され、玉の御子を擧げられ、やがて母と祖母とを喪つた孤兒を手しほにかけつゝ養はれ、源氏として臣籍に降され、加冠の折に後見を時の左大臣に託して、その女葵の上を妻はさしめ、而して內裏での曹子にはそのまゝ母更衣の桐壺を、里邸としては二條院を賜はつて、立派に獨立させられた、といふのが、その大要である。

「桐壺」の最後に十二歲であつた源氏は、中間五年の空隙をおいて、第二卷の「帚木」には、早くも十七歲の青年中將として、寫されてゐる。而して、「光源氏」の一語に冒頭を輝かして、

光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれ給ふ咎多かんなるに、いとゞかゝる好色事どもを、末の世にも聞き傳へて輕びたる名をや流さむと、忍び給ひける隱ろへ事をさへ語り傳へけむ人の物言ひさがなさよ。

と書いて居る。源氏が時代の衆美を一身に集めて、盛名を謳はれたこと、それにも拘はらず世に批難される行跡が多かつたこと、それには特に好色沙汰が多く、彼れ自身身後に醜名の

殘るを恐れて祕密に〳〵とつとめたにかゝはらず、それを聞き傳へ書き集めて物語に作りなした好事者があることを暗示したのであらう。作者はこの、源氏の生涯を要約したやうな、佛者ならば總持の名言ともいふべき言葉を以て、主人公の行を壯んにした。同時に、此の時代の權化ともいふべき主人公の生涯を好色本位に寫すことが、筆取つての名譽なることを、つゝましく自嘲的に道破した。作者はまた此の主人公と、副主人公の頭、中將と、高名の色道通二人とを、雨夜のつれ〴〵に相會せしめ、上中下三階級にわたる女の特殊相を、抽象的兼具體的に說明せしめて、源氏の長き將來に於ける活動暗示の略圖を畫かしめた。而して卷をも改めずして、その暗示實現の一例を、わが家司伊豫守の妻空蟬及び女なる軒端の荻に現はし、つゞいて最上級に對する憧れを藤壺、槿の宮、六條の御息所に、ちら〳〵と覗かせつゝ、同時に卑しげな花のつゝましく咲く陋巷に夕顏の美を見出ださしめた。

吾等は『源氏物語』の作者が此の正宗分なる源氏本傳の劈頭に於いて、主人公生涯の要契を敍したること、之れを寫す作者としての誇を示したること、及び主人公の活動する世界の略圖と指導原理とを掲げたることとに於いて、作者の偉大と非凡とを見出だし、同時に作の構圖の廣大無邊なるに驚くものである。『竹取』『伊勢』以來、平安朝はいふに及ばず鎌倉、室町をかけて江戶時代に至るまで、作の冒頭に於いて、巨大なる作の內包の要點を、隱約の間に、

これほど面白く掲げたものが他にあるであらうか。若しありとすれば、それは恐らく少しく劣れる『平家物語』たゞ一つであらうが、吾等はたゞ此の點一つに於いても、この「帚木」の冒頭が、「雲隱」の直前までを見通した豫定の計畫の指標として書かれたものであることを想像して、作者が創作的視野の遠く廣きに驚き、同時に作者が物語を仕組む手心の中に、論文作成の呼吸を加へたことを推察して、その結構の準備の行屆いたのに驚嘆するものである。

かくして源氏の愛を受けた女性を、作に現はれた順序によつてざツと擧げると、葵上、藤壺宮、槿宮、空蟬、軒端荻、六條御息所、夕顏、紫上、末摘花、源典侍、朧月夜内侍、花散里、明石上、女三宮などであらう。葵上は左大臣の愛娘で、源氏の第一の妻、本臺である。美しく上品で、嗜みのある人であつたが、餘りに立派で親しみ難いところがあつた爲めに、遂に源氏の愛を得ることが出來なかつた。而してその本臺に慰められぬ内虛寂寞の感が、自然に外方に手を伸ばす結果を惹き起こしたのであつた。藤壺は母の更衣に酷似した爲めの親しみから、いつしか性愛に移つたのであつたが、越え難き義理の障壁と女君の愼み深さとが、特に深く彼れの心を苦しめて、懊惱多年、而して辛うじて得た一度の機會が、女君をたゞならぬ身とならしめて、その結果は二人が生涯にわたる煩悶の種となつた。槿の齋院の宮はその容貌と心ばせの殊

勝さとから、若き源氏の心を惹いて、懸想十六年、女君の深き愼みと遠き慮りとが、遂に執念深き源氏の思ひを斷たしめたといふ、源氏に靡かぬ、作中唯一の例である。空蟬は國守の妻で雨夜の品定めの翌くる日、中川の方違で相知つた女性である。小形の瘦肉で、容貌はすぐれなかつたが、心の嗜みが姿を美化して、深くも源氏の心を惹いた。而して源氏の工夫を凝らした心寄せに對して深き悅びを感じながらも、身分と境遇とを顧みて、遂に過ちを再びしなかつた用心深き女性である。軒端荻は空蟬の繼子、空蟬を訪うた序に偶然相親しんだ女で、丸々と小肥りした、赤ら顏の愛くるしい、しかしながら思慮の足らぬ女性として寫されてゐる。六條御息所は亡皇太弟の未亡の貴夫人である。凄いばかりの美貌で、才藝に秀で、矜持が高く、一たび感情が激すると、ぽうッとなつて我れを忘れるといふ、謂はゆる「いと餘りなるまで物を思ひしめたる」性格の人であつた。此の御息所、初めは容易に源氏に靡かなかつたが、やうやく靡かれる頃から、生憎と源氏の足が遠くなつた。御息所は悲しまれた、歎かれた、憤られた、而して情の激した結果は、憤怒の魂魄身を離れて、一たびは源氏と逢曳する夕顏を捕り殺し、二たびは御產に惱む葵上を悶死させ、死靈となつては紫上をも危うしようとした。そして源氏の足の遠くなるのに思ひ惱みつゝ、到頭思ひ切らんが爲めに、女の齋宮に伴つて伊勢に下るといふ、複雜な、興味ある性格の女性であつた。此の女性の描寫振がまた、

他の素性を尋ね順序を追ふ方式とは、すッかり趣を異にして、先づ藪から棒に

六條わたりの御忍びありきの頃

と、誰れともなく、いつともなく書き出して居る。 そして譬へば雲間の切れ目〳〵に、龍の頭の一部を、爪の端を、鱗の數片を、尾の尖端をと、斷片的に點じて、龍の全身を想像させるやうに、夕顏等を描き行く間々に、介在的に片鱗を現はし〳〵して、此の嫉妬に燃える物凄い麗人を、讀者の幻に描かしめる、といふ、迫力に富んだ一種異樣の文章である。

夕顏は身分卑しく境遇に惠まれぬ女であつた。 そして別に氣品が高く才藝に富んで居るのではないが、その子供めいた、素直な、あどけなさに、何とも云はれぬ愛嬌があつて、さきに頭中將の愛を受けて子まで生んだ仲であつたが、中將の北の方から迫害を受けて、垣根に夕顏の花咲く陋巷に住みわびてゐたところを、源氏に見出だされたのであつた。 そして契りを重ねてまだ幾ばくもならぬ八月の十五夜に、洛外某の院で、六條の御息所の怨靈に取り殺されたのであつた。 源氏の夕顏に對する愛着は深かつた。 彼れはその後長く夕顏に似たる女性を尋ねて、そして尋ね得ぬことを歎いた。

紫上は兵部卿宮の女で、藤壺の姪である。 源氏が夕顏の變死によつて獲た瘧病をまじなふ爲め、北山の僧菴へ行つた折に、偶然見出だした少女で、その藤壺そッくりな姿に深き愛着

を感じて、遂に我が家に引取り、自ら師となり父となつて才藝を習はせつゝ、理想の北の方に仕立てたのであつた。その優美で、圓滿で、萬能に秀でたところは、譬へば源氏を女にしたやうな趣があつた。但じ彼女は源氏の好色とは反對に、源氏に對して絕對愛をさゝげた。そして俗事、風流、まめ事、あだ事、一切につき源氏と反を合はせつゝ、その間にいさゝか無害の嫉妬をまじへては、その交情をいやが上にも濃密にした。彼女は源氏からは至上愛をさゝげられ、他の愛人からは敬はれた。かく世にも稀なる幸福の中に、逆境ともいふべきは、源氏が須磨にさすらうた三年の間の留守、女三の宮の降嫁による正妻の地位の動搖、源氏の子の夕霧の懸想に怖ぢつゝ、源氏に後れた後の場合を豫想する杞憂等であつたであらう。而して是等は悉く、源氏と共にする深憂であつた。思ふに作者は、源氏と此の紫の上とに對しては、時代のあらゆる美しさと悅びとを兼具せしめ、同時に時代の缺陷、憂苦をも、美化しつゝ添加したのであらう。『源氏』の他の男女の人物が、それ〴〵偏つた一瓣の性格を賦與されてゐる間に、彼等二人のみは圓滿具足の味を見せて、譬へば巨匠の名作の觀音像、盧遮那佛像を見るが如き趣があり、而もその抽象にも近い完備の中に、一種の個性らしい或物を底深く輝かして居るのは、さすがに大才の筆とうなづかれる。

末摘花は常陸宮の遺兒で、源氏が夕顏に似た女を求める中に、さる命婦の言を輕く信じて

めぐり合はせた、あられもない醜女であつた。彼女は『落窪物語』の面白の駒を婦人化した、背は丸く長く、顔は白く長く、殊にその鼻が長く伸びて、尖端が紅花のやうに赤いといふ奇異なる外容の持主で、源氏は寢過ぐした雪の朝に始めて見出だして眉を顰めたが、醜き低能者の至誠にめでて、終生を愛し盡くしたのであつた。此の人に關する記事には醜に惹かるゝ心理の描寫ともいふべき變はつた味があつて、作全體に好笑諷諧の温かさを添へて居る源典侍は六十に近くして好色を忘れぬ官女である。源氏が一夜の情にほだされて、しなだれかゝる風情や、源氏が之れに戯れて頭中將と鞘當を演ずる趣など、これまた作全體に好笑温柔の變化を添へる一光景であるが、これは恐らく『伊勢物語』の九十九髪の老婆を取つて、理想化したものであらう。

朧月夜内侍は源氏とは敵筋なる右大臣家の六の君で、南殿の櫻の宴の歸るさに、弘徽殿の細殿で相見たのが、互に忘れ得ぬ緣となつた。本來右大臣は此の君を新帝(源氏の兄君)に奉らうとしたので、之れを知ると、慌てゝ二人の仲を塞かうとしたが、狂へる二つの心は更に強く引き寄せられて、その中に内侍が所勞の里下りに乘じた雷雨の一夜の逢引は、いたくも右大臣を激昻させた。その結果、源氏は須磨へ近流の身となり、内侍は宮中出仕を差止められたが、やがて許されての後も、源氏との文通はやまなかつた。帝と内侍との間は是等のごた

ごたにも拘はらず、極めて親しく、また極めて自由なもので、相對して源氏の美質を稱へられた。源氏が須磨から寄せた歌に

こりずまの浦のみるめも床しきを
鹽燒く海人（あま）やいかゞ思はむ

といふのがある。須磨謫居の憂目を見ながら、尙ほ懲りずまに、反抗（まけじ）ごころで、君が床しくてならぬのだが、その浦邊に鹽を燒きつゝ監視する海人達はどう思ふでせうね、といふのであるが、一體此の女君は春の朧月夜の櫻花の如く濃艶優情の麗人で、その言行には自然の推移は人力で塞き止められぬことを暗示したかの風情がある　花散里は麗景殿女御の妹である。眞面目な教育家質（だち）ともいふべき珍しき性格で、色めいた風情の微塵もない女であつた。彼女は源氏をたよりとしつゝも、他の愛人達に對して嫉妬を感ずることが全くなかつた。源氏も彼女に對しては同棲の樂みなどをば全く忘れたかの如く、その信用すべき溫淑着實なる性質を見込んで、專ら子女の教育を託した。作者のすぐれた藝術心と、廣く深く世間を見る周到な注意とが、從來の物語作者の殆んど心づかなかつた、此の珍らしい、氣が利かぬやうで大切な人物を創造して、重要な一役を勤めさせたのであらう。

明石上は播磨の前國守、謂はゆる明石入道の一粒種である。彼女が源氏に逢ふまでには

法橋宗達筆　澪標　（岩崎男爵家藏）

容易ならぬ曲折があつた。彼女は父なる入道の深き宿願と撓まざる努力とによつて源氏に見えたと云つてもよい。入道は自己の失敗を娘の出世によつて償はうとして、聟がねの望みを時の最高階級に懸けた。その大願の成就を住吉の明神に祈つた。言ひ寄る儕輩の子供達の撃退に、幾度も人憎まれの役を演じた。いよ／＼源氏を見出だしては、北の方の手強き反對に逢つた。いよ／＼源氏を迎へては、娘が源氏に見えることを肯んじないのに、はたと當惑した。彼女と源氏との契は久しい運命の定めであるにもかゝはらず、その成立には、親と神と源氏との一方ならぬ骨折を要したのである。思ふに作者は、多くの都會女性の文化ずれした戀愛を寫した後、氣骨ある田舍娘の戀に異彩あらしめようとして、十二分に手薬煉を引いたのであらう。かくして明石は到頭源氏のものとなつたが、その後の彼女は外面は柔らかに控目にして居りながら、内には負けぬ氣と犯し難き節操とがあつて、紫の上にも慮をおかれつゝ、愛人の間に重き地位を占め、六條院に迎へられては、合性の松に景色どられた冬の御殿をあてがはれて、特色のある生活を遂げた。やさしく控目にして、しかも齒應へがあり底力のある頼もしい女性、作者のねらつた明石の上の主要性格はこれであらう。

女三宮は源氏の兄帝、朱雀院の第三皇女で、源氏の姪である。多病なる院は御出家の直前に、久しい心懸りであつた此の幼い皇女を源氏に託せられた。源氏は四十歳、女三宮十三四

蔵の時である。源氏は氣乘りもせず迷惑にも感じたが、折角の御諚を背きもえせずに、御受けした。皇女の降嫁は必然にその正室たることを意味する。かくして源氏の心を第一に傷ましめたのは、紫の上との中の水臭くなつたことであるが、更に彼れの心を暗くして、其の後の一生を内攻的苦悶に送らしめたのは、彼れの甥なる柏木右衛門督が彼女と親しき仲となつて、罪の子＝後の薰の大將＝を生ませたことである。藤壺の宮、桐壺の院、冷泉の帝！源氏は彼れの舊惡を回想して戰慄した。而して此の恐ろしき應報を胸一つに疊んで、寂しく淋しく逝いた。女三宮は素直な美しい心の女性であつた。作者は若き頃の朱雀院を評して「若き御心の強きところなき程にて」と云つてゐるが、宮はまさしく父帝の此の意志の弱さを受け繼いで、守るべきを守り得ず、拒絶すべきを拒絶し得なかつたのであらう。院はやさしき親心に、幼女の行末を案じつゝ、源氏の永續愛を信じて、之れを依託された。源氏は叡慮を畏み、必ずしも好まざる幼女に對して最後の愛をさゝげた。而して宮は素直に周圍の人々の親切なる指圖に從つた。善き人同志の善き心によつて取纏められた事の結果が、かうならうとは誰れが測らう。思ふに紫式部は、源氏が戀愛經驗の最後として、全く他より要せられたる關係のもとに、意志の弱き至上位の幼愛人を置き、そこに源氏自身の昔をさながらに繰返す熱心なる求愛者を闖入せしめて、天の配劑の恐るべく、因果の理法の驚くべ

く厳粛なのに目を覺まさしめたのであらう。

七

源氏の愛を受けた女人譜はざッと右の通りである。藤岡作太郎博士は「源氏物語の本意は婦人の評論にあり」と云つた。「評論」の一語は異様に聞こえるが、作者を一種の傀儡師、小造化翁と見て、彼れが女性の一人づつを操に掛け舞臺に出しては幕の陰から、「手前は此の女人をば、かういふ性格のつもりで、物をいはせ、戀に狂はせ、泣かせ、笑はせて居りまする」と言つて居るかのやうに見えるところを見ると、譬喩的に見て一種の「評論」と云はれぬでもあるまい。とにかく源氏の經驗した、言ひかへると、＝源氏物語＝の寫した戀愛の種々相は、變化に富んだ賑かなものであつた。階級としては上中下、いろ〳〵の身分があり、境遇として本妻、人妻、未亡人、后がね、從姉妹、宮女のいろ〳〵があり、年齡としては十歳から五十餘歳に及ぶ長幼のいろ〳〵がある。關係から見れば、一時的のもの、生涯にわたるもの、容易に靡くもの、到頭靡かぬもの、他から摺ゑ與へられたるもの、是れよりしたるもの、彼れよりしたるもの、遭遇の間に成立てるもののいろ〳〵があり、性格から見れば、美しくして冷やかなる

もの、熱情があつて嫉妬に燃ゆるもの、たゞあどけなさの可愛ゆきもの、情味は無いが賴もしきもの、愚かにして物堅きもの、萬能具足して同時に驚くべき魅力を持つもの、などのいろいろがある。　また記述描寫の上から見れば、正面から寫したもの、側面から寫したもの、抑もの初めから順序を追つたもの、胴中から筆を着けたもの、主として當人の活動を寫したもの、周圍の描寫に主なる興味を置いたもののいろ〳〵があり、經過から見れば、順調に運んだもの、障礙に惱まさるゝものゝ障碍に惱みながら終りを完了したもの、到頭痛ましき失敗に終はつたものなどの、いろ〳〵がある。

とにかく源氏は是等、多數の女性と交渉した。　而して全不成功、半不成就の二三はあつたが、先づその殆んど全部に愛慕されたと云つてよく、彼れも亦靡いた全部に對して愛憐擁護のやさしい關係をつゞけ了せたのであつた。　こゝで一つの問題は、かやうに人を愛憐する善人めいた者が、どうして同時に、漁色にひとしき貪慾の手を八方に廣げたかといふことであるが、それは恐らく紫式部が源氏の性格觀に根據したのであらう。　式部は源氏の性格を二元的に創造した。　それは親切に眞面目なる「まめ人性」と、よき異性を見てそのまゝに過ぐし難き「重からぬ御心」とである　作者は已に「桐壺」の中に、七歲の源氏について、いとをかしう打ち解けぬ玩びぐさに誰れも〳〵思ひ聞こえ給へり。

では「帚木」である。というのである。七歳の子供のわけ知りに警戒したという女御更衣達が七歳の子供のわけ知りに警戒したというのである。「帚木」では頭中將を「あだ人」と云つたのに對して、源氏を「まめだち給ひける」と云つた。そして平凡な好色に興味は持たぬが、「稀にはあながちに引きだかへ心づくしなる事を、御心に思しとゞむる癖なむ生憎にて」と云つた。風がはりな戀をば、身にしめて執念深く成就させようとする意外の癖があつたといふのである。「玉鬘」の冒頭には、

さしも深き御志なかりけるをだに、おとしあぶさず取りしたしめ給ふ御心長さなりければ……

とある　さまで深くは愛さなかつた女をも、漏れなくいつまでも世話をするといふ廣き永續性の愛を持つてゐたといふのである。ひどく聰明で、幼少の時から其の道を理解してゐた。根が眞面目で親切である。よい異性を見ると素通りが出來ぬ。風變はりな手應のあるのに對して、負けじ魂の執着をもつ。一度交渉をもつた女をば一生振り捨てることをしない。かういふ諸性質を綜合して、三十九歳の時に四町四方の六條院を經營し、春夏秋冬の四つの御殿を建てゝ、此の院と二條院とに、紫の上、明石、花散里、空蟬、末摘花その他の愛人を迎へて、妻妾同居の珍しい大集團生活を營んだ事を考へると、彼れの眞面目な道德性と觸手の敏捷に働く好色性とが、聞ぎながら協力して、そこに愛した一人をも捨てぬといふ妥協案の

生れ出でた消息が解るであらう。此の性格による心理の最も明らかに痛ましく現はれたのは對藤壺宮の場合である。始終自ら責めつゝ、求めずには居られず、求めては悔い、遂げては一生を暗くしながら、猶ほ求めつゝ悦びにひたり眞心を盡くすといふ、此の複雑を極めながら巧みに統一された活きた人間の描寫には、味はひ盡くせぬものがある　源氏は種々の道德性を豐富に備へたスフィンクスであつた。彼れは決して世之助ではない、ドン・フアンなどでは尙更ない。

戀愛關係から見た源氏の一生は、先づこんなものであつた。その生涯を前後に分けると、須磨以前の二十六歲頃までは、情の赴くまゝ八方に手を伸ばして、他人迷惑のあながちなるわざを、ほしいまゝに試みたが、須磨以後はめツきり大人らしい貫祿を備へて來て、其の方面の活動も、惰力的の氣まぐれな發現ともいふべきものとなつた。同時に彼れの心を暗くしたのは、我が昔の所行を目下の若輩から仕掛けられることで、子の夕霧からは紫の上に目を附けられ甥の柏木には到頭女三宮に近づかれて、面ざしまでも酷似した薫を生ませられた。そして天下の仰望を集め、上皇待遇までも辱うしながら、かやうな傷心の應接に疲るゝ中に、女三宮には尼になられ、紫の上には先立たれ、幾年かの春夏秋冬を悲しく繰返した後、五十餘歲にして、その花やかなる一生の幕を閉ぢた。

これが源氏の生涯で、此の大作の中央本部、先きに謂はゆる正宗分の大要である。此の大幹線に沿うて、いろ〳〵の美しい年中行事、御代がはり毎の哀れさ、副人物等の戀愛事件、例へば玉鬘をめぐる妻爭、夕霧對雲井の雁、落葉の宮の戀愛、柏木の落葉宮及び女三宮に對する悲戀、また全篇にわたる源氏の對手、副主人公なる頭中將の一生、及び特に「落窪物語」の繼母に暗示を得たらしい弘徽殿の女御の痛快無比なる一徹性など、細かに擧ぐれば限りもない。先づ興味の無盡藏ともいふべきものである。

八

第三、終篇の流通分は源氏死後の「匂宮」から「夢の浮橋」に至る十三帖より成る。此の中最初の「匂宮」「紅梅」「竹河」の三帖を、中央部に附屬すべき源氏傳の名殘と見、「橋姫」以下の謂はゆる「宇治十帖」を終局部と見て、之れを他の作者の筆とする人も多くあるが、內容聯絡の點から見れば、やはり十三帖を一團として此の作の終局と見るのを正しとすべきであらう

此の部分の主人公は薫大將に匂兵部卿宮の二人である。二人は源氏の性格を遺傳して、

その方面を特殊化したかのやうに見える。薫は表面源氏の子にして、實は女三宮と柏木との間に生れた罪の子である。彼れは愛くるしい上品な子であつたが、幼い時分に源氏の涙を見た記憶があり、源氏が意味深げな不平を漏らされるのを耳にしたことがあり、また若き母宮の出家に不審を懷いて、何となく我が素性に大不安を感じてゐた。殊に八の宮を宇治に訪ねて、辨の御許から我が出生の祕密を聞いてからは、生來の厭世が更に一層の曇りを帶びて、世間の榮花に見かへらず、女人の姿などに振向きもしなかつたが、法の師と賴んだ八の宮＝源氏の弟宮で、うち重なる不遇から、都を去つて宇治に籠居された有髪の老高德＝から、二人の娘を託されてからは、その姉姫の大君に深く心を惹かれるやうになつた。彼れは屢〻切なる意中を訴へた。大君は深く薫を敬愛したが、此の求めには遂に應ぜずして、わが代りに妹の中の君を薦めた。薫はあくまで大君に執着し、其の戀を成就させるために、中の君を匂宮に讓つて、更に大君に迫つたが、その中に大君が病歿した。薫はかくして同時に二人の愛人を失つて、胸中の憂悶抑へ難く、我が物となるべかりし中の君を屢〻訪ねては、その苦衷を訴へた。中の君は思ひ餘つて、異腹の妹浮舟をすゝめた。浮舟は腹が賤しい爲めに、父宮から子としての待遇を受けることが出來ず、母に伴はれて常陸守の娘となつてゐたものであるが、大君に酷似してゐるために薦められたのであつた。薫は大君を思はせる面影と

優しい氣立とを愛して、浮舟を宇治の新邸に住ませたが、身分の高さと道の遠さとに妨げられて、暁々心にもなき途絶をする中に、早くも匂宮の魔手が伸びた。かくして浮舟は甲乙し難き二人の貴公子の愛に挾まれ、遂に死の一途を選むこととなつて、身を宇治の激流に投じたのである。

「薫」は身體からよい香りを放つので、與へられた渾名である。彼れは容貌が秀麗で、才藝徳望並びなき人物であつたが、同時に優柔不斷の非實行的な躊躇家であつた。彼れは、事に臨んで、理窟にかゝづらひ、空想に囚はれては、掌中の珠を取り逃がし又取りにがした。而して彼れが此の性格の虚に乘じて、その裏を掻いたのが、實行的なテキパキ屋の匂宮であつた。おもふに作者は、特に深き考があつて、源氏の美しさ、優しさ、氣高さ、聰明さを基本とし、之れに源氏の應報に生じた深き厭世感を加へて、此の空想に囚はれて躊躇低徊する新らしき性格を創造したのであらう。言ひ換へると、遺傳の根據と、應報の佛説と、空想に溺るゝ心性とを打つて一丸としたる一人のハムレットを創造して、得意の微笑を漏らしてゐたであらう。

匂宮は源氏の孫で、明石女御の子、當帝の第三皇子である。彼れは薫と好き體臭の美を競つて、「にほふ宮」と稱へられた。かやうな稱呼は、一つは作者が、王朝の美感が段々低級な破覺に墮して行くことを暗示したのでもあらう。宮は王朝の最も高き資格者たる點に於

いて、薫と上下し難き優者であつたが、異性に對する耽溺の無軌道振に於いては、上下の眉を顰めさせた。作者は恐らく匂宮に於いて、源氏の性格の二元の中から美しき「まめ人性」を除き去つて、色道執心の他の一元を放縱無碍に働かせたのであらう、而して善性の檢束を離れた惡性活動の結果の、いかに恐るべきかを見せたのであらう。彼れの活動のいかに放縱で激烈であつたかは、母の中宮が常に之れを歎きつゝ、人前を恥ぢられたのを見てもわかる。彼れに近侍した女房が、

いと騷がしきまで、色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人侍ひにくげになむ。

と言つたのでもわかる。薫が此の皇子に浮舟を取られて後、例の君子ぶつた空想に囚はれて、

かの宮の御具にては、いとよきあはひなりと、思ひも讓りつべく、退く心地し給へど、

浮舟が、匂宮の持物として、いかにも相應はしい相手だから、お讓りして手を引いてもよいが、もし手を引いたら、さん〴〵慰み物にした揚句、お妹君の女官などに投げ出してしまはれるであらう。さういふ例が、已に二三人もあるではないか。彼女が見捨てられて、女官にされて居るのを見るのがつらい、と云つて居るのを見てもわかる。此の宮の好色型は、見かゝり次第に首尾をつける、飽けば直ちに見放つ、時としては近代の遊人のよくやつた「賣り飛ば

すーに似たことをすらもされるといふので、かくして母の中宮を恥ぢさせ、舅の左大臣を呆れさせ、世間に眉を顰めさせたのであつたが、最後にその方面で深い恩義のある親友の薫を裏切ることになり、その結果が遂に浮舟を入水せしめることになつたのであつた。思ふに作者は此の宮の性格を創造するに當たつても、「薫」の創造に劣らぬ特殊の興味を感じたであらう。而してその中心興味は源氏傳來の好色性を無制限に發揮させるにあつたので、世界的にいふと、彼れのハムレットにこれのドン・フワンを對せしめて、「斷」のない美德、空想と德ない情慾の斷行との、共に爲すに足らぬことを暗示したのであらう。而してそこに、作としては豐富な具足性による美しき情界成立と病的な偏狹性による人生破壞との對照ー描き、時代としては、藤原氏全盛期の花やかな理想完成に對する衰頽期の淋しい希望離齬の對照をほのめかしたのであらう。薫、匂宮、浮舟三人の關係には、薫を源氏に、匂宮を頭中將に、浮舟を夕顔に對照させ、而して正宗分では頭中將の手を離れた夕顔を源氏が熱愛して物怪に失つたといふあの趣向を、逆まにし、曲折をつけて、今度は準源氏薫の熱愛した女性を準頭中將匂宮が奪ふといふ事に變へたとも見られるが、作者の中心興味はやはり前者にあつたであらうと、吾等は考へる。

この終篇の趣向の大體の進みを見ると、先づ源氏の光に立ち並び難き第三期の主なるし

人を叙し、夕霧、紅梅、玉鬘の後日譚や、その子達の成行などを叙して居る中に、忽ち其の姿を大寫しにして、讀者の視野一ぱいに廣げたのが、薫及び匂宮の二人である。つゞいて正宗分ではその名をだも知られなかつた宇治の八の宮が現はれ、之れに導かれて、大君、中君の二人の女性が現はれる。但し疾くに現はるべき女主人公、浮舟の容易に姿を見せないのは、作者に心あつて滿を持して放たなかつたのであらう。さて姿を現はしても、左近少將との婚儀破綻の經緯などに道草したのも、一つは讀者の待受心を刺戟する爲めであらう。その中に此の宿命の女性が、姉君を訪うて、その美貌がちらと匂宮の眸を射、ついで薫の愛を得て、宇治に住ませられるやうになると、事件はとん〳〵拍子に發展して、やがて板挾みの苦境に立ち、つづいて入水の悲劇を見るやうになつた。それから世を擧つて大騷ぎする間に、偶然老尼、老阿闍梨等に救はれて、比叡の麓の小野に隱される。程へて噂が薫の耳に入ると、彼れはやがて浮舟の幼い弟を使に立てたが、それが空しく歸つて來たので、自分が曾てしたやうに、誰れかが彼女を小野に住ませて居るのではないかと、氣をまはした、といふ事で、此の物語が大團圓となるのである。

九

右の隨筆式點描によつて、讀者がもし『源氏物語』の面影のせめて一部でも思ひ浮かべられるならば、望外の幸であるが、さて此の『源氏』に對して國民が古來、どんな見方をしたかといふに、先づ最大級の讃辭を惜しみなく捧げて來たと云つてよいであらう。而してその最も代表的なものは安藤爲章の『紫女七論』に謂はゆる「文章無雙」の一語であらう島村抱月氏は『源氏』の文章に對しては、全く無條件の讃辭をさゝげると云つたことがあつた。『源氏』の文章には、知らぬ者には知らずに禮讃させ、知れる者には、知るに從つていよ〳〵深く感歎させるといふところがある。無論世には『源氏』を「天下の大惡文」と云つた松波資之の如きがある。長文句の絡み合ふ冗漫さを惜しんだ末松謙澄の如きがある。また此の讀み惡く解し難き文章を國學者や世間がちやほやする氣が知れぬと考へた高山林次郎氏や正宗白鳥氏の如きがあり、或は徒らに技巧的だ、ブロークン・ジャパニースの標本だなどと云つて罵る人もないではない。けれどもそれらは概ね讀まず嫌ひか、讀めず嫌ひか、乃至『源氏』の文章の癖が氣に入らぬのか、或は拙き部分や見落しの瑕疵をさがして、主

觀的の漫評を下すのかで、よく讀んだ人の全體鑑賞による意見ではないらしい。『花鳥餘情』の一條禪閤兼良は、「我が國の至寶は源氏物語に過ぎたるはなかるべし」と云つた。これは恐らく、文章の妙と、中に盛つた人情の哀れと、諸般の知識とを綜合しての讃辭であらう。この所含の內容の豐富なる事に對して、特に御目を着けさせられたのは順德天皇で、吾々はその御記なる。

源氏物語不可說の物也。更に凡俗の所爲にあらず。誠に諸道諸藝皆此の一篇に縮まる。

の一節を拜する每に、ダンテの『神曲』が、やはり內容の廣汎にわたつて確實深奥なる點から、「百科全書的詩篇」(poëme encyclopédeque)と稱へられたことを想ひ起こして、一種の誇りを感ずるのである。山路愛山氏が史家の立場から「平安朝の他のあらゆる文物を失ふとも、『源氏物語』だけは失ふまい」と云つたのも、此の系統に屬すべき讃辭であらう。

あらゆる讃辭の中で、その指域の最も廣く、その認識の最も深いものは、本居宣長が『玉の小櫛』の中に、

やまと、もろこし、いにしへ今、行くさきにも類ふべき書はあらじとぞ覺ゆる。

と云つて居るものであらう。これは人情描寫の一面についての讃辭ではあるが、名著『玉

の小櫛』の著者、鄕黨の好學を集めて此の物語を講ずること三回半(みかへりなかば)に及んだといふ人の言と思へば、無量の深さと強みとがあるやうに思はれる

最後には、此の物語を讀む特別な悅びの表現で、『更級日記』の著者が「后の位ものかは」と云つたのは、恐らく當時に於ける女としての禮讃の極致であらう。之れと並んで或戰國の武將(細川幽齋?)が「夜更けてから源氏を讀んで、その中に寫された深き人情の味の胸の底に沁みわたるうれしさを思ふと、國も城も惜しくはない」と云つたのは、カアライルが印度を失ふともシェークスピアをば失はじと云つた警句と相對して、此の物語がいかに深く國民に愛されたかを語るものであらう。

さて源氏常識の最後として、『源氏物語』が古來どんな批評を受けて來たか。これは細かに擧ぐれば限りもないことであるが、大別して五つ位に纏められるかと思ふ。その第一は歷史代理說である。此の說を批評らしく表現したのは、安藤爲章の『紫女七論』を以て始めとする。卽ち

男ならましかば、一部の國史を撰びて、萬代の龜鑑に備へ侍りてまし。女なれども英才つひにおほふ事を得ずして、それに似つかはしき物語を作りて、閨門の風儀用意を敎へたるが則ち式部なり……若し實錄めきたる事を書きたらば、女に似つかはしからず、賢

したちたる事なり。然らば式部が平生の用意とは相違すべしと云つたのがそれで、これが式部の本意ではないとは、「螢」の卷に於ける物語論、及び『源氏物語』全體が證據だてゝ居るところであるが、しかしながら『源氏』に對する一種の見方として、最も早く讀者の心に浮かび、最も廣く興味を持たれたのは、これであつた。また作者自身にも全く此の心が無かつたとは云はれないであらう。最も早く浮かんだといふのは『紫式部日記』に記した一條天皇の左の御評である。

源氏の物語人に讀ませたまひつゝ聞こしめしけるに、此の人は日本紀をこそ讀みたまふべけれ、まことに才あるべしとのたまはせける。

意味は、此の物語の作者は餘程よく日本紀を讀んで居ると見える。えらい漢學の力のある人らしいといふのであらう。とにかく、これは歷史と此の物語との關係が非常に親密なることを認めさせられたもの、或は此の物語の主要なる意義を歷史との關係に見出だされたものであるが、後に至り陸續と現はれた準據說は、廣狹深淺の差こそあれ、いづれも正史との關係に興味を持つたものである。また作者心中の隱微の中には、史實に對する示唆に、興味の主なる一部を懸けてゐたといふこともあつたであらう。それは個人の內事に關する場合にもあつて、例へば、知つたかぶりをして眞名書き散らす婦人を論じては、「これは上﨟の

うちにも多かることぞかし―と云つて、清少納言を暗示し、髭黒の大將が玉鬘に通ふ時に、北の方から火取を投げつけられた事を記しては、帥宮が和泉式部に通はれる時に、正妃から受けられた類似の亂痴戲を暗示する類ひで、これが可なり多かつたであらうと思はれるが、同じ事情は當代並びに前朝の月卿、雲客、大臣、攝關、のみならず畏き雲上に關する國史の中樞部にも及んで、讀者に暗示を與へつゝ、「ムゝ、あれか」―「あの事の換骨奪胎か」―と、微笑し、苦笑し、感歎し、隨喜せしめることも少なからずあつたであらう。またカアライルが沙翁を評して、―事實よりも更に實なり―(more real than reality)と云つたやうに、『源氏』の方が、無駄を省かれ、肝心を添へられ、醇化され、活化され、藝術化されて、本物の史實よりは却つて實を得て居ると、人にも思はれ、作者自身も、しか思ひ信じたこともあつたであらう。それゆゑ、歷史の代理代行などと云ふ事も、意味次第、程度次第で、作者は物語を面白くし、史實に魂を吹き込むつもりで、始終歷史を讀み、世間の出來事にも注意したであらうが、唯だ其の第一義の關心は、史實を傳へることではなくして物語を面白く書くことであつた、歷史家たることではなくして小說家たることであつたに相違ない。　此の意味で歷史代理說は式部の本意を得て居る批評ではないと、吾等は思ふのである。

―『源氏物語』が受けた代表的批評の第二は、古典に據る哲理具現說ともいふべきものであ

る。それは、儒佛老莊等の諸方面に渡つてゐて、或は卷數を天台六十卷に準へて佛說を移したといひ、或は莊子に準へて人生の夢幻にひとしき事を教へたといひ、或は孔子の『春秋』に擬したといひ、史馬遷が『史記』の意氣を體して書いたといふ類ひである。これらも精しくいへば、全く根據の無いことではあるまい。作者は現に作中に於いて、人生の無常なる事、佛說の尊い事について、明示暗示を繰返して居る。彼女の頭の隅に老莊式の思想の潛んでゐたことは、最後の「夢の浮橋」の名が證するところであらう。準據したと視られる史實を情的、藝術的に取扱つて、一種の同情的解決を與へてゐるところを見ると、『春秋』の筆法に全く無關心であつたとも云はれまい。司馬遷の『史記』との聯想になると、半ば歷史代理說に類して來るが、その傾向の皆無と云はれぬことは、吾等の已に述べたところである。それ故、儒佛老莊等の古哲理を藝術的に具現したといふ事も、意味次第、程度次第で、吾等の結論はたゞ作者の根本趣意、第一關心が文學本位で、古哲理の具現ではなかつたといふことに歸するのである。少なくともダンテの『神曲』がスコラ哲學を、ミルトンの『失樂園』が新教を具現したと云はれる程度の關心を、作者は持たなかつた、それほどの痕跡を作が現はさなかつたといふのである。

『源氏』が受けた批評の第三は、廣くいふと教唆說ともいふべきもので、細かに分ければ、善

き教訓を與へると見る側の批評を勸善說と稱し、邪惡に導くと見る側の批評と妄語說或は誨淫說とも稱すべきであらう。有識無識に通じて、古來の源氏觀は概ね前者に傾いてゐた作者を觀音の化身と見たのも、其の傾向の現はれであるが、學者の言としては『河海抄』の序に、

凡そ物語の中の人の振舞を見るに、高き賤しきに從ひ、男女につけても、人の心を悟らしめ、事の趣を教へずといふことなし。

と云つてあるのや、或は熊澤蕃山が『源氏』の本領は好色を假りて上代の美風を傳へ、上﨟の嗜みを教へ、人情の哀れを知らしむるにあるとして、その『外傳』の中で、

表には好色の事を書けども、實は好色の事にあらず、只だ好色の戲れとなして、其の中に古の上﨟の美風心用ゐをくはしく記し殘せるものなり。夫れ日本王道の長久なる事は禮學文章を失はずして、俗に落ちざるを以てなり。古の禮學を見るべき物は唯だ此の物語にのみ殘れり。次ぎには書中人情を云ふこと詳かなり。人情を知らざれば五倫の和を失ふこと多し。これに戾りては國治まらず、家齊ほらず。

と云つたのを代表とすべきであらう。惡しざまに見る方の最初の現はれは、平判官入道康賴の『寶物集』や、安居院澄憲の『源氏供養表白』などであらう『寶物集』には、

間近くは、紫式部が、夢に虚言を以て源氏物語を造りし故に、地獄に墮ちて苦を受けたりと見えし。故に早く源氏物語を破り捨て丶、一日經を書き吊ふべしと云ひける。

と書いてあるが、『表白』もこれと同じ趣意にもとづき、或る大施主比丘尼の依賴により、紫式部が妄語の罪根を救ふ爲め、五十餘帖の題名を書き込んで、優美に諷誦するやうに書いたものである。おもふに『源氏物語』に對する非難は、最初「妄語」を中心として佛者から加へられたので、それが下火になつて後、今度は「邪淫」を中心として漢學者から加へられるやうになつたのであらう。林羅山などがその最も早き一人ではなかつたかと想像される。而して江戸時代に於ける國學者、殊に本居宣長の斬新有力なる辨駁によつて、すッかり下火になつた誨淫説が、最近日本精神運動の餘波に乘つて、再び擡頭しかけて來たのであらう。思ふに是等の批評も、作者に取つて全く覺えの無い事ではあるまい。彼女が物語の中で政治、教育、書畫、音樂、その他について卓拔な見識を見せたところには、往々世の昧者を教誨するかのやうに見える口吻がある。また小說の本領を說いて、「善惡にかゝはらず、世間の男女の生活の中で、幾度味ひても味はひ盡くせぬやうな、意味の深いのに出會はすと、自分の心一つに疊み込めておくには忍びず、成るべくはその悅びを天下後世にも分かたうといふ氣分になつて、天分のある者が、つい筆の立つまゝに、その實を寫し神を傳へようとする、そこ

に小說といふものが發生したのだ」などと云つて居る所を見ると、勸善懲惡など云つては理に墮ちて面白くないが、とにかく人間の甲斐ある生き方、愛情、嗜みなどいふ事を、角立たぬやうに教へようと云ふ位の考はあつたと見る方が至當であらうと考へる。「妄語」の罪などいふ事は、無論超越して齒牙にも掛けなかつたかと思はれるが、誨淫の一義はどうであらうか。　これも無論低級な讀者の好みに阿り、媚情の筆を弄ぶなどいふ心の微塵も無かつたとは明らかであるが、人倫共通の好色心に深き興味を持ち、折々は未亡人の心やりに味を見せるなどいふ事が、全く無かつたではあるまいと思はれる。　さうすると、是れもやはり意味と程度の問題で、つまり、作者に、世間を教へよう、愛慾の味な境地をも覗かせようなど思ふ心の、全く無かつたではないが、それは偶々のこと、乃至第二義第三義としての、ほんの夾雜分子で、本領としては、どこまでも藝術の本道を堂々と押し進む考であつたのであると思はれる「源氏物語」が受けた批評の第四は物の哀說である。　これは此の作の出現以來、あらゆる讀者の實際には感じてゐたことであり、これあるが爲めに讀んで泣きみ笑ひみし、后の位にも比べ國をも城をも惜しまぬまでの悅びをしたのであつた。　また學說としても、已に熊澤蕃山の人情說にその一面を露はしてゐたのであつたが、之れを委曲に主張し、正面に振りかざして破邪顯正の筆を振つたのは、本居宣長であつた。「物の哀れ」とは、貴賤尊卑、男女老幼

喜怒哀樂、山川草木、禽獸蟲魚、何にてもあれ、人の情を刺激して「あゝ！」と云はせる心持である。人の心の働きの「！」である。宣長は『玉の小櫛』に云つてゐる。

先づ凡そあはれといふは、もと見るもの、聞くもの、觸るゝ事に、心の感じて出づる歎息の聲にて、今の俗言にも、あゝといひ、はれといふ是れなり。例へば月花を見て感じて、あゝ見事な花ぢや、はれよい月かななどいふ。あはれといふは、此のあゝとはれとの重なりたるなり。……此の物語(『源氏』)は殊に人の感ずべき事の限りを、樣々に書き表はして、あはれを見せたるものなり。……人の情の感ずること戀にまさるはなし。されば物の哀れの深く忍び難き筋は、殊に戀に多く、此の戀の筋ならでは、人の情の樣々と細かなる有樣、物の哀れのすぐれて深きところの味ひは、表はし難き故に、殊に此の筋を多くものして、戀する人の、樣々につけて、爲すわざ思ふ心の取り〴〵に哀れなる趣を、いとも〳〵細やかに書き表はして、物の哀れを盡くして見せたり。

言ひ換へると、小說は「あはれ！」と感じた事を寫して、その哀れを讀む者にも感せしむべきものである。人に哀れを感せしめる事物は限りもなく多いが、戀ほど深く又多樣に哀れを感じさせるものはない。それが小說家の競つて戀を寫す所以であるが、此の戀の諸相をしんみりと寫した點に於いて『源氏物語』に比ぶべきものがない、といふのである。情の

世界を寫すのは文學悉くの使命であるが、小說は殊に其の世界を自由に委曲に寫す可能性を持ち、殊に戀愛を精細に描寫する點に於いて、特別の使命を有するものである。『源氏物語』が量と質とのいづれから見ても、情的描寫、殊に戀愛の描寫に主力を置いて居ることは爭ふべからざる事であるが、從つて物の哀れの描寫を『源氏』の第一義とするのは極めて妥當の事である。吾等は『源氏』を讀んで、その自然の描寫の妙に打たれ、公私生活の描寫の面白さに打たれ、文章の調子の美しさに釣り込まれ、殊に委曲を極めた戀愛の種々相に感歎の聲を放たしめられる。是れが『源氏』の讀者に共通する深き感じで、他の史實との聯想、宗教や哲學との比較、乃至讀み終はつての利害得失等は、恐らく人々名々の狹い主觀の眼鏡の作るところであらう。吾等はかやうな理由によつて、物の哀說を以て、文學としての『源氏』の本質を最もよく說き得たるものとなし、少なくとも今までに現はれた批評の中の最も優れたものと思ふのである。

最後に『源氏物語』が受けた批評の第五は、『源氏』の本意を婦人の評論と見る藤岡博士の說であるが、「評論」といふ語が、創作を論文扱ひする氣味があつて妥當でない上に、たとひ此の語を譬喩と見ても、片手落の嫌ひがあるであらう。『源氏』がもし婦人の評論ならば、同じ意味で男子の評論でもあり、源氏は云ふに及ばず、明石入道、夕霧、柏木、薫、匂宮等の存在

が主なる女性達のそれに比して輕かるべき筈がないからである。思ふに「婦人の評論」の一語は藤岡博士の眞意を表はし得たものではなく、のみならず其の所論の核心を摑み得たるものでもあるまい。

吾等は以上で『源氏物語』の常識に關して、大要を說き得たやうに思ふ。吾等は更に進んで此の物語の髓腦眼目を擇り出だして、說明し描寫せねばならぬ。

一〇

第一に擧げたいのは『源氏物語』の作者の見識である。世間人として一文字をも知らぬやうに見えた式部も、物語の中では人物の口を藉りつゝ、庭訓、政事、歌道、音樂、服飾等に關して、折々傾聽すべき見識を聞かせてゐる。のみならず、式部の見識は日常茶飯の事にも現はれて、往々人を驚かすことがあつた。例へば婦人の心得について、一方では「男にどんな振舞があつても、穩かに見過ぐして我慢するにましたことがない」と言はせ、或は「數多の愛人のある中で、自分が特別な待遇をされるといふのが女の誇りで、女一人を守るやうな男を持つのは世間の物笑ひであらう」などと、時代の習慣を辨護するやうな事を言はせて居る

かと思ふと、一方では「女だからとて、見たいものも見られず、したい事もされずに、始終引籠つて居るやうでは、生んでくれた親までが恨めしくなる」などと言はせて居る類ひで、かういふ述懐を見ると、時代を超越したらしい作者の心の奥の祕密が、何となく恐ろしくも感ぜられて來るが、『源氏』には、かういふ珍らしい見識の發露を見せた所が少なからずある。而して其等は悉く一種の深き興味であるが、吾等は暫らく之れに目を塞いで、唯だ一つ、文學の本領に關する見識の現はれともいふべき物語論卽ち小說論を紹介するであらう

論は「螢」の卷の一節で、本居宣長が『玉の小櫛』に、始めて其の部分を取出して、逐語の批評を試みた處、而して明治の末年以來再び斯道の學徒から、問題として繰返されてゐる所である。筋は源氏三十六歲の五月、丁度梅雨のさかりに、女君達が每日、當時流行の物語類を讀む寫すで夢中になつて居る折に、源氏が養女の玉鬘姬を訪ねられた。源氏は姬も同樣小說寫しで上氣して居るのを見て、冗談を云はれる。「そんな出たらめの作り事にだまされて、よくもお精の出ることですね。

この頃幼い明石姬が腰許どもに讀ませて居るのを、傍らで聞いて居ると、世の中には隨分筆達者に書き散らす者もあると見える。つまり平生嘘八百を吐き馴れてゐる口から、しやべり散らすのだらうと、私には思はれるが、さうではありませんかね。」

と言はれると、玉鬘は

「ほんとに仰しやる通り、嘘をつきつけた人が、いろ〳〵取り集めて面白く仕組むのでせうよ。わたくしなどは、唯だもうほんとの事とばかり思ひ込んで居りました。馬鹿々々しい、では寫すことなど止しませう。」

と云つて硯を片つけられると、源氏は「いや〳〵今のは冗談！　つい惡口を云つて了つたが、抑も小說といふものは神代以來人間のあらん限り傳はる情愛の生活を書いたものですよ・・・・」と、かう續く所である。

(物語は)神代より世にある事を記しおきけるなンなり。日本紀などは唯だ片そばぞかし。これらにこそ道々しく精しき事はあらめとて笑ひ給ふ。その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも惡しきも、世に經る人の有樣

譯

「物語(小說)といふものは、神代の昔に人間があつて以來、連綿と此の世の中に有りつゞいて來てゐる事、卽ち情愛の生活を書き記しておいたものなんだよ。これに比べると、日本紀などは人生のほんの片側一面を書いたものに過ぎないので、今お前の讀んでゐた、それらの物語にこそ、人間のほんとの道ともいふべき、人生らしい人生の精しい消息が書いてあるのですよ。」

と云つてお笑ひなさつた。

の、見るにも飽かず、聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて言ひ置きはじめたるなり。善き樣に言ふとては、善き事の限りを擇り出でて、人に隨はむとては、また惡しきさまの珍しき事を取り集めたる、皆かたぐ\につけて、この世の外の事ならずかし。人の御門の才作りやうかはれる、同じやまとの國の事なれど、昔今のにかはるなるべし。深き事淺き事の差別こそあらめ、ひたぶるに空言といひ果てむも、事の意違ひ

「無論物語は作つたもので、これは某の身の上の事だと云つて、有つた通りに書き記すといふことはないが、善い事でも惡い事でも、世の中に暮らして行く人々の生活振の中で、幾度見ても見あくといふことがなく、幾度聞いてもまだ聞きたいと思ふやうな、意味の深い事で、今の世のみならず、後世にも語り傳へさせたいと思ふやうな事どもを、自分の心一つに疊み込んで置くことが出來なくなつて、書き始めた、それが物語、小說といふものの起りなのです。そこで理想的の光明面を、善く言ふ爲めには、成るべく善い事を良い事をと、事選りをして此上なしといふ事を選み出だし、また世間並に暗黑面をも書くとては、惡い方の珍しい材料を取り集めて書くのだが、善い方も惡い方も、皆世の中にある事で、吾々に取つて一つも無關係の餘所事ではないのです。又これを書くについては、國それぐ\、時世それぐ\で、唐土の作者の作りやうは日本のとは異ひ、同じ日本のでも、昔のと今のとは違ふでせう。また書き方に深い淺いの差別はあらうが、それらを一概に嘘ッ話と言ひ切つてしまふのも、事實相違の嫌ひがあ

てなむありける。

——りますね。

吾等は若き女性を相手の冗談話として、さら〳〵と書き流した是等の言葉の中に、重大な意義を含んだ文句が四五箇條あるやうに思ふ。第一に「神代より世にある事」とは、親子、夫婦、兄弟、朋友、愛しみ會ひ親しみあふ情愛生活をいふのであらう。歴史に書いてある事は、如何に重要な事でも、或年或時代に起こつた事、その以前には無かつた事であるが、親しき同士のいつくしみ合ふ情愛の生活は、伊弉諾伊弉冊命以來、人間のあらん限り存在するものであり、而して世々の人類の之れが爲めに生き、之れが爲に死んだ一大事因縁であるからである。また「見るにも飽かず、聞くにも餘る事」といふものは、情愛生活以外に於いて、めツたにあり得ることではない。それは唯だの史實、或は理論學說の話などは、初耳にこそ珍しいが、同じ話を二度三度と聞けるものではないのを見ても解るであらう。また同じ文學の中でも、知識本位、筋立本位の探偵小說などは、二度と讀む氣にもならないが、立派な文學は幾度繰返しても飽くことを知らず、また本格の名作劇が、幾十回と繰返して觀ても更に興味を減せぬのを見ても解るであらう。紫式部は九百年の昔に於いて、早くも此の情愛生活本位といふ本格小說の中心特性に目を着けたのであつた。そして周圍の愛讀者達が史實準據の關係などに氣を取られて、日本紀の局などと持囃して居る間にあつて、物語の偉いのは、人類が

出來始めて以來有らん限り續くところの、此の情愛生活――あらゆる同胞がこれ有つてこそ生き甲斐、死に甲斐、樂しみ甲斐があると感ずる情愛生活――を寫すところにあると斷じ、此の點から見ると、或る年或る時代に限られた事實の、しかも多くはその外面の輪廓を寫すを常とする歷史などの、足許にも寄れることではないと高唱したのは、實に偉いことではないか。

吾等は次ぎに『源氏』の作者が、見るにも飽かず、聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふしぶしを、心に籠め難くて言ひおき始めたるなり」と言つたことに對して、作家としての心掛の殊勝偉大なるを感ずる。吾等は此の書が本朝、震旦、天竺のいづれかに於いて、『源氏』以前に發表されてゐるか否かを知らぬが、『源氏』以前以後の物語作家が、概ね、或は唯だ昔かすに居られぬ本能の刺戟により、或は文才を誇らんが爲めの野心により、或は先輩に好く物眞似から、或は衣食の資を得る爲め、或は遊び心の誘ふまゝに筆を執る間に在つて、此の見飽かず聞き餘る人生を味はふ悅びを同胞に頒かたんが爲めに筆を執るといふのは、唯だ思附の動機論としても面白く、また拙劣なる作家の空想的氣焔としても見上げたものであるが、これは一文字をも知らぬかに見える謙讓な女性が、作中の人物の口を藉りてほのめかした意見であり、また其の大作に於いて立派に實現した理想の表白でもある。其の言葉の絕大價値は、改めて言ふまでもないことであらう。吾等は曾てヘンドリツク、ヴ

ン、ルーン氏(H. Van. Loon)が、賢哲が悟を開いた悅びを衆人に傳へようとする所に、世界の大學の起源を見出だした論に、深い興味を感じたことがあつた。

それは、こゝに聰明な賢者があつて、精進修道の結果やうやく眞理に目覺めた。而して悟道の悅びを獨占するに忍びず、之れを大衆に頒かたうとして街頭に立つた。人々は歡び迎へて其の言葉に耳を傾けたが、說話の最中に驟雨の見舞ふことなどがあつて、可惜説法を中斷されることがある、その切なさから思ひついて、天氣に妨げられぬ小屋を造つて、其處で心靜かにその哲人の話を聞くことにした。此の小屋が卽ち大學の起原だといふのである。さうでもあらう。大學の起原が、悟を開いた哲人が、自分獨り眞理を樂しむに忍びずして、その悅びを衆人に頒かたうとした所にあるといふのも面白いが、小說の起原を、言語藝術の天才が、味はひ盡くせぬ人生を、我れ獨り樂しむに忍びずして書き始きたところにあるといふ紫式部の小說起原論は、また實に破天荒にして、同時に尊貴宏大なるものではないか。紫式部の小說起原論は聖者の慈悲より生れ出でた文學論である。

吾等は第三に、「皆かたゞ〳〵につけて此の世の外の事ならずかし」と云つたことに於いて、『源氏』の作者の透徹した考慮と偉大なる見識とを見るのである。物語の作者は物語を面白くする爲め、物の哀れを切にする爲めに、善い方では珍しい最善の事を選び寫し、惡い

方では驚くべき最惡の事を擇び寫すであらう。さうすると、讀む者が怪しんで、世の中にこんな事實があるものか、是れは作者虛構の空言に相違ないと云ふであらうが、實はそれ〴〵世の中に存在する事實なので、吾々に取つて決して無關係な餘所事ではない、といふのである。ふと聞くと、いかにも平凡な言のやうであるが、よく考へると、此の中には貴重な藝術的眞理を含んでゐる。獨逸のヘーゲルは、その名著『美學』の中に於いて、「藝術は一人間に關する事は、すべて自分に取つて餘所事とは思はれず」―(" Nihil humani a me alienum puto ")と云へるローマの詩人テレンス(Terence)の言を實現すべきなり」―と云つて居る。言ふところは、作家の書きやう次第で、同じ事が生きた事實とも思はれ、ば、眞赤な作り話とも思はれる。また同じ事實が我が事のやうにも思はれ、ば、自分に全く無關係な餘所事のやうにも思はれる。凡そ作家が人事を寫す以上は、讀者が我が事と感じて身につまされるやうに言ひ換へれば讀者をして、かりにも自分に無關係な餘所事とは思はせぬやうに書かねばならぬといふのであらう。例へば、若き男女の心中が平凡な筆に寫されて、新聞の三面に揭げられ、ば、穢れたる男女のたはけ話と馬鹿にして、大衆からまで一笑に附せられるであらうが、その同じ事件が近松門左衞門の靈筆に上ると、人生悲痛の深刻な事實として、識者の淚をも誘ふのである。卽ち、作の中に書いた他の事を我が事と感せしめるか、或は餘所の事と感

せしめるか、事實と思はしめるか、或は拵へ事と思はしめるか、これが物語の死活の分かるゝ所で、ヘーゲルは喜劇詩人のテレンスが作中の人物に言はせた、「人間に關係のある事ならわたしは何でも餘所の事とは思ひませんよ」といふ平凡らしい奇言に、藝術の哲學的普遍性を認めて、之れを文藝の本義としたのであらう。而して我が紫式部は、人生の實を書かう、書く以上は讀む者に親しい事實と思はせ、身につまされる思ひさせてやらねばならぬといふ考へから、物語に書き記す事を「この世の外の事ならずかし」とは云つたのであらう　無論紫式部がかう言つたのは、直接には前に、物語は嘘をつき馴れた作者の愚にもつかぬ架空の作り話であると逆語した戯言を正誤する爲めに相違ないが、一つは前代の物語、例へば『竹取』『宇津保』等がおどろ〳〵しい不可思議を書き集めたのに對して、目やすきあるらし事を精しく寫した、その現實的、自然的の建前を述べたのであらう　また更に、人情の甚深味を心に籠め難くて言ひ置くといひ、和漢古今によつて物語の體樣が違ひ、作家によつて深淺の差別があると云つて居る前後の文句に引き連ねて考へると、彼女の眞意は、恐らく、善惡兩方のいかに珍しい事でも、自分の書く事は悉く此の世の中に在る事である、またそれをば讀者に此の世の事、我が身の上の事と思はせずにはおかぬといふ抱負をほのめかしたのであらう。實際此の物語に描かれた事は、甚だしい情事でも大抵はあの時代のいつ頃かに實

在した事で、普通ならば架空の作り事とも思はるべき事を、紫式部が筆の力の强さで、全くの事實と思はせ、人間心奥の祕密の具象とも感せしめたのであつた。

最後に『源氏』の作者の一つの見識ともいふべきは、支那の作家の作りやうは日本の作家の作りやうと異なり、同じ日本でも、昔の作風は今のとは違ひ、また和漢古今、人によつて、その書き方に深淺の差別があると云つて居ることとである。是れも恐らく、彼女が、わが行き方は支那の作家ともちがひ、また日本の昔の物語とも、今の物語とも作風を異にして、古今獨歩、頂天立地、我が特殊の大道を進んで居る、そしてそれは神代以來長へに存續する人間愛情生活の、甚深微妙の味を書き傳へて、餘處事ならすと感せしむるにあるといふ心境を、それとなく暗示したのであらう。

以上、吾等は物語に關する紫式部が時代を超越した見識の、幸に一處に集まつてあるのを取つて、簡單な說明の仕直しを試みた。紫式部の見識はいろ〳〵の方面に見出だされるが、これは其の中のほんの一部面の現はれである。また吾等は紫式部の見識を證明する爲めに西洋の諸賢哲の言葉を引いたが、これは彼等を、より偉大とする爲めではない、唯だ偉大なる文藝思想群を、事の序を以てお茶の子に取扱つた我が古代の女性作家と、眞面目に學說を樹立した西洋の後輩學者とを引合はせて、破顏せしむる爲めである。

二

「文章無雙」の讃辭に引かれて、吾等は第二に『源氏物語』の文章美について考へたいと思ふ。『源氏』の文章はその本質に於いて、純大和ぶりを女性的に極度に磨き上げたものであつた。『竹取』『伊勢』『宇津保』『落窪』等は、まだ多分に漢文の殼と男性的の調子とを持つてゐた。『源氏』は彼等から、漢文の殼と男性的の調子とを取り去つたが、しかしながら、それは唯だ漢文素、男性素を除き去つたのではなくして、彼等よりは遙かに多く漢文素をも男性素をも採り入れながら、それらを美しく女性化したものであつた。『源氏』はまた他の前代の諸作に見られぬ綿々連亘の美を持つてゐた。吾等が若し『源氏』の文章が、綺麗な句に句を重ね、章に章を聯ねつゝ、重疊累積、切れ目なしに數十行に亙つて、しかも極めてよく調和した渾融無縫の美を成して居る趣を見て、五衣十二單衣、裳唐衣の裝ひに、厚さと長さと曲折との限りを見せた、鳳凰のやうな女房裝束を思ひ比べるならば、平安期に於いて最も立派に完成された類似の雙美ともいふべき假名の文章美と婦人の裝束美とを、一擧に看取することが出來るであらう。例へば雨夜の品定の冒頭なる

つれづれと降りくらして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて、書どもなど見たまふ序に、近き御廚子なる、いろいろの紙なる文どもを引き出でて、中將わりなく床しがれば、「さりぬべき少しは見せむ、かたはなるべきもこそ」と、許し給はねば、「頭中將」そのうちとけて、傍ら痛しと思されむこそ床しけれ、おしなべたる大方のは、數ならねど、ほどほどにつけて、書きかはしつゝも見侍りなむ、おのがじし怨めしき折々、待ち顔ならむ夕暮などのこそ見どころはあらめ」と怨ずれば、やむごとなく切に隱し給ふべきなどは、かやうに大總なる御廚子などに、うち置き散らし給ふべくもあらず、深く取り隱し給ふべかんめれば、これは、二の町の心やすきなるべし

の如きは、まだ中長の部類であるが、之れによつて、とにかく美しい文句が鎖り鎖つて、微妙な諧音を奏しつゝ、孔雀の羽の如く、蔦蘿の蔓の如く、連亙する樣子を、想像することが出來るであらう。

「源氏」の文章は、此のやうに純粹な、優美な、女性的、聯綿的の美の極致を見せたものであるが、同時に是等と反對なる美の要素を缺いてゐた。純粹は單純を意味し、單純は自然に單調を意味する。純粹の優美は自然に雄大、樸野の風致を缺いた。純粹の女性美は自然に男性

的、粗剛的の要素を缺いた。純粹の聯綿調は自然に短切の齒切れよさを缺いた。アポロ式の美の極致を求める結果がディオニソス式の美の要素を失ふのは、止むを得ぬことであらう。かくして、風雨雷電の自然の怒りも、『源氏』に於いては、

その又の日の曉より、風いみじう吹き、潮高う滿ちて、浪の音あらきこと、巖も山も殘るまじき氣色なり。神の鳴りひらめくさま、更にいはむ方なくて、落ちかゝりぬと覺ゆるに、ある限りさかしき人なし。(明石)

と寫されて、物凄さよりは寧ろ優雅な調子を感ぜしむるやうになり、九州邊土の荒くれ武士が血相を變へて詰め寄るところも、

「いでや、こはいかに仰せらるゝ」と、ゆくりかに寄り來るけはひにおびえて、おとゞ色もなくなりぬ。(玉鬘)

と寫されて、なごやかな光景を感ぜしむるやうになつた。これが複雜なる興味を求める讀者が『源氏』に對して不足を感ずる所以の一つであるが、『源氏』に取つて、これは恐らく不能の悲劇であらう。とにかく『源氏物語』の文章美を考ふるに當たつて、吾等は先づ、作者が文學の歷史の流れの潮先に立ち、最新の主流を捉へて、之れに時代の思想を吹き込みつつ、醇化し美化して、急速に健全なる發達を遂げさせたことを知らねばならぬ。同時に主流

を極度に醇化、美化した結果は、自然に反對要素を含め得ざることとなつて、その要素補充の功名を後至の文學＝近くしては『今昔物語』『大鏡』遠くしては『平家物語』等＝に讓つたことを察してやらねばならぬ。同時にまた作者が、その方針に可能なる範圍に於いて驚くべき集大成を試み、而して成就したことを知らねばならぬ。

二

『源氏物語』の文章は、恐らく古今無双であらう　けれども吾等は『源氏』を以て徹頭徹尾の名文と信ずるものではない。『源氏』には大處についても、局部に於いても、可なりに多くの疵がある。吾等は試みにその局部的なる一二を拾ふであらう。

「須磨」の巻の初めに、源氏が左大臣を訪ひ、一泊して曉に歸るところを寫して、かう書いて居る。

明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやう／＼盛り過ぎてわづかなる木蔭のいと面白き庭に、薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜の哀れに多く立ちまされり。

時は源氏が三月二十日過ぎに立つて須磨へ行く、その二三日前としてある、はツきりはしないが、假りに二十日頃の朝と假定して、さて要點は初めの三句の相互關係であるが、一明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう」は、矛盾した文句が絡み合つてゐて、これでは印象の浮かべやうがあるまい。それは、第一には、明けてしまへば夜が深くないからであり、第二には夜が深ければ有明の月の存在しやうがないからである。『細流抄』などは、此の部に對して「三月末の景氣たぐひなし」などと、手離しの禮讃をさゝげて居るが、何あしらひや音調の美は別として、事理は曖昧を極めてゐる。少し進んで、左大臣の北の方、大宮からの挨拶に、

いといと夜深う出で給ふなるも、さま變はりたる心地のみし侍る。

と、更に「いと」までを添へて繰返して居るところを見ると、前のも單なる誤記ではあるまい。また源氏のいよ〳〵立ち出づる所をば、

出で給ふほどを、人々のぞきて見奉る。入方の月いと明きに、いとゞなまめかしう清らにて、物をおぼいたる樣、虎狼だにも泣きぬべし。

と書いてある。「月のいと明き」は夜がまだ深くて暗いからであらうが、「入方」とあるので、試みに昭和十三年陰暦三月二十日の月の入を檢べて見ると、午前八時三十分となつてゐ

る。十九日の入は七時四十九分であり、二十一日のは九時三十一分である。そして毎年まづ大同小異である。さうすると、陽暦の四月末、日の長い頃の午前七時乃至九時はもう太陽の高く輝きわたつてゐる時でなければなるまい。かう考へると、作者は源氏の出立が、まだ夜半の暗い中か、半明のほのぼの明けかを、はツきりと意識してゐなかつたらしい。また三月二十日頃の月の入が何時頃であるかをも、考へも調べもしなかつたらしい。好んで人の缺點をさがすやうで心苦しいが、『源氏』の中には、かういふのが、自然の描寫にも人事のにも折々ある。現に間近く「須磨」の中に、冬の一夜源氏が從者等と琴や歌に心をやるところを、

冬になりて雪ふり荒れたる頃、空の氣色も殊に凄く眺め給ひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔に横笛吹きて遊び給ふ。心とゞめて哀れなる手など弾き給へるに、他物の聲どもは止めて、涙をのごひあへり。昔胡の國に遣はしけむ女を思しやりて、ましていかばかりなりけむ、この世にわが思ひ聞こゆる人などを、さやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむ事のやうにゆゝしくて、霜の後の夢と誦じ給ふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅のおまし所は、奥まで隈なし

と書いてある。同じ一夜の暫らくを、弾きつ歌ひつして、王昭君の故事を思ひ出した間の事

であるが、雪降り荒れて空の氣色も殊に凄かつたのが、何の理由もなく、忽ちにして「月いと明うさし入りて奥まで隈なし」一は、隨分前後の連續を辨へぬ敍述と云はねばなるまい、けれども是れは紫式部ばかりの事ではない。吾等は前に『蜻蛉日記』の作者が石山詣でから歸るさの琵琶湖を寫して、

空を見れば月いと細くて、影は海の面にうつりて、雨風うち吹きて、海の面いと騷がしうきら〳〵と騷ぎたり。

と云つてゐるのに對して、「同じ時所位に起こつたとはとても思はれぬ矛盾を見せてゐて、讀む者の印象をかき亂す」と云つたことがあつた。『和泉式部日記』には、ある秋の曉の樣子を、

妻戸押し明けたれば、大空に西に傾きたる月の影、遠く澄みわたりて見ゆるに、霧りわたりたる空の氣色……

と書いて居る。月の影の遠く澄み渡つて見える事と、一面に霧の降りてゐる事とは、とても同時に存在し得ぬことであらう。かういふ事を當代の選まれたる三才女が揃ひも揃つて書いて居るのであるが、弘法大師は『文鏡祕府論』の病犯論の中に於いて、「相反」一の稱の下に、「晴雲開₂極野₁、積霧掩₂長洲₁」一といふ例を擧げて居る。野の果てまで晴れ渡る事と長洲

一ぱいに霧がかゝつて居る事とは、いかにも相反するわけであるが、どこの名家にもかういふ手落、不注意があるものと見える。

『源氏物語』に見出ださるゝ惡文缺點の例證はまづ此の位にして、さて『源氏』は此の種の病犯を可なりに多く持つてゐるが、それに拘はらず、全體としては實に偉い名文であつた。その名文たることの一大特色として、前に極度に磨きのかゝつた美しさを擧げたが、吾等は此の『源氏』の文章の美しさが、四大要素の合力によつて成立つたものであると思ふ。四大要素とは統一、變化、妥當及び調音の四つである。統一とは『源氏物語』が語句の全部を優美、典雅、やさしさ、うつくしさ、品のよさの一色で整へて居ることである。漢語、佛語、俗語、學者、武人、俗業、その他一切の言語動作を、王朝の磨かれたる趣味の是認すべき言葉及び語法で塗りつぶしてゐることである。變化とは語句のあしらひの千様萬態である。古今東西の修辭學者が說くところの詞姿の數が三百餘種からある、それらを最も多く、最も巧みに使ひこなしたのは、イギリスではシェークスピアであると云はれるが、日本では『源氏物語』と、近松の淨瑠璃と、一群を成したものでは謠曲とであらう。卽ち『源氏』は語質は至純至美の一色一味だが、その一色純美の言葉を綾どつて無限量の修辭技巧を見せてゐる『源氏』の文章の美は、この語質の一と修辭姿態の多との經緯の綾に成立つてゐるのであるが、こゝ

にもう一つ加へなければならぬのは、用語、句立、引喩、接離等に於ける妥當性である。その場合々々に極めてよく適合したる言葉を用ゐ、譬喩を引き、句をあしらひ、順序をつけ、人物自然を配してゐることである。卽ち品のよい綺麗な言葉で、豐かな修辭の變化を見せ、而してその用語修辭が濡れ紙を貼つたやうに、ぴツたりと本尊の內容に適合してゐる。これで『源氏』の文章美の骨髓が、まづ言ひ盡くされたやうなものであるが、更にもう一つ加へなければならないのは、讀む上の調子のよい事、卽ち音調の美しさである。竹本筑後掾が『鸚鵡の杣』に、元祿藝界の名手某々等が、さる雲上の老貴紳に招かれ、名々得意の藝づくしをした後に、主人の老翁が最後に、麿も何か一鎖をと云つて、『源氏物語』の一節を誦み聞かせられたが、その面白さには、さすがの名人連も一同感淚を拭つたといふことが書いてある。それは無論老主人の讀み方の巧みなのにもよつたであらうが、主としては『源氏』の文章そのものの持つ音調の美しさによつたのであらう。吾等はかやうに考へる所から、『源氏物語』の文章美成立の四大要素は、至純至美の言葉を以て、限りなき修辭の變化を織りなし、それらの用語、句あしらひが、ぴツたりと壺に嵌まつた上に、出來あがつた文章の音調が何とも云はれぬ美しさを持つといふ、此の統一、變化、妥當、調音、之れを半ば皇朝に歸化した英語に言ひ換へれば unitiy, varietty, propriey, harmony の四つであると思ふのである。

右の標準によつて、左に少しばかりの例を擧げて見る

一三

美しい文章の例として、吾等は先づ『源氏』の作者が專らその手腕を見せようとして技巧を凝らしたらしい幾斷片かを引いて見る。それは多く卷々の冒頭に、情趣ある光景の出端に、或は特殊の味を暗示する要所々々に用ゐられたもので、情景を絡み、故事を匂はし、緣語のかゝりを添へ、語句を出來るだけ節約して、餘情を出來るだけ豐かにしたものである。これは恐らく文章家としての作者の最大苦心の存するところで、同時に最大の誇りでもあつたのであらう。例へば「玉鬘」の最初なる。

年月へだたりぬれど、飽かざりし夕顏をつゆ忘れ給はず、心々なる人の有樣どもを見給ひ重ぬるにつけても、あらましかばと、哀れに口惜しくのみおぼし出づ。

の如きは、意味を辿ると、夕顏を失つてから、もう十八年、長い歳月は經過したが、いくら思つても思ひ飽くといふことのなかつた夕顏を、一寸もお忘れなさらず、その後いろ／＼な性格の女君達を見て、段々經驗は積まれたが、夕顏のやうな女は一人もない、あゝ／＼あの女がも

し生きてゐてくれたならばと、可哀相な、情ないことをしたとばかり、思ひ出し〳〵なされたといふのであるが、夕顔、露等の縁語を絡んでは餘情を籠めて實に美しく書いたものではないか。序にその夕顔を伴れ出す時の八月十五夜の書き出しも、やはり此の種の詞の綾と、情趣と餘意とが助け合つて、何とも云はれぬ風情の文である。

傳冷泉爲相筆　源氏物語　やどり木

八月十五夜、隈なき月かげに、ひま多かる板屋殘りなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍しきに、曉近くなりにけるなるべし。

或は短いのでは、「桐壺」の更衣の母が涙の眼で宸翰を拝するところの

目も見え侍らぬに、かく畏き仰言を、光にてなむとて見たまふ。

の如き、イギリスのワレー氏が "My sight is dim" said mother, "Let me hold his letter to the light": (我が視覺はおぼろなり、いざ燈火のそばにて御手紙を) などは言語道斷であるが、ほゞ其の味をも傳へ得た柳亭種彦が『田舍源氏』の補譯の「歎きくらして目も疎く、讀み得んことも覺束なし、されども君の御威光の、光に照らして拜さんと」が、大意は得ながら、餘情、品位、調子などから比較して雪泥の相違のあるのを見ても、この簡淨無盡意の『源氏』の文のいかに優れて居るかが解るであらう。

「東屋」の冒頭なる

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山のしげりまで、あながちに思ひ入らむも、いと人聞き輕々しう、傍ら痛かるべき程なれば、おぼし憚りて、御消息をだにえ傳へさせ給はず。[一]

【註一】薫大將が辨の尼の紹介で、一たび浮舟に逢ひたが、身分を憚つて暫らく音信もしなかつたことを書いたので、「古今集」の「筑波山はやましげ山しげけれど、思ひ入るにはさはらざりけり」を踏まへ、同時に浮舟が母の夫が常陸守なることを匂はしたのである。大意は、「筑波山の繁ゐる常陸の國守に養はれた娘に逢はうとするのだ、古歌にも此の山、一心に分け入れば入られぬことはないとも云うてある、その通り、山を分け茂みを分けて、我が物として見たいといふ御心はあるが、しかし、相手は身分のない女だ、強ひて執着して麓の小山の藪の中まで、分け入るのも、身分がら甚だ世間體が憚らるゝし、傍目も気

止の至りであると遠慮して、語れることは勿論、御便りだけさへも、辨の尼の手から傳へられることが出來ないのであつた」といふのである。

の如きは、この文體の苦心と味はひとを最もよく現はしたものであらう。同時にかういふ曲折の多い、凝りぬいた文飾を好まぬ者には、やゝこしく、廻りくどく、一種の厭味にも見え、また氣取くさい惡文とも感ぜられるであらうが、とにかく一種の美しい興味のある文章であることは許さねばならぬ。而して今こそあれ、『源氏』の作者が始めて此の種の文體を完成した當時に、人々にめでられ、自ら誇つた消息は、また想像するに難からぬことである。兼好、西鶴、一葉の如きは、此の文體の追隨者の中に加へらるべきものであらう

吾等は次ぎに「妥當」の例を見るであらう。妥當はある意味からすれば、修辭に於ける最高の花であり冠である。妥當に語句の妥當があり、譬喩、引例の妥當があり、飜譯の妥當があり、秩序、連絡の妥當がある。『源氏』の妥當は、それらのいづれもに於いて多くを見出だすことが出來るが、まづ『夕顔』の卷から二三を擧げて見ると、夕顔が怨靈に物怖して我れかの氣色になつた所にある、

右近「物怖をなむわりなくせさせ給ふ御本性にて、いかに思さるにか」と右近も聞こゆ。いとかよわくて、晝も空をのみ見つるものを、いとほしと思して、源「われ人をおこ

さむ。手叩けば、山彦の答ふる、いとうるさし。こゝに。しばし。近く」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押しあけ給へば、渡殿の火も消えにけり。

この一鎖全體が妥當で面白いが、特に取り出したいと思ふのは「こゝに、しばし、近く」の三句で、こゝの源氏の詞は

おれが行つて起こして來る。手を叩くと、山彦の返事がうるさい。此處へおいで。一寸のことだ。もッと近う／＼」と云つて、右近を夕顔の側に寄せられた。

といふのであるが、「こゝに暫し近く」は引きつゞけるのではなく、右近が躊躇して進みかねて居るのを見て、「此處へおいでといふに＝何、ちよッとの事だよ＝もッと近く／＼。」と、ポツ／＼と、切り／＼言つた味であらう。前にも言つたやうに、『源氏』の文章の特色は、全體としては蔦葛の蔓もどきに、連綿と絡み繋がるところにあるが、稀には、かういふ句讀短かな、ぽつ切れの味を見せて居るところもある。これもその一つで、いかにも壺に嵌まつた用語ぶりであると思ふ

世に知られた「夕顔」の卷にさし當たつた序に、妥當の辯證かたがた、『源氏物語』の性格描寫、心理描寫といふものに言ひ及んで見たいと思ふ。

夕顔の悲劇は六條御息所と夕顔と、此の二人の女性の性格と、身分と、源氏の待遇振との三

要素を、心理的に發展させることによつて成立つた急調の哀話である。作者は雨夜の品定に於ける頭中將の好色懺悔として、夕顏に關する豫備工作を暗示的に施したが、六條御息所については、「夕顏」の卷の冒頭に「六條わたりの御忍びありきの頃」の簡單な一句を設けただけで、次ぎには夕顏に關する叙述の小間隔を置き、やがて、六條御息所の性格記に入つた。御息所は先皇太弟の未亡人、源氏には七歲の姉、聰明な權式の高い人で、初めは容易に靡かなかつたが、辛うじて靡かれると、やがて源氏の足が遠くなつた。そして其の遠くなつた主なる原因は、身分のない新米の夕顏であつた。此の女君の性格を、かう書いてゐる。

女はいと物をあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡の程も似げなく、(源氏十七歲御息所二十四歲)人の漏り聞かむに、いとゞかくつらき御夜がれの寢ざめ〳〵、思ししをるゝこと、いとさま〴〵なり。

いかにも核心をつかんだ記述で、彼女は物を極端に思ひ詰め、思ひつめては取りのぼせてかッとなるといふ性質であつた。そして其の人が今や世間に恥ぢつゝ、源氏の重なる無沙汰に、すッかり萎れ切つて居られるのである。氣の勝つた上氣性の貴婦人が、一旦護謨毬のやうにひしげたのは、やがて猛然と膨れあがる機が孕まれて居るのであらう。

一方夕顏の性格は、頭中將の言によると、のどけく、穩しく、遠慮がちで、怨まるべき事があつ

ても見知らぬ振し、久しく途絶してても意に介せぬらしく裝ふといふ女であつた。それが親も無いところに、幼い女の子があり、そこへ中將の本妻から迫害の手が伸びて、子をも連れずに、夕顏の花咲く陋巷に隱れ住んでゐたのである。かういふ御息所と夕顏と、二人共に一たび男を持ち、一人の子を生んで、二度目に天下の選まれたる源氏に見えたといふ類似の經歷を持つてゐるのであるが、同時に一方は、身分に光り、高貴に見えた過去を負うて人に臨み、執着が強くして、上氣するとすぐに昂奮するといふ積極性の危險な麗人であり、一方は身分が無く、親が無く、意地が無く、しかも愛人の本妻から壓迫された後妻打たれの苦しい先驗にびく〳〵してゐるといふ消極質のおぼこめいた麗人であつた。今や此の甚だしく相似て、同時に甚だしく相異なる二人が、運命のいたづらによつて、激烈なる競爭の舞臺に立つたのである。而して作者は此の競爭の解決を、前者が怨みの一念の壓迫の勝利によつて附けようとするのである。此の解決の結果は已に二人の性格と境遇とに豫定されてゐるのではあるがその結果を無事に將來することは、作者に取つて重大なる負擔であつた。而して作者はその方法を交互記述の迫上と心理描寫とに見出だしたかのやうに見える。

作者は御息所と夕顏との源氏に對する戀愛關係を迭代りに寫した。而して前者に對して源氏は、此の高貴の麗人に濟まぬと思つて、心惹かれつゝ遠ざかりに遠ざかり、後者に對し

ては、此の見る影もない女性の何處に引きつけられるのかと怪しみつゝ近づきに近づいた。而してその遠ざかり方近づき方は、自然で、徐々で、當の目的は他の長閑な夾雜叙事と綯ひ交せつゝ、敵の目を忍ぶ埋伏火藥でもあるかのやうに祕められたが、その完全爆發の手配は寸分の油斷もなく施された。萩原廣道はその『評釋』に於いて、御息所の怨靈が姿を現はす以前に「怪し」の一語が幾度となく繰返して用ゐられてゐる、これは超自然の出來事なる怨靈の出現を、讀者に不自然に感ぜしめぬ爲めの拔目なき豫備工作の一つであると說いて居るが、さうでもあらう。かくしていよ〳〵怨靈の現はるゝ直前に、作者は何を書いたか。がらんとした某の院の夕暮は、ひどく淋しかつた。夕顔は物恐ろしさに、源氏の傍に副ひ通ほしてゐる。源氏は格子を早くおろさせ、燈火を點けさせ、「これまで深い仲になりながら、猶ほ心に祕密の一部を殘して、名を敎へてくれぬのがつらい」などと言つて怨む。そして聯想は內裏に飛んで、「父帝が、さぞおさがし下さることであらう、今時分お使が何處を搜して居るであらうか」と想像する中に、むツくりと頭を擡げたのは六條御息所の姿であつた。

「かつは怪しの心や。六條わたりにもいかに思ひ亂れ給ふらむ。怨みられむも苦しう道理なり」と、いとほしき筋は、まづ思ひ出で聞こえ給ふ。何心もなきさし向ひを、哀れとおぼすまゝに、あまり心深く、見る人も苦しき御有樣を、少し取り捨てばやとぞ、思ひ

比べられ給ひける、

と、まづかうあつて、直ぐその次ぎに、

宵過ぐるほど、少し寢入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、―おのがいとめでたしと見奉るをば、訪ねもおもほさで、かく異なる事なき人を率ておはして、時めかし給ふこそ、いと目ざましくつらけれ―とて、この御傍の人を起こさむとすと見給ふ。物におそはるゝ心地して、おどろき給へれば、火も消えにけり

と書いてある。前段はまさしく後段の喚び水で、源氏のこの心理に喚ばれて、出て來たのが、御息所の靈である。―それにしても理由のわからぬ我が心よ。六條邊でもどんなに待ち焦がれ思ひ亂れて居られることであらう。しかし怨まれるのも道理だから、仕方がない―と、平生氣の毒〳〵と思つて居られる事とて、まづ第一に御息所を思ひ出された。それにつけても、夕顏との對座を、心安く嬉しいと思召すまゝに、餘りに見識が高くて、傍にゐても氣疲れするやうな御息所の、あの威の勝つた御容子を、少し取り捨てたいものであると、御息所と夕顏とを、心の中で、つい比較せずには居られなかつた―などは、實に自然に面白い呼び出しの心理ではないか。而してかく呼び出されて、美しい女が枕上に現はれると、―わたくしはあなたを、これほど待ち焦がれて居りますのに、訪ねようともなさらずこんな取所のない平凡

な女を連れ出して御寵愛なさるとは、えゝ癪な、おつらう御座います―と云つて、傍らの人を起こすと夢に見られる……などは、これまた實に自然な呼應ではないか　かやうに性格の對照、身分境遇の對照、源氏の待遇の對照と、豫備工作を進めた上に、間際近くなつては、無氣味な言葉の連發によつて、讀者の心に恐怖の暗示を與へ、月に寄せた女の述懷の

山の端の心も知らで行く月は
うはの空にて影や絶えなむ

の歌では、運命の前兆を感ぜしめ、さていよ〳〵の直前には、嫉妬に燃える一方を痛切に思ひ出し、のみならず妬む方と妬まれる方とをつく〴〵と比較して、やがて妬まれる方に愛の全部を寄せる。　吾等之れに對して我が國最初の性格描寫と心理描寫とを見るの心地がするのである。

一四

自然に仕組まれた性格描寫や心理描寫は、高尙なる意味に於ける「妥當」の現はれの一種であるが、吾等は飜つて、再び小局部についての妥當を考へて見たいと思ふ。

譬喩、擧例、引喩等は短い語句に次いで複雜なるものであるが、『源氏』に於ける古成句の引用は、實に妥當巧妙を極めたものであつた。それは白氏文集の詩、催馬樂、朗詠の句、古今、後撰の歌、悉くさうであるが、假りに催馬樂に例を取つて見ると、或る一事に興じて誦じ出だされたる句を取つて、その引用價値を考へる者は、必ずその句が世に知らるゝ催馬樂六十數首の中の最適者なることを見出だすであらう。時としては當時行はれた和漢の古典の中に、之れに優る適合者の無いことをも見出だすであらう。例へば「須磨」の卷の頭中將が源氏の謫居を訪うた處に、座敷からの見通しに穀物倉があつて、中將は男どもがそこから藁を取り出しては馬に飼ふところを見て興を催された、そして

飛鳥井すこし謠ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ聞こえ給ふ

と書いてある。「飛鳥井」は催馬樂の一篇で、「飛鳥井に、宿りはすべし、かげもよし、御水もさむし、御秣もよし」といふのである。作者は恐らく先づ馬に飼ふ秣に共通の興味を見出だし、副の興味としては、原句では木蔭の意なる「かげ」に、馬の毛色の鹿毛などをも聯想して、當意卽妙に之れを謠はしめたのであらうが、吾等は此の場合に誦する句として、是れ以上に相應はしいものを、催馬樂、風俗、東遊その他に見出だし得ないことを感ずるものである。

もう一つ「若紫」に、源氏は葵上を訪ねられたが、葵上が早速對面もされぬのを不滿に思

つて、不平を和琴に紛らさるゝところがある。そしてそこを、

物むづかしう覺え給ひて、あづまを清掻きてひたちには田をこそ作れといふ歌を、聲はいとなきめきて、すさび居給へり。

と書いてある。これは常陸の風俗歌なる「常陸にも、田をこそ作れ、あだ心や、かぬとや君が、山を越え、野を越え、雨夜行きませる」の初めの二句である。意味は一所懸命に田つくる我れを、君は疑うてあちら行く、雨の夜を、野越え山越え、あちら行く」といふので、原歌は女が誠實に働きながら、男に疑はれて見放された悲しさを歌つたのであらうが、此の場合、源氏がたまさか訪ねたのに、妻なる人が早速にも迎へぬ不平を、本歌とは逆まに、妻に見離されたと見做して、口ずさまれたのであらう。さう考へると、かういふ特殊の場合の感情に、これ以上合ふものは、風俗、催馬樂その他をさがし求めても、先づ見出だされまいと思はれる。從つて吾等はこゝに於いても、妥當句引用に關する『源氏』の作者の高き眼識と周到なる用意とを認むべきであらう。

『源氏』の作者の漢文飜譯に關する技倆もまた非凡なるものであつた。例へば「帚木」の品定の、藤式部丞が博士の娘に通ふ仔細を語るところに、女の父の博士が盃を持ち出でて「我がふたつの途うたふを聞け」と謠ふ事が書いてある。これは白樂天が嫁選びを歌つ

た古詩の中の「一聽我歌兩途」を譯したのであるが、吾等は「りやうと」と云はずして「ふたつのみち」といひ、殊に「ふたつのみちをうたふ」と云はずして、「ふたつのみちうたふ」と讀んだのを、王朝ぶりの日本化といふ點より見て、實に奥床しい見あげた譯筆であると思ふ。もし「途を」と云つたならば漢臭を帶びて來て、此の場合甚だ不調和なるものとなつたであらう。吾等は同じ理由で、「須磨」の卷の頭、中將が源氏を訪うて酒を酌みかはしつつ、同じく白氏の「醉悲灑淚春盃裏」を、「醉ひの悲み淚そゝぐ春の盃のうち」と謠はせて居るのを面白いと思ふ。これも「淚をそゝぐ」と云つたならば、直譯口調となつて渾融の雅調を損ふべきところを、「なみだそゝぐ」と讀んだので、前後に馴染んで無縫の雅相を見せたのである。『源氏』の外國古典の譯には、かういふ種類の名譯が多かつた。

吾等は次ぎに序次連接の妥當について考へて見たいと思ふ。序次連接は一語三語の最も短いものから長篇の作全體の結構にも及ぶものであるが、こゝには假りに『源氏』に於ける和歌連記の場合を擧げることとする。『源氏』の和歌には、『宇津保』に見る三十八首べたつゞけといふが如き無常識なる連記はないが、それでも八百首足らずの數の中には數首連記の例が、しば〳〵ある。而して其の連記された歌の間には、前後された心理的、藝術的の理由が含蓄されて居るやうに見える。從來の註釋や研究には、かういふ方面が全

く度外視されてゐるやうに見えるが、『源氏』の作者の藝術的優越性は、此の方面からも認めらるべきであらう。例へば「須磨」の卷の名高い「心づくしの秋風」のつゞきに、源氏と侍者三人の歌合はせて四首が無雜作に連記されてゐる。前後のつゞきを一二行添へると、左の通りで、

雁のつらねて鳴く聲檝の音にまがへるを、うち眺め給ひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは、古郷の女戀しき人々の心地、みな慰みにけり。

初雁は戀しき人のつらなれや
旅のそら飛ぶ聲のかなしき

とのたまへば、良清、

かきつらね昔のことぞおもほゆる
雁はその世の友ならねども

民部大輔、

心から常世をすてゝ鳴く雁を
雲のよそにも思ひけるかな

前の右近の丞、

とこ世出でて旅の空なるかりがねも

つらに後れぬほどぞなぐさむ

友まどはしては、いかに侍らましといふ、

といふのであるが、四首それ〴〵の大意は、大體かういふのであらう。

先づ最初なる源氏のは、

あの初雁は、我等のやうに故郷を戀しく思ふ人の仲間な爲めであらうか、旅の空を飛びつゝ鳴く聲が、ひどく悲しく聞こえるのは。

といふのであらう。源氏がかう言はれると、それを受けたのは昵近の良清、今の播磨守の子で、こゝの須磨には最も深き關係があり、播州本位に考へて第一位を與ふべき男で、その歌の意は、

さう仰しやれば、あの雁の聲を聞くと、あとから〳〵と、限りもなく昔の事、都故郷の事が想ひ出されます　あの雁は今始めて見るので、昔からの馴染ではありませんが、その聲を聞いて故郷の昔の事の想はれるのは、仰しやる通り、吾々と同じく故郷を戀しく思ふ仲間だからで御座いませうよ。

といふのであらう。吾等は斯樣に解釋して、實によく承けた、無上の連絡振と思ふのである第三座を承つたのは、侍者の第一位惟光である。これは普通ならば源氏に次ぐべきであるが、播磨本位に見て、第一位を良清に讓つたのであらう。彼れの歌は源氏、良清の二首を受けたので、大意は

　あゝ、さういふわけですかね。吾々は自ら進んで、君の御供をして、常世の故郷花の都を捨てて、此の須磨三界で泣いてゐるのだが、今の今まで、あの自ら求めて暖かい常世の故郷を捨てて旅の空に泣く初雁どもをば、すッかり自分等とは無關係のものと思つて居りましたよ。

といふのであらう。實に面白い開展振、連續振ではないか。最後の殿を承つたのは、前の右近の丞、これは源氏のお側附ではなく、親しさに於いて惟光、良清等に讓るが、源氏の推擧を得たのを徳とし、親が新任地へ同行せよと勸めたのをも振りきつて、源氏へ殉流の須磨下りをしたといふ男である。此の因縁によつて、最後に廻されながら、同時に打納めの花の役を振られたのであらう。彼れの歌は、源氏、良清、惟光三人の三首を、巧みにも總括的に承けたもので、その大意は、

　あの初雁は故鄕を戀ふる吾々の仲間だ。あれを見ると、昔の事が限りもなく思ひ出される。そして吾々は皆自ら求めて都を捨て、かうしてさすらひの旅の苦しみを嘗めて居るのであ

る。がしかし、あの長き棲所を離れて、旅の客をさびしく佗んで居る雁だッて、列に後れず、友達と一緒に居る中は慰められるといふものさ。吾々だッて同じことだ。これが友達にはぐれて御覽！　源氏の殿樣にお離れ申して御覽！　まあ、どんなに淋しからうではないか。といふのであらう。いかにも筆力千鈞の重い結尾ではないか。主昔がさすらひの旅愁に始まり、それに喚びさまされた近侍二人が現在の悲境の自覺に央し、而して陽氣な青年崇拜者が眼前の親睦融和に見出だした意味深き慰めに終はる。吾等は之れを見て、立派に秩序立てられた哀史一章を、わざと斷叙して豐かな餘意を見せたかのやうに思ふのである。

一五

吾等は次ぎに詞藻の美、連接の妙、時代思想の現はれ、性格の對照、心理の発所、いろ〳〵の興趣を短い間に具足して、＝源氏＝の作家の非凡なる手腕を示した一鎖を擧げて、簡單なる說明を加へようと思ふ。＝須磨＝の卷の一節で、明石の入道が、その娘を貴人に嫁がせようといふ宿願を叶へる爲め、源氏を迎へることについて、北の方に相談する所である。

譯

世に知らず心高う思へるに、國の――

内は、守のゆかりのみこそは、畏きことにすめれど、僻める心は更にさも思はで、年月を經けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君こそ、公の御かしこまりにて、須磨の浦にものし給ふなれ。我子の宿世にて、覺えぬ事のあるなり。いかでかゝる序に、この君に奉らむ」といふ。母「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やんごとなき御妻ども、いと多くもち給ひて、その餘りに、忍び／＼御門の御女をさへ過ち給ひて、かくも騒がれたまふなる人

明石入道は無類の高あがりやであつた。彼れは播磨一國擧つて、娘を持つたら國守の緣者へと、畏れ入つて居る間に、いさゝかさうした様子もなく、うるさい求婚者を斷つては、此の幾年かを通ほして來たが、今度源氏が、近くの浦へ御さすらひと聞いて、北の方に相談した。

「今度桐壺の更衣腹の源氏の君――あの光源氏の君が、公儀に對する御遠慮筋で、須磨の浦へお越しになつたといふではないか。娘の幸運の爲めに、かういふ思ひ設けぬ事が起こつたのに相違ない。で、わしはどうぞして此の序に、娘をあの君に差上げたいと思ふのだ。」

北の方は驚いた。

「まあ、飛んでもない。都の人の言ふのを聞くと、其の君は尊い御身分の奥方を澤山持たれて、尚ほその上に、憚るべき女君への出過ぎた御失敗まであつて、大騒ぎを起こされたといふ。さういふ御

は、まさにかく怪しき山賤を、心とどめ給ひてむや」といふ。腹だちて、「え知り給はじ。思ふ心異なり。さる心をし給へ。ついでして、此處にもおはしまさせむ」と、心をやりていふも、かたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君「などて、めでたくとも、物のはじめに罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとゞめ給ふべくはこそあらめ、戯れにてもあるまじきことなり」といふを、いといたくつぶやく。入道「罪にあたる事は、唐土にも、わが

方が、どうして此の邊土の田舎娘などに、目をかけて下さるものですか。」

といふと、入道はかッとなつて、

「何、お前にわかるものか。己れにはおれの分別がある。とにかく、そのつもりで支度をなさい。都合をつけて、此處へもお迎へするであらう」

あゝこれで積年の留飲が下つたと、自分獨りよい氣持になつてゐるのを見ると、此の入道、餘程一徹者らしい。それから入道は頻りに家を裝飾する、娘を大事にする。それを見て母君が、

「どんなに立派なお方だッて、こッちは立派な處女、始めて男に見えるといふのに、何の爲めに罪に觸れた流され人を思ひかけるといふのです。それも向うの御氣に入るなら結構だが、それは冗談にしても有りッこのないことですからね」

入道は言句につまッて、暫らくぶつ／＼云つてゐたが、

御門にも、かく世にすぐれ、何事にも人に異になりぬる人の、必ずあることなり。いかに物し給ふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にものし給ひし按察使大納言の御むすめなり。いと警策なる名を取りて、宮仕に出だし給へりしに、國王すぐれて時めかし給ふこと、並びなかりけるほどに、人のそねみ多くて亡せ給ひにしかど、この君のとまり給へる、いとめでたし。かく女は心を高くつかふべきものなり。おのれかゝる田舍人なりとて、思し捨てじ」など言ひゐたり。

やがて、

「何、罪に觸れる？　罪に觸れるといふことは、支那でも日本でも、源氏の君の如く世にすぐれて、何事にかけても群を抜いて居る人は、必ず有るに極つてゐることなんだぜ。一體お前は光源氏をどういふお方と思ふのだ。苟も自分とは御緣つゞき、亡くなられた母君御息所は、かくいふ入道の叔父君なる按察使大納言その人の娘御なんだぜ。それが才色兼備の名を歌はれて、禁裡へ御奉公に出られたが、出られると國王の御寵愛ぶりが無上無類とえらかッたので、その結果、人々の嫉みの積りで、到頭橫死は遂げられたが、あとに此の君の忘れ形見と殘られたは、重疊の至り。この通り、女といふものは、理想を高遠に持つべきものなのだ。かういふ御緣もあり、自分が此の通りの田舍者だからとて、やはか見捨てゝは下さるまいぞ。」

など云つてゐた。

第一に怪しいのは、大臣の子で、都では近衛中將にもなり、田舍では播磨の國守をも勤めた者が、自ら入道までしながら、何の爲めに娘を貴人に、しかも罪ある貴人にまで奉らうと思つたかといふことであるが、これは恐らく當時の外戚思想の現はれであらう。當時藤原氏の上流は、自家の力と德とを恃ますして、專ら娘を美しく育て上げて入內させ、その娘の腹に宿らせられた皇胤を擁立し、天子の祖父たる威力によつて政權を握らうと企てたのであつた。此の時代思想が前國守入道の胸の底深く宿つて、當てもなき宿願の爲めに住吉明神を祈り、願叶はずば海に入れ、海龍王の后になれと娘に命するまでに、いぢらしき苦心をさせたのであらう

第二の興味は入道と北の方との性格の對照である。男は情熱的の空想家で、これと思ひ込むと、物に憑かれたやうになるが、同時に人に優しいところがあつて、油斷なく準備の工作をもするといふ性質であつた。作者は此の入道の性格を深く凝視めて、頭尾に徹せしめたかのやうに見える。彼れは大臣の子と生れながら都の官場生活に失望すると、さツぱりと見切りをつけて地方の國守となつた。地方官としての生活に再び失望すると、今度は世間生活を見切つて、出家の生活に入つた。同時に一面、一粒種なる娘の將來に大望を懸けて、海邊と山の手とに莊麗な邸宅を設け、住吉に祈願を籠めつゝ、聟がねを迎へる準備に熱中した。

願ひ叶つていよ〳〵光源氏を得、娘の腹に姫君の出生までを見ると、今度は北の方をつけて娘と姫君とを都に上せ、自分は一切を抛つて山林に跡を晦ました。吾等は明石入道一人の生活に於いても、『源氏』の作者が持つ性格描寫の手腕の一面を窺ひ得ると思ふ。北の方は入道とは正反對の、石橋を叩いて渡る女々しい消極性の大事取屋である。而してその性格は、前後のいろ〳〵の場合に現はれてゐる。

第三は文章表現の妙味である。夫婦それ〴〵の性格に應じ、また相談、反對、激昂、説得と、內容の移るまゝに、文致の改まつて行くのも面白いが、殊に、女房が近視的、世俗的、石橋的なる反對意見にむか〳〵となつて、

え知り給はじ。思ふ心異なり。さる心をし給へ　序して此處にもおはしまさせむ。

「お前等に解るものか＝己にはおれの分別がある＝その積りで用意をせい＝都合をつけて、其のうちにお迎へ申すわ」と、千切れ〴〵に短句讀の文句を言ひ放つあたり、何といふ面白さであらう。また母君が源氏にけちをつけて、「罪にあたり流されたらむ人」と云つたのに對して、初めには説破が出來ず、たじ〳〵して、ぶつ〳〵云つて居たが、その中に、妙案が浮かむと、北叟笑みながら、女房の詞をそのまゝ受けて、「罪にあたるとは」（何？　罪にあたるだッて！）と、尻取の鸚鵡返しをやッたところも、實に面白い。

最後に拔群の妙味は、源氏を迎へる計畫の合理的なることを說得する二段構である。入道は母君の用語をそのまゝに受けて、先づ「罪にあたることが何故わるい？　偉い人で罪せられない人があるか、罪せられるのは其の人の偉い證據だぞ」と云つた、そして更に追ツかけて、「其の上、源氏の母君と自分との間には、緣つゞき、從兄妹同志といふ親しい關係もあるんだぞ」と云つた、此の先づ情の聲を聞かせ、次いで理の聲を聞かせた二段構が實に面白いといふのである。誰れしも人情で、激した時には亂暴な事をも、怪しまずに言ふものである。そしてそれを聞く者も亦、成程と思ふものであるが、逆情が下つて、頭が冷靜になると、お互に前の言葉が愚かしく感せられて來る。例へば激した時には、「酒を飮まぬ者にろくな奴があるか」などと云つて、言ふ者も得意になり、聞く者もさまで怪しまぬが、暫らくして理性が頭を擡げて來ると、双方共に極り惡さを感ずる類ひである。此の場合もさうであらう。入道は母君の冷語に昂奮して、「偉い人で罪せられない人があるか」と放言したが、彼れは其の詞が終はツたばかりで、まだ理性が鎌首をもたげる隙の無い中に、正常穩健なる理由を附け加へて、「源氏の母君は自分の從姉妹だと云つた」これには母君も安心して耳を傾けたであらう。此の二つは一種の双助で、一つでは用を爲さぬものである。前の情の言だけでは唯だ無分別者の譫言と聞かれるであらう。後の理の言だけでは風情のない

唯だの説明と聞かれるであらう。またこの双助は理智の言を前にし、感情の言を後にしては、何の效目もなくなるものであるが、それが非理に近い情の言を先づ發して、すかさず理の言で補ふと、彼れ是れ相助けて何とも云はれぬ藝術味を發揮して來るのである。吾等は曾て此の最適の例を、シェークスピアが『ヱニスの商人』の法廷の場に見出だした。シャイロックがナイフをアントニオの胸に擬した時に、判官は「やれ、待て猶太人！」と一喝して、「ヱニスの法律は、それなる商人の胸より一ポンドの肉を切り取ることを許すが、一滴たりとも血を流すことは許さぬぞ」と言つた、そしてシャイロックがたじろき、滿廷が狂喜の目を輝かすのを尻目にかけつゝ、更に疊みかけて、「のみならずヱニスの法律は正當の理由なくして基督教徒の生命を危うする者に對して、財産を沒收し、死刑をも宣告するぞ」と言つたのは、まさしくこの双助を巧みに用ゐた二段構である。血を流すことを許さぬのは當意卽妙の宣告ではあるが、生き身を切ることを許して血を流すことを許さぬのは、大背理である。醒めたる理智は、やがて之れを嘲るであらう。けれども流血禁止の臺詞を省いた裁判は味の無い知識であり、藝術の無い劇である　沙翁はさすがに之れを知つた、而して先づわざと痛快なる背理の一撈を演じ、而して觀衆の理智の覺醒する隙もあらせず、合法十二分の理由を加へて、觀衆の心を、且つ喜び、且つ安んぜしめたのである。低級なる俗衆の喝采を博

したのみならず、同時に知識階級の高き鑑賞眼をも滿足せしめたのである。

「源氏」に於ける偉人必罪と母氏近親との双助の二段構は、まさしく之れに匹敵するものであらう。我が國の文學に當意卽妙の背理打開は少なからずあつた。合理打開は無論無數にある。けれどもこの双助の二段構は皆無もしくは殆無であつた。近松巢林子がその名作「大經師昔曆」の最後に於いて、罪ある男女の處刑の場に、黑谷の東岸和尙が飛び込んで、僧衣の功德唯だ一つの理由で助けたるが如きは、まさしく此の情のみを立てた背理の打開の趣向で、高級の讀者を納得せしめ得ざるものであるが、吾等は是等東西の名作に比較することによつて、「源氏物語」の價値の更に高く世界的に昂揚せらるべきことを思ふのである。

一六

吾等はもう一つ、いろ〳〵の興味を豐かに盛つた一節を掲げたいと思ふ。それは「明石」の末段、源氏がさすらひの旅の三年目に、いよ〳〵赦されて都に歸ることとなつたところである。優曇華の花をも悅びの中に、悲しみは、新らしき愛人明石上との別かれであつた。女

君は唯だ涙に沈んで居る。母君は慰めかねて、その不滿の飛沫を入道にかける。入道は腹立ちながら、うろ／＼するといふところである

母君も慰めわびて「何に、かく心づくしなることを思ひそめけむ。すべてひが／＼しき人に從ひける心のおこたりぞ」といふ。入道「あなかまや。思しすつまじき事も物し給ふめれば、さりとも思すところあらむ。思ひ慰めて、御湯などをだにまゐれ。あなゆゝしや」とて、片隅に寄り居たり。乳母母君など、ひがめる心を言ひ合はせつゝ、「いつしか、いかで思ふさまにて見奉らむと、年月を頼

譯

お母さんも慰めあぐんで、

「何だッて、こんな心配事を思ひ始めたのだらう、これもみんな、あの旋毛曲りの人の言ふなりになつた油斷から起きたことなんだよ。」

といふ。入道は

「かしましいわ。お見捨てにならない事情も、ちやんと出來てるるんだからな、(お腹にもうおこさんも出來てゐるぢやないか。)今度はお一人御上りなさるにしても、屹度何かお考がおありだらうよ。(娘に)サァ氣を引き立てゝ、せめて御藥湯だけでも御あがりよ。(獨語)あゝ忌々しい、怪しからん！」

と云つて家族の群を離れて、片隅に小さくなつてゐる。

一方乳母とお母さんとは、名々のひがんだ心持を言ひ合

み過ぐし、今や思ひかなふやと
こそ頼み聞こえつれ。」「心苦し
き事をも物の初めに見るかな」
と歎くを見るにも、いとほしけ
れば、いとゞほけられて、晝は日
一日寝をのみねくらし、夜はす
くよかに起きゐて、珠數の行方
も知らずなりにけりとて、手を
押し摺りて仰ぎ居たり　弟子
どもにあはめられて、月夜に出
でて行道するものは、遣水に倒
れ入りにけり。よしある岩の
片そばに、腰もつきそこなひて、
病み臥したる程になむ、少し物
まぎれける。

はせて、

乳母「一日も早く立派なお方の北の方様にして、御見上げ申したい申したいと、長い年月あてにして居りましたが、やッと思ひが叶つたと、安心して居りますと……」

母君「ほんにさうだよ。これが初婚といふのに、なんて意外な、情ない目を見ることだらうねい。」

と、女達が歎きあふのを見るのも氣の毒さに、入道はすッかり喪神の様子で、晝は一日ごろ／＼と寝て暮らし、夜は一晩つくねんと起きてゐて、「おや！珠數は何處へ行つた？」などと、第一の修行道具の置所さへも忘れて、空を仰いでは、あゝ／＼どうもと、手を揉んで居た。そして弟子共にまで馬鹿にされては、てれ隠しに、月夜を幸ひ、外修行に出かけたのはよかッたが、出かけた結果は、遣水に轉び込むといふ喜劇を演ずる。そして由緒の岩の出ッ鼻に腰を打ちそこねて、痛い／＼と云つて居る、その間だけやッと娘の心配を忘れたのであつた。

第一に面白いのは、別離の悲愁に目眩つた四人四樣のちがッた態度が書き分けてあることである。當人の娘は、たゞもう泣きに泣いてゐる。平穩無事を希つた消極質の母君は、當面の悲しさに度を失つて、無遠慮にあたり散らす。乳母も母君に合流して、持前の饒舌を縱橫に振ふ。入道も心は同じ悲愁當惑に包まれつゝ、女どもの雜言に刺戟されて、初めは半ば激昂し、半ば勇氣をつける爲めに、尤もらしい事を云つてゐたが、やがてうろ〳〵して幾多の滑稽を演ずる。この感情動搖の間に於いて、それ〴〵の人物性格進展の自然道を一歩も逸れさせぬところが面白い。もう一つ目につくのは芝居がかりの手の込んだ經緯を、あッさりと敍事式に書きすましてゐることである。入道、その他の詞をば、原典は、寫本も、版本も、註釋書も、皆一樣に一本筋に書いて居るが、入道の詞は實は三段を成してゐるので、初めの

あなかまや。思し捨つまじき事も物し給ふめれば、さりとも思すところあらむ。

は、母君をたしなめたのであらう。次ぎの

思ひ慰めて、御湯などをだにまゐれ。

は、娘を慰めたのであらう。而して最後の

あな忌々しや。

は自ら呪つて舌打した傍白の獨語であらう。まだ演劇といふものがなく、文句讀法の道具

立の殆んど無かつた昔とて、一筋に書き流してはあるが、これだけの變化を籠めて居るのは珍しいことである。次ぎに「いつしか、いかで」から「物の初めに見るかな」に至るまでを、諸本悉く一人の詞としてはあるが、初めに「乳母、母君などひがめる心を言ひ合はせつゝ」とあり、而して詞は初めの

いつしかいかで思ふさまに見奉らむと、年月をたのみ過ぐし、今や思ひかなふやとこそ頼み聞こえつれ。」

には、「見奉らむ」「聞こえつれ」と敬語がつけてあり、最後の二句には、

心苦しき事をも、物の初めに見るかな。

と云つて、敬語の添つてゐないところを見ると、初めは乳母の詞、後は母君の詞で、それを切れ目なしに書きつゞけたのであらう。かういふ事情を綜合して考へると、今の吾等が平凡視當然視して讀み流して居る處に於いて、作者が意外に込み入つた工夫を凝らして居ることが察せられる。

次ぎに一つ怪しいのは、「乳母母君」の順序立である。此の場合何故に「母君乳母」と、尊卑の序次を正さずして、召使を先きにし、主人を後にしたのであらうか。思ふに是れは、かういふ特別の場合によく聞く饒舌を標準として、乳母に先位を與へたのであらう。吾等は

曾て『平家物語』の俊寛足摺の條に於いて、俊寛僧都が漕ぎ去る船に對して、「乘せて行け、具して行け」を繰返す所を、

幼き者の乳母や母などを慕ふやうに、足摺をして、……

と書いてあるを見て、一たびは訝りながら、これは當時の貴族心理の現はれであると思つて、點頭いたことがあつた。子が生れると養育を乳母に託する王朝の上流貴族に取つて、危急の場合に、先づ乳の親みある乳母を呼ぶのが人情の自然だからである。雖つて「明石」を見ると、不平や欝憤をほしいまゝにしやべり散らす場合に於いて、饒舌の上手は、乳母である に相違ない。此の特別の理由により、他の平常の場合には「母君乳母」と次第して居る作者が、此の場合特に普通の順序を轉倒したのであらう。さう思ふと、『源氏』の作者の注意が、特別心理の影を暗示する言葉あしらひにまで及んでゐたことが察せられて、作者の文學位が更に一段の高さを加へるやうに思はれる。

最後に面白いのは、「夜はすくよかに起き居て」から最後に至るまでのユウモアの味ひである。『源氏』のユウモアの特に高級なものは、詞の品位と調子の雅致とに包まれて居る結果、普通平常の記事として看過ぐされるのが常である。こゝもやはりその種のユウモアの一つで、入道のうろ〳〵する可笑しさと、怪我をして痛さを忍ぶ間だけ娘の心配を忘れた

といふをかしみとを寫したので、晝は寢ころび、夜は起きてゐて、おや珠數が見えないぞなど
と、うろ／＼しては、弟子どもに笑はれる。幸ひ月があるので戸外の修行に出る。出たのは
よいが、出た結果は庭の流れに轉び入つて、腰を打つたといふのである。―よしある岩―から
後には、殊に皮肉の味が加はつてゐる。その味は築庭好みの入道が、深山の溪流からでも運
び出して來たのであらう、―イヤ此の岩の風情は！―なぞと云つて、自慢にしてゐたその由
緒の岩の角に、腰を打つ、そして、痛い／＼と云つて寢てゐる、その間だけ娘の心配を忘れたと
いふのである。

『源氏物語』のユウモアには時々かういふ味のがある。三滑稽と云はれる末摘花、源典侍、
近江の君に關する部分などは、正路をはづれた容顏の不具、老女の好色、低能の早口と、まづ普
通の滑稽を、滑稽らしく一束ねに書き集めたものであるが、さもない場合々々に、知らぬげに
鏤められたのに、此の―よしある岩―のやうな、ユウモアの至味を見せたものが往々ある。
例へば『夕顏』の、源氏が六條御息所を辭して歸る時に、腰許の中將が見送つて來たのを捉
へて、「折らで過ぎうき今朝の朝顏」と詠みかけられると、お供して來た子供が、それを文字
通りに解釋して、庭に下りて、朝露に裾をぬらしつゝ、朝顏を折つて來て御目に懸けたといふ
ところを、かう書いて居る。

をかしげなる侍童の、姿好ましうことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花のなかにまじりて、朝顔折りて參るほどなど、繪に書かまほしげなり。

詞遣や調子が上品で、しとやかで、何處に滑稽諧謔があるのかと思ふやうだが、よく注意すると、紫式部が味なユウモアを文字の間に伏せて、にツこりして居る所が、目に見えるやうである。雨夜の品定めに、左馬頭が抽象論を一通り濟まして後、好色懺悔の實際話に移らうとするところを、かう書いてある。

その初めの事、好きぐしくとも申し侍らむとて、近く居寄れば、君も目覺まし給ふ。中將いみじく信じて頰杖をつきてむかひ居たまへり　法の師の世の道理說き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、かゝる序は、おのく睦言もえ忍びとどめずなむありける。

たはれた好色話を信仰して聽聞する。その樣子を惠心、法然の說法道場に見立てるなどは作者自身の言ふ通り、隨分をかしい滑稽で、まことに豐富な皮肉味を添へた意味の深いユウモアといふべきであらう。

或は「須磨」の卷で、朱雀院が源氏の退京以來數ヶ月ぶりで參內した朧月夜內侍と共に、源氏の噂をされる所に、院が世の中は果敢ないものだ、自分も久しく生きて居られようとは

思はぬなどと愁歎話をされるところがある。

「さもありなむには、いかゞ思
さるべき、近き程の別かれに、
思ひおとされむこそねたけれ、
生ける世にとは、げによからぬ
人の言ひおきけむ」と、いと懐
かしき御さまにて、物をまこと
に哀れと思し入りて、のたまは
するにつけて、ほろ〳〵とこぼ
れ出づれば、「さりや、いづれに
墜つるにか」とのたまはす

譯

「もし死にでもしたら、どれ程わたしを思つて下さる？
つい先頃の、源氏との別かれほどは悲しんでくれまいと
思ふと、妬ましいね、昔の歌人は「死んで後に何するも
のか、生きてゐる中に愛されなくッちや！」と云つたと
いふが、これは大方わしのやうに、女にもてない者の云つ
たことだらうよ」と、いかにも懐かしい御様子で、しみじ
みと仰しやるので、ついほろ〳〵と落涙すると、

「オヽ泣くのか。して、その涙は、わしと源氏とのど
ちらに落ちるのだ？」

と仰しやつた。

主體もだが、殊に最後の「おや泣いてゐるな、その涙は誰れの爲めに流れるのだ？」などは、當人は眞面目に泣いてゐる、それが傍から見ると非常にをかしく見えるといふ、最も意味の深いユウモアの實例を見せてゐるのではないか。この品位と雅調と甚深の意味とを織り込んだユウモアの趣に於いて、『源氏』は恐らく國文學の第一位に位するものであらう。

一七

吾等はまた『源氏物語』に於ける歌と地の文との連接味を語らずに、素通りすることが出來ない。歌物語に於いて、歌と地の文との關係は最も重要なる事の一つであり、而して二者の連接の妙味は『源氏』に於いて最もよく發揮されてゐるからである。抑も興味ある說話に歌を伴はせることは、『古事記』以來の久しい習慣であつた。それは恐らく語部があつて以來のみならず初心なる說話が試みられ始めた原始以來のならはしであつたであらう。彼等は大蛇退治の說話を物語つては、その間に八雲立つ瑞祥の神韻を挿んだ。大國主命の功業を語つては、須勢理媛、沼河媛との純樸なる贈答歌を添へ、日本武尊の東征を語つては、悲痛なる國思の歌を加へた。彼等の中には、或は地の文を縮約したやうなものもあつた。或は地の文と互に補ひ合ふものもあつた。或は散文の地が一歩々々高めて來た興味の最後の頂點を成すやうなものもあつたが、とにかくそれは一鎖の物語の眼目となり、これなくしては物語の興味の主要部を失ふやうに見られて來たものであつた。この說話に歌を伴はせる習慣が、謂はゆる歌物語の源流となつたので、平安朝に入つては、それが少しづつ

形を變へて、『竹取』『伊勢』『土佐』その他の物語、日記、隨筆に採入れられ、のみならず折々は漢文の間に萬葉假名で挿入されて、異風の興味を添へることとなつたが、その間に於ける變遷を約めていふと、第一の變化は、もと長歌、短歌、片歌、旋頭、混本、いろ／＼の歌謠を挿入したのが、殆んど短歌の一種に限られるやうになつたことである。第二の變化は、孤立式から添詞式に轉じて來たことである。孤立式は擧放式及び「―と受式」の二種に分けられる。而して擧放式は更に單なる擧切式と切受式との二種に分けられるであらう。添詞式はまた不卽不離式とも稱せられるであらう。擧切式は『古事記』に數多く見え、後世の文學にも無數に見られるもので、例へば「某はかくぞ歌ひける」と前置して、歌を擧げただけで、文章を切つて了ふのである。切受式は歌を擧げて、一旦切つて後、「かく歌ひて」などと斷つて、更に文句をつゞけるものである。『古事記』『日本紀』『舊事本紀』『日本靈異記』等に於ける挿歌の形式は悉く此の二種に限られてゐた。「と受式」は歌を擧げて後に「―と詠み給ひける」といふ風に言ひつゞけるものである。「―と受式」は詞その他では上代から無數にあつたが、歌を「―と」で受けたのは、恐らく假名の文學が出來てからで、『竹取』『伊勢』あたりを先祖とするものであらう。

以上の擧切式、切受式、「―と受式」の三種は、いづれも歌を獨り立ちさせて取扱つたもので、

一括して孤立式とも稱すべきものであるが、こゝにいつの頃からか、歌の次ぎに短い詞（對話語の意）を添へ、その歌と詞とを一團として「と」で受ける形式が行はれて來た。此の形式の實例は『土佐日記』に唯だ二つを見、『かげろふ日記』に十三四を見るだけであつたが、『宇津保』『落窪』になると、俄にその數を加へ、同時に技巧の冴えをも見せて來た。而して此の添詞式、不即不離式の挿歌法が、今や『源氏物語』に於いて、空前の洗錬を加へられて驚異的の存在となつたのである。『源氏』は歌物語の雄である。『宇津保物語』が含むところの短歌九百九十四首、之れに對して、『源氏物語』の含むところは聊か劣りの七百九十四首であるが、しかしその各〻は、人と場所と機會とに適應したる點に於いて、言ひ換へれば物語の内容と有機的關係を持つてゐる點に於いて、空前絶後と稱せらるべきものである。然らば此の七百九十四首の大部分が有する地の文との美しい關係が、特別の研究を要するのは當然の事であらう。

挿歌の形式に關する吾等の用語が餘りに新奇な嫌ひがあるので、左に簡單なる例説を試みる

この大神（須佐之男命）初め須賀宮を作らしゝ時に、そこより雲立ち騰りき。かれ御歌よみし給ふ。その御歌は

八雲たつ、いづも八重がき　つまごみに、八重がきつくる　その八重垣を。

（古事記）

このあとに續く文句がない。これが一種の㩼切式である。

天皇（應神天皇）此の獻れる大御酒に醉げて、御歌はしけらく、

須須許理が、釀みし御酒に、吾れ醉ひにけり、事和酒、咲酒に、吾れ醉ひにけり、

かくいひつゝ、歌はしつゝ、幸行る時に、御杖もちて、大坂の中なる大石を打ち給ひしかば、その石走り避りぬ。（古事記）

これが第二種の切受式である。

昔男ありけり、京におりわびて、東にいきけるに、伊勢尾張の間の海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

いとゞしく過ぎにし方の戀しきに

うらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。（伊勢物語）

これが第三種の一と受式一である。

女（桐壺更衣）もいといみじと見奉りて、

かぎりとて別るゝ道のかなしきに

いかまほしきは命なりけり。

いとかく思ひ給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞こえまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげに、たゆげなれば……（桐壺）

これが第四種の添詞式即ち不即不離式である。これは『源氏物語』の最初に現はれた歌で、光源氏の母更衣が帝に別かれを惜しんだ歌であるが、歌からすぐ詞につゞけて、「お別かれのつらさにつけても、生きたいのは命で御座ります＝ほんとに初めから、かうとわかッて居りましたら」と、息も絶え〴〵に……といふのであるが、その歌から地へ、知らぬ間に滑り込んで行く所が面白いのである。それが歌と離れて居るやうでもあるが、同時に即いて居るやうでもある。此の歌と詞とを一如に見て、同時に詞をば地の文とも見せる一種の幻術のやうな風致が、たまらなく面白いのである。嚴密にいへば、是れも一種の「と受式」で、唯だ受けられるものが歌だけではなく、「歌プラス詞」と複雜になッたといふだけであるが、とにかく此の詞が、短い中に無量の味を含蓄してゐて、しかも歌につゞいて調子よく馴染んで居るところが云ふに云はれぬのである。此の連接の味から見ても解るやうに、又歌と

詞とを一緒にして、それを一と一で受けてゐるところから見ても解るやうに、本來此の歌と詞とは引き續けて書かるべきものであつた。また事實明治以前の『源氏物語』は『明治になつても早く出た或るものは』寫本はもとより版本も、歌と添詞とを引きつゞけて、

かぎりとて別かるゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり』いといとかく思ひたまへましかば……

と書いたものであつたが、明治の中程から、校訂者、出版者の無理解から、歌と詞との此の親しい仲を引き裂いて、別行にしたのであつた。今後は宜しく連絡式に還原すべきであらう。此の歌の挿み方、言ひ換へれば歌と連續句との關係の發展を、歴史的にかいつまむと、奈良朝には、孤立式の中の舉切式及び切受式のみが行はれた。平安朝に入つて假名文學の起こると共に、一と受式一が行はれ始め、それが舉切式及び切受式と共に盛んに行はれて、こゝに孤立三式の全盛時代を現じた。『伊勢物語』は、それらが短く切られつゝ、無數に繰返された代表的のものである。その中に不即不離の添詞式が行はれ出して來た。その最初の試みが誰れによつてなされたかは明らかではないが、吾等は『土佐日記』に現はれた二つの例の中の初めなる、

海賊報いせむといふなる事を思ふ上に、海のまた恐ろしければ、頭も皆白けぬ　七十八

十は海にあるものなりけり。

わが髪の雪といそべの白浪といづれまされり沖つ島もり＝檝取いへ。

（正月二十一日）

が、最初の試みであつたかと思ふ。それから此の添詞式は、他の孤立三式と並びつゝ行はれて行く中に、『宇津保』『落窪』の興隆期を經て、遂に『源氏』の全盛時代を見ることとなつたが、その後次第に降り坂になつて來た。その間にあつても、『狹衣物語』『夜半の寢覺』『濱松中納言物語』『堤中納言物語』『とりかへばや物語』等は、數も少なく技巧も劣りながら、とにかく『源氏』の面影を傳へて來たが、『今昔物語』は王朝の中にあつて、已に全く「と受孤立式」一相の姿を見せた。更に鎌倉期に入つては、新時樣の『平家物語』はいふに及ばず、擬王朝式なる『住吉物語』『十六夜日記』などに於いてすら、全く不即不離式の片影をも見ることが出來なくなつた。

挿歌の不即不離式は、主として歌とそれにつゞく詞との關係に見られるものであるが、『源氏物語』には地から歌につゞく關係にもその味を利かせたのがある。例へば「夕顏」の巻の、源氏が夕顏と同車して某の院に行くところに、かうある。

簾をさへあげ給へれば、御袖も――

譯

いたう濡れにけり　源「まだかやうなる事を習はざりつるを、心づくしなる事にもありけるかな。

古もかくやは人のまどひけむわがまだ知らぬしのゝめの道、=ならひ給へりや」とのたまふ。　女恥ぢらひて、

山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影やたえなむ。=心ぼそく」とて、物恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住居の心ならひならむと、をかしうおぼす。

霧の深くおりて居るところへ、車の簾まであげて居られたので、御袖もしッとりと濡れてゐる—未明に女を連れ出だす、わたしはまだかういふ經驗をしたことはないが、とても心配なものでしたね。=

昔の人も戀ゆゑには、かうも迷つたものだらうか、わたしはまだ知らない、この曉の相合車の道行を=どうだ、お前はもう馴れてゐますか」と云はれた。　女は頬をあからめて、

あてもなく君に誘はれて行くわたしは、あの山の端の氣も知らずに行く月のやうなもの、月は今途中で雲に隱れましたが、わたしも中途で影が消え失せるかも知れませんよ。=心細くて堪りません」と云つて、いかにも恐ろしさうに、凄さうに思つて居るので、これは、今まで狭い處に數多の女と一緒にゐた、その心癖のためであらうと、面白く思はれた。

前半は一首も一の歌として、その前の句と後の句と、三段が渾然と一體を成して、源氏の詞に或

つて居り、前段なる心づくしなる事にもありけるかな」から歌への移りも、滑らかに續いて居るが、殊に歌の末から「ならひ給へりや」への移動振、「わたしはまだしらない、ほい／＼明けのかういふ道行＝お前は疾うに知つてますか」に至つては、そのつゞき、はずみの妙實に言語道斷と云はねばならぬ。後半夕顏の方は、歌から詞へのつゞきだけであるが、「途中でどうなるかも知れませんわ＝心細くツて！」も、前のには及ばずとも、ほゞ相似たる妙趣と許さるきものであらう。

もう一つ、『浮舟』の卷の末で、薫の大將が、浮舟の匂宮に許した事を知つて、詰問の手紙を送つた條に、かうある。

かしこには、御使の例よりしげきにつけても、物思ふことさま／＼なり　たゞかくぞのたまへる。

波こゆるころとも知らず末の松まつらむとのみ思ひけるかな　＝人に笑はせ給ふな」とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ

宇治では浮舟、薫の大將からの使がひまも無く往復するので、疵もつ足の、祕密を知られたのではないかと、おど／＼してゐる。手紙を開いて見ると、唯だ一首あるばかり。それは『古今集』の「君をおきてあだし心をわれ持たば、末の松山浪も越えなむ」を蹈まへたの

で、君にあだし心があつて、もう末の松山の松を波が越えてゐるとも知らず、わたしを待つてゐてくれるだらうとばかり思つてゐましたよ　＝どうか、わたしを世間の笑はれものにして下さるな―とあるのを見て、はて變だと思ふにつけ、もう知れたのかと、胸もふさがる思ひがした、といふのである。―わたしは最後唯一の松のつもりで、その松を待つ君とばかり思つてゐましたよ＝世間の笑はれものにしないで下さい―などは、實に絶妙のつゞけざまである。そも〳〵かういふ味は、とても歌だけが示し得るものではない、また孤立式の擧放式や―と受式―の現はし得る所でもない、歌にあらずして歌にも優る姿と味とを持ちつゝ、歌に伴ふに極めて相應はしい、かういふ姿の句の隨伴することによつてのみ、始めて實現し得るものであらう。

吾等は＝紫式部家集＝の歌に感服するものではないが、＝源氏物語＝の挿入歌に對しては、その七百九十四首が王朝の大歌人等の大歌集に對して、少しも遜色のなきものと思つてゐる　殊に王朝の歌人等が題詠を専らとして机上の空感を弄ぶ傾きがあつたのに對して、＝源氏＝の挿歌が、空想された作ではありながら、特殊の人物が、特殊の境遇に觸れた、特殊の感じを、藝術的に創造したところに、特殊の價値があると思つてゐる。　また殊にその優れた歌と前後の詞とを連接させた特殊の姿に空前絶後の美觀のあつたのを、やまと文の誇りと

も思つてゐる。好事らしく見える此の一章は、吾等が此の心の發露である。

一八

吾等は次ぎに『源氏物語』が持つ書かざる妙味について、一言したいと思ふ。『源氏』には朧ろな寫しざま、思ひ切つた省略、當體の影をも見せぬ無言沈默など、いろ〳〵の意味に於いて、表現したる美しさの外に表現せざる美しさがあり、それが時としては、表現したる美しさに優ることもあるやうに見える。そして此の點に於いてまた作者の伎倆は、本邦第一であつたやうにも見える。

但し『源氏』には、ぼかし、省き、だんまりの妙趣があると共に、委曲を悉くして物言ふ特殊の妙味もあつた。末松青萍は『源氏』の文章が蔓纏錯綜して讀者を昏迷させる事を惜しんで居るが、『源氏』の文章にはいかにもさういふ風の傾向もないではない。而して世間の『源氏』批難者の多くは、恐らく『源氏』の此のやゝこしさ、もどかしさに惱まされて、愛想をつかしたものであらう。けれども同一事に對しても見樣はさま〴〵で、本居宣長は『玉の小櫛』の中で、

さて又よろづよりもめでたき事は、まづ漢文（からぶみ）などは、世に優れたりといふも、世の人の事に觸れて思ふ心の有樣を書ける事は、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく淺きものなり。すべて人の心といふものは、漢文（からぶみ）に書けるごと、一方（ひとかた）につきぎるなる物にはあらず。深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだ〳〵しく、めゝしく亂れあひて定まり難く、さま〴〵の隈多かるものなるを、此の物語には、さるくだ〳〵しき隈々まで、殘る方なく、いとも委しく細かに書き表はしたること、曇りなき鏡にうつして向ひたらむが如くにて、大かた人の情（こゝろ）のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今、行くさきにも類ふべき書（ふみ）はあらじとぞ覺ゆる。

と云つてゐるが、此の標準で見直すと、世間の多數に批難されるところが、「源氏」に取つて却つて一種の長所ともなりはせぬかと思はれる。例へば、「帚木」の最後に、空蟬（うつせみ）が女房の局に隱れたと聞いて、源氏がそこまでも押して行かうか、止さうか、止さうか、行かうかと迷ふところを、かう書いてゐる。

例の人々いぎたなきに、一所（ひとところ）すゞろにすさまじく思しつゞけらるれど、「人に似ぬ心ざまの、

譯

お供の人々が前後も知らず寢て居る間に、源氏の君お一人は、變なことになつた、つまらないと、空蟬の事ばかりが

なほ消えず立ちのぼりけるもねたく、かゝるにつけてこそ心もとまれと、且つは思しながら、＝目ざましくつらければ、さばれとおぼせど、さもえ思しはつまじく、源「隠れたらむ所にだに、なほ率て行け」とのたまへど、小君「いとむつかしげにさし籠められて、人あまた侍るめれば、かしこげに」と聞こゆ。

氣にかゝるけれども、＝また空蟬のめッたにない見上げた心持が、堂々と氣高く見えるのも、我が心を刺激して、かう手折り難く見えるからこそ、心も引かれるのだ、一つ思ひ切つて行かうかと、一方では思召すが＝しかし恐ろしく強情だから、まあ許しておかうかと思召したけれども、＝またさうもあきらめ切れさうもなく、到頭

「やはり、その隠れて居るところへ連れて行け」

と云はれたが、子供は

「ひどくむさくろしい處に入りこんで居りまして、それに人も澤山居りますので、畏れ多う御座います。」

と申上げた。

不平を悈へつゝあきらめる、手ごたへがあるから、それで手折りたくもなるのだと思つて行かうとする、しかし強情だから許さうかとも思ふ、が、やはりさうも思ひ切りかねる。と、彼方に振れ、此方に搖れて、齒切れの惡いことおびたゞしく、從つて讀み進む勇氣を沮喪する氣味もあるが、また一方から見れば、人の心といふものは、かういふ場合には、かうもくだくだしく女々しく亂れあッて、定まり難いものなのであらう。作者はまた此の源氏の心に照應する

が如く、次ぎなる「空蟬」の卷に至つて、源氏に對する女の心を、かう書いて居る。

女もなみ〳〵ならず傍らいたしと思ふに、御消息もたえてなし。思し懲りにけると思ふにも、＝やがてつれなくて止み給ひなましかば憂からまし。＝強ひていとほしき御ふるまひの絶えざらむも、うたてあるべし。よき程にかくて閉ぢめてむと思ふものから、＝たゞならず眺めがちなり

譯

空蟬も深く笑止の至りと思つて居ると、その後源氏からの御便りがさッぱり無い。ではお懲りになつたと見える、まあよかッたとは思ふが、＝このまゝ手を引かれては物足らぬことであらう。＝さればとて執念深く、いとしい愛行爲のつゞくのも困つたもの、まあ〳〵好い加減に、此の邊で切り上げようか、＝と思ふくせに、やはり氣にかゝつて思ひに耽りがちであつた。

これも源氏に思ひ切られるのは安心だが、それも物足らず、つゞけられるのは嬉しいが、それは迷惑でもありといふ、くだ〳〵しく、女々しい心の亂れ合ひの描寫であるが、源氏と空蟬との心々を、かう對偶的に照應させて書いて居るところを見ると、これは作者が心あつて書いた、故意のくだ〳〵しさで、筆が到らぬ爲めにごた〳〵したのではあるまい。從つてかういふ事に關しては、本居流の觀察が作者の心理の實際を看破して居ると見る方が至當であ

らうと思はれる。

これは『源氏物語』に於ける委曲詳悉式なる筆致のほんの一例で、この特色は他のいろいろな方面にも見出だされるが、之れに對して更に著しい特色は、ぼかし、はぶき、おろぬき、だまる物言ひぶり、言ひ換へると、準無言式乃至無言式の表現振である。『源氏』に於ける此の特色の現はれは、諸方面に通じて擧げ切れぬ程に多い。それは『源氏物語』に取つて非常の重大事ともいふべき主人公源氏の薨去を、一語も記さず、剰へ、源氏本紀の最後なる「幻」の巻より八年の間を全く空虚にして、九年後の記事の冒頭に於ける「光隱れたまひにし後」の一句によつて暗示したるが如き、或は浮舟が宇治川入水の事を一句も示さずして、遥かに後の宇治の院に於ける發見によつて朧ろに顯はしたるが如き、更に甚だしきは『夢の浮橋』の最後を、薫の使が浮舟の隱家を訪うて空しく歸つたといふくだりで、半途に於ける一切放下の體で、此の長篇小説の大團圓としたるが如きを見ても、明らかに知られることであるが、その主として用ゐられたのは、愛慾に關する刺擊性の事の描寫であつた。これは戀愛道の教典視される『源氏物語』としては、極めて自然なる描寫法で、作家は恐らく之れによつて讀者に與へる刺擊を和らげ、作の品位を維持し、藝術品としての鑑賞を深く、高く、純ならしめようとしたのであらう。とにかく此の方面に於ける作者の心配りは尋常ではなか

つたらしく、その味な技巧には驚くべく微妙なものがある。例へば、懐姙の徴候を

心苦しき氣色ありて惱みけり

といふが如きは、さ迄でも無い事を、過ぎたる事のやうにも思はれるが、作者の敏感なる羞耻的遠慮はかやうな點にまで及んだのであつた。或は、源氏が養女の玉鬘に戀を感じたことを

床しげなき樣にはもてなし果てじと、大臣はおぼしけり。

と書いて居るが如き、意味はその美貌を見て居ては、うれしくもない父子の關係を、とても持續し切れまいと豫想されたといふのであるが、馴れぬ讀者には恐らく想像もつきかねることであらう　おもふに是れは、戀愛道に始終身を浸して居りながら、女は年頃になれば簾、几帳を隔てずには異性に逢はず、男もそれをうつくしく床しと心得てゐた當時の不思議な風俗が、姿を變へてかくも異樣に當時の文學に現はれたので、而して『源氏』の作者は此の時樣を體得し、人の及ばぬ磨きをかけて表現したのであらう

源氏の君四十歳の時に、兄帝朱雀院が第三皇女の謂はゆる女三宮を賜はつた、これが爲めに今迄の本室紫上との仲が水くさくなつた事は、已に前に述べたところである。その女三宮の降嫁について、朱雀院が側近の女房に相談されるところを、かう書いて居る。

女房「かの院こそ、なか〲猶ほいか——　譯

なるにつけても、人を床しく思したる心は、絶えず物せさせ給ふなれ。その中にもやむごとなき御願深くて、前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえ給ふなれ」と申す。朱雀院「いでその古りせぬあだけこそは、いと後めたけれ」とのたまはすれど、げに數多の中にかゝづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親ざまに定めたるにて、さもや讓りおき聞こえましなども思しめすべし。朱「まことに少しも世づきてあらせむと思はむ女子もたらば、同じくはかの人のあたりにこそは、ふればはせまほしけれ。幾ば

女房「それよりは、（女三ノ宮の聟がねとして、源氏の子の夕霧よりは）あの六條院樣（源氏）の方が、お年は召しても、やッぱり、どういふ相手でも、女を好もしく思召す御心が衰へずに、今も御盛んで入らッしやると申しますよ。女の中でも特に高貴の御方をお望みで、前の齋院樣（九年前に不成功とあきらめた槿宮）などをも、今以て忘れかねて入らッしやると申しますからね。」

と申上げた。院は

「サア、そのいつまでも衰へぬ仇氣が、どうも不安に思はれるんだよ。」

とは仰しやッたが、しかし御心の中では、源氏に嫁がすれば、愛人達の澤山居る間に立ち交はつて、面倒な思ひはするであらうが、やはり夫婦兼親子といふやうな格にして、女房どものいふ通り、三の宮の世話を源氏に託さうか、などとも思召すことであらう。

朱「いかさま、女の子を持つ親が、その女を立派に過ぐさせようと思はゞ、出來ることなら、あの源氏の左

くならぬ此の世の間は、さばかり心ゆく有樣にてこそ、過ぐさまほしけれ。　われ女ならば、同じ兄弟なりとも、必ず睦びよりなまし。　若かりし時など、さなむ覺えし。　まして女の欺かれむは、いと道理ぞや」とのたまふ。（若菜上）

右に添はさせたいと思ふだらうね。　また男としても、此のはかない世に、せめて生きて居る間だけでも源氏のやうに、自由な生活を存分にして、世を過ぐしたいものさ。　わたしが若し女ならば、たとひ兄弟の仲でも、源氏に言ひ寄つて、わりない仲にならう、とね。若い時分などには、さう思つたものだよ。　まして女が迷ふのは、何、當然の事さ。」

と仰しやッた。

朱雀院が御出家の前に、十四歲の幼皇女を源氏に嫁がせようと心配なされての御問答で隨分聞きにくい內容を滿載して居ることは、下の譯と對照しても明瞭であるが、それでゐて原文を讀めば、實に花やかで、朗らかで、何處に人前を憚るやうな祕事が含められてゐるのかと思はれるばかりである。　而してさう思はれる主要なる理由が、直接明確なる指示を避けて、朧ろに、薄く、圓く、遠く、そして美しい調子に寫した爲めであることは、人の頷くところであらう。

やがて源氏が此の事を紫の上にうち明けて、諒解を求めるところには、

女三の宮の御事を……事々しく——　　譯

人はいひなさむかし。今はさやうの事も初々しく、すさまじく思ひなりにたれば、人づてに氣色ばませ給ひしには、とかく遁れ聞こえしを、對面のついでに、心深きさまなる事どもを、のたまひつゞけしには、えすく〳〵しくもかへさひ申さでなむ。（若菜上）

今度女三の宮の降嫁をお受けした事については、事々しく噂する者もあるであらうが、わたしももう四十歳、色戀の筋も、すツかり初心になつて、一向、心すゝまないのであるから、先きに左中辨を介して、御內意を御漏らしの折には、然るべく言ひ遁れて御斷り申上げたが、拜謁の際に、深く御案じの事情を縷々と仰せられたのに對しては、御無愛想な御返事も申上げ兼ねて、つい御受け申したといふ次第だ

と書いてある。人の氣に障る刺激性の事柄を、此の物語が、いかに非直接に、非明確に、遠廻しに、何事を言ふのか解らぬかのやうに言ひ現はして居るか　かく言ひ現はす處に如何なる特別の美が成立つか。普通ならば醜穢として面を背けらるべき事が、かく言ひ現はされると、何故に氣に障らないのみならず、一種の美趣をすら感せしめられるやうになるか。吾等は此の簡短な例によつて、此の方面に於ける人情の機微を味はひ知ることが出來るやうに思ふ。

『源氏物語』が、刺激性の愛慾事相を、かやうにおぼろに、遠廻しに、抽象的に、暗示的に、或は無

藤原隆能筆　寄生木　（徳川美術館藏）

言的に言ひ現はして居る中、その傾向の最も著しくして、不可思議ともいふべき程度に面白いのは、異性情交の當の事象を空白にすることである。委しくいへば、事前事後の光景や心理の推移をば、委曲をつくして寫してゐるにかゝはらず、當の事實には一言半句も觸れずして、直ちに事後に飛び移つて居ることである。而してそれが時々偶々の事ではなくして、除外なしの恆例になつて居るところを見ると、『源氏』の作者には、之れに關して必ず一種の立派な主張があつたのであらう。『源氏』に於ける此の種の場面は、空蟬、藤壺、末摘花、紫の上、明石、女三宮、浮舟その他、可なりの數に上つて居るが、その悉くが申し合はせたかの如く、此の形式になつて居るのである。吾等は試みにその最初、最後及び最幼稚の三例を擧げて、源氏に於ける無言描寫の趣致を偲ぶことにする。

最初の場合は空蟬のそれであつた。源氏は女を我が室に伴つて、愛情を求めたが、女は身分の懸隔に思ひ惱んで應じなかつた、といふ事が先づあつて、次ぎに、かう書いてある。

まめだちて萬(よろづ)にのたまへど、いと類ひなき御有樣の、いよ／＼うち解け聞こえむこと侘しければ、すくよかに心づきなしとは

譯

源氏は實意を見せて、いろ／＼と言葉を盡くされるけれども、空蟬は類ひなき高貴の御姿を見るにつけ、ます／＼

見え奉るとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり人がらのたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。まことに心やましくて、強ちなる御心ばへを、言ふ方なしと思ひて泣く樣など、いと哀れなり。心苦しくはあれど、見ざらかしかば、口惜しからましとおぼす。□慰め難く憂しと思へれば、源「などかく疎ましきものにしも思すべき。覺えなき樣なるしもこそ、契りあ

御言葉に從ふことが勿體なくなつたので、たとひ無愛想な情知らずと見らるゝとも、取るに足らぬ野暮な女として通ほさうと考へて、冷淡にあしらひつゞけてゐた。この女の人柄が、本來なよ／＼と柔らかな處へ、強い決心に氣が張つて居るので、譬へばしなやかなる竹の如く、どうしても手折ることが出來ぬ。そしていかにも、氣持わるさうにして、強ひて迫る源氏の心を、ひどいと思つて泣く樣子など、實に哀れであつた。之れを見ると實に氣の毒ではあるが、このまゝで別かれては、口惜しいことであらうと思はれる。(で、かき口説いて遂に契を結ばればが、女に取つて後の心地が、とてもわるい。)

いくら慰めても、慰め得ぬばかりに、女がつらく思つて居るので、源氏が

「かういふ仲になつた以上、わたしを、さう疎遠な者と思はれるわけがないではありませんか。かういふ思ひ設けぬめぐり合はせをこそ、神樣のお引合せ、

りとは思ひ給はめ。むげに世を思ひ知らぬやうに、おほほれ給ふなむいとつらき」と怨みられて、空蟬「いとかくうき身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かゝる御心ばへを見ましかば、あるまじき我れだのみにて、見直し給ふ後瀬もやと、思ひ給へ慰めましを、いとかう假りなる浮寢の程を思ひ侍るに、類ひなく思ひ給へ惑はるゝなり。よし今は見きとなかけそ」とて、思へるさま、げにいと道理なり。（帚木）

深き約束事とは思はるべきですよ。それに異性の親しみといふものを、全く知らぬかのやうに、ぼんやりとして居られるのが、聞こえませんね。」

と云つて怨まれると、

空蟬「それはもう、身分の定まらぬ、親がかりの娘の身で、此の通りの御愛情を御受けするのでしたならば、出過ぎた自分免許ながら、今はともあれ、いつかは御優待の日もあらうと、豫想しても慰めませうが、これが定まつた賤しい身に起こつた、ほんの淺はかな假りの契りかと思ふと、何とも思案に餘るので御座います。しかしもう仕方がありません。せめてわたくしに逢つたといふ事をば、ちよッとも御他言下さいますな。」

と云つて、物思に沈んで居る樣子、實に尤もの次第である。

「見ざらましかば口惜しからましと思す」（このまゝ手を引くのは殘念だと思はれた）の次

ぎに無言の大省略があつて、そこで二人の情交が成立つのである　而して其の事があつて後、女がいくら慰めても、ふさぎ込んで居るので、源氏が持てあまして、かう云つた、といふのである。而して其の事をば此の通り一言半句も書き現はしてゐないところから、歴々の註釋家の間に「實事ありしなり」「無かりしなり」などいふ異論が起こつたのであるが、作者が明らかに有つた事として寫して居ることは、やがて女に、「よし今は見きとなかけそ」(かうなつては仕方がありません、せめて私に逢つたといふ事を、口の端にかけても下さるな)と云はせて居るのでも明らかである。とにかく事前と事後の情交並びに心理の經過を、この通り精しく書いて居りながら、當の事象を全くの空白にするとは、恐らく『古事記』以來の珍事であらう。

愛の極致に關する『源氏』の作者の描寫の手法は、悉くかうであつた。紫の上との新枕は源氏二十二歳紫上十四歳の事とされてゐるが、十歳の時に養ひ取つて以來、親として、師として、かしづき親しんでゐた此の少女との珍しい新生活入りを、作者はかう書いて居る。

らう／＼しく愛敬づき、はかなき戯れ事の中にも、美しき筋をし出で給へば、思し放ちたる年月こそ、

譯

紫の上が段々にませて來て愛嬌が加はり、無邪氣な遊

たゞさる方のらうたさのみはありつれ、忍びがたくなりて、心苦しけれど、□いかゞありけむ、人の差別見奉り分くべき御中にもあらぬに、男君は疾く起き給ひて、女君は更に起き給はぬ朝あり。人々、いかなればかくおはしますらむ、御心地の例ならず思さるゝにやと、見奉り歎く。（葵）

び戯れをする中にも、水際立つた、うまい手筋を見せ見せされるので、まだ駄目だと断念してゐた是れまでの數年間こそ、唯だ子供としての可愛ゆさに、滿足して居られたが、かうなつては、とても我慢が出來なくて、まだ十三四の子供に氣の毒とは思はれたが、ご（遂結契）させていよ／＼新枕をかはされたか、どうか、前から親しい御仲なので、傍から有無の差別をつけかねてゐると、或朝のこと、男君が早く起きられて、女君のいつまでも起きられぬことがあつた

かういふ事が、かうも美しく、かうもおぼろに書けるものか、また言はずして言つた以上の味を見させられるものかと疑はれるばかりで、とにかく稀代の妙筆致である。而して此の文章に對しては、恐らく何人も肉穢を解脱して、超越世界に遊ぶ心地がするであらう。

最後の例は浮舟が匂宮に逢ふそれである。浮舟は八宮の第三女で、薫大將が、亡くなつた愛人大君に髣髴して居るところから、特に目をかけて、宇治川端の新室に住ませておいた女である。その噂を耳にして、例の好き心から、親しい家來に案内させ、夜道を急いで密かにこ

こに來られたのが匂宮であつた。宮は暗がりを利用し、聲を薫に似せて、女房の右近に手引きさせつゝ、浮舟の室に近づかれた。浮舟は薫と信じて深夜の思ひかけぬ來訪を悦んだが、覺めて後に人違ひと知り、しかもそれが自分を薫にすゝめた大恩の姉、中の君の夫、曾てその御殿で危ふく魔手にかゝらうとした匂宮であると知つて愕然とした。そこをかう書いてある。

右近「例の御座にこそ」などいへど、物ものたまはず。御衾まゐりて、寢つる人々起こして、少し退きて皆寢ぬ。御供の人など、例のこゝには知らぬ習ひにて、「哀れなる夜のおはしましざまかな。かゝる御有樣を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、右近「あなかま給へ、夜聲はさゝめくしもぞ

譯

右近は「いつもの御室に入らしては……」など云ふが、默つて何も仰しやらない。そこで寢衣を差上げて、女君の側近くやすんでゐた女達を起こして引き下つて皆寢てしまつた。宮のお供の人々の應對などは、こちらではしない例であつたので、薫の大將のと違ふことなどには、氣のつきやうもなく、賢ぶッて通がる女などは、「夜ふけての御訪問なんて、しみじみするわね。お姫樣には、そこの味がお解りにならぬと見えるよ。」など云つたが、右近が

かしましき」などいひつゝ寢ぬ。□女君はあらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、……初めよりあらぬ人と知りたらば、いさゝか言ふ甲斐もあるべきを、夢の心地するに、やう／＼其の折のつらかりしことゝ年頃思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよ／＼恥かしく、かの上の思さむことなど思ふに、又猛きことなければ、限りなく泣く

「叱ッ！　靜かになさいよ。夜ふけてのひそ／＼聲は、耳障りですからね。」

など云ひ／＼してゐる中に、皆寢てしまつた。（この間に契かあるこ）

女君は別人であつたと氣がつくと、えらい事になつたとあさましく思はれたが。……初めから他人と知つたならば、かう轉甲斐なくはなかつたらうに、過ぎては、もう仕樣がない、まるで夢のやうな心地がして居る中に、男君が段段…いつか逢つた折には、なぜつらかつた？……あれから何年忘れる間もなく思つて居るぞよ」などと云はれるので、さてはあの匂宮樣かと知つたのである。さうと知れば更に恥かしく、宮の北の方（浮舟の姉、中の君）の御心中などを思ふと、何一つ此方に顏の立つ事がないので、唯だ限りなく泣いてゐる

例の如く豫備の工作と事後の推移の描寫とは委曲を極めて居るが、事の極致をば全くの空白にすかしてある。そも／＼『源氏物語』の肝心は戀愛である　その戀愛の描寫を生命とも第一義ともしてゐる作者が、何故に戀愛成就の楔子ともいふべき一事を、禁忌のやう

に避けて、その方面に特技を振つた西鶴、春水等に似たる詳叙をなさぬばかりでなく、せめて前朝の『古事記』に見たる「御婚ひましぬ」や、同じ王朝の『伊勢物語』に見たる「契りけり」程度の簡單なる撮記すらもしなかつたのであらうか。是れは恐らく『源氏』の作者に取つて胸中の一大祕事であつたであらうが、思ふに彼女は此の事象に最大の興味を持ちつゝ、うッかり觸るべからざる重大事と思つたのであらう。顯はさずに床しめば、微妙とも、神聖とも、雲煙縹渺とも、まことに言語道斷の風趣を帶びた物であるが、その實體を一たび顯はせば、顯はすと同時に、美しき幻影は忽ち破れて、神聖は俗惡となり、微妙は醜穢となり、遙かに望んで飽かぬものが、近づけば面を背くべきものとなり、剩へ親しき者と居並びて讀み得ざらしめ、沒分曉の吏僚に藝術干渉の口實を與へるものが、これである。これは周圍に忌垣玉垣を結ひめぐらし、梅櫻桃李を繚亂と咲き匂はせて、その裡に齋くべき人生の祕密である。と、かう考へて、さてこそ當體には一語も觸れず、周邊の叙述を飽くまで詳密にし、華麗典雅にして、已に熊澤蕃山等も云つた通り、之れによつて先代の禮樂を知り、閨中の嗜みを悟らしめようとしたのであらう。人皆の除外なく好む所に緣つて、物の哀れの眞髓を教へ、その人倫觀を高雅ならしめようとしたのであらう。永平の道元禪師はその典座訓に於いて、臺所を賄ふ者は、菜ッ葉、大根、鹽、胡椒の一莖草、一微塵を取扱ふ間に於いても、常に大法輪を轉ず

るの覺悟が無ければならぬと言つた。『源氏物語』の作者の志も、恐らく世の男女が天地の大法に引きまはされて、はかなく狂ひ戯るゝ逢ふさ離るさに、特別の取扱を加へることによつて、立派な藝術を創造し、兼ねて人生を知り、樂しみ、明らめ、悟らしむるよすがとするにあつたのであらう。

紫式部の斷片の消息に關する興味は、意外に深きものであつたやうに見える。彼女は作中の人物に假託しては、しばしばその片影を覗かせた。けれども彼女はさういふ描寫にも、必ず一種の美しさと、眞面目さと、深さとを伴はせた。彼女は之れによつて一度も人を玩具にし、情を弄んだことがない。例へば「横笛」の巻に二歳の薫が朱雀院から贈られた筍をねぶる事が書いてある。

御齒の生ひ出づるに食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよゝと食ひぬらし給へば、「いとねぢけたる色好みかな」とて、

うきふしも忘れずながら

譯

薫は丁度齒の生えかゝつて居る時とて、物に食ひ當てようの衝動から、その筍を無造作に握つて、涎を流しゝゝ食ひしやぶつて居る。源氏は之れを見て、

「こいつは餘ッぽど變はつた色好みだな。」

と云はれ、

「柏木がひどい事をしてくれた其の結果の子だと思

ら呉竹のこはすでかたきものにぞありける。と、率て放ちて、のたまひかくれど、うち笑ひて、何とも思ひたらず、いとそゝかしう這ひおり騒ぎ給ふ。

ふと、あのつらい事は忘れやうもなく思ひ出すが、無心に竹の子をしやぶッてゐる子供を見ると、可愛ゆくッて、どうも捨てられないわ。」
と云つて、筍から引き離して、大人に物いふやうに話しかけられたが、薫はたゞにこ／＼と笑ふばかりで、何もわからず、唯だそゝくさと源氏の膝から這ひおりて行つて、騒いで居られた。

吾等はこれを以て、『源氏物語』全篇の中、最も卑猥なるところだと思つてゐる　筍を握り持つて涎を流しつゝねぶり濡らす。二歳の子供の仕草ではあるが、心理の根據はフロイドを待たずして明らかである。恐らく彼女は未亡の婦人の、一つは心やりに、かういふ筆の遊びを試みたのであらう。けれども斯ういふ場合に於いても、彼女の藝術的態度には眞面目さと、美しさと、深さと、穩かさとがあつた。事はあるべき人の、あるべき事情の間に置かれ語句の表現はあくまでも優麗典雅であつた。『源氏』の作者には醜をも美化する力があつた。而して彼女は此の力により、見飽かず味はひ飽かぬ人生の至境を藝術的に表現して、之れを世間教化の一具とも爲さうと考へた。吾等は彼女が戀愛の取扱振には、最高義に於ける善意の用心深さがあつたと思ふのである。

一九

『源氏物語』の興味の中心は戀愛の描寫にある。然らば『源氏』の作者は、如何なる種類の戀愛を描いたか。

吾等は戀愛に、大體から見て、五種の型があると思ふ。それは球竿型、松葉型、菊の花型、矢車型及び三角型の五つである。

第一の球竿型は一人の男と一人の女とが純なる愛の一線に繋がるもので、その關係が球竿體操に用ゐる一本の竿が兩端の球を繋いで居るのに似て居るからいふのである。此の種の戀愛は世界に無數である。戀の歌といふものの大多數は、此の種の戀を歌つたものであらう。けれども女は男に欺かれんが爲めに生れたものと信じた平安朝の物語には、此の種の戀愛を寫したのが殆んど無かつた。唯だ一つの除外例は恐らく『落窪物語』に於ける主人公藤原忠頼と落窪の君との仲であらう。戀愛の種々相を具備した『源氏物語』にも一男一女の相愛を善しとする口吻が、處々に見えてゐるにもかゝはらず、此の形式の戀を特に寫

したのは、一つも無い。

第二の松葉型は一人の男が二人の女に通ふので、但し女と女との間に、關係が全く無いか、或は有つても稀薄なのをいふのである。一人の女が二人の男を迎へるのも同樣である。これはその關係が松葉の先が二本に分かれて居るのに似てゐるところから名づけたものであるが、生田川や櫻子、桂子等の傳說を外にして、王朝時代の實際には極めて少なかつたであらう。物語や日記にも、暫らくの間の二人同時愛は、『伊勢』『大和』から『宇津保』『落窪』『源氏』にかけて無數にあるが、生涯に通じ、或は長期に亙つての一男二女、或は二男一女といふ關係は先づ皆無と云つてよい。一時だけについていへば、源氏對六條御息所及び夕顏、源典侍對源氏及び頭中將、夕霧對雲井雁及び落葉宮等は、皆そのいづれかで、またそれ〴〵に面白く描かれて居る。

第三の菊の花型は一人の男が多數の女に愛の手を伸べるのである。その關係が、菊花が眞中の蕚から多くの花瓣を四方に派生するのに似て居るところから名づけたので、また遠心型と

云つてもよい。此の型の戀愛が、始めて物語に現はれたのは、『伊勢』の業平對多くの女性達の關係であるが、その最も花やかで、變化があり、筋立及び性格の上に合理的の根據があつて、空前絶後の妙を極めたのは、『源氏物語』の光源氏對女君達の關係である。

第四の矢車型は、多くの男が一人の女に愛を求めるのである。これはその關係が、矢車の矢が轂を指して集まるのに似て居るから名づけたので、また求心型と云つてもよい。此の型の戀愛の最も早く物語に現はれたのは、『竹取』のかぐや姫に對する戀爭ひであつた。これに次いで數と變化とを加へたのは、『宇津保物語』の貴宮を對象として數多の男性の挑み寄る情景の描寫であつたが、彼等の後を承けて、その上に出で、同時に其の裏を掻いて、破天荒なる趣向描寫の妙を見せたのは、『源氏物語』の玉鬘を中心とした妻爭ひの物語であつた。而してこれは吾等が已に前章に於いて委しく述べたところである。

最後の三角型は世に謂ふ三角關係で、男女の三人がまんじ巴と纏れ合つて相爭ふものである。それには男二人女一人の場合もあらう、また男一人女二人の場合もあるであらうが、とにかく三人相互の間に緊張した交渉のあることを要とする。一人が二人に對して離れ

〳〵の交渉を有するだけでは、前の謂はゆる松葉型であつて、三角型ではない　また同性の二人の間に交渉があつても、その關係が薄弱では、まだ三角型とは呼ばれぬ。それは例へば源氏對六條御息所及び夕顏の關係のやうなもので、源氏と六條御息所との間、及び源氏と夕顏との間のそれ〳〵には、いかに猛烈なる愛慾の縺れがあつても、女と女との間に、唯だ一方が嫉妬の餘り怨靈となつて何も知らぬ女に祟るといふだけでは、三角型とは云はれぬので

ある。頭中將對北の方及び夕顏の關係なども同樣で、北の方が人を介して他の女に壓迫を加へたといふだけでは、三角型とは云はれないであらう　吾等はこの種の戀愛を川骨型と呼んで居る。同性の二人の間の關係が弛緩して緊張しないのを川骨に於ける三角形の一邊のたるんだのに見立てたのである。

三角型に於いても、もう一つ除外せらるべきものは、競爭者の間に於ける甚だしき片劣りである。三角型に於ける同性者は對等乃至對等に近き勢力者でなければならぬ。競爭はしながらも、その勢力に格段の差別があつて、一方が他の鼻息を窺ひ、落ちこぼれを拾ふに滿足するやうでは、本格的の三角型とは云はれぬ。かやうな片劣りは、一方は附上り、他は諦めるといふだけで、文學的の興味となるべき何等の波瀾をも悲劇をも起こさないからである。

またもう一つ言ひ添へたいのは、平安朝には、事實に於いても、物語に於いても、純粹の三角關係といふものが殆んど有り得なかつたことである。平安朝はあの通り愛慾本位の時代であつた。『源氏物語』の中に「保たるゝ女」と云ふ言葉があるのでも知らるゝ如く、女は男の所有物と視られた時代であつた。『源氏』の作者は「夕霧」の巻で、源氏の子の夕霧をして、その妻雲井雁の嫉妬を和める爲めに、かう云はせて居る。「然るべき身分の男が一人の妻を大事に守つて、鷹の雄鳥が雌の前に出たやうに、びく〳〵してゐるのは、世の物笑ひの種であらう。またさういふ男の意久地なしに守られるのは、女に取つて、餘り面目でもありますまいよ。愛さるゝ女性の數多ある中に、此の人だけはさすがにといふ特別の優待を受けてこそ、世間の思はくも申分なく、又女自身も氣が張つて、生き甲斐のある生活が出來るといふものではありませんか。」――

さるかたくなしき者に守られ給ふは、御爲めにも猛からずや。數多が中に、なほ際まさり、異なる差別見えたるこそ、よその覺えも心にくゝわが心地も猶ほ古りがたく、をかしき事も、哀れなる筋も絶えざらめ。(夕霧)

と云はせて居るが、かういふのが、事實王朝に於ける男性の理想であり、また概しては女性の理想でもあつた。從つて當時の貴族の戀愛には、實際として、紛れなき一人愛といふものが

無く、また男性一人に女性二人といふ意味での二人愛といふものも先づ無かつたであらう。要するに當時の戀愛は、大體一夫多妻式であつたので、吾等は、假りに相愛中の著しいものに就いて、三人を並び立たせるのであるが、さて斯く三人を並び立たせた上で、忘れてならぬ肝要事は、本格の三角型は、三人相互の間に猛烈なる相愛もしくは相妬の關係の存在するを要するといふことである。圖解すれば左の通りで、假りに男二人が一人の女を爭ふとすると、(一)第一の男が女を深く愛すると同時に、女も亦その男を深く愛せねばならぬ、(二)第二の男が深く女を愛すると同時に、女も亦第二の男を深く愛せねばならぬ、而して(三)第一の男と第二の男とは相互に強く相爭はねばならぬ、といふのであるが、此の標準によつて古來の戀愛文學を檢べると、宇治十帖の薫大將、匂宮及び浮舟の對立ほど、此の三角型の理想に叶つたものが無いやうに思はれる。啻に三角型の形式が理想的に整つて居るのみならず、その戀愛描寫の自然で、巧妙で、深刻なる點に於いて、之れに優るものが無いやうに思はれる。また五種の戀愛にはそれぞれ特殊の味はひがあり、球竿式、松葉式、遠心式、求心式、いづれをいづれとも言ひ難き特殊の趣致があつて、その勝劣は要するに描寫の巧拙と命を吹

き込む創作力の强弱とに歸するのであるが、しかしながら概していふと、球竿型、松葉型は單純に過ぎて、愛情活躍の曲折を盡くし得ざる嫌ひがあり、菊の花型、矢車型は複雜に過ぎて注意を分散し興味を稀薄にする傾きがある。その間に在つて、單純複雜の中庸を得、愛情の曲折を悉くしつゝ、微妙深刻なる耽味を贏ち得べきものは三角型であらう　もし然りとすれば、三角型は戀愛諸相中の興味無上とも稱すべきものであるが、吾等は此の點から見て、薫、匂宮對浮舟の戀愛をば、『源氏物語』に於ける戀愛描寫中の最美最高なるものと思惟し、從つて古今の國文學に於ける戀愛描寫中の最美最高なるものと信ずるのである。不完全な、稀薄な三角戀愛は古今の文學に無數であつた。しかしながら完全な高義の三角戀愛は甚だ稀れで、『源氏』以前には皆無であつた。此の類ひ稀なる三角戀愛をあの長篇物語の最後に描き、男女三人に申分なき身分と境遇とを與へ、名々の言行を名々の個性から自然に流れ出でしめ、緊張した競爭嫉妬の且つ進み且つ迫つた結果として、悲しき運命の切羽を寫し、兼ねて前卷に於けるあらゆる戀愛の總締としたるが如き趣のある所を見ると、作者の之れに對する、必ず特別甚深の心入があつたのであらう

前にも言ひ及んだ通り、此の三人の戀愛關係は純粹の三角型と云ひ得べきものではない　薫は浮舟を得る前に、已に今上の二の宮の降嫁を仰いでゐた。匂宮に至つては、夕霧左大臣

の六の君を正室とした上に、宇治の八宮の中君を迎へられたが、その他にも數へきれぬ對手があつた。けれども浮舟を得た後、殊に競爭意識が萠して後の二人の心の全部は、浮舟に占領されてゐたので、此の點から見て彼等の關係は、その精神に於いて、理想的の三角型と云つてもよいであらう。

浮舟を登場させるまでの作者の藝術的關心の緻密さに關しては一切省略することにして、扨生れながら世を厭ふ心があり、名利に淡く、婦女子に見かへらなかつた薫は、宇治の大君を見て始めて戀を感じた。そしてその戀が成らぬ中に大君が病死して後、大君に酷似したる故を以て、その異母妹の浮舟を愛することとなつた。彼れは浮舟を宇治に住ませて都から遠い山路を通つた。彼れの宇治通ひは、心ならずも時々途絶えした。その隙に乘じて浮舟の愛の半ばを占め得たのが匂宮であつた。薫は王朝のハムレットである。彼れは常に消極的態度を取つて、事々に遲疑し逡巡した、而しその結果は到頭、以前に戀の手引の奉仕までした匂宮に裏を搔かれて、その愛を奪はるゝこととはなつたのである。匂宮は王朝のドン・ファンである。彼れは善からぬ意味の極端な直情徑行で、觸るゝ所春を生じ、その勇敢なる好色行爲は常に父帝、母后の、舅左大臣の、北の方の、周圍の女房等の惱みの種であつたが、薫が或女を宇治に住ませて居ることを聞くと、卽夜に馬を驅り、五里の山河を强行して、卽夜に

その女の心を奪つた。女は浮舟であつた。それからの彼女は罪に怯えつゝ、迭に薫及び匂宮の二人を迎へては、いづれをも熱愛し、いづれをも却けかねて居る中に、二人の競爭が日を追うて激化した。而して、最後に宮と薫との兩方から、別々に都に迎へらるゝといふ、無慘な定めの日が近づくに及んで、遂に宇治の激流に身を投げた。

吾等は、左に此の哀れなる三人の性格から迸り出づる、切なる心の現はれともいふべき數節を拾ふであらう。最初は匂宮が始めて浮舟に逢はれた翌くる朝、お供の者どもが御歸りを促した折の宮の御心である。

出で給はむ心地もなく、飽かず哀れなるに、又おはしまさむことも難ければ、京には求め騷がるとも、今日ばかりはかくてあらむ。何事も生ける限りのためにこそあれ、たゞ今出でおはしまさむは、まことに死ぬべく思さる。

譯

宮は女に別かれて出かける氣分にもなられず、いくら愛しても愛し足らぬ人に、又逢ひに來ることも出來さうもないので、たとひ京都で大騷ぎしてさがされようとも、ままよ今日だけは此のまゝ泊らう。電光朝露の人生だ。何事も生きてゐる中に樂まなくッちや！と、此のやるせない折に出かけることをば、ほんとに死んでしまふやうに思はれた。

筆に愛が籠つて居るのであらう。此の際に於ける匂宮の切なる心は、この高貴の遊人を眞情の權化たらしめたかのやうに見える

浮舟は心の中で宮と薫とを比較した。そして噂の立つた場合を想像して、薫の、母の、匂宮の夫人なる我が姉、中の君の心を忖度した。

女いとさまよう心にくき人を見習ひたるに、時の間も見ざらむに、死ぬべしと思しこがるゝ人を、心深しとは、かゝるをいふにやあらむと、思ひ知らるゝにも、怪しかりける身かな、誰れも物の聞こえあらば、いかに思さむと、まづかの上の御心を思ひ出で聞こゆ。（浮舟）

譯

女は今まで、（烈しい氣違ひじみた事などを云はぬ）穩かな奧床しい薫を見馴れて來たところへ、新しい匂宮が、一寸の間も逢はずに居たら死ぬるだらうなどと云つて、白熱的に思ひ惱まれるのを見て、愛情が深いとは、かういふ人をいふのか知らんと、始めてしみ〲と解つて來たやうな心地がするについて、ハテ自分ながら不思議な運命の身ではある。もし此の事が噂に立つたら、誰れも〱どんな心持がされるであらう、と思ふにつけて、先づ第一に宮の夫人、わが姉上中の君の事が思ひ出された。（浮舟）

女はまた薫の大將を、目の前の宮に比べて、かうも考へた。

女はまた大將殿を、いと清げに、またかゝる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ、清らなることは、こよなくおはしけりと見る。

譯

――女はこれまで薫の大將をば、實にきれいで、世の中にまたとかういふ人があるものかと思つて見てゐたが、こぼれるやうな愛嬌や、御立派さの申分なき點では、やッぱり此の宮の方が上で入らッしやると思つて見てゐる。

二人の愛人の比較も自然で面白いが、二人の善い點ばかりを思ひ出して比較するのが、殊に面白い。

宮は都に歸つて引籠つて居られると、そこへ薫の大將が見舞はれた　宮は胸さわぎしつつ、「此の男、聖者ぶつて居りながら、女を匿ふとは呆れ果てた山伏心である。あんな氣の毒な人を、淋しい處に放つて置いて、長い月日を待ちわびさせるとは怪しからん」など考へられたが、大將が親切に見舞を述べて歸られると、

恥かしげなる人なりかし。我が有樣をいかに思ひくらべけむなど、さまぐ゛なる事につけつゝも、たゞこの人を、時の間忘れず思し出づ、

「薫はやはり立派な人物だ。浮舟が、あの男に自分を比較して、どう思つたであらうなどと、事々につけて、一寸の間も忘れずに浮舟を思ひ出された」いかにも品のよい、强烈な、そして

自然な嫉妬である。

やがて女が薫を迎へる日が來た。彼女の心には二人の愛人の面影が交錯して、亂麻のやうである

烏帽子直衣の姿、いとあらまほしく淸げにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意異なり。女いかで見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく恐ろしきに、強ちなりし人の御有樣、うち思ひ出でらるゝに、また此の人に見え奉らむを、思ひやるなむいみじう心憂き。「我れは年頃見る人をも、皆思ひ變はりぬべき心地なむする」とのたまひしを、げに其の後御心地苦しとて、いづくにも〳〵、例の御有樣ならで、御修法など騷ぐなるを聞

譯

薫の大將は、烏帽子直衣を申分なく裝はれて、女の室に入られたが、その態度は實に立派で、隙間のない嗜みぶりであつた。女は氣が咎めて、どうして御目にかゝれようかと、空おそろしく恥かしく思ふ。と同時に、強要された人の容子が、ふと聯想されるので、他し男に許しながら、又この人に見えるのかと思ふと、それは想像するのもつらいことであつた。

宮は「お前に逢つてから、今まで馴染を重ねた女達をも、悉く別な心で見るやうになつたよ」と仰しやつたが、その後ずッと御不例で、どこの女君をも御訪ねなさらず、周圍では御惱御平癒の御祈りなどで騷いでゐると聞くところへ、又わたしが大將にお逢ひ

くに、又いかに聞きて思さむと思ふも、いと苦し。 この人はたゞいとけはひ異に心深く、なまめかしき樣して、久しかりつる程の怠りなどのたまふも、言多からず、戀し悲しとおり立たねど、常に逢ひ見ぬ戀の苦しさを、さまよき程にうちのたまへる、いみじく言ふには優りて、いと哀れと人の思ひぬべき樣を、しめ給へる人がらなり。 艶なる方はさるものにて、人の行末長く賴みぬべき心ばへなど、こよなく優り給へり。 思はずなる樣の心ばへなど、漏り聞かせたらむ時、なのめならずいみじくこそあんべけれ。 怪しう現心もなく思し

したとお聞きになッたら、どんな御心地であらうと、實に心苦しく思はれる。 ところへ、大將がまた大將で、御容子も他の人とはすッかり違つて御立派に、御心持が重々しく、それに愛嬌のあるお容子で、久しい無沙汰の詫びなどを仰しやるにも、詞數が少なく、戀しいの、悲しいのと、心安立ての愛想をお並べにはならないが、始終逢はれぬ不如意の戀の切なさを、氣障なところが少しもなく、穩かに仰しやる、それが巧言令色の口數には遙かに優つて、ほんとにうれしい、有難いと、女としては思はずに居られない御人柄を、生れながらちやんと具備して入らッしやる。 そしておきれいな方は云ふに及ばず、女として長い將來をあてにされる賴もしい御心持などは、此の上もなく(右宮に比べて遙かに) 優つて居られる。 そのお方が意外の褄がさねをした私の心境などを、人の噂にちら〳〵と聞かれた場合に、まあどんな御心地がされるであらう。 と思ふと、あの狂氣じみて、煩しく思ひ

いらるゝ人を、哀れと思ふも、それは——
いとあるまじく輕きことぞかし、この
人に憂しと思はれて、忘れ給ひなむ
心細さは、いと深うしみぬべければ、
思ひ亂れたる氣色を、月頃にこよな
う物の心知り、ねびまさりにけり……——

込んで下さるお方(匂宮)を、嬉しいと思ふのは、あるま
じき輕卒な事ではないか。あの人(薫の大將)に愛想
をつかされて、忘れられる心細さは、ほんとに魂の底
に沁みるであらう。と、思ひ亂れてゐる女の容子を
見て、大將は、これは暫らく逢はぬ中に、すッかり人情
を理解して、見ちがへるほど大人らしくなッたらし
いと思はれた。

女の心の中に於ける二人の愛人の比較は、恐ろしく複雜になつて來た。彼れもよく、是れもよく、前後、本末、順逆の違ひはあるが、各〻に對する既成の義理と人情とが、善良な纖弱い女の心を搦んで、どうにも動きがつかなくならしめたのである。此のやさしい、うぶな女が、運命の惡戲により、兩手に花を持たせられて、とやかくと迷ふ、その亂れあうて定まり難き心理の隈々を、實に痛ましく、しかしながら自然に表現しつゝ、兼ねて二人の愛人の性格心境をも併せ寫した一筆三叙の簡潔なる妙筆致は、三歎に値するものである。

　その中に今度は匂宮からの消息があつた。女がそれを見て煩悶して居るところへ、折重ねて薫の大將からの手紙が來る。

筆に任せて書き亂り給へるしも——

譯

見どころあり、をかしげなり。 殊にいと重くなどはあらぬ若き心地に、いとかゝるを思ひも勝りぬべけれど、初めより契り給ひしさまも、さすがに彼れは猶ほいと物深う、人がらのめでたきなども、世の中を知りにし始めなればにや。かゝる憂き事聞きつけて、思ひ疎み給ひなむ世には、いかでかあらむ。 いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそは、もて煩はれめ。 かく心いられし給ふへ、はたいとあだなる御心の御本性とのみ聞きしかば、かゝる程こそあらめ、またかうながらも、京

匂宮が筆に任せて書き散らされた、それがまた一種の味があつて、面白さうである。 別に重々しいところもない若い女の心には、やはりかういふ情熱的な、詞の多い方に、より多く心を惹かれるであらうが、しかし長い親しみの薫の容子も聯想されて、宮もよいが、しかしながら大将は、やはりお考へ深く、人物が立派で入らッしやるなどと思つたのも、薫によつて始めて世の中を知つた爲めであらう、

彼女は考へた、大将がもし此のいやな噂を聞きつけられて、捨てられるといふ事が、若しあらば、どうして生きて居られよう。 そんな事があれば、わたしの都に迎へられる日を、いつか／＼と待ちこがれてゐる母親にも、怪しからぬ意外の子よと云つて、持て餘されるであらう。 それでも宮に添ひ遂げられるなら、まだしもだがあの性急に迫つて來られる人とて、誰れの口からも、ひどく浮氣な御本性の人とばかり聞いて居るのだから

に隱しすゑ給ひ、永らへても思し數まへむにつけては、かの上の思さむこと。よろづ隱れなき世なりければ、……聞き給はぬやうはありなむやと思ひたどるに、我が心にも、疵ありて、かの人に疎まれ奉らむ、なほいみじかるべしと思ひ亂るゝ折しも、かの殿より御使あり。これ彼れと見るもうたてあれば、猶ほ言多かりつるを見つつ伏し給ふ。

この通りちやほやされる當分こそよからうが、やがては……。また此のまゝの關係で、京に迎へられ圍はれその關係が永く續いて、愛人の中に數へられるやうになるにしても、今度はあの宮の北の方、大恩の姉上のお耳に入るといふことがある、その人の思はく！　又いかなる祕密も漏るゝ習ひ、薫の大將とて、その中に聞きつけられぬといふ事があるものかと、思ひ亂れて居る折も折、その大將殿から、御文の使が見えたのであつた。兩方取りまぜて一しよに見るのも、いやな氣がするので、やはり詞の多い、長文句の宮の御手紙を見ながら、うつぶしにふして居た。

かやうに手紙の鞘當があつて女の煩悶が倍加する中に、この祕密がいよ〳〵薫の耳に入つた。彼れは驚愕し、憤懣し、激怒した。けれども此の王朝のハムレットの驚きぶり、憤りぶりは、あくまでも思索的、空想的、學者的、机上計畫的の資え切らぬものであつた。作者はかやうな場合の嫉妬の表現についても、それを個性の中から自然に流露させることを忘れなかつ

た。

彼女は書いて居る

道すがら、「猶ほいと隈なくおはする宮なりや。いかなりけむ序に、さる人ありと聞き給ひけむ。いかで言ひ寄り給ひけむ。田舎びたるあたりにて、かやうの筋の紛れは、えしもあらじと思ひけるこそ幼けれ。さても知らぬあたりにこそ、さる好き事をものたまはめ。昔より隔てなくて、怪しきまでしるべし、率てありき奉りし身にも、後めたく思しよるべしや」と思ふに、いと心づきなし。對の御方の御事を、いみじく思ひつゝ、年頃過ぐすは、我が心の重さはこ

譯

薫は祕密を聞かされて歸る途すがら考へた。「やッぱり恐ろしい、油斷も隙もない宮であッたわ。一體、どういふ序に、そんな女が居るといふ事を聞きつけられたのであらう。そして又、どうして近づかれたのであらう。あゝいふ都離れた邊鄙ではあり、他の男が人目の隙に紛れ込むなどいふ心配は、よもやあるまいと思つたのが、今思へば子供らしい考であつた。それにしても、自分に關係のない女になら、さうした色戀沙汰の御試みも結構であらうが、自分と宮とは、幼い昔から隔なく御交際して、自分でも變だと思ふ位、戀の御手引までして歩いた仲ではないか。それにかういふ油斷のならぬ事を巧らまれるといふ事があるものか」と思ふと、癪にさはッて仕方がない。それに比べると、自分が

よなかりけり。……此頃かく惱ましくし給ひて、例よりも人繁き紛れに、いかで遙々と書きやり給ふらむ。おはしや始めけむ。いと遙けき懸想の道なりや。怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞こえきかし。さやうの事に思し亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし。昔を思し出づるにも、えおはせざりし程の歎き、いといとほしげなりきかしと、つく〴〵と思ふに、女のいたく物思ひたる樣なりしも、片はし心得そめ給ひては、萬思しあはするに、いと憂し。あり難きものは人の心

宮の夫人(中の君)を、戀しいと思ひながら、怺へ〳〵て、何年かを事もなく過ぐしたといふのは、我れながら愼重を極めた態度であッたよ。……

一此頃はあの通り御不例といふ事で、不斷よりも人の出入が多いのに、どうしてあの遠方まで、手紙を書いて持たしてやられる隙があつたのだらう。もう通ひ始められたのか知らん。五里の戀路とは、さて御苦勞な戀愛行進ではある。行方が怪しいといふので、御住所を尋ねられることも、よくあッたと聞いて居るが、屹度そんな事に思ひ亂れて、何といふこともなく惱まれたのであらう。昔の事を考へて見ても、あの宮が今の夫人の處へ、行きたいにも行かれなかつた時のしよげ方ッて、無かつたからな」と思ッて、ふと氣がつくと、此間訪ねた時に、女がひどく物思に沈んでゐる樣子であつたのも、あゝその爲めであッたかと、一部分が解り出すと、あれもこれもと無數に思ひ合はせられる、その氣持

にもあるかな。らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし。この宮の御具にては、いとよきあはひなりと、思ひも譲りつべく、退く心地し給へど、やむごとなく思ひそめ始めし人ならばこそあらめ、猶ほさるものにて置きたらむ。いまはとて見ざらむ、はた戀しかるべしと、人わろくいろ／＼に心の中に思す。我れすさまじく思ひなりて、捨ておきたらば、必ずかの宮呼び取り給ひてむ。人の爲め後のいとほしさをも、殊にたどり給ふまじ。さやうに思す人こ

の悪さと云ッたら、無い。測られぬは人の心だ。あの浮舟、可愛らしげに、大様に見えてゐて、そこにあだッぽい好色性のある女だからな。しかし、あの宮の玩具には丁度似合の所だらう。これは寧そ手を引いて宮にお讓りしようか」とも思はれたが、しかし地位の高い本妻として思ひ始めた人ならば、斷然と手をも切らうが、これはもと／＼慰みの第二號だ。やはり閑物としてそのまゝにして置くとしよう。それに「左様ならと云つて、縁を切つても、未練が殘つて戀しいこともあらうから」と、心の中では人目のわるいほど、いろ／＼と思ひ悩まれた。

その中にまた例の君子心が芽を吹いて來て、「自分がもし、ひどい女と愛想をつかして捨てゝしまッたら、あの宮が必ず引き取られるであらう。そしてあの女の爲めに、見捨てた後の可哀相な事などを豫想して、別に心配はされまい。現に一度愛人であッたのを見棄てたと

そ、一品の宮の御方にも、二人三人參らせ給ひたんなれ。さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとほしくなど、猶ほ捨てがたく、氣色見まほしくて、御文つかはす。

いふ女を、お妹君の一品の宮樣の御殿に、女房として、二三人も差上げておかれるではないか。あの浮舟が、そんな風に見はなされて、女官奉公をして居るのを、見たり聞いたりするのは、可哀想であらう」などと考へて、やはり見捨てるには忍びず、また此頃の樣子も見たしといふやうなことで、御文を遣はされた。

その御文は

「波こゆる頃とも知らず末の松、まつらむとのみ思ひけるかな　人に笑はせ給ふな」＝君のあだし心が、已に第二の人に許したとも知らず、最後までの唯一人として、私を待ちこがれてゐて下さることとのみ思つてゐましたよ。世間の笑はれものにして下さるな。＝と、極めて簡單なものであつた。

女は恐ろしい豫期の實現を見て、がツかりした。やがて彼女の心境と外境の壓迫とが迫り合つて進んで來た。薫が夜警の者をいましめる。宮がその間を强ひて訪ねて、追はれて空しく歸られる。

手つき顏のにほひなどの、向ひ聞こえたらむやうに覺ゆれば、昨夜

譯

匂宮の御手つき、御顏の美しい艶などが、まるで對座し

一言をだに聞こえずなりにしは、猶ほ今ひとへまさりて、いみじと思ふ。かの心のどかなる様にて見むと、行末遠かるべき事をのみのたまひわたる人も、いかゞ思さむと、いとほし。

て居るやうに思ひ出されるので、昨夜折角のお訪ねに、一言葉もかはさずにお別かれした事を、更に悲しく、えらい事になッたと思ふ。同時に薫の大將の事も聯想されて、あの心長閑にゆッくり逢はうなどと、遠い將來の事ばかりを、口癖に云ッて居られる人も、(もし自分が死んだら)どう思はれようかと、氣の毒に感ぜられた。

これが女の心に現はれた二人の愛人の最後の比較である。彼女は最後まで強く二人に惹きつけられた、そして最後まで二人を輕重し得なかつた。一人をば、短兵急な、煽情的な、言葉多き、輕いけれども愛すべき才人として、他の一人をば、心長閑に、言葉少なく、常に將來を夢みる、遲緩なれども重々しき人物として。「心のどかなる樣にて見むと、行末遠かるべき事をのみのたまひわたる人!」薫に對する、何といふ恰好妥當な性格批評であらう。『源氏』の作者が人物の性格に對する深き關心は、此の一語によつても知ることが出來る。

かくして浮舟が宇治入水を限りとして、三人の三角型なる愛の生活は終はりを告げた。薫と匂宮との浮舟に對する愛は、天にも地にも替へられぬものであつた。女が二人の貴公子に對する愛は、いづれをいづれにも見替へ難きものであつた。而して薫と匂宮とは、女に

對する運命的な愛の爲めに、或は恩義ある幼馴染の友を裏切り、或は禁裏御最愛の皇子に楯つきつゝ、最後まで闘ひぬいた。　また三人の戀ひぶり、爭ひぶり、悶えぶりには、三人それ〴〵の性格から自然に流れ出づる妥當性があつた。　しかのみならず、彼等三人の性格と運命とは、さうならざるを得なかつた長き遺傳の集積の結果であつたやうに見える。　女三宮と柏木との間に生れて、源氏の過去を償ふ爲めに、假りに其の子となつたやうな薫の大將。　朱雀院の愛子なる帝と源氏の孫娘なる明石中宮との間に生れて、明石入道系の執着的實行性と源氏系の風流好色性の兩遺傳を多分に承け繼がれたやうな匂宮。　宮家に生れながら、腹の卑しき爲めに子として取扱れず、次いで母の嫁いだ常陸守からは繼子として薄遇され、一旦定まつた聟の少將には、異腹なるが爲めに破約された後、姉君二人の薄倖の餘波を弱い一身に引受けて、遂に貴公子二人の競爭に責めぬかれた浮舟。　かう並べて見ると、三人が三人ながら、いかにも過去遠々の因緣によつて、卽今の境涯が招來されたやうではないか。　彼等三人の三角愛は完全形の三角愛に加ふるに、性格、境遇、遺傳、いろ〳〵の深き意義を以てして、自然に、妥當に、重厚に表現されたものである。

本居宣長は「人の情（こゝろ）の感ずること、戀にまさるはなし」と云つた。『源氏』は戀愛の描寫を生命とした物語である。　戀愛に球竿型、松葉型、菊の花型、矢車型及び三角型等、いろ〳〵の

型がある中で、單複その中を得て、藝術的の描寫耽味に最も適したものは三角型である。『源氏』の作者は光源氏を主人公とした正編に於いて多種多樣の戀愛描寫を試みたる後に、宇治十帖に於いて、新に薫、匂宮對浮舟三人の間に成立つた三角愛の描寫を試みた。而してその描寫は、正編に於ける各種の戀愛のそれに比して、一段と優れたものであつた。殊に薫と匂宮とには、源氏の具へた道德的、好色的の二性質を分擔したかの趣があり、浮舟には、その二人の分前した二性質を十分に活動せしめる事を天分とした女性であつたかの觀がある。而してまた此の意義深き天分を持つた三人が懸命に愛を追うた結果は、求むる愛のあだなることに目覺めつゝ、夢の浮橋に茫然として立つ自身を見出だしたかのやうな趣があつて、諸行無常の深き佛旨を悟らせ、平安全朝の戀愛追求が畢竟夢中に幻を追ふに過ぎぬものであつた事を暗示したやうにも見える。かう考へると、『源氏物語』の卷軸となつてその最後を飾つた薫、匂宮、浮舟の三角愛は、戀愛文學の醍醐味を現はすと共に、『源氏物語』一篇に於ける最後の幽祕を暗示したものといふことが出來るであらう。

二〇

藤原隆能筆　御法

『源氏物語』の價値と意義と興味とは無限である。文學史的に見ての最大價値は、本朝、震旦、天竺、三國の文化の粋を、廣く美しく攝取したこと、言ひ換へれば前代の影響を、量的には多く取り、質的には磨きをかけて、その上に立派な統一を與へたことであらう。一般史的に見ての最大價値は、創作した作話の中に於いて、當代の人情、風俗、文物、及び時代の思想を、無駄を省き、形を變へ、神を寫して、實よりも更に實に現はしたことであらう　藝術としての最大意義は、前代の諸様式を集めて大成したる上に、いろ〳〵の重要なる創始を加へたこと、例へば、一つの說話を纏めては切りをつけつゝ、大筋を進展させて大統一を成す纏斷統一式の大成、歌と地の文とを連接せしめる不卽不離なる文致の圓現、風雅優美を中心に立てゝ、あらゆる文章要

素を統一したる美觀、人物、事件及び自然の描寫に於ける未曾有の筆致、戀愛種々相の妙表現、殊に三角型戀愛の妙創案等の類であらう。が、之れと共に最大の興味は、何ともなき描寫の裏に、人間世に關するいろいろな見識、思想、教訓の暗示的に覗いてゐることであらう。『源氏』の中には、一人物の或場合に於ける何げなき對話や和歌などの中に、人生の廣所、深處に通じて無限の暗示を與へるものがある。

（益田男爵家藏）

これは前論の中にも、已に述べたことであるが、例へば

おほかたの憂きにつけては厭へどもいつかこの世を背きはつべき（かつ濁りつゝ。）

は、藤壺の宮が、世の厭はしさに尼とはなつて見たものの、可愛ゆい子の居る世を背き切ることは出來ない、佛を念じかけては、つい濁世の恩愛に心を引かれ／＼する、といふのであるが、移して以て王朝の公卿殿上人一般の對佛教態度を說明し得るものであらう。王朝の貴族は、官位が昇らぬ、戀が成らぬ、憂い、つらいと云つては、世を捨てゝ佛道に入つた、そして入りながら世に背き切れずして、やがて異性に、利慾に見かへり／＼した。それは丁度鎌倉の武人

等が病に怯え、戰に敗れては、命乞ひに出家し、そして出家しながらも相變はらず片手間に戀を、利慾を漁つて怪しまなかつたのと同じことであつた。彼等は多く、且つ念佛し、且つ漁色する佛俗兼樂の大慾者であつた。「おほかたの憂きにつけては厭へどもいつかこの世を背き果つべき、且つ濁りつゝ」。彼等はまさしく佛に往いては俗に歸り、澄みつ濁りつして、四百年を過したので、此の一首まさしく彼等の心境そのまゝを道破したもののやうに見える。或は

目に近くうつれば變はる世の中を
行末遠くたのみけるかな

の一首は、紫の上が源氏の女三宮を迎へるについて、わが水入らずなる第一位の崩れかゝつたことを歎じた歌であるが、移して以てあらゆる男の、女の、家の、國の、盛者必衰の場合にあてはめることが出來るであらう。吾等は此の歌が藤原氏の、平家の、源氏の、北條氏の末路を諷喩する味と力とに於いて、西行法師の名高き「いつの世に長き眠りの夢さめて驚くことのあらむとすらむ」に劣るところが無いと思ふ。

『源氏物語』には、かういふ處世修養の立派な教訓ともなるべき文句が、少しも裝はずに、あちこちに鏤められて居る。而してこゝが此の物語の、讀む人によつて一種の經典代用をも

なすところであらう。『源氏』にはまた戀愛を描きながら、形の上の戀愛を忘れて、意味深き大愛の味ひと嗜みとを教へる矛盾の貴さがある。あの全篇戀愛を描き盡くしながら、最後の男女に一物をも得させずして呆然自失せしめたのも、恐らく此の無盡の意義と興味とを藏めて居るのであらう。

『源氏物語』は空想された人と事と自然とを假り、磨き上げられたる時代の言葉によつて、時代の神を傳へたかのやうに見える。平安朝時代の魂が、自らを不朽にせんが爲めに、嚴選して乘り憑つた人、それが紫式部であつたのであらう。

以上、長い／＼源氏物語論であつた。但し、吾等がこの非常識に近い長談義を試みたのは、『源氏物語』の本體を明らかにすることは、『源氏物語』の爲めであると同時に、平安朝文學全體の爲めであり、日本文學全體の爲めであり、また日本の爲めでもあると考へたからである。均衡を破つた我儘に對して、切に讀者諸子の寛宥を御願する。

第十七　短歌をめぐる傍系の惑星歌群

一

紀貫之が『土佐日記』に、船頭が、「船君の仰せだ、例の北風の吹き出さぬ中に精を出せ」と云つて、船子を勵ます言葉の調子が面白いと思つて、書いて見ると、

御船より　仰せたぶなり　朝北の　出で來ぬさきに　綱手はや引け。

この通り言葉そのまゝが三十一文字になつてゐたといふことが書いてある。また、舟子どもが海の荒れを物とも思はず、聲高く歌つてゐるのを聞くと、

春の野にてぞ　音をば泣く。若薄にて　手を切る〳〵、摘んだる菜を、親やまほるらん、姑や食ふらん。カヘラヤ、

昨夜の　童女もがな、錢乞はん。

譯

春の野原で　音を泣き〳〵、若いすゝきで　手を切り〳〵、やう〳〵摘んで　おくる菜を、思ふ女は　食ひもせで、親が頬ばろ　姑が食はう。ダメダネイ

昨夜の　少女が　來ぬかいな。來たら貸した金　は

虚言をして、おぎのりわざをして、錢も持て來ず、おのれだに來ず。

（譯）たらうに。あのあまッちよめ、嘘ついて、借り逃げこいて、錢も持て來ず　身體も見せず。ダメダネイ。

といふので、「これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心は少し凪ぎぬ」と書いてある
また土佐から後を慕つて來た童が、

なほこそ　國の方は　見やらるれ、
わが父母　ありとし思へば。カヘラヤ。

譯

やッぱり國さが　戀しいな、父さん母さん　あるさかひ。カヘラウ！

と歌ふのを聞いて、泣かされたと書いてある、貫之は當時の歌壇の覇王である。彼れは短歌の調子が自然に下賤の日常語に現はれたのを聞いで得意の微笑を漏らしたであらうが、同時に變はつた調子の田舍歌に耳を傾けて、其の心の深く動かされるのを感ぜざるを得なかつた　何故であらうか。思ふに品位に乏しい其等の鄙歌が、この老名匠の心を捉へたのは、一つはその面白い調子の爲めであつたであらう　他の一つは、それらが短歌に見出だされぬ別の世界を歌つてゐる爲めであつたであらう　而して貫之の心は當時の歌壇全體の心であつたであらう。

そも〳〵平安朝の歌謠界に於いて、王座を占めてゐたのは短歌である。短歌は無數の歌人と無數の歌集とを擁し、朝家の御保護と一般世間の尊敬とを受けつゝ、歌壇一ぱいに羽を伸ばしてゐたが、その間にも、異樣の風格によつて小さい存在を認められた特殊の歌謠が無かつたのではない。吾等は此の特殊の歌謠を大別して二種とすることが出來ると思ふ。その一種は、短歌に取つて一種の譜代ともいふべきもので、萬葉集以來の傳統によつて、勅選歌集に仲間入を許された長歌、旋頭歌の類である。他の一種は、特殊の用途と、特殊の節附と、特殊の内容とによつて、外樣扱ひされ、時としては外道視され、或は畑違ひの餘所者扱ひされたもので、神樂、催馬樂、東遊、風俗、和讃、今樣の類である。初めの譜代歌謠に關する説明は、暫らく措く。後なる外樣歌謠はまたおのづから二種に分かれるであらう。一つは供養、奉納、禮讃を本義とする歌謠で、神慮をすゞしむる爲めの神樂、東遊や、佛德を讃歎する和讃などが之れに屬する。他の一つは遊樂本位の歌謠で、催馬樂、風俗、今樣などが之れに屬する。彼等は概して短歌と内容を異にした。また概して形式をも異にした。また和讃、今樣以外については、彼等は時として『萬葉』『古今』『後撰』の短歌を取ることもあつたが、その場合には、或は同じ文句の反覆により、或は拍子詞の挿入によつて、その調子と氣分とを新たにした。これらの歌謠の作者はそれ〴〵の歌の目的に副ひ、調子に連れることを心掛けただけで、短

歌に附き纏ふやうな面倒な髄腦式の心得などには思ひ及びもしなかつた。彼等が他人の作を平氣で利用し變改したところを見ると、恐らく作家としての名譽などを考へたこともなく、唯だ才氣のあるに任せ、全く慾離れした氣分で、神に奉仕し、遊樂の世界にさまよつて居たのであらう。而して短歌の作者が、名譽にかけて秀歌を詠み出ださうとつとめ、よき歌の數を積んで歌道の隆盛を謀らうとしたのとは全く異つて、彼等は名を傳へようとも、作の數をふやさうとも、又その歌の道を盛んにしようとも全く思はなかつた。その結果、古歌の借物と無名の作歌の巧拙まち／＼なる作品とを合はせて、神樂歌の六十九首、催馬樂の六十一首、風俗歌の二十九首を、辛うじて天地間に留め得たのである。和讃は多少樣子を異にして、名僧の名を署した作も現はれたが、短歌と内容形式を異にしたことと、藝術品としての自覺的鍛錬が足らなかつたこととは、全く同一であつた。

短歌は譬へば恒星の如く、定められたる軌道を正しく通過しつゝ、それ自身の赫々たる光を放つた。之れに對して是等の歌謠は惑星の如きものであた。彼等は短歌の周圍をめぐつて、その光を受けては、風變はりな弱い光を放ちつゝ、ふら／＼と天空をさまよひあるいたのである

二

神代以來五七、五七、七七と三段に讀まれた短歌は、奈良朝に近くなつて、五七五、七七の上下二段に讀まれるやうになつた。而して短歌の讀みつゞけの此の革命によつて、今まで標準歌格として五七の短長格のみを持つてゐた日本の歌謠は、新たに七五の長短格と七七の長長格とを持つやうになつた。形式上より見たる『萬葉集』は、五句三十一字の中に「五七」「七五」「七七」(短長、長短、長長)の三選格を具へた短歌と、五七の一格のみに始終した長歌、旋頭歌との競爭のやうにも見えるが、平安朝に入ると、短歌の創めた七五調が歌壇の殆んど全面を支配するやうになつた。その最も著しい現象の一つは、長歌の七五調化である。他の一つは七五を中心の基調とする和讃と、七五の一格よりのみ成立つ今樣との盛行である。是等の點に於いて、讀者は、吾等が短歌を恒星に見立て、他の長歌、神樂、催馬樂、和讃、今樣等を惑星に見立てたことの、必ずしも輕卒な譬喩でないことを認めらるゝであらう。

もう一つ、短歌が此の時代の惑星歌群に及ぼした形式上、調子上の大いなる影響は、七七を主とする長長格の盛行であつた。そも〳〵七七調は、短歌の第三句第四句を引きつらねた

第二聯の中、第三句が第二句と提携した爲めに、孤立した第四句が、新に最後の第五句と提携したところに成立つたものである。例へば、素尊の「八雲立つ」の詠は、もと

（第一句）八雲立つ—（第二句）出雲八重がき、（第一聯）
（第三句）つまごめに—（第四句）八重がきつくる、（第二聯）
＝（第五句）その八重がきを。

と、三段に接離させて讀ませたものであつたが、奈良朝に近づいて、いつの間にか、

（第一句）八雲立つ—（第二句）出雲八重垣—（第三句）つまごめに（上ノ句）
（第四句）八重がきつくる—（第五句）その八重がきを（下ノ句）

と、上下の二段切に讀まれるやうになつた。かくして本來第一句第二句の連絡した第一聯の五七調と、追加した添への七音句とのみを有した短歌、約めて云ふと唯だ五七調のみを有してゐた短歌が、

八雲立つ—出雲八重がき

と一、二の兩句を續け讀むことによつて、もとのまゝに五七調を有し、

出雲八重がき—つまごめに、

と、二三の兩句をつゞけ讀むことによつては、新に七五調を有し、最後に

八重垣つくる—その八重垣を、

と、四五の兩句をつゞけ讀むことによつては、また新に七七調を有することになつたのである。この調子の上の大革命によつて、短歌が永遠不滅の生命を得たので、その中、七五調が惑星歌群に及ぼした影響は已に上に述べた通りであるが、七七調(廣くいふ長格)の彼等に及ぼした影響も亦、決して輕いものではなかつた。神樂歌の

ヤ、谷から行かば、岡から行かん、ヤ、岡から行かば谷から行かん。ヤ、これから行かば、かれから行かん、ヤ、かれから行かば、これから行かん。

や、催馬樂の

石川(いしかは)の　高麗人(こまうど)に　帶を取られて、からき悔いする。

などが、それを證據立てるであらう。

かう見ると、平安朝の歌謠界に於いて、短歌と他の小歌群との間に、恒星對惑星、宗家對末家、乃至、正統派對異端派といふが如き、關係のあつたことは明瞭であるが、とにかく是等の歌群が、自由な立場から、一切を氣輕に取扱つて、內容形式の兩方に於いて、すツかり違つた領分を開拓したのは、多とせねばならぬ。而して其の數ある貢獻の中で、最もおもなるものを擧げると、第一には、短長、長短、短々、長々(五七、七五、五五、七七)等、諸〻の句格を無遠慮に交ぜ用ゐ、拍子詞

を挿み、思ひ切つた繰返しを試み、變はつた調子に謠つて、短歌とはすツかり違つた調子の世界、變化に富んだ自由な調子の世界を創造したことである。第二には、短歌作者の偏狹な潔癖から、避けて歌はず、或は歌ひ得なかつたでもあらう、或は卑しげな、或は皮肉味の、或は跪爪らしい、或は特別な刺激性を持つた內容を、氣を利かして面白く歌つたことである。是等の歌謠は、恐らく相當な短歌の作者の餘技になつたものであらうが、彼等が自ら輕んじて此の方面の文學の價値を自覺しなかつた結果、質を磨き、量を多くし、變化をつけ、品位を添へれば、それ〴〵に大きな閑吟集を成し、或は狂歌集、柳樽をも成すべきものを、遂に一人の太田蜀山、柄井川柳をも出ださずして、この文學煌耀時代の隅ツこに宿かりのやうな地位を占めたのは、惜しみても餘りあることであつた。

三

謂はゆる惑星歌群の中、その起原の最も古いのは神樂歌である。神樂は古く神遊と云つた。太前に奏して神慮を慰め奉る奏樂の意である。神樂はもと臨時に所も定めず行はれたが、奈良朝以後は豐樂院の淸暑堂で、臨時に神宴の折に行はれるやうになつた。定期とな

つたのは一條天皇の御代からで、それから隔年に內侍所で行はれたが、白河天皇の御代から恒例として每年行はるゝこととなつた。また伊勢、石淸水、賀茂、春日、その他の神社でも行はれた。語義については、神樂の轉といひ、「かぐれあひ」の轉といひ、或は祭の歌を意味する西藏語であるといふ河口慧海氏の說の如き、いろ〳〵あるが、神座遊の略轉とする『大言海』の說を最も妥當とすべきであらう。日神の隱れました天の岩戶の前に於ける天鈿女命の奏したのが起原だとされてゐる。

神樂歌集の冒頭に「庭燎」と題して、

みやまには、みやまには、霰降るらし、外山なる、まさきのかづら、色づきにけり、色づきにけり。

といふのが載せてある。『古今集』大歌所の歌の中に、「神遊の歌」と詞書して擧げられた「みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり」と同じ歌であるが、恐らくもと五句の短歌形に作られたのが、最初及び最後の二句を繰返して、七句に歌はれたのを、拍子の關係を離れ、再びもとの五句に還原して、この歌集に採錄されたものであらう。この歌は、恐らく短歌そのまゝを取つて、その一部を繰返す神樂歌の原始的形式の中の最も原始的なる姿の殘つたものであらうと思はれる。

この「庭燎一」の歌の次ぎに、「阿知女作法」といふ左の一章がある。

本

阿知米　於於於於

末

於介　阿知米　於於於於

阿知米は鈿女命で、音の類似によつて、かうも呼ばれたのである。本末は神座に向つて左を本座といひ、右を末座と云つたので、庭燎の儀が終はつて、人長が鈿女命の神態を演ずる時に、左右の座の者が、それ〴〵にかう呼ぶのである。神代の幽祕で、今から明らかにすべくもないが、恐らく、左の本座に列んだ者が、

鈿女！　鈿女！　オヽ、登場て來たわ〳〵！

と呼ぶと、右の末座に列んだ者が、つゞいて、

演れ！　演れ！　鈿女！……　オヽ行り出したわ、行り居るわ！

と呼ぶ、といふのであらう。

此の鈿女の舞の記事があつて後、久しく書記を缺いてゐたが、崇神天皇の御代になつて、大和の笠縫邑に天照大神の御靈と草薙の御劍とを遷し奉つた事を、『古語拾遺』に、

其遷座之夕、宮人皆參、終夜宴樂。歌曰、美夜比登能、於保與須我良爾、伊佐登保志、由伎能與呂志茂、於保與須我良爾

と書いてある。これは恐らく、橘守部等の考へた通り、神樂歌の大前張の「宮人」の歌なる。

宮人のおほよそごろも、ひざとほし、きのよろしもよ、おほよそごろも

と起原を同じうするので、神樂に奉仕する宮人等が盛裝して、上衣の長く膝の下まで垂れた容子のみやびたる樣をめで囃したので、原始的な神樂歌の姿を見せて居るものであらうと思はれる。

その後奈良朝の末に淡海三船が神樂、催馬樂の樂曲を撰定して多自然麻呂に傳へた。而して圓融、花山兩朝の頃に一條左大臣雅信が之れを大成したと云はれるが、是等によつて察するに、原始期の神樂歌は、主として舞踊者を愛で囃す文句を採り用ゐたので、人長が採つて舞ふ榊や、幣や、杖や、篠や、弓や、劍などを讃美する、謂はゆる「採物」の歌が、最重要事として最初に揭げられるのも、此の歷史的餘習であらうと思はれる。

神樂歌は普通、庭燎、採物、大前張、小前張、星歌、雜歌の六種に分けられるが、内容の特色からは、約して儀式物、餘興物の二種に大別すべきであらう。概していへば庭燎、採物が奉仕禮讃の儀式もので、前張その他が儀式以外なる自然人事の興味を歌つた餘興式のものである。而

して後者の中には、戀愛や滑稽に關する散樂式の内容を取扱つたものもあるが、これは恐らく洒落な日本人の氣質が神祇の御心を忖度して、眞面目な儀禮と共に破顔笑噱の興味をも好ましく思召すと信じ、眞心だにあれば寧ろ嬉笑の材料の多いのを悦ばせらるゝと思つたからであらう。それは彼等が特に謹愼して奉仕した採物の歌の中に於いて、已に前半儀禮後半戀愛ともいふべき咲分式のものがあるのを見ても知られる。左に擧ぐる「篠」や「弓」などがそれである。

本

この篠は、いづこのさゝぞ、舍人らが、腰にさがれる、鞆岡のさゝ、鞆岡のさゝ

末

篠わけば、袖こそ破れめ、利根川の、石はふむとも、いざ川原より、いざ川原より。

譯

本

この執るさゝは　何處のさゝ、　宮の舍人が　腰に帯る、　鞆の名をもつ　岡の篠、　あの岡のさゝ。

末

篠を分けては　袖が裂きよ、　妹にその袖　見せられよか　石は蹈んでも、　利根川の、　あの川原から　川原から。

神樂の詞人の情はさすがに美しかつた、そして其の筆は冴えてゐた。たゞの三十一文字の

一句を反覆して、別樣の風味を加へたところも面白い。篠の產地の名を、美しい聯想の序詞で生かし、篠の關係から、篠を分け行く戀路へ誘ひ入れたのも面白い。そして此の奇想天外の聯想をもつ二首の歌を相並べて、神明の笑覽に供へたところは、實に破天荒の妙味である、神樂歌の本末には、俳諧の連歌に於ける附合の味があつた。

小前張の中に「總角」の本末がある。

本

あげまきを、わさ田にやりてや、其を思ふと、そをもふと、そをもふと、〳〵、〳〵。

末

そを思ふと、何もせずして、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら。

譯

かはい愛人を　早稻田に出してヨウ、　それを思ふと、思ふと思ふとヨウ。

それを思ふと　何も手につかずヨウ、　長い春の日が春の日が、　長い春の日が春の日がヨウ。

言ふまでもなく戀愛を歌つたので、神も一しほ哀れと御嘉納あらせられたものであらうが、吾等はこれに於いて神樂歌及び催馬樂に於ける繰返しの趣と味はひとを知ることが出來る。此の歌の本の「そを思ふと」は五度の反覆、末の「春日すら」は四度の反覆で、最も多き反覆の一例であるが、かういふ反覆は、一つは唐土傳來の長き曲譜に合はせる爲めに、短い

國歌を引き伸ばす必要から起つたものであらうが、同時に斯様な引伸をなし、或は拍子詞を挿む處に、國歌の新しい姿や味はひが加はつて來たことも、また見逭すべからざることである。

神樂歌の原始の姿は、たとへば「あはれ、あな面白、あな樂し、あなさやけ、おけ」などの如き、感投詞的の短い句を、幾つか並べたものであつたらしいが、之れに次いで試みられた一種の定形は、恐らく「採物」の歌に見るが如き短歌の一二句を幾度か繰返して、切れ目／＼に拍子詞を挿んだものであつたであらう而して最後に餘興遊情の資料に供

神樂歌總角　鍋島侯爵家藏（國寶）

されたのは、一口に云へば催馬樂式のもので、調子について云へば民謠や、口遊や、經文などを醇化し變化した長短いろ／＼のもの、内容についていへば民情や風景や、戀愛や、遊戯や、洒落

や、諷刺やを取り入れた、眞面目、滑稽いろ〳〵のものであつたやうに見える。

本　しだらが眞人の、單の狩衣、な取入れそ、いとねたし。

（譯）しだらが殿様の單衣の狩衣、取りな入れそよ　忌々しいに。

末　な取入れそ、小雨にそぼぬらせ、夜離れする、いと〳〵ねたし。

（譯）入れずにそのまゝ小雨にぬらせ、こん小雨に　ひんぬらせ、待つ夜待つ夜を　明けをるが、とてもとッても忌ま〳〵しいに。

の如きは、民謠風の戀に絡んだもので、催馬樂そッくりであるが、かういふ調子は、遠く遡れば紀記の童謠などに見られるもので、近くは『萬葉集』に、ほんのわづか見えてゐる地方の流行歌などから緣を引いたものであらう。萬葉十六卷の能登國歌といふのに、

階楯の　熊來酒屋に、ま罵らる　奴わし。
誘ひ立て　率て來なましを、まぬらる　奴わし。

（譯）能登の梯立　熊來の酒屋に、間抜けの奴めが　叺鳴られて居るわ、ヨウイ。すかし出だして　連れて來ませうよ、叺鳴られなぶられる、間抜けの奴、ヨウイ。

といふ、神樂、催馬樂を思はせる格はづれの歌がある。また之れに引きつゞいて、

か島根の　机の島の、小螺を　い拾ひ持ち來て、石もち　つゝきはふり、辛鹽に
こゝと揉み、高坏に盛り　机に立てゝ　母に奉りつや　愛兒の刀自、父に奉りつや
み愛兒の刀自。

といふのがあるが、その最後の「母に奉りつや、愛兒の刀自、父に奉りつや、美愛兒の刀自」の如きは、純然たる催馬樂調ともいふべきものである。おもふに萬葉時代にも、かういふ紀記の歌の或るものを、承け繼いだやうな、路頭船中に於いて樵夫、牧童、水夫等が、樂器なしに謠ふに適したやうな、反覆調に富んだ自由律の歌が、地方々々の民間に行はれたのであらう。そしてそれが奏樂諷誦の緣につれて、いつしか本格的な短歌に伴ふやうになり、遂には短歌を風化して、自ら興味上の主位を占めるやうにもなつたのであらう。神樂歌が此のやうに格式の正しい短歌を本臺として、次第に民謠式なる自由律の歌を取り入れて來たのと丁度反對に、催馬樂はまた路頭巷里に牽聲を揚げて、馬を追ひ船を漕ぐ賤の男等に勝手に唄ばれて居る中に、段々短歌をも仲間に引き入れ、いつしか唐土、高麗、林邑傳來の謹嚴微妙な曲譜まで附けられて、和歌にも劣らぬ、雲上人の弄びとはなつたのであらう。

短い句を折り重ねた剽輕なものに「早歌」といふのがある。各〻獨立した應酬句十二對を綜合した物であるが、思ふにこれは與へられた難題を即妙に應答して手早く解決する

味はひを見せたもので、速問速答を誇りとした連鎖的詰開の行進曲ともいふべきものであらう。句の初めに「ヤ」「ヤ」と云つて拍子を取つたところなど、殊に面白い。最初の四組は、かうである。

本　　　　　　　　　　末

ヤいづれぞも、とう留り。‥‥ヤかの崎越えて。
ヤ深山のこつゞら。‥‥‥‥ヤくれ〳〵小葛。
ヤ鷺の首取ろんと。‥‥‥‥ヤいとはた長うて。
ヤ胼胝ふむな、尻なる子。‥‥ヤ我れも目はあり、前なる子。

譯すれば「ヤ留まる所あ何處だ？　あの山のさきで。」「ヤ山の奥の葛藤は？　手繰り〳〵行かうよ。」「ヤ鷺の首取らうよ！」「長くツて取れまい。」「ヤあかゞり踏んでくれるな！　おれにも目が、あるわよ」といふやうな意味で、早足踏で堂々まはりなどしつゝ唱へたら、面白いものであらう。神樂歌の作者も隅におけぬ趣向を凝らしたものである。

「酒殿歌」は、

本　酒殿は　廣しまびろし、甕越しに　わが手な取りそ、しか

譯

瓶越しに　人の手取るな、酒殿は廣いよ廣いよ、

末　はせぬわざ、しか告げなくに。
酒殿は　今朝はな掃きそ、と
ねり女の　裳引き裾曳き、今
朝は掃きてき　けさ庭掃きき。

何のわるさぞ　せよとも言はぬに。
清いさかどの　けさ掃くな、殿守り女の子が　清
い裳ひいて　裾ひいて、朝ぎよめ疾ッくに　御庭
の隅まで。

といふので、「本」は酒神を齋いた酒倉の中で、男の戯るゝを女が戒めたもの、「末」は倉守女が家の内外を、箒を加へる餘地の無い迄に清淨に奉仕し了へた跡なることを稱へたもの、相並べて神樂歌の作者の清濁併せ呑んで、則をはづさぬ藝術的の嗜みを見るべきものである。

「蛬」は諷刺を味はふべきものである。

本　きりぎりすの　ねたさ憂れ
たさや、御園生に　まろり
來て、木の根を　掘り食ん
で、オサマサ、角折れぬ、
オサマサ、角折れぬ。

末　ねたさうれたさや、御園生
に　まろり來て、木の根を

譯

蟋蟀めの、けしからん、君の御園に入り込んで、大事の木の根を、掘ッては食ふ。と見るとノ\、よい氣味い、蟋蟀め、エンサ、ワンサと掛聲して、掘る最中に、大威張の角が、ぽきりと折れた　エンサア、ワンサア！　角がぽきり、ぽッきり！　あッはッは！
忌まノ\しや　じれッたや　こほろぎめ、君の御園に入り込んで、大事の木の根を　掘つては食つて、大威張で、エンサア、ワンサア！　その最中に　角が

掘りはんで、　オサマサ、　角――ぽッきりぽッきり、！　あッはッは！

　　折れぬ。

奸臣の社稷を奪ふ陰謀が、忽ち露顯して挫折したことなどを諷じたものであらう。催馬樂向きのものではあるが、神前の餘興としても、また一味である。社稷を守らせらるゝ神前で、かういふのを奏するのも、相應はしくないことはあるまい。

神樂歌は、ざッとかういふ味のものであつた。內容から見れば、神儀及びその環象を頌するのを本義とし、添ふるに興味ある自然人事を以てしたもの、形式から見れば、五七、七五、五五、七七、反覆、拍子詞など、いろ〳〵の句法修飾を縱横に用ゐて、神々が眞面目に悅ばるゝのみならず、笑みくつがへッて、氏子等が氣の利いた獻奏に心ゆかせらるゝやうにしたものである。從つて、その興味は短歌にも優るべきものであつたが、作者に抱負のなかつた結果、數をも趣致をも豐かにしようと努めず、唯だ儀式用の歌謠として、詞壇の一隅に潛んでゐたのは惜しいことであつた。

四

神樂歌、催馬樂の類歌の中、神前に奏する點に於いて神樂歌に縁の近いのは東遊(あづまあそび)である。

東遊は東國ぶりなる歌舞の遊びの意で、もとは小中村清矩博士が『歌舞音曲略史』に言つてある如く、「東國の風俗歌に合はする舞なるが故に」名づけたのであらうが、後には專ら賀茂、春日、男山、北野等の社前で奏せらるゝものとなつた。また後には、歌の方では東國の意味が全く失はれて、それ〴〵の神社を頌する和歌を、時の名歌人に作らせて、之れを歌ひ舞ふこととなつた。

東遊の起原は、大昔駿河の有度濱に天女が舞ひ下つたことがあつた、その時の天女の歌舞を眞似て駿河舞が出來たのにあると云はれる。

東遊歌駿河舞　鍋島侯爵家藏（國寶）

その舞に用ゐた「駿河歌」は六段から成つて居るが、最初の二段は左の通りである。

一段

ヤ、うど濱に、駿河なる、うど濱に、打ち寄する波は、なゝくさの妹、ことぞよし、ことこそよし。

二段

なゝくさの妹は、ことこそよし、あへる時、いさゝねなむや、なゝくさの妹、ことこそよし。

謎のやうな歌詞であるが、駿河の有度の濱にうち寄する波につれて、七彩まばゆき美裝の天女があらはれた。目出たい、とても目出たい。逢つたら、誘うて寢るであらう、といふことであらう。東遊を奏した事の史に見えたのは、清和天皇の貞觀三年（一五二一）を以て始めとすると云はれる。さすれば此の歌はそれより可なり以前の平安朝初期のものであらうが、調子は實に古ぶりの悠々雍々たるものである。

東遊として、天治本の『東遊歌譜』に傳ふるところは一歌、二歌、駿河歌、求子歌、大廣歌の、唯だ五首だけであるが、「求子歌」は『大鏡』に、宇多天皇の御代に始めて行はせられた賀茂の臨時の祭に、藤原敏行が詠進したと書いてある「千早ぶる賀茂の社の姫小松よろづよふとも色はかはらじ」の一首で、樂の東遊としては、

アハレ千早ぶる、　賀茂の社の、　姫小松、　アハレひめ小松、　よろづ代ふとも、　色はかは、　アハレ色はかはらじ。

と調べてある。『東遊歌譜』には入れてゐないが、朱雀天皇の天慶五年に行はれた石清水の

臨時の祭に奏する東遊として、紀貫之が

松もおひまたも苔ねす石清水

行く末遠く仕へまつらむ

と詠進したといふ事が、同じく『大鏡』に書いてある。

「大廣歌（おほひれのうた）」といふのは、

おほひれや、をひれの山は、よりてこそ、よりてこそ。山はよらなれや、とほ女はあれど

譯

大比叡小比叡も　寄らねば見えぬ、山が歩いて寄り來よか。あゝあ、遠くに女（をな）はあるなれど、あるなれど。

といふのであるが、恐らく東遊の代表的のものであらう。要するに東遊は東國に緣起した由來は持つてゐるが、必ずしも東國に限るのではなく、場所も題材も自由であり、形式の方も短歌式、民謠式、反覆、拍子詞が併せ用ゐられて、まづ神樂歌と殆んど同樣と云つてよい。同じ種類のものが、不思議な緣によつて、神樂歌の傍らに小さい存在を與へられた運命の歌、それが東遊である。

五

神樂歌、東遊、催馬樂、風俗は、惑星歌群の中の姉妹歌謠であるが、彼等は各〻自己の名義に執着しつゝ、極めて氣まゝに他の歌謠の形態を攝取した。例へば、神樂歌はもと神前奉仕の愼み深い短歌を基本としたのであらう。東遊はもと東國に起源した民謠を基本としたのであらう。催馬樂はもと都鄙に通じて、路頭巷里の民謠を基本としたのであらう。而して風俗歌はもと特殊の國々里々のはやり歌を基本としたのであらう。しかも彼等は年月を經る間に、その名をば長く保存しながら、その名に相應はしからぬ非本質的の歌謠をも、慾深く取り入れたらしく、而してかく取り入れた結果は、いづれをいづれとも分かち難きものとなつた。吾等は已に神樂歌及び東遊に於いてその實例を見たのであるが、この攝取の廣く雜駁なる點に於いて殊に著しく目立つのは、催馬樂であつた。

催馬樂の故實や概念については、橘守部の『催馬樂譜入綾』が一種大成の趣を見せて居る。彼れはその著の冒頭に「或樂家の記錄に曰はく」と斷つて、

神樂催馬樂曲之事、家傳云、淡海、三船撰之。多氏へ相傳ふ。右近將監多自然麻呂神樂催馬樂

乃祖也

と紹介して居る。また

續紀天平十四年正月、六位以下等鼓琴歌曰「新年始邇何久志社供奉良米萬代摩提丹」と載せたる、是れ卽ち今の催馬樂の呂の新年曲に收めたるにて、はやくそのかみ歌ひそめつる一ツの證とすべきものなり。

と云つて居る。また

郢曲祕抄、風俗裏書云「催馬樂、本路頭巷里之謠謌也、然而後好事之士女、取以爲彈琴歌曲故其歌、因來甚有古代、有中世、厥后更奉諸國、謂之風俗、又後代謠謌謂之今樣　催馬樂、風俗固是一也。遂翫於宮中已久矣」

と云つて居る。之れを綜合すると、催馬樂はもと民間に歌はれた自由律の流行歌で、後に上流に取り上げられ、立派な曲譜をつけられて、琴鼓に作はれるものとなつた。その宮廷に入り、曲譜琴鼓に作はれたのは、遲くとも奈良朝の天平十四年(一四〇二)以前で、曲譜の纏められたのは奈良期の末期、纏めた人は平安奠都の十年前なる延暦四年に歿した淡海三船であるといふのである。その後清和天皇の貞觀頃(一五一九―三六)には、かなり盛んに行はれたらしく、圓融、花山、一條の三朝頃になつて更に隆盛を極めた事は、至尊の御口すさびに上つた事

や、『源氏物語』の記述などによつても推察することが出來る。風俗歌は催馬樂とほゞ同一のものと見てよいであらう。催馬樂の中には風俗歌と云つてよいものがある。例へば「紀伊國」の

一段

紀の國の、紀の國のヤ、しらゝの濱に、眞しらゝの濱に、おりゐる鷗、ハレ、その玉もて來。

二段

風しも吹いたれば、餘波しも立てれば、水底霧りて、ハレ、その玉見えず

の如きは、風俗歌としても極めて妥當なものであらう。また風俗歌の中にも、催馬樂と云つてよいものがある。例へば「常陸」と題して、

ひたちにも、田をこそ作れ、あだ心ヤ、兼ぬとや君が、山を越え、野を越え、雨夜行きませる。

とある如き、「ひたち」は本來直路の意であり、全意は、わらははかうして傍目もふらずに田を作つてゐるのに、君は二心ありと疑つて、此の雨夜のさ中に、わらはを棄てゝ餘處へ行かれるのが情ない、と云ふのであらう。國持の貴族か大地主でもあらばともかく、しがない農家の一少女に取つて、常陸國にも田を作るといふのは意味のないことである。『源氏物語』の「若紫」には「ひたちには田をこそ作れ」としてあるが、結局同じことで、要するに、これは

常陸の國風ではなく、唯だ路頭巷里に歌はれた催馬樂とすべきものであらう。「彼乃行「奈利高之」など、その他にも此の類が可なりある。また實際に行はれた點から見ても、『枕の草子』が「風俗よくうたひたる」と云つてめでて居り、『源氏物語』が主要人物をして催馬樂、風俗の二つを、似寄りの場合に同じ樣に歌はせて居るのを見ても、二者の間に格別な相違の無かつたことが察せられる。

催馬樂の語義及び字義については古くは、昔國々から大藏省に貢物を納める時に、それを運び行く民どもの口ずさびから起こつたので、馬を催すと書くのは、貢物を負うた馬を驅り催す意であるとする、後白河院の『梁塵祕抄口傳集』や、一條兼良の『梁塵愚案抄』系統の說がある。江戸時代になつては、神樂に前張がある、その拍子にうたふ故に言つたので、サイバラはサイバリの轉であるといふ、賀茂眞淵の說がある。或は本居宣長が『玉勝間』に擧げて居る、催馬樂譜の初めに、「いで我が駒、早く行きこせ」の一首を載せてある、これが馬を催す詞なので、一類全部を總括する名稱とはしたのであるといふ長瀨眞幸の說があり、大槻文彦博士の『大言海』には之れを代表語原說と見做して居る。橘守部はまたこの吾駒と神樂の前張とに二股かけて、サイバラの稱はもと「吾駒」の歌から出たのであるが、その節が神樂に取られる時に、偶々神樂に「さいばり」の歌があつたので、その一種類をサイバリ

と呼ぶことになつたのか、或は神樂の「さいばり」が此の名稱の起原であつたのを、催馬樂では後に「吾駒」の歌の心によつて、文字を催馬樂と改めたのか、二つが中の一つでなければならぬと云つて居る。最も新しくは、高野辰之博士が「催馬樂は馬子歌の意で、唐樂の曲名に摸してこんな名を附したに過ぎない」と云つて居られる。

まことに催馬樂の本質は古說の示すが如く、路頭巷里に歌はれた民謠なので、初めに馬を催すに用ゐられた緣から、「催馬樂」の三字が當てられたものであらうが、サイバラといふ國語の起原は、サキバラヒ(前拂)であつたのではなからうか。馬子どもが長路をいたづく馬を勇氣づける爲めに、陽氣な歌の節で行手の心がかりを拂ひのけ拂ひ却け前途を明るくして行く、その意から、もと前拂ひと云つたのが、後サイバラヒに轉じ、最後に「ヒ」を後略して、學者の文字好みから、「サイバ」に「催馬」を當て、「ラ」に「樂」の字を當てゝ、唐樂めかしたのではなからうか。サイバリがサイバラと轉ずるのは自然でなく、また初めから催馬樂の文字を用ゐたと見るのも空想に過ぎると、吾等は思ふ。

六

國史は奈良の天平時代に於いて、已に宮廷で呂の「新年(あたらしきとし)」

あたらしき、新しき年の始めにヤ、かくしこそ、ハレ、〽かくしこそ、仕へまつらめヤ、よろづ代までに、〽アハレ、ソコヨシヤ、よろづ代までに。

を歌つたことを教へて居るが、原始の催馬樂は此の樣に嚴かな内容を歌つた短歌式のものではなくして、恐らく形式に於いては自由律の、内容に於いては戀愛か、飮酒か、もしくはあどけない戲言(ざれごと)を弄ぶ類ひのものであつたのであらう。例へば、大昔から今日まで連綿と愛で謠はるゝ「更衣(ころもがへ)」の如きが、その一つで、

衣(ころも)がへせんや、サキンダチヤ。わが衣(きぬ)は、野はら篠原(はら)、萩の花ずりや、サキンダチヤ。

譯

衣(ころも)かへませうよ、ネイ愛人(いと)サン。おらが衣(きぬ)はよ、野はら篠原、萩いやぶ、分けて通へば、めちやノヽに亂れ草摺、花ずり衣(ぎぬ)よ、ネイ愛人(いと)サン。

「衣がへ」といふ骨子の一事に絡んで戀情を暗示してゐるところ、實に野趣の掬すべきものがある。或は「庭生(にはにおふる)」の

庭に生ふる、庭におふるか、らなずなは、よき菜なり、ハ

譯

庭に生ひたる、ぺんぺん薺(なずな)、ナンテよい菜よ、おのしやれ姿、ソレ

レ、宮びとンの下ぐる袋を、
おのれ下げたり。

譯

意氣な淑女のハンドバッグを、ちやんと下げとる、ソレ、栞のくせに。

の如き、内容といひ、調子といひ、言はれぬあどけなさは、催馬樂獨得のげに天下一である。それから「酒飲」の

酒をたうべて、たべ醉うて、
たうところんぞや、まうで
來る、なよろぼひそ、まうで
來る。タンナ、〳〵、タリヤ、
ランナ、タリチリラ

譯

飲んだくれ、酒飲んで、醉ッぱらッて、よろ〳〵と、……オ、、ころぶぞよ…… 立ち直り、やッて來る！ ソレころぶなよ……またやッて來る。ピーロレロ、ヨーロヨロ、トッピキピノ〳〵、ピーロレロ、ヨーロヨロ。

の如きも、醉拂が醉歩蹣跚として、轉びさうにしては、立ち直り立ち直り、やッて來る醉態の可笑しさを、惡童どもが笛の譜に合はせて囃す面白さを歌つたのであらうが、無類の味である催馬樂の最も短いのは二句もので、それを繰り返し〳〵て興じたらしい。「眉止自女」は

大御酒わかせや、まゆとじ
め、眉とじめ、〳〵、〳〵、〳〵、
〳〵。

譯

お燗をつけろよ、別嬪年增、別嬪年增、〳〵、〳〵、アッハハッハ。
別嬪年增、〳〵。

醉漢が氣を大きくして、銚子のおかはりを連呼するところでもあらう。奴僕が大旦那の酒癖の口眞似をする可笑しさでもあらう。唯だ二句、しかしながら、その餘韻は無限である。

同じ二句ものに「無力蝦」といふのがある

力なき蝦、ちからなきかへる、骨なき蚯蚓、骨なきみゝず。

これは恐らく、實力なくして高位に居る衣冠の盜人に對する諷刺であらう。或は平生空威張してゐた當路者が、外交や戰爭に後れを取つた卑怯さ、齒痒さ、を笑つたものであらう。もし平生蝦蟇大臣、蚯蚓大將などいふ渾名を取つた大官でもあつて、いくら威張つても、あゝ無力の骨なしではと嘲笑したのであッたら、それこそ天に口なし、催馬樂の作者をして言はしむるの妙味があつたであらうと思はれる

諷刺は催馬樂の作者の最も興味を感じた一面であつたやうに見える　彼等が興味の發展は、おそらく先づ戀愛や、輕い洒落や、酒間の座興などを、馬を追ひ、船を漕ぎ、畑を打つ拍子で奏でることであつたであらう。次ぎには當座の面白い出來事を、簡單な詞で繰返しつゝ、囃し慰むことであつたであらう。次ぎには、何か改まつた場合に、威儀を飾る料として、立派な三十一文字の部分々々を反覆して朗詠することであつたであらう。「安名尊」「眞金吹」「君乎置天」(風俗)の如きは、皆この最後の要求に基づいて歌はれたもので、

あなたふと、今日の尊さや、いにしへも、かくやありけん、けふのたふとさ。

まがね吹く、吉備の中山、おびにせる、細谷川の、音のさやけさ。

君をおきて、あだし心を、
我がもたば、末の松山、
波も越えなむ。

の類は、此の方面の要求から、主として大宮人達が、お馴染の品位高き短歌を取り、雅樂式な外國振の節づけをして、矛盾の調和を悦んだのであらう　而して此の短歌反覆式のものや、雅樂式の悠長な曲譜を持つた歌は、路頭巷里の下層民とは、ずツかり緣を斷つやうになつて、雲上の雅調を夢にも知らぬ民衆は、貫之が『土佐日記』に採錄した舟子等のカヘラヤ節のやうな調子で、櫓柏子、馬追節の鄙歌を歌ふことになつたのであらう。

天治本催馬樂抄（帝室博物館藏）

かくして催馬樂の作者等が最後に達したのは諷刺の心境であつたであらう。彼等は自然に對しても時折此の皮肉な表現を見せたが、人事に對しては更に高き意味なる皮肉の味を見せた。風俗歌の中に「宇婆良古支」といふのがある。「うばらこき」は茨垣の地方詞である。

茨垣の下には、鼬笛吹く、猿かなづ、いなご麻呂は、拍子うつ、きりぎりすは、鉦鼓うつ。

意味は明瞭である。此の歌方言で現はされ、風俗の中に取り入れられてゐるところを見ると、或はある山村の珍奇な光景を歌つたのでもあらう。或は當時の社會人に對して、あてこすりを言つたのでもあらうが、吾等は之れを讀んで、何となくあの高山寺所藏の國寶、鳥羽僧正が動物戯畫の繪卷を見る氣持を感ぜずに居られぬのである。音數の都合で稻子にだけ麻呂をつけては居るが、作者の心では、鼬、猿、蟋蟀の悉くに、それぞれ相當な烏帽子を着せ、相當な直衣か、狩衣かを裝束させて居るのであらう。そしてそれが唯だ一首で數が少なく、從つて量本位の集團的貫祿がないので、一方の勢力とは見られなかつたが、此の同じ調子で群像式に連續描寫を試みたならば作者は歌謠界の覺猷僧正となり、歌は國寶の動物戯畫となつたのであらう。吾等は此の催馬樂の作者の心境が、まさしく鳥羽僧正そツくりであつたと思ふので、彼れ自ら重んぜずして、輕々に唯だ此の珍貴無類な歌の一首を投げ出したことを

惜しむのである。

人事諷刺の面白いのに「老鼠（おいねずみ）」がある。

西寺の、おい鼠、わか鼠、おん裳（ちゃ）つんづ、袈裟つんづ、袈裟つんづ。法師に申さん、師に申せ、法師にまをさん、師にまをせ。

譯

西の御寺の、大鼠小鼠、大事の御裳（おんちゃ）を、嚙（かじ）り居る、かじり居る、大事の御袈裟（おけさ）を、かじり居る、嚙り居る。師の御坊に申さうか、御師の御坊に申さうか。師の御坊に早よ申せ、御師の御坊に早よ申せ。

鳥羽僧正覺猷筆

實際或る大寺に於ける奸佞邪智の役僧共が老若心を合はせての横領振に切齒しての諷刺でもあらう。或は朝廷乃至攝關大臣の家なる惡家司（あくけいし）等の徒黨に對する悲憤の情を、あざれた歌謠に託したのでもあらう。古今東西、いつ何處（いづく）にもある事で、調子に釣られて歌ふ中に、鋭く深く頷かせられるものである。

最後に風俗歌の「大鳥（おほとり）」。

大鳥の羽根に、ヤ

譯

鳥獸畫卷　高山寺藏（國寶）

レナ、霜降れり、ヤレナ。誰れかさ言ふ。千鳥ぞさ言ふ、雀鷄（かやぐき）ぞさいふ、蒼鷺（みとさぎ）ぞ、都より來て、さいふ。

「大鳥の羽根に、オヤ、ほんに霜がおいたわ。」「何？　誰（だ）れだ、さう言つたは。」「千鳥がさういふわ、かやぐきがさう言ふわ、あの大きい蒼鷺（あをさぎ）も、京から來て、ちやんとさう、言ひ居るわよ。」

大鳥は鷲か熊鷹かのつもりであらう。無論象徴の諷刺である　曾て都で羽振を利かした線の太い人物が、田舍に下つて居る中に、いつしか老境に入つて、鬢上に霜華を見る、そして以前輕視してゐた兒輩に侮らるゝ末路を諷じたのであらう。組織は三段の對話から成立つてゐて、先づ或小鳥が來て、「成程大鳥殿も老いたな」といふ。大鳥が聞き咎めて、「何？　誰がそんな事を言つた？」と詰ると、小鳥がなぶるやうに「千鳥が云つたわ、かやぐきも云つたわ、都から來た蒼鷺さへも、さう言ッてたわ」

と答へたといふ問答の味である。「都より來て」の一句が、意義に重さを添へ、句に變化をつけ、而して諷刺の本旨を力强く暗示してゐるところが、殊に面白い　此の風俗歌は江戸時代の狂歌の諷刺、例へば太田蜀山が一世の中にかほどうるさきものはなし、ぶんぶといひて夜もねられず」の類に比べて、一段高き位と味とを持つてゐるが、作者の無自覺から、わづか三四首の同類を見るに止まつて、遂に一方の勢力とならなかつたのは、實に惜しむべきことであつた。

此の「大鳥」は一段もので、その中に問答を含めて居るが、催馬樂にも風俗にも段と段と相對して問答になつて居るのが可なりあつて、一種の異彩である。『萬葉集』の問答式長歌などから緣を引いて居るのであらう　例へば名高き「東屋」の

一段

あづまやの、まやのあまりの雨そゝぎ、
われ立ちぬれぬ、そのとゝのど開かせ。

二段

かすがひも、とざしもあらばこそ、この
殿戸、われさゝめ、おし開いて來ませ、わ

譯

あづまやの、/＼、軒の先きの雨落ちに、立ちつゞけて、ぬれてゐる、早うその戸開かしめ。

かすがひも、鎹も、あらばわたしが、かけもせう、堂

れや人妻。——々とあけて通らせ、人の妻でもあるまいに。

の類ひであるが、この問答相對が催馬樂、風俗に劇的の味を加へ、兼ねて解を分ける複式組織の味を加へてゐるところが、見のがされぬ味である。

催馬樂は複雜な趣味を兼ね具へた、謙遜な、そして不遇な歌謠であつた。彼等は文學と音樂とに兩股かけて、いづれからも外樣扱ひされ、時としては附屬物扱ひされた。幇間のやうに上流に愛でられ、一流の大文學に調法されながら、その一首だに作者の名を伴はされたものがなかつた。これは恐らく當時の社會も、文人も、催馬樂の作者みづからも、盲目的に短歌に淫して、通俗的、音樂的の傾きある歌謠に目を開かなかつたからであらう。けれども催馬樂の價値と趣味とは、形式に於いても内容に於いても偉大であつた。形式に於いては、五五、七七、五七、七五（廣くいへば短短、長長、短長、長短）の各句形を縱横に用ゐ、その間に各句の反覆、拍子詞の挿入等、いろ〳〵のあしらひを見せて、句形に千變萬化の妙趣あらしめた。内容に於いては、短歌系の正しい固い、改まつた禮容に對峙して、知的情的に、いろ〳〵のくつろいだ曲味を見せた。それにも拘はらず王朝四百年の長きにわたつて第二義的な日蔭の存在をつづけたのは、彼等に取つて實に氣の毒な事であつたと云はねばならぬ。

けれども、事實に於いて催馬樂及び催馬樂系の歌謠の價値と趣味とは、廣く深く且つ大き

い。次ぎに述ぶる和讃今様を加ふることによつて、吾等は更によく其の大いなる意義を知ることが出來る。

七

同じく平安朝に於ける惑星歌群の觀がありながら、小柄な姿をして一首も作者の名を知られぬ催馬樂、風俗、神樂等とは異つて、堂々たる體形を具へ、一首毎に一代名流の作者名を帶びて居る歌謠は倭讃である。倭讃は梵讃が梵語を以て佛乘を讃歎し、漢讃が漢土の言葉を以て佛乘を讃歎したのに對し、和語を以て佛乘を讃歎したる歌謠である。和讃の題材は主として佛法僧の讃歎であるが、中には個人の述懷や、哀れな俗界人の身の上物語に關するものなどもあつた。作者は行基、空海を始めとして、慈覺、慈慧、千觀、恵心、一遍、法然、等で、之れに鎌倉期の親鸞、遊行、日蓮等を加へるならば、讀者はまづ此の特殊の歌謠の堂々たる陣容に驚かれるであらう。倭讃は國文學史に於ける三つの最大級の誇りを持つてゐた。その第一は、作者に多數の巨人を持つてゐることである。第二は、最も長き句數の長篇を持つてゐることである（明治以前では）。第三は七五調一相から成立つ最初の歌謠を創製したことである。

此の三つの最大級を有つて居りながら、時の文壇に雄視せずして、遂に一種の惑星歌群たるに終はつたのは、何故であるか。外ではない、第一には、宗教を第一義として、文學を第二義としたからであつた。第二には、梵語、漢語を濫用して、國語本位の純粹にも、精練にも、留意しなかつたからであつた。吾等は此の偉大なる不幸な歌謠について、左にその由來、變遷の大略を述べるであらう、而してその發達の中途から、感情本位、文學本位、國語本位、緊縮本位の潜在意識から、「今樣」の支生した謂はれを述べるであらう。尚ほ此の研究について、吾等は高野辰之博士の纂蒐された『日本歌謠集成』に對して感謝をさゝげねばならぬ。殊にその卷四の中なる「古讃集」は博士が甚大の努力に成つたもので、吾等が王朝の古倭讃に對して鳥瞰的考察を加へることが出來たのは、實にそのお蔭であつた。

八

和讃は行基菩薩の「百石讃歎」及び「法華讃歎」に、その源流を見出だしたと云はれる行基は聖武朝に榮えた聖者であるが、その歌の姿はいかにも奈良朝の眞盛りを上るとも下らぬもののやうに見える。叡山所傳の「百石讃歎」は左の如く、

百石に、八十石そへて、給ひてし、乳房の報い、今日ぞわがするや、今ぞわがすや、
今日せでは、いつかはすべき、年も經ぬべし、さ代も經ぬべし

といふので、乳房に寄せた、母恩讃であるが、この形式は短歌に次ぐに片歌を以てしたもので、尙ほ之れに加ふるに、佛足跡歌、式催馬樂式の繰返を以てしたものである。此の讃の反覆部を取り除いて、中心骨子の部分だけを殘すと、

百石に、八十石そへて、
賜ひてし、乳房の報い、
今日ぞわがする。（五句の短歌）
今日せでは、いつかはすべき、
年も經ぬべし。（三句の片歌）

となるが、これは記紀時代に榮えて、已に神代からあつた形式で、二人の詠み繼ぎでは、大久米命と神武天皇との問答なる、

やまとの、高佐士野を、
七行く、處女ども、
誰れをしまかむ。（大久米命）

かつがつに、最さきだてる、
　愛をしまかむ。（神武天皇）

があり、一人一首のものでは、仁徳天皇の

八田の、一本菅は
　手持たず、立ちか荒れなむ、
　　あたら菅原。
　言をこそ、菅原といはめ、
　　あたら清女。

の如きがある。思ふに、此の「百石讃歎」の先祖和讃は、此の古調を基本とし、短歌、片歌の最後の一句を、いささか變へて繰返して、佛足跡調の味を見せたのであらう、そして其處に神樂催馬樂式の一種の變はつた味が出來たのであらう。

今日ぞわがするや、今ぞわがすや。
　年も經ぬべし、さ代も經ぬべし。

尤も佛足跡の歌の形式は神代からあり、「萬葉集」にもあつたので、奈良朝に創試されたものではなく、それが唯だあの物々しい由緒の碑面に、同調の二十一首が賑やかに立ち並ん

だので、一種の權威となり、同時に當代に於ける流行を思はしめるのであるが、彼れ是れ考へ合はせて、和讃が神代大昔の古調を帶びながら、奈良に行はれた最後の一句反覆の味を加へしかも神樂、催馬樂の味を見せて居る所を見ると、之れを行基の作として聖武朝の前後に出來たと見るのが、いかにも妥當なやうに思はれる。「法華讃歎」は

法華經を、わが得しことは、薪こり、菜摘み水汲み、仕へてぞ得し、仕へてぞ得し。

といふので、これは單に短歌の最後の一句を繰返した佛足跡式の歌、或は神樂、催馬樂化された短歌ともいふべきものであつた。

以上によつて、奈良朝に於ける原始期の和讃が、大體短歌、片歌の形式を基本として、之れに最後の一句反覆の味を加へたものであつたことが想像される。從つてその時代の和讃は五七調をも七五調をも含んではゐたが、それは奈良朝の短歌に見るが如き、まだ際立たぬ五七、七五で、もはや純粹の五七調でもなく、同時に徹頭徹尾一相の七五調でもなかつたことが想像される。

徹頭徹尾の七五調を見せて和讃の面目を一新したのは、弘法大師の「いろは歌」であつた。

色葉にほへど、散りぬるを、わが世たれぞ、常ならむ。

有爲のおく山、今日越えて、淺き夢見し、醉ひもせず。

「いろは歌」は和讃とも今様とも稱せられる。行基に次ぎ、慈覺と並んで、佛の教旨を讃歎した歌であるので、和讃とは呼ばれたのであらう。用語句作りが和讃には珍しく純國風で、(外國語は有爲の一語だけ) 後世盛んに行はれた今様に見る七五、四聯の形式を美しく備へてゐるので、和讃とも呼ばれたのであらう。此の「いろは歌」はまた今様七五の形式が連續的に見事に成立つてゐること、その他多くの理由によつて空海の作でないとも見られるが、主として『凌雲集』に載せた仲雄王の「謁海上人」と題した詩句に「字母弘三乘、眞言演四句」とあるのによつて、やはり大師の作と見るのを妥當とすべきであらう。七五調の見事な整ひぶりについては、時代の前後を見わたして、いかにも尙早の感がないでもないが、已に同時代の慈覺の長い和讃に七五調のかなりに調つた例があり、素尊の「八雲立」の歌が、最古に成つて、しかも最新の趣を見せてゐる處を見ると、「いろは歌」についても、やはり此の新時代の新らしい調子が、此の天才沙門の頭腦に閃いて、此の超時代的な國寶歌謠を産んだとも見るべきであらう。

準舊式な句法の行基の作と、斬新を極めた空海の作とについで現はれた和讃は、叡山第二世、慈覺大師の「舍利讃歎」であつた。「舍利讃歎」は三段七十二聯、細かにいふと、百四十四

句から成立つて居る。その初段は

　佛の御舍利は　遇ふこと難しや、敬ふこと難しや。一度も遇ひて　誠心に拜めば、惡趣をぞ永く離るゝや、淨土にぞ早く生るゝや。無量劫を經しかども　未曾にも遇はざりき、今日ぞ我が遇へる、今日ぞ拜み奉る。見る人聞く人悉く、近きも遠きも諸共に、佛の道に入りはてぬ、聖の位に定まりぬ。釋迦如來照らし給へ、彌勒慈尊鑒み給へ。

といふのである。まづ自由律ではあるが、おもなる調子は八八、八七といふが如き長長格に折々七五調を交へたともいふべきもので、殊に著しい特色は初めの三句を續ける事と、後の句を繰返すこととである。例へば

　佛の御舍利は遇ふこと難しや
　　敬ふこと難しや。
　一度も遇ひて誠心に拜めば
　　惡趣をぞ永く離るゝや
　　淨土にぞ早く生るゝや

の類ひで、初めの三句を繫ぐのは、萬葉以來の短歌の上の句五七五を繫ぐ傳統を承けたので

の後句反覆式を承けたのであらう。後の句を繰返すのは、佛足跡、或は、「百石讃歎」の後句反覆式を承けたのであらう。而して折々に見える七五調、例へば「見る人聞く人、ことごとく、近きも遠きも、もろともに、佛の道に、入り果てぬ」「寶の山に、登る人二「深き智惠こそ、難からめ」二わづかに人と、生れては」の類は短歌の、殊に「いろは歌」の影響を蒙つたのであらう。要するに、慈覺の「舍利讃歎」は、主として短歌及び「百石讃歎」を承けつゝ、三句連絡と、同句の反覆と、及び八八、八七の如き長長格の中に七五調を交へる事とを、句格上の特色としたので、まづ往を繼ぎて來を起こす、といふ、此の時代に相應はしい役目を勤めた作といふべきであらう。

降つて慈慧大師の「註本覺讃」「千觀阿闍梨の「極樂國彌陀和讃」に至ると、吾等は、空海が短章八句の中に遠き將來の横範を示し、慈覺が長篇の處々に手近な將來の進路を見せた七五調が、立派に成熟して、もう完全形の七五長篇が出來あがつてゐるのを見出だす。この二高僧の二作品は、新格式成就の點から見て、ほゞ發展の同じ程度に達したものであるが、慈慧の作が佛語そのまゝの挿入が多く、例へば

歸命本覺　眞法身　常住妙法　心蓮臺
三身萬德　備はりて　三十七尊　住み給ふ。

の如く、ぎごちなき文句が多いのに對し、千觀の作は比較的國語らしく和らいでゐる點に於

いて、一歩を進めたものと見るべきであらう、千觀の「極樂國彌陀和讃」は一段組織の六十八聯、百三十六句から成立つてゐるが、最初の

婆婆世界の　西の方、　十萬億の　國過ぎて、
淨土はありつ　極樂界、　佛はいます　彌陀尊、

から、最後の

大悲我等を　捨てずして、　三途の苦しみ　拔き給ふ、
歸命頂禮　彌陀尊、　極樂界會の　能化の主、
たとひ罪業　重くとも　引攝かならず　垂れ給へ。

に至るまで、多少の字餘り、字足らずはありながら、まづ立派な七五調と云つてよい。やがて千觀阿闍梨と殆んど同時に、少しく後れて、源信僧都卽ち謂はゆる惠心僧都が出で、多くの大作を撰して、此の特殊の宗教歌謠を大成したが、教旨具體化の風致と藝術的手腕とを別にして、七五調完成の點から見れば、金龍寺の千觀、慧心院の源信、まづ殆んど同功と云つてよいであらう。そもそも和讃は奈良朝のなかばに起原したが、句格の上から見れば、それは唯だ神代以來久しく傳はつて來た短歌と片歌とに、曲譜上の變化を加へただけのものであつた。それが歌謠として句格の上に著しい特色を見せたのは、空海の「いろは歌」からで、先づ純

七五調の短章が出來、つゞいて慈覺の三句連絡や長長格の中に七五の芽生を含んだ長篇が試みられ、次ぎにかなりの年月を隔てゝ、慈慧、千觀が出でて七五調を完成し、やがて惠心僧都が更に之れを大成して、此の歌謠界に於ける空前絶後の偉觀を現じたのであつた。　之れを年代的に辿ると、弘法大師が「いろは歌」を作つたのは高野の寺開きの折であつたとして、嵯峨天皇の弘仁七年頃（一四七六）であつたであらう。　慈覺大師が「舍利讃歎」を作つたのは、大師が唐から將來した佛舍利供養の最初の折であつたとして、それより四十餘年後なる清和天皇の貞觀二年頃（一五二〇）であつたであらう。　最後に慈慧大師、千觀阿闍梨、及び惠心僧都のつぎ／＼に筆を染めたのは、村上天皇の應和頃（一六二二）から圓融花山兩朝を經て一條天皇の長保寛弘の頃（一六六七）までであつたとして、又およそ百年を經てからであつたであらう。　かう見ると、長篇の和讃が徹頭徹尾七五調になつたのは村上朝頃からであつたらしいが、同時にいろは歌式なる四聯八句の短い和讃が盛んに作られ、歌はれたのも、凡そ其の時分からであつたであらうと思はれる「今樣」の語が始めて物に見えたのは、「枕の草子」の「歌は」の條に、

うたは杉たてる門。　神樂歌もをかし。　今樣は長くて癖づきたる。　風俗よくうたひたる

とあるのであるといふが、それが一條朝の初めに、あのやかましい趣味家の清少納言から新名稱のもとに賞でられるまでになつてゐたのを見ると、その可なり長い前から和讃とは引き離して歌はれたのであらうと想像される。而してそれが何の爲めに和讃から引き離され、異つた名稱のもとに、異つた歌ひ方をされたかは、明らかでないが、恐らく和讃の方に段々いろは歌式の短いものが行はれるやうになり、短い物が盛んに行はれる中に、その中の宗教味が少なくして世俗式の人情味に富み、佛教語が少なくして親しい國語の多いのが、高野、大原あたりで歌ふ聲明式のとはすッかり違つた當世ぶりの俗樣に歌はれ出したのであらうそしてそれが久しく繰返される中に、いつしか違つた名稱をもつ別流の歌謠となつて、俗間宴遊の翫び草とはなつたのであらうと思はれる。然らば相變はらず和讃として歌はれた八句の短いのが如何なるものであつたかといふと、是れも今から明らかに知るべくもないが、恐らく後白河院の御纂輯に成つた『梁塵祕抄』の卷二に載せられた法文歌のやうなものであつたであらう。それは例へば

彌陀の誓ひぞたのもしき、十惡五逆の人なれど、一たび御名を稱ふれば、佛になるとぞ說い給ふ。

釋迦の御法は唯だ一つ、一味の雨にぞ似たりける、三草二木はしなじなに、花咲き

實なるぞあはれなる。

や、或は卷中第一の作かと思はれる

佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え

給ふ。

の類ひであつたであらう、そして是等に對して、同じき『梁塵秘抄』の

住吉四所の御前には、顏よき女體ぞおはします、男は誰れぞと尋ぬれば、松が崎な

る。好色男。

頭に遊ぶは頭虱、項の窩をぞ極めて咬ふ、櫛の齒より天降る、苧桶の蓋にて命終は

る。

といふ類ひや、或は『平家物語』に祇王が歌つたと書いてある。

蓬萊山には千年ふる、萬歲千秋重なれり、松の枝には鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ。

といふが如き祝賀ものや、德大寺實定卿が荒れ果てた舊都を訪うて歌つた

ふるき都を來て見れば、淺茅が原とぞなりにける、月の光はくまなくて、秋風のみ

ぞ身にはしむ。

といふが如き哀情ものなど、總じていふと、佛敎に關係しながら艶情を含んだものや、祝賀、戀

愛風景などに關したものなどが、「今樣」の名の下に、特に親しまれて遊興を添へる料になつたものであらうと思はれる。言ひ換へると、佛教的よりも文學的のもの、殊に短いものが悅ばれるやうになり、此の要求に合つた和讚が節附まで別に施されて、こゝに「今樣」といふ新歌謠が出來たのであらうと推考される。

八

和讚を大成して空前絕後の偉觀あらしめたものは、惠心僧都であつた。彼れの和讚には、信仰があり、救濟があり、悅樂がある上に、文學があり、脚色があり、繪畫があり、劇があつた。彼れに「天台大師和讚」「來迎和讚」「二十五菩薩和讚」、その他多くの長篇があつたが、最も長くして最も優れたのは「極樂六時讚」といひ、或は、「淨業和讚」とも稱せられるものである。「極樂六時讚」は六章、十六段、千七百數十句（七、五を二句と算へて）より成る空前絕後の長篇和讚である。大要は、一日を晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の六時に分けて、勤行をする時に、至心に信仰して「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀」と稱へると、極樂の諸相が髣髴と眼前に浮かんで來る。その極樂の諸相を六時に配して、七五調で寫し出だし、一時の幻想の終はる毎に、

惠心僧都自贊像　（近江來迎寺藏）

願共諸衆生　往生安樂國　願共諸衆生　値遇彌陀尊

と稱へ、また南無阿彌陀佛を七遍稱へ畢はつて、次ぎの一時に移るといふ趣向で、要するに、かやうな脚色のもとに、極樂の莊嚴微妙なる光景を選擇して六群に結束し、之れを六時に分配して、文學的には彼岸の理想境を目の前に思ひ浮かべしめ、教化的には往生極樂の信仰を深うせしめようとしたのが、此の「六時和讃」である。

その趣は、先づ「晨朝讃」には、南無阿彌陀佛を數遍稱へて、西方の虛空を遙かに望むと、大光雲が山の如くに起こるであらう、而して、

まづは教主世尊の　御前に參りさぶらへば、
始めて定より起ち給ひ、　體相威儀いつくしく、
紫磨黃金の尊容は　秋の月の曇りなく、
無數の光明あらたにて　國家あまねく明らけし、
宮殿樓閣よろづの色　互に照らし輝けり、
朝の日の雲を出て　遙かに照らすが如くなり、
左右の觀音大勢至　一切聲聞賢聖衆、
たふとく御顏を瞻仰せむ、

などとある。「日中讃」の中には、食後の散歩の樂しさを寫して、

飯食すでに終はりては　座より立ちて經行し、
多くも少しも己がじし　處々に徘徊遊戲せむ。
七重寶樹の風には　一實相の理をしらべむ、
八功德池の波には　無生滅の義をとなへむ、
こがねの濱よりあゆめば　鳧雁鴛鴦なれたり、
玉のうてなに赴けば　孔雀鸚鵡したがへり。

など云うてある。かやうに念佛を稱へ、經文を誦じては、極樂淨土の佛菩薩を、宮殿樓閣を、微妙の音樂を、珍貴なる草木花鳥を、幻に見つゝ、此の徑路を六たび繰返して、毎日六度づつ、眞の極樂往生の準備生活を味はへる。是れが恐らく惠心僧都の此の和讃の根本中心の意義であらう。

惠心は極めて聰明な、謙抑な、同時に向上の念に燃え、慈悲の情に富んだ高德の沙門であつたが、彼れに於いて殊に珍らしいのは、事理を綜合して考へる事と、空想幻化の創造力に富んで居る事とであつた。彼れは幼孩の折に、或人から、「數の名が、一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、六ツ、七ツ、八ツと、みんな「ツ」が一つだけ附いて居る中に、五つだけに、「ツ」が二つ附くのは、どうい

ふ理か—と尋ねられたが、卽座に

「それはね、をぢさん。一ツから九ツまでは、みんな後に一ツ—がついてゐるのに、十にだけ附いてゐないんダロ。だから、後の十の分を取つて、一イツヽ—と二遍云つたノサと答へて、聞く者に舌を卷かせたといふことである。彼れはまた幼い時に、高尾寺の寶藏で澤山の鏡のあるのを見たが、坊さんが、その中から小さい曇つた鏡を取り出して與へると、彼れは—こんな小さい暗いのを、どうするんだね。ソッちの大きい明るいのを頂戴よ—と云つた。坊さんは—何、此の鏡を横川へ持つて行つて磨くんだよ—と云つた、といふ夢を見た彼れはその時横川が何處にあるかも知らなかつたが、他日叡山に登り慈慧大師に謁するに及んで、始めて夢の意味を理解したと云はれる。更に『元亨釋書』の傳へる所によると、彼れは臨終の床に高足の慶祐を呼んで云つた。今天童が二人來て、—彌勒さまからお迎へのお使にまゐりました—と云つた。見ると、その後ろに數萬の天人衆が從いて來たが、私は「兜率天に登つて彌勒菩薩にお目にかゝるのは、まことに難有いが、しかし私には平生阿彌陀樣にお目にかゝりたいといふ本願があるんだ。それでまづ安養界へ往つて、阿彌陀樣にお目にかゝつて、それから、屹度彌勒樣へ御挨拶にあがるからね。さう宜しく申しておくれよ—といふと、二人の天童が頷いて昇天したが、間もなく觀音菩薩が、雲に乘つて、アレあの通

り來て下さつたよ。これで願が叶つて安心したところだ。悦んでおくれ」と云つたといふことである。彼れが物を纏めて見る力の優れてゐたこと、具象的創造力に富んでゐたこと、一日、惝怳し、憧憬すると、すぐにそれを現に見る幻想力が、恐ろしく强かつたことが、これでも解る。彼れは此の統一力と、幻想力とを以て、幻に見たるがまゝに、あの「聖衆來迎之圖」を畫いたのであらう。あの地獄極樂の有樣をまざ〳〵と寫した『往生要集』を撰じたのであらう。『往生要集』は鴨長明が『方丈記』で「抄物」と云つたので、多くの人から經文の唯だの拔萃のやうに思はれてゐるが、事實は諸經文の萃を集めて、立派に取り纏めたものである。その集めた萃に各〻處を得させつゝ、漢文の名句をも引き、自家の創意をも加へて、魂を吹き込んだ一種の創作である。彼れは要集の中に、

一目之羅不能得鳥、萬術助觀念成往生大事。

と云つて居るが、この大切な觀念を助成する萬術の中のおもなる一つとして、あの地獄極樂の有樣を如實具體に見る點に於いて諸經典も及ばぬ創意の述作を企てたのであらう。而して彼れは『往生要集』の中の地獄極樂の光景をば、實際幻

惠心僧都筆

聖衆來迎之圖（高野山藏　國寶）

に見つゝ書いたのであらうが、此の『極樂六時和讚』は、その中の極樂の部から更に萃を擇りぬいて、一日の六つの時刻に配しつゝ、新興歌謠の和讚とはしたのであらう。すなはち惠心僧都の「極樂六時和讚」は、智的に構案され、机の上で精練された世間並の文學ではなくして、聖者が深き信心の極、まのあたり見てゐる現象と實行とを、文字に託して、世の佛子等に悅びを頒かたうとしたものである。

「極樂六時和讚」は他の和讚に比して遙かに詞藻の美に富んでゐた。他の和讚が多く佛菩薩を讚し、經典を讚し、特殊の心境や教訓を述べて居るのに對して、一日六度の勤行に極樂の光景を配し、更にその一章々々に念佛、叙事、叙景、垂訓を按排して、變化の中に統一のある一種の構圖を見せた

他の和讃が多く說理、叙事に傾いてゐるのに對して、記述したる光景を繪のやうに見せる力がある。他の和讃が多く一事一景を寫してゐるのに對して、舞臺が變轉する間に種々の人物風景の立ち變はる趣がある。吾等が此の和讃に對して、文學があり、脚色があり、繪畫があり劇があると云つた意味は、これで理解されるであらう。

『極樂六時和讃』と『往生要集』とを並べて見て、吾等の聯想するのはダンテの『神曲』である。惠心僧都は三藏並び窮めた教界の偉人で、藝術の豐かな天賦を持つてゐた。已に『要集』に集めただけの豐富な資料をもち、『六時和讃』に現はしただけの立派な詩才をもちながら、どうして二つを捏ち合はせて、『神曲』のやうな大規模の、而して宗教に囚はれぬ文學を作つてくれなかつたのであらうか。思ふに、その理由の一つは、彼れが常に宗教界といふ一種の象牙の塔に閉ぢ籠つて、之れを脫出することが出來なかつた爲めで、もう一つは前に好き暗示を持たなかつた爲めであらう。もし彼れの前に、せめて『神曲』や『失樂園』の卵ともいふべき宗教文學の暗示があり、彼れに佛教徒及び佛教語の殼を破る勇氣があつたならば、我が上世に於いて、已に桑門のダンテ、ミルトンを見ることが出來たであらうにと、彼れの餘りに專門過ぎた名作を見る毎に感ずる吾等の遺憾は、これである。

惠心僧都筆　聖衆來迎之圖（國寶部分）　（高野山金剛峯寺藏）

九

吾等は先きに、和讃がもつ最大級の三事として、作家に偉人群を有つこと、七五調を完成したこと、及び最長の分解長歌を有つことの三つを數へた。初めの二つは如上の略說によつて明らかにされたであらう。吾等は次ぎに第三の最大級を說かねばならぬ。

『古事記』『日本紀』の歌謠に於ける最も長き作は、大國主命が須勢理媛命に與へられた四十九句であつた。『萬葉集』に於ける最も長き作は、柿本人麻呂が高市皇子を悼み奉つた百四十九句であつた。また古今に通じて最も長き長歌は、奈良の興福寺の大法師等が仁明天皇御四十の寶算を賀し奉つた三百十句の大長歌であつた。千七百餘句を有する惠心僧都の極樂六時の和讃が、是等に比べて遙かに長いことは云ふまでもないが、此の和讃に取つて、特に珍らしいのは、大國主命、柿本人麻呂、興福寺の大法師等の作が、皆、一解一スタンザの長歌、即ち段切なしにつゞく單式開展の長歌であつたのに對して、六時の和讃が多くの解を切り、スタンザを切つた複式開展の長歌であつたことである。

そも〳〵長歌には、解、スタンザを切らずに、初めから終りまで一息につゞける單式開展の

ものと、解、スタンザを切りつゝ、一篇を幾つかの段落に區分する複式開展のものとがある。記紀の歌謠には、總數約七十首の長歌の中に約二十三首の複式があつた。『萬葉集』には總數二百六十餘首の長歌の中に、辛うじて九首の複式があつた。總じて我が上代の長歌には、のべつに詠みつゞける單式が多くして、分解の複式に乏しき傾きがある。『萬葉集』を境として、長歌の大いに衰へたのは、一つは此ののべつ幕なしに續ける長段落の長歌に、讀者が倦怠を感じた爲めであらう。平安朝の長歌も、歌集に收められたものと、物語、日記及び歴史の中に挿入されたものとに通じて、殆んど悉く單式開展のひたつゞけであつた。また神代以來の複式長歌に、於いて殊に貧しさを感ずるのは、その解、段落の數の少なきことである。彼等の最大多數は唯だ二解より成立つものであつた。三解四解は恐らく二三首に過ぎなかつたであらう。催馬樂、風俗歌の段分を、假りに一つの解と見ても、四段五段は極めて稀れであつた。長門本の『平家物語』には無官大夫敦盛の作として、四解より成る左の七五調の長歌を擧げて居る。

櫻梅桃李の　春の初めに　なりぬれば、　すに囀る　鶯の、
　野邊になまめく　心地して、　野徑の霞の　あらはれて、
　そともの櫻　いかばかり、　しげく咲くらむ　八重櫻。

九夏三伏の　夏の天にも　なりぬれば、　藤波いとふ　ほとゝきす
夜な〳〵篝火　下もえて　忍べる戀の　心地する。
黄菊紫蘭の　秋の晩にも　なりぬれば、　垣根にすだく　きり〴〵す
荻の上風　身にしみて　妻戀ふ鹿の　恨む聲、
白菊黄菊　とり〴〵に、　龍田の紅葉　色かへて、
唐錦とや　まがふらむ、
玄冬素雪の　冬のそらにも　なりぬれば、　谷の小川も　氷柱ゐて、
みな白妙に　なりにけり、　名殘惜しかりし　故さとの、
木々の梢を　ふりすてゝ　萬里の波濤に　身をまかせ、
今は攝津國　難波のほとり、　一の谷の　苔の下に、
うづもれむ。

これは明らかに四解五十五句から成立つ複式の長篇で、敦盛自身の作か、或は長門本の筆者その他の詞人が假託の作かにかゝはらず、平安朝の末期を飾るべき異例の作であるが、當代の歌謠界に於いて、是れ以上の鮮かな段切を見せた作がなく、また和讃の方に於いても二解乃至三解以上の複式味を見せた作の全く無かつた時代に於いて、全體が六章より成り各

々の一章が二解もしくは三解から成立つて居るのみならず、總計千七百數十句を含む惠心僧都の大長篇「極樂六時讃」を見たのは、驚くべきことと云はねばならぬ　殊にそれが一日六回、それ〴〵の時刻に、念佛讀經しては、次ぎ〳〵に極樂淨土の幻想を樂しむといふ一種の夢幻劇的趣向を加味して居るに至つては、實に時代を超越した破天荒の作ともいふべきであらう

思ふに惠心僧都が他の和讃の作者等と同じく、香華念佛界ともいふべき一種の象牙の塔に籠もり、竺唐織り交ぜの宗派詞による傍若無人の表現をつゞけた結果が、おのづから文壇との交渉を稀薄ならしめたのは惜しむべきことであるが、とにかく佛教流布のあの時代に於いて、貴族社會一般の信仰を導きつゝ、彼等の憧憬する極樂の諸相を六分して、繪卷の如くに展開し、しかも章段の立派に分かたれた千數百句の長篇詩を成したのは、明治以後の長篇新體詩を思はせ、西洋諸國の長詩を思はしめるもので、歌謠界の驚異とすべきである。

惠心僧都以後、永觀律師、珍海已講、信西入道（藤原通憲）、櫻町中納言（藤原成範）等が、それ〴〵に長篇の和讃を遺したが、教義の研鑽に專念して源平の爭亂を知らなかつたといふ比叡の學僧、寶池坊證眞の「慈慧大師和讃」や、王朝末期から鎌倉期にかけて、新教の弘布に不惜身命の活動をつゞけた法然上人（源空）の「涅槃和讃」などを以て、先づ王朝和讃の最後を飾つた

ものと見るべきであらう　而して「涅槃和讃」が釋尊入滅の有樣を寫して

時に廬頭大尊者　悲歎の聲を擧げつゝ　十二由句に充ち滿つる、衆會に告げて悲しまく　大疊世尊は只今ぞ、事切れ果て給ひぬと、大衆尊者の音を聞き　各〻大地に倒れ伏し、或は金の棺を見て、佛の御前に消え入りぬ、或は大河に身を投げて、波に交はる人もあり　或は衣を裂き捨てゝ、威儀を忘るゝ人もあり　或は手に手を合はせつゝ　大地に倒るゝ人もあり　或は聲を擧げつゝ、佛を呼ぶ人もあり　或は髻を拔きすてゝ　虛空に投ぐる人もあり　或は音も出ださずして、坐禪の牀の如くなり　或は淚も出ださずして、醉へる者の如くなり　或は自ら手を握り、合掌踞跪の如くなり　或は叫んで山に入り、或は泣く〳〵野邊に出づ、羅睺羅は佛の後にて、解脫の袂をしぼること、則ち母に別かれたる　幼き者の如くなり……

と云つてある如きは、印度式佛教式の誇張的累積辭を最もよく學び移した例を見せたものであらう。

一〇

奈良朝に於ける芽生當時の和讃は、短歌や片歌の處々を繰返して特別な節附を加へたものであつたらしいが、平安朝の初めには、いち早く七五調八句の謂はゆる今樣式が出來たらしく思はれる。その後長篇の和讃が、代々の高僧達によつて次ぎ〳〵に作られた。而してその間に、今樣式の八句物も數多く作られ、歌はれたらしく想像されるが、その內容は恐らく「いろは歌」類似のもので、それらの中、王朝末期まで歌ひ傳へられたものが、後白河院の叡慮にかなつて、『梁塵祕抄』の法文歌などに跡を留めることになつたのであらう。而して彼等の中、佛法味よりは俗情味の勝つたものが、段々和讃本部から引き離して取扱はれる中に、いつしか節附までが特別に施されて、俗界の遊樂に伴はれるやうになつたのであらう。而してまた新しい今樣の有つ國風（くにぶり）の調子の面白さに引かれ、佛法本位なる七五調八句の和讃をも同じ國風の調子に歌つて、「今樣」とも云つたものであらう。

今樣はその名稱を『枕の草子』や日記、物語などの中に見出だすだけで、その作は概ね鎌倉期の『平家物語』や『源平盛衰記』などの中に、斷片的に見出ださるゝだけであるが、その集團的に纏められたのは、『梁塵祕抄』に於ける和讃その他と取りまぜての纂錄を外にしては、恐らく『唯心房集』の中の「今樣」五十首があるのみであらう。唯心房は『大鏡』の作者に擬せらるゝ藤原爲業（ためなり）（寂念）の弟で、名を賴業といひ、法名を寂然と云つた。五十首の

中には、朗詠や古今の歌などを繹案したものや、花月の風流や戀愛などを歌つたものもあるが、主としては無常を歌ひ佛乘を讃したものである　作者の性格の發露であらう、温雅の風致に富んで氣品は高いが、愛嬌や氣魄に乏しく、人を打ち、或はほろりとさせる所の無い憾みがある。

柳さくらを　こきませて　花の都ぞ　錦なる、大宮人は
いとまあれや、今日もかざして　暮れにけり。

あるかなきかの　世の中を、何にかたとへて　おもふべき、
岩もるしみづに　宿りつゝ、むすべどとられぬ　月のかげ。

さてもその夜は　君や來し、我れやゆきけむ　おぼつかな、
夢かうつゝか　たどられて、思へど〳〵　あさましや。

無常おもはぬ　人ばかり、哀れはかなき　ものはあらじ、
雪の山なる　鳥だにも、今日かあすかと　啼くとかや。

『梁塵祕抄』の中に採り入れられた句餘りの破格物は、おそらく今樣を基本としてそれに風變はりな調子を添へようとしたので、その相對は恰も短歌に對する神樂歌、催馬樂の如く、その相違は唯だ神樂、催馬樂が短歌の調子を基本としたのに對して『梁塵祕抄』の破格物は、あくまで今樣の七五調を基本としたところにあるやうに思はれる　彼等の中には、一句を唯だ拍子の代はりに用ゐたやうなものもあつた　例へば

近江の湖は海ならず、天台藥師の池ぞかし、何ぞの海、常樂我淨の風吹けば　七寶蓮華の波ぞ立つ。

の四句神歌の中で、「ナゾノウミ」は催馬樂に於けるハレ、アハレ、ソコヨシヤ、サキンダチャなどの拍子詞の役廻りをしてゐるのであらう。或は雜の歌の

我れをたのめて來ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ。さて人に疎まれよ　霜雪霰降る水田の鳥となれ　さて足冷かれ　池の萍となりねかし。と揺りかう揺り揺られ歩け

の如きは、その基本部は「我れを頼めて來ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、雪降る水田の鳥となれ、池の浮草となりねかし」といふ今樣八句の部分で、あとは前なる「ナゾノウミ」と同じやうに、前部の基本句に對する愛嬌の添詞を、拍子式に加へたのであらう　かう見ると、現在幸存の『梁塵祕抄』はわづかな短歌の一部を除いては、大體廣き意味に於ける「今樣集」

と云つてもよいもののやうに思はれる。

以上の説明で、吾等が短歌をめぐる惑星に譬へた神樂歌、催馬樂、風俗歌、和讃、今樣等に關する發生、變遷、本質、趣味、價値に關するあらましが理解されたであらう　取りすべていふと、彼等は本來、それ〴〵特別なる調子と内容と趣味とを持つて、獨立の存在を保つべきものであつた　短歌に對しても讓らざる並存の旗幟を高く掲げ、もしくは堂々たる敵國を成すべきものであつた。　それが第一には滔々たる時代の趨勢に引きずられ、第二には作者の無自覺により、或は音樂と文學と儀禮との間に、細々と中間色の存在をつゞけ、或は宗教莊嚴の一具と視られるやうになつたのは、限りなき遺憾と云はねばならぬが、しかしながら自然に後世の俗謠の源流となり、平家、謠曲、淨瑠璃等に於ける持殊の調子を導き出したことを思へば、またいさゝか慰むることが出來るであらう。

第十八　王朝文壇の宗主、短歌

美しく＝新しく＝深く

一

平安朝に於ける短歌の美觀は個別觀にあらずして全體觀の上にある。一首々々、一人一人、のみならず一々の集を、別々に切り離して見るところにあらずして、寧ろ彼等を一つの連續した集合體として、歌と歌と、歌人と歌人と、集と集とが、蜿蜒と相連り、相繼ぎて、大河流、大山脈にも比ぶべき大系統を成してゐるのを、遙々と見わたすところにある。先づ當時の短歌の秀逸の公認結集ともいふべき勅撰歌集を見ると、謂はゆる八代集の中、最後の「新古今集」を除いた『古今』『後撰』『拾遺』『後拾遺』『金葉』『詞花』『千載』の七大勅撰歌集が二十年、三十年、四十年乃至七八十年を隔てゝ、次ぎ〳〵に纂輯された。

古今和歌集　醍醐天皇の延喜五年(一五六五)

紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、奉勅撰。二十卷

後撰和歌集 村上天皇の天暦五年(一六一一)大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等、梨壺の五人、奉勅撰。二十卷。

拾遺和歌集 一條天皇の長徳乃至寛弘の間(一六五五―一六六七)に成立。二十卷 花山院御撰といひ、藤原公任撰ともいふ。また此の集を選減して半ば以下としたる『拾遺抄』があり、その抄者がまた、花山院とも公任とも云はれる。集は二十卷、抄は十卷。

後拾遺和歌集 白河天皇の應徳三年(一七四六)藤原通俊奉勅撰。二十卷。

金葉和歌集 白河法皇の院宣を奉じて源俊頼撰 崇徳天皇の大治二年(一七八七)頃成る 十卷。

詞花和歌集 崇徳上皇の院宣を奉じて藤原顯輔撰。近衛天皇の仁平元年(一八一一)成る 十卷。

千載和歌集 後白河法皇の院宣を奉じて、藤原俊成撰。後鳥羽天皇の文治三年(一八四七)成る 鎌倉幕府成立の翌年ではあるが、内容及び事業の所屬に從つて平安朝の所産と見られる

而して彼等の卷の數は總じて百二十卷に上り、歌の數は、假りに『國歌大觀』の收錄するところに從へば、總數八千百二十首、その中から長歌、旋頭歌等の異式のもの九首を除いて、純なる短歌のみが八千百一首、萬世の權威に誇りつゝ、ひた並びに並んでゐる。彼等の或ものは『古今集』に對する『新撰和歌』『拾遺集』に對する『拾遺抄』の如く、更に組合せを替へ或は拔萃しても弄ばれた。彼等の周圍には、後に歌集より取り集められた『僧正遍昭集』『在原業平集』『小野小町集』等を始めとして、『紀貫之集』『藤原公任集』『和泉式部集』『曾丹集』より、源俊賴が『散木弃歌集』、藤原俊成が『長秋詠藻』、西行法師が『山家集』に至る、他撰自撰の無數の個々人の家集があつた。當時の歌人の間にはまた歌合が盛んに行はれて、公會の席上に於ける理由づきの衆議判に熱狂したが、その結果が「在民部卿家歌合」「寬平歌合」「天德歌合」等、無數の歌合となつて現はれた。彼等はまたよき歌を作らんが爲めに、歌に關する歷史的、修辭的、文學的、作法的の研究を試みた、而してその結果が傳藤原濱成の『歌經標式』、傳喜撰法師の『喜撰式』、傳菅原道眞の『孫姬式』、傳安倍淸行の『石見女式』等の謂はゆる和歌四式を初めとして、藤原公任が『新撰髓腦』、能因法師が『能因歌枕』『源俊賴が『俊賴無名抄』、藤原仲實が『綺語抄』、藤原淸輔が『奧儀抄』等謂はゆる「五家髓腦」その他の歌論書が數多く現はれた。また當時の散文文學にして短歌を挿入せぬ

ものが、全く無かつた。彼等の作者が、いかに短歌を大切にしたか、短歌挿入を、その作を潤飾するためのいかに大切な工夫と考へて居たかは、『伊勢物語』の挿歌二百九首、『土佐日記』五十七首、『蜻蛉日記』九百九首、『落窪物語』七十首、『榮花物語』六百二十八首、而して『宇津保物語』の挿歌が九百九十四首、『源氏物語』の挿歌が七百九十四首に及んで居るのを見ても知られるであらう。短歌はまた漢詩に伴つてその趣味を加へ、相互に映發の功を收めるものとされてゐた。菅原道眞が寛平五年(一五五三)に『新撰萬葉集』を撰して短歌の一首毎に漢詩の七絶を作はしめたのも、此の趣意によつたのであらう

歷年砥色䇺不變松之枝丹宿留雪緖花砥許曾見咲

冬來松葉雪斑々。素蘂非時枝上寛。山客廻眸猶誤道。應斯白鶴未翶翔。

大江千里が寛平六年(一五五四)に『句題和歌』を撰進し、漢詩の古名句を題として、恰當の和歌を並置したのも、この同じ好尙の現はれであらう

不明不暗朧々月

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜ぞめでたかりける。

大江維時は『千載佳句』を著して、朗誦すべき和漢の詩句のみを撰集したが、後に藤原公任が『和漢朗詠集』に於いて、『千載佳句』の主なる部分を取り收めつゝ、數聯の詩句毎に相

應ずる和歌を添へ並べたのも、この時代の好尚に投合したのであらう。而してこの始めて試みられた詩歌並賞の面白さに、此の朗詠集のみが國民永久の愛翫を贏ち得たのであらうそも〳〵短歌は當時の教養ある男女に取つて、行住坐臥の弄びであつた。『源氏物語』は、節會の日に參内の支度を急ぐ人に歌を詠みかけることの愚かさを笑つて居るが、同時にさういふ場合にすら、他から詠みかけられて返歌し得ぬのを恥辱として、

返しせねば情なし、えせざらむ人ははしたなからむ。

と云つてゐる。紀貫之は『新撰和歌』の序に和歌の德をたゝへて、「動天地、感神祇、厚人倫、成孝敬」と云つた。正徹は藤原俊成の逸話として、俊成が老後に、かう明け暮れ歌にかゝづらうてゐては後世が案ぜられると歎いて、住吉に一七日參籠した。そして此の事を明神に歎いて、

もし歌はいたづら事ならば、今より此の道をさしおきて、一向に後生のつとめをすべしと祈念ありしかば、七日滿ずる夜、夢中に明神現じ給ひて、此の道の外に別に佛道を不可求と示し給ひしかば、いよ〳〵此の道を重くし給へり。」(徹書記物語)

と云つてゐる。西行法師の歌に、

行方なく月に心のすみ〳〵て、はてはいかにかならむとすらむ

といふのがある。その意は、自分は、いつまでと限りもなく月に慰んで、心を澄まし〳〵て居るのだが、とゞのつまり、どう成らうといふのであらう、一生を月見、歌詠みに過ぐして了ふのであらうか、といふのであらう。當時の名匠は和歌の功徳をかうまでも廣大無邊と信じ、斯の道に一生を打込むのを、佛道の修行と等しく有意義なるものと信じてゐた。而して歌に遊ぶ無數の男女は、彼等を一代の詞宗と仰いで、斯の道に憧れつゝ、命にかけてよき歌を得よう、と競ひ、わが誇りの歌を譏られて狂ひ死にする者すらあつた

歌人の名の記憶は、更に吾等をして當時に於ける和歌の驚くべき流行と勢力とを思ひ浮かべるさせるであらう。試みに當時の歌人の中より、國民の常識記憶となつてゐるものを拾つて見ても、小野篁、僧正遍昭、在原業平、小野小町、源融、菅原道眞、紀貫之、凡河内躬恒、源順、藤原公任、曾根好忠、和泉式部、清少納言、紫式部、赤染衛門、藤原俊頼、藤原俊成、西行法師、鴨長明、源三位頼政等がある。桓武天皇を始め奉り、白河、鳥羽、崇德、後白河、後鳥羽に至るまでの歴聖殆んど悉く、歌を詠ませられ、中には歌聖と申し奉るべき御方もあらせられた。藤原氏その他の攝關、大臣、納言等にして歌を詠まぬものは全く無かつた。武人にすら斯の道の達人があつて源義家、源三位頼政、平忠度等があり、源頼朝までが次期の歌集に入撰の榮を擔つてゐる。田舍の賤しい男女や遊女乞丐人の類にも、少なからぬ好事者があつたであらう。而して彼等

の間には、卑賤にして高貴に交はるべきもの、唯だ斯の道があるのみとさへ信ぜられる傾向があつた。

そも〳〵短歌は、その持別なる調子により、神代以來奈良朝まで行はれた長歌、旋頭歌、片歌、混本歌等の衰へ廢れた後に、唯だ獨り榮えに榮えて、遂にその領分を散文の世界にまで推し擴げたものである。神に守られ、皇家の御保護を受けて、永久に榮えて來たものであるが、それが殊に此の時代に於いては、文藝第一位の敬愛を受けて、あらゆる教養階級に作られ、全國民に尊まれ、他の文學に迎へ取られ、外來文學に提携され、偉人の一生を抛つべき有意義の事業と視られ、勅命によつて權威ある詞人が一代の秀逸を纂輯することが嚴かなる行事とされ、而して堂々たる長篇の物語にすら作者の名を記錄せぬ時代に於いて、野人、遊女までが其の名を記し留められ、故あつてその作を讀人知らずとされた歌人が、幽靈となり、人の夢にまで現はれて、その名の表示を求めたと信ぜられたのであつた。この神人に擁護された三十一文字の短歌が、平安奠都の早々から鎌倉覇府の成立に至るまで、有名無名の無數の歌人によつて、連綿不斷に無數に詠みつゞけられたのである。それが大波を打つて、四百年の長きに亘り、而して選まれたる優秀作が三十年、五十年、八十年を隔てゝは、勅撰歌集といふ大群團をなしつゝ、時代々々の特色を見せたのである。この大群團の周圍には主なる歌人名々の

家集があり、それにつゞいて、忘れられたる文字通り無數の作が押合つてゐたのである　業務を異にする各方面の人々が、常に之れを仰いで、政事に、教化に、工藝に、及び他の文學の潤飾に用ゐてゐたのである　同時に立派な和歌を崇め、立派な和歌を作り上げることが、無意識のうちに國民全體の務めとも願ひともなつてゐたのである

平安朝に於ける短歌の文化的地位は、まさしくかうであつた、而して彼等の粹は『古今』から『千載』に至る七代集であり、七代歌集の隨一は『古今和歌集』であつた。吾等は次ぎに『古今集』を概說して、他の六代集に及ぶであらう。

二

平安朝に於ける短歌の持色は、女性振の優雅なるところにある　それは謂はゆる『萬葉集』の丈夫振に對する手弱女振なるもので六歌仙を經て『古今集』に大成した此の持色が、少しづつ變へられて鎌倉に傳へられたのであつた　而して其の變へられ方の要點は、初めは及ばぬを知りつゝ、おづおづと『古今』を眞似てゐたのが、いつしか才氣を負うて新味を誇る者が出るやうになり、是等新奇を悅ぶ者と傳統を守る者とが相爭つてゐる中に、到頭

偉大なる天才の大努力者が出でて、二者を統一し、新樣を創造するやうになつたともいふべきであらう。も少し委しくいふと、まづ遍昭、業平、小町等の花月戀愛の風流を洒落に詠み出づる歌風が、延喜の貫之等により智的に整調されて、『古今集』の春夏秋冬戀無常を美しく、調子よく、解りよく、味に詠み現はす優雅な手弱女ぶりの歌風が、大盤石と成立した。それから『古今』を理想としつゝ、及ばぬ模倣に努力する中に、常識をもどくやうな奇語を弄して新風を誇る曾根好忠が出で、同時に大膽な戀愛感を傍若無人に表白する和泉式部が出た。かくして『古今』を襲踏した短歌界が、皮相的、局部的ながら、多少の活氣を見せつゝ新奇派と襲踏派とが相爭つてゐる中に、いつしか鎌倉時代に近づいて、こゝに新舊の二潮流を調和させて一種の味ひ深き新風をうち建てた二人の偉大なる歌人が出た。藤原俊成と西行法師とである。佛理に參する心持で、あらゆる內容を幽玄に詠み現はすのが俊成の理想であつた。當時の歌人等の謂はゆる「幽玄」には、深奧不可說な特殊の意義があつたらしい

鴨長明はその『無名抄』に於いて、

幽玄の體まづ名を聞くよりまどひぬべし。自らも心得ぬことなれば、さだかに申すべしとも覺え侍らねど、よく境に入れる人々の申されし趣は、詮はたゞ詞にあらはれぬ餘情、姿に見えぬけしきなるべし。心にもことわり深く、言葉にも艶きはまりぬれば、たゞ

徳はおのづから備はるにこそ、譬へば秋の夕暮の空のけしきは、色もなく聲もなし、いづくにいかなる故あるべしとも覺えねど、すゞろに涙のこぼるゝが如し。……一ことばに多くのことわりを籠め、現はさずして深き心ざしを盡くし、見ぬ世の事を面影にうかべ、いやしきをかりて優なるをあらはし、おろかなるやうにて妙なることわりを極むればこそ、心も及ばず、言葉も足らぬ時、これにて思ひを述べ、わづかに三十一字がうちに、天地を動かす徳を具し、鬼神をなだむる術には侍れ

と云つて居るが、蓋し最も要領を得た説明であらう、而して俊成等は此の表現境を理想として精進したのであらう。俊成にはまた桐火桶の説があつた。定家の著と傳へらるゝ『桐火桶』に、

亡父卿は寒夜の冴えはてたるに、ともし火かすかに背けて、白き浄衣のすゝけたりしを上ばかり打ちかけて紐むすびて、その上に衾を引きはりつゝ、その衾の下に桐火桶をいだきて臂をかの桶にかけて、たゞ獨り閑疎として、床の上にうそぶきて詠み給ひける也

と書いてある。俊成はかやうに、夜ふけの閑室に、衾を羽織つて古さびた桐の火桶を擁しつつ、神來の興を得るために、或は白氏の名句を朗誦し或は在原中將の秀歌を微吟して、思ひを凝らしたと云はれる。彼れは歌道を佛道に進へた。新舊兩派の名匠に道を尋ねた「古今

ぞまことに詞もめでたく見え侍る」と云つて『古今』を崇めつゝ、同時に我が幽玄の特色を固く持した。而して環境を申分なくしつらひ、我が歌の喚び水として古詩歌を吟誦しては天來の興を得つゝ、九十餘年の意義深き生涯を送つたのである　彼れこそ誠に努力の天才といふべきであらう。『新古今集』の中に選まれた

むかし思ふ草の庵の夜の雨に

　涙な添へそ山ほとゝぎす

は、彼れの名高い代表作であるが、白樂天が廬山の草庵の夜雨を思ひ、清少納言が雨の夜に於ける「草の菴を誰れがたづねむ」の機智を偲び、老の侘住居に桐の火桶を擁しつゝ、森閑と夜の雨を聞く　と、無論これは主觀の空想であるが、その上に山時鳥までを想像して、これ丈でも涙に餘る情味だのに、山時鳥までは想ふまいといふのであらう。『千載』に萌し『新古今』に成熟した歌風の主なる特色は、内容の豐富、形式の新奇、古典の暗示等で、それらが少しも角立たずに優麗和潤の調子を見せるところが、此の時代の誇りであるが、俊成の此の歌の如きは、まことに時代の理想の顯現ともいふべきものであつた。

和歌を宗教に准じ、命にかへて歌に執心する點に於いて、更に俊成を凌駕したのは西行法師であつた　彼れは官職を棄て、交遊を棄て、家を棄て、妻子を棄てたけれども、花月自然に對

する愛着を棄てることが出來なかつた。

花に染む心のいかでのこりけむ
　捨てはてにきと思ふわが身に

『西公談抄』の著者は西行の平生について、

歌の事を談すとても、其のひまには、「一生幾ばくならず來世近きにあり」といふ文を、坐臥の口すさびに言はれし。あはれに貴く覺えしか　今も面影の餘波絶えぬなり、忘れがたし。

と言つて居る。彼れは自然、佛道、和歌、この三つの愛に引きずられて、六十餘州に寂しさを求めては庵を結び捨て結び捨てつゝ、生涯を斷の道にさゝげた。平賀源内の言を藉れば、彼れの和歌は、まことに禪定の修行であつたであらう。かくして彼れは、俊成が歌匠ぶりの修養に潜心して、新舊の兩派を知り、歌論に通じ、環境を擇り好みつゝ、象牙の塔の中に穴籠りして、特殊の氣分の名歌を詠み出でようと企てたのに對して、彼れは世捨人としての生身をそのまゝ自然の中に投入した。而して自然との道交に生まれ出でた情感を、美しき詞藻に託した。彼れは

和歌はうるはしく詠むべきなり。古今集の歌の風體を本として詠むべし。中にも雑

の部を常に見るべし

と云つたと云はれる。思ふに彼れは『古今』と宗としつゝも、その天成無類の歌心は自然にその歌に特殊の風致あらしめたのであらう、同時に環境に動かされて、自然に新らしき時代の諸傾向を分前したのであらう。

かくして匠氣本位の修養から入つて、籠居的に新らしき歌風を樹立した俊成と、俗的に死んで靈的、藝術的に生まれ變はつた身を、自然に直接せしめて新らしき道交の消息を抒べた西行と、此の二人によつて平安末期の和歌が、活力と、審美性と、偉大性と、高貴性とを備へて來た、而してそれ自身、美しく王朝和歌の名譽ある殿(しんがり)をつとめつゝ、新らしき鎌倉時代の和歌に對して、歴々堂々たる基礎を與ふることとはなつた。

三

發掘された出土品が遠き過去の隱れたる祕密を、鮮明に復原して見せるやうに、若し平安朝初期に詠み出だされた、あらゆる歌謠の音聲が、天涯地角の何處かに保存されたのを聞き出だす機會があるならば吾等は必ず、大伴家持の詠が質及び量のいづれもに於いて、花やか

に此の美しき時代の黎明期を輝かしたのを見るであらう、從つて新時代の初頭が、前朝に於ける得意の大歌人の奏づる萬葉風なる失意の哀調によつて異樣に飾られたのを見るであらうと想像する。それはあの『萬葉集』最後の四卷を、殆んどその作だけで埋め盡くした大歌人が、いかに失意のどん底に陷つたからとて、一首の短詠をも殘さぬ道理がないと思はれるからであるが、しかしながら是れは一場の夢語りに過ぎぬとして、さて新らしき時代に入つて、名歌人として最初に吾等の目を惹くのは、參議小野篁であつた。彼れの歌については吾等は已に前卷に說いてであるが、彼れと貞觀前後に榮えた六歌仙との中間あたりに、猿丸大夫といふ歌人があつたらしい。猿丸大夫は聖德太子の御孫弓削王にも擬せられ、或はその存在すらも疑はれる怪しい人物であるが、『古今集』の眞名序に「大友黑主之歌、古猿丸大夫之流也」とある所を見ると、延喜時代には其の人も歌も、立派に存在を認められてゐたのであらう　そしてもし人口に膾炙する

おく山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
　　聲きく時ぞ秋はかなしき

を以て、彼れの作とするならば、それは『萬葉』よりは『古今』に近い調子の、極めて平明なたゞごと歌ともいふべきものであつたやうに思はれる。

さて此の時代に入り、始めて名歌人の群出によつて美しい名稱の一時期を劃したのは、貞觀（元年は淸和天皇の一五一九）前後の文德淸和、陽成の三朝に亘つて榮えた、謂はゆる六歌仙時代であつた　六歌仙とは『古今集』の序文の與へた順序に從ふと、僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、僧喜撰、小野小町及び大伴黑主の謂ひである。貫之は彼等を評して、それ〴〵に遍昭は「歌のさまは得たれども誠すくなし」、業平は「心あまりて言葉足らず」、康秀は「言葉は巧みにてそのさま身に負はず」、喜撰は「言葉幽かにして始めをはり確かならず」、小町は「哀れなるやうにて强からず」、黑主は「そのさま卑し」と云つた。但し、その中の康秀、喜撰、黑主の三人には、確實な作が幾らも現存してゐないので、彼等が歌の特色を想ひ浮かべ難いが、他の三人には幸にして殘された可なり多くの秀歌がある。それによつて彼等の特色を想像すると、第一に僧正遍昭は感激性と、趣向好みと、典雅性とを基本として、その複雜なる生活經驗を豐富なる詞藻に託したかのやうに見える。彼れは王家の名門に生れ、若うして風流情癡の生活に親しんだ。仁明天皇の崩御に遭つて、悲歎の餘りに薙髮した。その後花山寺を建立したが、沙門の生活に入りながらも、生涯花月の風流を捨てなかつた。彼れの生涯には可なり多く西行に似たところがある。

吾等が彼れの歌に於いて先づ感ずるのは、趣向の巧みである。而してその巧まれたる跡

藤原信實筆 僧正遍昭像（國寶）　（小倉房藏氏藏）

が極めて自然で品位が高く、意味が極めて明瞭でありながら露骨ならずして豐かに餘韻を籠めて居ることである。

花の色は霞にこめて見えずとも
　香をだにぬすめ春の山風

淺みどり糸よりかけて白露を
　玉にもぬける春の柳か

はちす葉の濁りにしまぬ心もて
　などかは露を玉とあざむく

構想が面白く、調子がよく、よく解つて同時に限りなき餘意を含んでゐることがわかるであらう　二月時分に花咲く道を行くとては、

折りつればたぶさにけがるたてながら
　みよの佛に花たてまつる

と詠み、春の一日花山寺に法皇の御幸があつて、間もなく御還幸にならうとしたのを悲しんで、

待てといはゞいとも畏し花の山

われおちにきと人に語るな　英一蝶筆（滋賀重列氏藏）

しばしと鳴かむ鳥の音もがな

と詠んだのも、趣向の妙と、情の自然と、氣品の高さとを併せ備へたものである

彼れはまた極めて洒落で諧謔を愛する癖があつた。而して世を捨てながら情癡の消息を憚らずに詠み出でたがこれが爲めに、少しも品位を失ふことがなかつた。女郎花を手折らうとして、落馬して

名にめでて折れるばかりぞ女郎花

われ墮ちにきと人にかたるな

と詠めるが如き、初瀨寺に參籠してゐた時に、小野小町から

岩の上に旅寢をすればいと寒し

苔のころもをわれにかさなむ

と詠みかけられて、

世をそむくこけの衣はたゞ一重

かさねばうとしいざ二人ねむ

と返したるが如き、その著るしい例である。紀貫之は『古今』の序に遍昭を評して、「歌のさまは得たれども、誠すくなし」と云つて居る。遍昭は特殊な歌の容姿を手に入れて、その面白さはいかにも獨得無類であるが、これを「誠すくなし」と云つたのは何故であらうか。それは恐らく女郎花や苔衣問答の如き深酒落に眉を顰めたのであらう。しかしながらこれはたゞ彼れが好んだ諧謔の一面に過ぎぬので、彼れが豐かに持つてゐた他の眞面目な一面を見れば、誰れしもその眞情の切なるに打たれずには居られない。例へば、

空蟬はからを見つゝもなぐさめつ
　深草の山けぶりだに立て

末の露もとのしづくや世の中の
　後れさきだつためしなるらむ

の如きは、皆人をしんみりさすべきものであるが、殊に重恩の主上に後れ奉り比叡に登つて頭をおろした時に詠んだといふ

垂乳根はかゝれとてしもむばたまの
　わが黑髮をなでずやありけむ

の如きは、憂き世の悲哀を集めて人の心に迫るかの感がある。

要するに遍昭は感激性に富み、自然人生の諸相に對して深く心を動かした、その感動に異常な興味のある表現を與へようとした。悲喜愛憎のあらゆる事相を詠む中にも、殊に諧謔に對して特殊の興味を持つてゐた。豐富な想像と修辭とを持つてゐたが、その表現は常に明瞭で、同時に餘意を持ち、暗示に富み、また品位を具へてゐた。思ふに當時の歌人の中で彼れぐらゐ詠出能力の振幅を持つてゐたものはあるまい。吾等は彼れの歌を見て後に、業平を見、小町を見、貫之、躬恒を見、順、公任、和泉、曾丹等を見ると、何となくその視角の狹小なるを感じさせられる。また彼れの殘した歌は少ないが、その少ない歌は殆んど悉く彼れの特色を豐かに盛つた名歌であつた。これも吾等が業平、小町、貫之、躬恒等の家集に平凡な歌の案外に多いのを見て、後に遍昭集を讀んで常に感ずるところである。おもふに遍昭は努力した天才であつたであらう。彼れはその感動を大事に取扱つて、之れに色彩に富んだ妥當な表現を與へようとした。いかなる內容にいかなる表現を與へるにかゝはらず、かりそめにも典雅なる品位を失ふまいとした。而して作者の現はさうとする意義を、はツきりと讀者に攫ませつゝ、その本義の周圍に豐かな餘韻を漂はせようとした。これらの點から見て、吾等は遍昭をば、貫之等よりも更に風味と含蓄とに富んだ歌人で、貫之等は知的要素の過分なる添加によつて遍昭より詩味を殺いだものであるかのやうに思ふ。

四

吾等は遍昭の歌を評して、本義をはツきりと讀者につかませつゝ、その周圍に豐かな餘韻を漂はせると云つた　吾等はこれを以て遍昭の歌の特色であり、同時に古今集時代の歌の著しい特色でもあり、之れに對して餘韻を故らに豐富にして、意義の本體を捉へにくゝしたのが、平安朝末期の『千載集』から『新古今集』にかけての著しい特色の一つであると思ふので、暫らく之れについて一言したいと思ふ

短歌は五句三十一字から成る單純性の結果として、考へ樣によつては、古今殆んど同調であるかのやうにも見える　讀者は神代最古の和歌と稱せられる須佐之男命の

八雲立ついづも八重つまごめに八重がきつくるその八重垣を

が、多くの學者から時代を遙かに引き下げて考へられることを知られるであらう、また實際この歌が明治大正の調子を持つと云つても、さまで不穩當でないらしいのを見られるであらう　藤原公任はその『三十六人撰』に於いて、最初に人麿及び貫之の歌おの／＼十首を擧げて居るが、試みに十首の中の最初なる人麿の四首

きのふこそ年は暮れしか春霞
かすがの山にはや立ちにけり
あすからは若菜つまむと片岡の
あしたの原はけふぞ燒くめる
梅の花それとも見えず久方の
あまぎる雪のなべて降れゝば
郭公なくや五月のみじか夜も
ひとりしぬればあかしかねつも

を取つて、貫之が最初の四首

訪ふ人もなき宿なれど來る春は
八重葎にもさはらざりけり
行きて見ぬ人もしのべと春の野の
かたみにつめる若菜なりけり
花もみな散りぬる宿は行く春の
ふるさととこそなりぬべらなれ

夏の夜のふすかとすれば郭公
　なく一聲にあくるしのゝめ

に比較すると、殆んど同じ時代に於ける同じ人の作であるかのやうにも見える　思ふに、公任に取つては、客觀性から見た『萬葉』も『古今』もなく、人麿も貫之もなく、唯だ彼れの心に固有する好惡を定規として、人麿、貫之の作の中から、自分に反の合ふ歌を求めたのであらう　而して具平親王と人麿、貫之の勝劣を論じた時にも、たゞ此の色眼鏡をかけて、貫之を優れりとしたのであらう、それは單に公任だけのことではない、王朝の歌人には概して此の傾きがあつた。而してこれにも全く道理のないことではなかつたが、しかしながら事實はやはり時代が違へば自然に歌の姿も違つて來て居るので、例へば『萬葉』の

君が行く道の長手を繰りたゝみ
　燒きほろぼさむ天の火もがも

さ寢らくは玉の緒ばかり戀ふらくは
　富士の高峰の鳴澤のごと

の如きを取つて、平安朝の

いとせめて戀しき時はぬば玉の

夜の衣をかへしてぞぬる（小野小町）

獨りのみおもふは苦しいかにして

おなじ心に人ををしへむ（壬生忠岑）

などに比較すると、さすがに兩者がそれ〴〵紛るべからざる時代の烙印を帶びてゐることがわかる。また『萬葉集』第二十卷の最後に近き部分に、大伴家持の

月よめばいまだ冬なりしかすがに

霞たなびく春立ちぬとか

といふのがある。『古今集』の冒頭には、在原元方の

年のうちに春は來にけり一年を

去年とやいはむことしとやいはむ

といふのがある　殆んど同じ内容を歌つたものであるが、姿や口調に於いては、彼れの男性的で、荒削りのかど〳〵しい剛快な味に對する、これの女性的な滑らかに下る風雅な味は、一見一誦して知られるであらう。更に遙かに下つて『千載集』卷第一の冒頭には、源俊賴の

春の來るあしたの原を見わたせば

霞もけふぞ立ちはじめける

といふ、同じ立春の歌が載せてある。この『古今』の元方と『千載』の俊頼とを並べて誦んで見ると、同じく風雅な滑らかな調子のものでありながら、而して同じく知識的の趣向に興じて居るものでありながら、その間に紛るべからざる差別の感ぜられるのは、後者に於ける智巧のやゝこしさである。一寸讀み考へるだけでは眞意の摑めないことである。內容はまことに單純至極の事であるのに、それをばわざと曲らせ、くねらせ、解らぬやうに言ひ廻して、それを一種の誇りとしてゐる時代相である。文句の詮索だけ試みても「あしたの原」は掛詞として「春の朝」「大和の名所朝原」「春の歩いて來る足」の三義を含み、「立ちはじめ」は「霞が立ち」「春が始ち」「春の足が立つ」といふ一筆三叙の重疊味を暗示して居るのである。而してかういふ歌は、安心して讀み難く、讀む者に無駄な苦勞をさせ、解つて後には形式の綾に念の入つてゐる割合に、內容の收獲の少ないのに呆れさせる氣味のあるものである。これが遍照の歌や、『古今集』あたりに見る貫之の

今年より春知りそむる櫻花
　散るといふことは習はざらなむ

櫻ちる木の下風は寒からで
　空に知られぬ雪ぞ降りける

などが、本意を解り易く、はツきりと摑ませつゝ、安んじて修辭の餘意をも汲み味はひさせるのとは、大分樣子を異にしてゐることが解るであらう。

この傾向の最も甚だしいのは『新古今集』であつた。例へば、同じ集の中に俊成の女の作として載せてある名高い歌に、

風かよふ寢ざめの袖の花の香に
　かをる枕の春の夜の夢

といふのがある。素直にいふと、「花を誘ふ香ばしい風に吹かれて目がさめると、袖もかをる、枕もかをる、夢までがかをる」といふのであらうが、これは此の簡單な内容をば、あやに絡んで、容易に見當がつかないやうに詠みなして居るやうに見える。本居宣長はこれをば「詞のいひ知らずめでたき歌なり」などと褒めたゝへてゐる。いかにも口づき耳ざはりの實によい、調子のすぐれた作である。また此の特殊な時代樣に投じたので、時の人にはめでられたであらうが、古今に通ずる一般常識からいへば、一種の惡質な時代癖に囚はれた人困らせの作であらう。

また同じ『新古今』に、定家の作として

櫻色の庭の春風あともなし

とはゞぞ人の雪とだに見む

といふのが載せてある。これは一櫻花もすッかり散り切つて、庭を見ても、花まじりの櫻色した春風は跡もなく、もうさッぱり吹かなくなつた　せめて今の中に人が訪ねて來たならば、地上の落花を雪とだに見てくれようものを、誰れも音づれて來ぬ、といふのであらう。全く解らぬといふのではないが、非常に事多で、くだ〳〵しく、複雜で、いたづらに人の頭を疲らして、しかも解つたところで、格別の味がないといふ歌のやうに吾等は思ふ。

かやうな理由によつて、吾等は『萬葉集』の歌をば直情直抒の歌であると思ふ。無論修辭の曲折はあるが、概して感じた通りをそのまゝに歌ふといふのである。六歌仙や『古今集』あたりの歌をば、雅情雅抒の歌であると思ふ。内容としては自然人事の中から優美風雅なものだけを選び出だして、それを優美風雅な調子にのみ詠み出だすといふのである。而して之れに對して『千載』に萌し『新古今』に成就した歌をば、曲情曲抒の歌であると思ふ。何事でも素直に詠み現はさうとはせず、一捻りひねッた思想を一寸は理解の出來ぬやうにくねらせて詠むといふのである。此の歌風の建立者、大祖師にして佛理に參し、古典を取入れ、夜半孤燈の下に桐火桶を擁して、凝念の餘りに幽玄の調子を編み出さうとした俊成は、此の歌風の長所を最もよく養ひ得た天才であつた　而して此の時代風によつて、その

特別に意味深き自然觀、人生觀を曲折多く詠み出でた西行は、俊成以上に此の時代風を善用した天才であつた。西行の歌にも曲情曲抒の氣風はある、しかしながら、彼れの歌の內容が、骨折つて味はへるだけの價値を持つてゐるので、このやゝこしい表現傾向が、彼れに取つては障礙とはならずして、一種の成功條件とはなつたのであつた。同じく『新古今集』に載せてある彼れの歌に、

捨つとならば憂世をいとふしるしあらむ
　われには曇れ秋の夜の月

といふのがある。一我れは已に憂世を捨てゝ佛門に入つた、捨てた以上は憂世を厭うた効驗があつて、月を見ても心が惹かれず、妻子や俗世間などを聯想することの無かるべき筈であるが、月を見ると俗世間が思ひ出されてならぬ。あはれ我れに對しては曇つてくれよかし、秋の夜の月よ」といふのであらう。內容過多の嫌ひがあつて、多少曲抒の氣味もあるが、しかしながら骨折つた結果、かういふ微妙甚深の人生味をさぐり當てることが出來れば、骨折ばえがあるといふものである『千載集』から『新古今』に至る、普通ならば難事ともいふべき曲情曲抒の歌風によつて、最もよく自らを利したのは西行法師であつたであらう。

五

紀貫之は智巧をめでた人のやうに見える。また我を立てるに專らであつた人のやうに思はれる。彼れは遍昭、業平等六歌仙の批評に於いて、概ね褒貶の兩端を擧げた、而して蹄重の衡皿は、いつも褒むるに輕くして譏るに重き傾きがあつた。

遍昭。歌のさまは得たれども、誠すくなし。

業平。心餘りありて、言葉足らず。

康秀。言葉は巧みにて、そのさま身に負はず。

喜撰。言葉幽かにして、始め終りたしかならず。

小町。哀れなるやうにて、強からず。

黑主。そのさま卑し。（褒めの詞がない。「花の蔭」が、或は褒詞のつもりかも知れぬ）

思ふに彼れの貶辭は、主として彼れの重んじた歌道の要義の缺乏に對して下されたのであらう。委しくいへば、彼れが平生誠を重んじ、詞が內容に相應することを重んじ、首尾のたしかなることを重んじ、詞に力のあることを重んじ、殊にあらゆる場合に品位のあるべきことを

主張したので、六人の歌に對しても、それ〴〵我が和歌に必須と信ずる資格の缺けた點を難じたのであらう。

在原業平は、貫之から餘意の多きに過ぎて、言葉の足らざることを難ぜられた。これは恐らく業平の歌に對する適切の評であらう。彼れが歌の中で最も世に愛誦された千古の名調は

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

の一首であらうが、加茂眞淵は『伊勢物語古意』に於いて、月も梅も「すべて去年に似ぬなり」の意に解した。アストンは之れに據つたのか、その英文の『日本文學史』に於いて、

藤原信實筆

Moon ? There is none. Spring ?
'Tis not the spring of former days.

と譯した。その他にも、學者の間に

在原業平像　馬越恭一氏藏（國寶）

いろ〳〵の說があつて、更に要領を得ぬ歌であるが、＝但し吾等は一月も梅も去年のまゝだが、愛人の身は、すツかり變はつてゐる、離るべからざる一對の中、自分の身だけが去年のまゝで一といふ意味であると思ふ＝意味が不明瞭を極めながら、古來の巨匠達に愛誦されて、神往招來の靈力あるものとまで思はれて居るのは、恐らく微妙な調子の裡に任五が魂の籠もつてゐる爲めであらう。

とにかく業平の歌は限りなき餘情を籠めて、何となく人を惹きつける神韻を持つてゐた。而して遺さ

れた歌は大部分戀愛に關するもので、內容の單調な嫌ひはあるが、悉く生命を宿し、瑞氣をたゞよはしてゐるかの感がある。要するに天才の美しき感情が、主義や髓腦に煩はさるゝことなく、極めて自然に選まれたる詞に現はされたからであらう。

起きもせず寢もせで夜をあかしては
　春のものとてながめ暮らしつ

世の中に絕えて櫻のなかりせば
　春のこゝろはのどけからまし

大方は月をもめでじこれぞこの
　つもれば人の老となるもの

ぬき亂る人こそあるらし白玉の
　まなくも散るか袖のせばきに

世の中にさらぬ別れのなくもがな
　千代もと祈る人の子のため

小野小町の歌は、貫之の評した通り、いかにも哀れなるやうにて强からぬ趣を持つてゐる

しかしながら貫之の評が曖昧で且つ貶意に傾いて居るのは穩かでなく、また面白くない。これはむしろ詞が柔らかで女々しき優しさを持つてゐるといふべきであらう

花の色はうつりにけりないたづらに
　わが身世にふるながめせしまに

色見えでうつろふものは世の中の
　人の心の花にぞありける

わびぬれば身を浮草の根をたえて
　さそふ水あらばいなむとぞ思ふ

世の中の憂きもつらきも告げなくに
　まづ知るものは涙なりけり

小町の歌も亦業平の歌の如く、概ね戀愛に關するものであつた。そして業平よりも更に單調であつたが、弱々しい戀の美しさを詠んだ點では、恐らく古今無類であらう。

僧正遍昭が熱情を豐富な修辭に託した多角的な歌、在原業平が廣き深き熾烈な愛情を暗示的に表現した餘情の豐かな歌。小野小町が美しい弱い女の戀を柔らかに調に託した花のやうな歌　貞觀前後の歌は、この三人が天賦の導くがまゝに純情を歌つた作を中心と

して、始めて著しい集團的光耀を見せた。かくして『古今』の序に謂はゆる世の中が色につき、人の心が花になつて、あだなるはかなき歌のみが競ひ詠まれるやうになつた。そして心ある者が眉をひそめて居る中に、やがて大歌集の勅撰が企てられ、同時に創業の意氣に燃えた大才紀貫之が出でて、新しい歌風が開眼されることとなつた。

六

延喜に於ける和歌の興隆は久しき歳月を積んだ結果で、天の時、地の利、人の和を綜合したものであつた。仁明天皇の承和の初めには(一四九六頃)平安城の都會相が完備して、山城が始めて日本第一となつた。嘉祥二年(一五〇九)には、興福寺の大法師等が奉献した聖壽四十歳奉祝の大長歌の中に、始めて漢文に對抗する國語尊重の意氣が現はれた。さる程に、貞觀、元慶(一五一九―一五四四)を經て、片假名、平假名が自由に用ゐられ廣く行はれるやうになつた。宇多天皇の寛平六年(一五五四)には、菅原道眞の奏請により、遣唐使が廢止せられて、日本特殊の王朝文化が自然に自由に成熟することとなつた。貞觀、元慶は謂はゆる六歌仙が活動して、此の朝の歌境に始めて集團體中心の現はれた時であつたが、宇多天皇(一五四七―

一五五七）は后の宮と共に斯の道に好かせられて、一方ならぬ御勸奬を賜はつた　寛平の御宇に於ける歌道御擁護の難有さは、菅公がその寛平五年に撰した『新撰萬葉集』の序に

當今寛平聖主萬機餘暇、擧レ宮而方有レ事レ合レ歌、後進之詞人、近習之才、各獻二四時之歌一

とあり、同寛平六年に大江千里の獻じた『句題和歌』の序に、和歌獻上の聖詔を傳へられて「奉レ命以後、魂神不レ安臥、重痾延以至レ今」とあるのを見ても知られるであらう　また『古今集』の和歌千百首の中に「寛平の御時后の宮の歌合の歌」と題した歌が五十五首も含まれて居るのを見ても知られるであらう　延喜の帝はその後を承けて更に之れを恢宏せさせられた　而してすぐれた歌人等の雲の如く群がるが中に、年齡技倆共に老熟して一世の輿望を負うた貫之、躬恒、友則、忠岑の四人が、聖旨によつて新しき歌集の撰にあたることとなつた　それは奈良朝の『萬葉集』に對して、平安奠都以來の名歌を纂輯するといふ事業で殊に延喜當代の歌を尊重あらせらるゝ聖旨に副ひ奉る大事業であつた　中心主役の貫之は聖旨によつて特に自作百首を集の中に取入れることを許された　忠岑の如きは、木蔭に埋もれて老い朽つべき身が、はからずもこの聖世に逢ひ奉つたのが難有いと云つて、不老不死の藥を服んで、若返り〳〵大君の八千代の御榮えを拜みたいと歌つて居る

かやうに歌道興隆に有利なる史的事情の累積した後を承け天時、地利、人和の總協力の下

に纂輯されたものが『古今集』である。聖天子の擁護の下に、天下の輿望を集めた四人がその局にあたり革新の覇氣に燃えた紀貫之が、千古無比の歌集を創作して、聖旨に應へ奉らう、時代を輝かさう、皇國の文藝位を高めようとして、最善を盡くした結果作り上げたものが此の大『古今和歌集』であつたのである。

然らば『古今和歌集』は、いかなるものであつたか。

七

吾等は先きに王朝の和歌は離れ〳〵に見るべきものではなくして、四百年連綿と引きつづいた姿を綜合的に見るべきものであると云つた。吾等はまた『古今集』に對しても、同じやうに、序文から本文の一千百首までを、綜合的、立體的に取纏めて見るべきものであると思ふ。

吾等は人の「家」を觀察する時に、先づ門や塀の外構(そとがまへ)を見、つぎ〳〵に庭園と家屋との關係を見、間取の具合や座敷の飾附を見、家族の人達を見るであらう、而して是等の各〻が相應し調和して、主人の氣息(いぶき)が全部に行きわたつて、一種の特色ある家風を成して居るのを見て

之れを立派な「家」と見做すであらう。

歌集は恰も人の住居のやうなものである。而してその各部相應した調和相の見事さに於いて、『古今和歌集』の如きは、前にも後にもあるまい。何故かといふに、先づ『古今集』を見て、第一に吾等の目につくのは、入口なる門構の序文である。それは和歌の定義、効用、起原、發達、變遷、種類、名高き歌人の歌の批評、撰の由來、編者の見識、大御代の壽頌等から成立つてゐる、實に備はつたものである。撰者は之れに於いて前代を統べ、漢土を踏まへて、博大なる見識を見せたが、更に脇諷の門構として漢文の序を加へた。淑望に漢文の序の起稿を託した貫之の最初の趣意は、新らしき和文の序創作の參考とするにあつたのであらうが、倭漢の兩序が出來て後に、彼れは之れを並べて見て、あの天晴れな漢文の序を捨てることが出來なかつたのであらう。而して二つの序文を、或は隣接させ、或は本文の前後に隔離させつゝ、とにかく此の貴き勅撰歌集一卷の中に共在せしめたのは、恐らく新に工夫された純日本振なる假名の序が漢文の序に輝き優つて居るからで、かく並べ掲ぐることによつて、漢文に對する和文の國威を示さうとしたのであらう。それは丁度彼れが『土佐日記』の冒頭に、「男もすといふ日記といふものを、女もして試みむとてするなり」と云つて、和文の日記の輝きまさりを見せたのと、同樣の心理であつたであらうと思はれる。

幾多の缺點はありながらとにかく『古今集』の假名の序は偉いものであつた。而してその偉さは、之れを獨立させて見るよりも、後至の歌集の序と比べて見て、更に著しく感ぜられるものであつた。『古今』に次いだ『後撰集』『拾遺集』は序を持たなかつた。持たぬ所以は不明だが、恐らく撰者に序を書き添へる手腕も、勇氣も、自恃の權式も無かつたのであらう。而して序を持たぬ二つの集は「後に撰む」「落ちこぼれを拾ふ」といふ名詮自稱の不思議な名と共に門構の序を持たぬ淋しさを見せて、その影の頗る薄いものであつた。『後拾遺集』は假名の序を持つた。それは『拾遺』にすら後るゝといふ哀れな名を持ちながら、新風創始の意氣が下萌えに萠え始めて來た時代相の現はれであらう。しかしながら『後拾遺』がもつ序としての新味は、唯だ近き頃に出來た撰集の名を擧げた位のことで、要するに『古今』の流れを汲んだ、獨創の無い拙いものであつた。次いで『金葉』『詞花』の二集はいづれも序を持たなかつた。『千載集』には假名の序があつて、『後拾遺』の序に比べていさゝか纏まりを見せては居るが、長さは『古今』の半ばに過ぎず、内容は『古今』の十が一にも足らぬ事を、力のない詞花言葉で飾つたもので、此の特色ある歌集を重くするものではなかつた。『新古今集』は『古今』に擬して和漢の兩序を前後に備へて居るが、これも要するに『古今』の序のほんの一部を、月並な詞の綾で敷衍したもので、趣旨にも文致にも殆ん

ど新たなる何物もなかつた。かう書き並べて來ると、『古今』の序が、爾後のあらゆる歌集の序に比べていかに貴重なるものであるかが、想像されるであらう。要するに、文體の創新、内容の豐富、論旨の高邁、これらの諸要素が相合して、空前にして同時に絶後なる序文を以て、その門墻を飾られたこと、これが、あらゆる歌集の近づくべからざる『古今和歌集』の第一の威容であつたのである。

『古今和歌集』に於いて吾等の第二に接する美觀は、その整然たる分類である。これは家に取つての間取乃至庭園との關係にも比すべきものであらう『萬葉集』に於ける雜歌、相聞、挽歌の三分類は極めて大ざツぱなものであつた。之れを四季に配し、譬喩歌などを加へて、かりに六種以上と見ても、猶ほ頗る雜駁なもので、例へば挽歌を置いて頌歌を設けぬ如きは、類別としては大きな片手落であらう。『古今集』はあらゆる歌を大體、春、夏、秋、冬、賀、離別、羇旅、物名、戀、哀傷、雜の十一種に分けて居る「雜」は一類を成す力のない無資格者を一束にしたものらしく、歌體から見ては、此の時代に無勢力となつた長歌、旋頭歌や、性質から見ては、極めて少數なる好笑諧謔の誹諧歌や、音樂關係、地方關係などの特殊部類ともいふべき大歌所御歌、神あそび歌、東歌などを之れに屬せしめて居る。一種類が領する領域から見て、春夏秋冬が六卷を占め、戀が五卷を占めたのは、花鳥風月の優しい自然と兩性の戀愛とが、當時の歌

人等が注意の焦點となつたからであらう。大體『萬葉集』の常識的、卽興的の分類を種として、其の後の流行や漢詩の分類などを參考しつゝ、『萬葉集』が卷毎に繰返した分類を、二十卷に通じ一度に取統べて試みたといふのが、『古今集』の分類であるが、此の分類と順序立とは長く後代の歌集を支配することとなつた。但し種類の增減や順序の轉換は集每に多少行はれて、四季以下の順序を『後撰』は戀、雜、離別、羇旅、慶賀、哀傷とし、『拾遺』は『古今』『後撰』を取り交へて賀、別、物名、雜、神樂歌、戀、哀傷等とし、『後拾遺』は賀、別、旅、哀傷、戀、雜として、最後に神祇、釋教、誹諧歌を加へ、『金葉』は賀、別離、戀、雜として外に連歌を加へ、『千載』は離別、羇旅、哀傷、賀、戀、雜とするなどの相違はあるが、和歌の內容と分類と順序立とは、まづ『古今集』に定まつたと云つて差支なく、また全體を通觀して『古今』を最も妥當とも優雅ともすべきであらう。吾等はもとより『古今』の內容制限や分類を以て完全とするものではない。『古今』が『萬葉』の持つてゐた男性的、野人的、興笑的、高唱的、敎誡的の領分を喪つたのは非常に淋しいことであり、また序の六義說と本文の分類との全く無交涉なるが如きも甚だ面白くないことと感ずるけれども、しかしながら、當時の時代思想に從つて歌の內容を春夏秋冬戀その他の優美な風流な、樣よき事物に限つた以上は、『古今』の分類と順序立とを以て、先づ最も合理的な、風情のあるものとすべきであらう。先づ自然を先きにした春

夏秋冬の順序立には異論がないとして、人事では、人の壽福を祝ふ慶賀を第一とし、次ぎには暫しの別かれの名殘、別かれの一種の旅行と、半ば悲しく同時に味はひのある事を並べて、次ぎに物の名を詠み込む無邪氣な好笑に心を轉じ、その頂上に悲喜哀歡の情を盡くす戀を置いて今度は全く反對の純なる悲みの哀傷をおき、最後に所屬不明の雜を掲ぐる其の順序立が自然で面白いことは、『古今』のそれ〴〵の部の最初の一首を、順序のまゝに並べて見ても知られるであらう。「賀」以下「哀傷」までの最初の一首の見通しは、左の通りである。

傳紀貫之筆（毛利公爵家藏）

我が君は千代に八千代にさゞれ石の

巖となりて苔のむすまで（賀の最初、讀人しらず）

立ちわかれいなばの山の峯におふる
まつとし聞かば今かへり來む（離別の最初、在原行平）

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも（羇旅の最初、安倍仲麿）

心から花のしづくにそぼちつゝ
うくひすとのみ鳥の鳴くらむ（物名の最初、藤原敏行）

郭公なくやさ月のあやめ草
あやめも知らぬ戀もするかな（戀の最初、讀人しらず）

泣く涙雨とふらなむわたり川
水まさりなばかへりくるがに（哀傷の最初、小野篁）

長壽を祝ふ、＝別かれに臨んで名殘を惜しむ、＝遠國にして故郷を憶ふ、＝鳥の名を掛詞にして微笑する、＝わけもなく人が戀しい、＝亡き人を慕うて泣きつくす。行平、仲麿、敏行、篁と、一つは粒選りの名人の名作揃ひだからではあるが、しかしながら卷頭の一首はその卷の代表である、而して代表歌の連續味は卷々の連續味を暗示するであらう。而して此の『古今集』

の創造した歌の順序立を味はつて後に、他の集の、或は「戀、雜、離別」とつゞき、或は「羇旅、哀傷、賀」とつゞく順序立に接すると、此の自然的推移の妙味を感じ得ぬので、吾等は飜つて『古今』の歌の排置の微妙なることを感ぜざるを得ぬのである

『古今集』に於ける內容の配置が、自然で、面白く、美しい事は以上でわかるであらう。それはたとへば住宅に於ける家と庭との對應や、間取、飾附等が申分のないやうなものである。

八

『古今和歌集』に於いて吾等の第三に考へさせられるのは、卷々に於ける歌の順序立である。『古今集』の撰者はよき歌の選擇に苦心したと同じやうに、その歌の排列順序立にも苦心したやうに見える。試みに、「賀」の歌の最初の五首を順序のまゝに擧げて見ると、かうである。

我が君は千代に八千代にさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ

君が千年の有り數にせむ
鹽の山指出の磯にすむ千鳥
君が御代をは八千代とぞ鳴く
我がよはひ君が八千代にとり添へて
留めおきては思ひでにせよ
かくしつゝとにもかくにも長らへて
君が八千代に逢ふよしもがな

巖の苔、濱の眞砂、千鳥の鳴聲、我が老齡を君の八千代に加へん、我れも長生して君が八千代に逢はん。と、千代八千代で貫きながら、その間に變化をつけつゝ、いかにも自然に馴染み合つてゐるではないか。次ぎに『後撰集』の「賀」の最初の五首を擧けて見ると、かうである。

萬代の霜にもかれぬ白菊を
うしろやすくもかざしつるかな
雲わくる天の羽衣うち着ては
君が千歳にあはざらめやは
今年より若菜にそへて老の世に

うれしき事をつまむとぞ思ふ

琴の音も竹も千歳の聲するは
　人の思ひも通ふなりけり（貫之）

百年と祝ふを我れは聞きながら
　思ふがためはあかずぞありける。

歌が劣つてゐる爲めでもあらうが、之れを見ると、歌と歌との間に親しい關係がなく、從つて何となくちぐはぐになつてゐて、氣持よく讀み進めぬことが感ぜられる。歌集編纂の骨が唯だ良い歌を選むばかりではなくして、順序立にもあることが、これでも知られるであらうまた聯想を自然に運ばうとして同類を並べるのが、必ずしもよいわけでもない。『千載集』の「賀」の部は、竹の歌三首を引きつゞけて最初を飾つて居るが、面白くないのみならず、却つて鼻について興味を殺ぐ嫌ひがある。

幾千代とかぎらざりける吳竹や
　君がよはひのたぐひなるらむ

植ゑて見るまがきの竹の節ごとに
　こもれる千代は君ぞかぞへむ

わが友に君がみかきの呉竹は
　千世に幾世の影をそふらむ（俊成）

代々の歌集に於ける是等の實際を知つた後に、翻つて『古今集』を見直すと、此の點に於ける卓越が殊に著しく感ぜられるが、此の心遣が各卷各處に行きわたつて居るところを見ると、貫之等が主なる苦心の一部は、必ず此の點に注がれたのであらう。そも〳〵形式に對する貫之の凝性は、『古今』の序と『土佐日記』とが證するところである。『新撰和歌』の序によると、『古今集』が出來て後、醍醐天皇は貫之に命じて、『古今集』の中から更に勝れた歌を抽き出させ給うた。貫之は仰言を畏り、土佐在任の五年間に謹撰して、奉献の悦びを夢みつゝ都に上つたが、それは已に延喜崩御の後であつた。この『新撰和歌』は『古今集』千百首の中から玄の又玄なる秀歌三百六十首を選び出だしたものであるが、その苦心は、春を秋に、夏を冬に、賀を戀に、といふが如く、相對を配合して相鬪はしむるにあつて、その最初に、

袖ひぢてむすびし水の氷れるを
　春立つけふの風やとくらむ

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
　風の音にぞおどろかれぬる

紀貫之筆　古今和歌集　（山内侯爵家藏）

といふ春秋の二首を相對的に並べてある。勅命に應へ奉らうとして、かやうな對峙相鬪の形式に數年の思ひを凝らす貫之彼れである。『古今集』に於ける春、夏、秋、冬、賀、離別、羇旅、物名、戀、哀傷、雜の類別並びに順序立についても、必ず心を惱ましたであらう。卷每の其の部〳〵に於ける歌の排列の順序立については、更に心を惱ましたことであらう。

九

『古今集』を撰した貫之等に取つて、第一の幸福は歌の蓄積の豐富なることであつた。殊に其の蓄積の大部分が名人の名作で、王朝和歌の創業期に於ける登り坂の積極的氣力に富んだものであることであつた。寛都以來、小野篁より六歌仙を經て延喜の貫之、躬恒等に至るまで一百餘年、たとひ初期の大多數が失はれたにしても、猶ほ記憶や筆錄に殘つた歌が多かつたであらう。撰者等が奈良朝の歌を全く除外して、『萬葉』の向うを張らうとしたのも無理ではない。

かくして彼等は先づ和歌の大蓄積を擁することが出來た。彼等が次ぎに案じたのは、選擇の標準を定めることであつたであらう。而して其の標準は『古今集』や『新撰和歌』

の序などによると、消極的には、色につき花を競つた、あだなるはかなき歌を除くことであつたであらう。積極的には、眞情を風流に現はして、世道に資し、天地を動かし、鬼神を感ぜしめ男女の間を和らげ、武士の心を慰め、人倫を厚うし、孝敬を成し、美しく下を風化し、上を諷刺する歌を取ることであつたであらう　また集全體の傾向によつて察すると、消極的には萬葉ぶりや、粗野な、剛快な稜角菱の多い調子や、品のわるい、意味のふたしかな、省略の多過ぎる表現を排斥し、積極的には優美に、典雅に、美しく流れるやうな調子で、程よき含蓄を持つことであつたであらう　殊に彼等の好んだのは、現實をそのまゝ現はさずに、興味のある思附を美しく表現して、「あらましかば」の空想世界を描き出だすことであつたやうに見える。是等の好みから來る自然の結果として、彼等の選んだ歌は多く智巧的で、やゝもすれば知識的傾向が感情の天眞流露を妨ぐる嫌ひもあつたが、同時に其の美しい調子は冷やかな知巧をもまんまと優美化する傾きがあつた。前に擧げた『萬葉集』最後の卷なる大伴家持の

月よめばいまだ春なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

を、『古今』の卷頭なる在原元方の

年のうちに春は來にけり一とせを
去年とやいはむ今年とやいはむ

と比べて見て、『古今』の調子が、いかに美しく滑らかで、內容上の難を隱すかを知ることが出來るであらう。而して此の對照は、恐らく貫之等が萬葉調に對する人知れぬ得意でもあつたであらう。

「古今集」はかやうな標準によつて、豐富なる貯蓄の中から嚴選に嚴選した。かくして粒選りされた歌が、更に配列を美しくされ、詞書を相應はしくされた。詞書はまた正しく、美しく、簡潔にと志されたが、その間に於ける破格の面白き變化は、殆んど在原業平の歌にのみ許された長文句のものであつた。これは恐らく『萬葉集』の山上憶良などの歌に於ける漢文の長序から暗示を得たものであらうが、更に有力な因緣は、貫之等が業平に對する尊敬と『伊勢物語』に對する特別の興味とで、これが、在五の歌のみに對して、詞が長く文體が異なるにもかゝはらず、『伊勢物語』そのまゝを移して、歌の詞書となさしめたのであらう。とにかく『古今集』の內容を成す千百首は、調子が美しく、品位が高く、趣向が面白く、解り易き含蓄を託するといふ理想的標準によつて選ばれたので、詞書などの附屬條件までも嚴密に善處されたものであつた。「家」に譬へて云はゞ、主人の意氣が家庭の隅々に通じて、家族の各員が主人の命令を遵奉しながら、各員名々の特色を失はぬにも比すべきものであらう

『古今集』に於ける此の特殊な風格は、『後撰』『拾遺』と下るに從つて段々に薄れ失はれ

たが、『古今集』の美しさと、嚴選振とはこれら後代の歌集と比べることによつて更に明らかにされるであらう。例へば『古今』の最初の

年の内に春は來にけり一年を
去年とやいはむ今年とやいはむ

を讀んで後に、『後撰』の躬恒が

晝（ひる）なれや見てまがへつる月影を
今日とやいはむ昨日とやいはむ

を讀む者は、これだけでも、新しき集の劣りざま、撰者の不見識に面を背けるであらう。また之れを見ては、躬恒も苦笑するであらうと思はれる。また『古今』の哀傷の初めなる小野篁の

泣く涙雨とふらなむわたり川
水まさりなば歸りくるがに

を讀んで後に『拾遺集』の卷十五、戀の歌のはじめに「善祐法師流されて侍りける時、母のいひつかはしける」と詞書して、

泣く涙世はみな海となりななむ

おなじ渚に流れよるべく

とあるのを讀む者は、同じ卷頭にあつて、甚だしく見劣りするのみならず、之れを戀の歌に攝することの不合理なることを感ずるであらう

殊に甚だしいのは、戀の歌が『後撰』『拾遺』と下るに從つて、ます／＼色につきたる仇なる作の多くなつたことである。殊に彼等は多く長き詞書を伴つたが、その放縱ぶりは、勅撰の名を冒すには恐れ多い、目に餘るものであつた。『古今』の戀は、事實は極めたる背倫であつても、その表現は朧ろにかすめた極めて美しいもので、その長い詞書も亦極めて愛すべきものであつた。例へば

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に、ほいにはあらで、ものいひ渡りけるを、睦月の十日あまりになむ、外へ隱れにける。ありどころは聞きけれど、え物もいはで、またの年の春、梅の花ざかりに、月の面白かりける夜、去年を戀ひて、かの西の對にいきて、月の傾くまで、あばらなる板じきにふせりてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
　我が身ひとつはもとの身にして

を讀んだ後に、『後撰』の

定めたる男もなくて物思ひ侍る頃小野小町
いゝいゝ

あまのすむ浦こぐ船の舵をなみ
　よをうみ渡る我れぞ悲しき

や、同じ集の

元良のみこのすみ侍りける時、手まさぐりに、何入れて侍りける箱にかありけむ、下帶してゆひて、また來む時にあけむとて、物のかみにさしおきて、出で侍りにける後、常明のみこに取り隱されて、月日久しく侍りて、ありし家にかへりて、この箱を元良のみこに送るとて

あけてだに何にかはせむ水の江の
　浦島の子をおもひやりつゝ

を讀み、或は『拾遺集』なる

貞盛がすみ侍りける女に、くにもちが忍びて通ひ侍りける程に、貞盛まうで來ければ、惑ひて塗籠に隱して、うしろの戸よりにがし侍りけるつとめて、いひ遣しける　くにもち

宮つくる飛驒のたくみの手斧音

ほと〳〵しかるめをも見しかな

を讀み、而して此の種の歌や詞書が、この他にも少なからぬことを思へば、『後撰』『拾遺』その他が、『古今』から、貫之等の理想から、いかに遠ざかつたか、いかに墮落したかを推察することが出來るであらう。但しそれは『後撰』や『拾遺』に、よい歌が無いといふのではない。唯だ撰が蕪雜で玉石混淆の醜態を見せたといふのである。『後撰』の如きは、撰者等の作を一首も載せぬといふ不見識な謙遜ぶりを見せ、『拾遺』に至つては、溯つて『萬葉』の中から人麿、家持等の歌まで取りながら、猶ほその內容を半減した『拾遺抄』が專ら行はれて、後に出でた『金葉』『詞花』十卷の先例を成したと云はれるのを見れば、此の二集が自ら侮り世から侮られた消息の一面を知ることが出來るであらう　また二集以後、撰集が段々劣りに劣つて、三代集が八代集の中に於いて、特に重き地位を與へられて居るのを見れば、『後拾遺』以下がいかに見劣りして來たか、翻つて乃祖の『古今集』が、いかに超越的なる高き地位を占めて居るかが解るであらう

要するに『古今和歌集』は、立派な理想と周到なる注意とを以て美しく構成されたる歌集であつた　偏狹なる審美眼を尺度として、題材を限り調子を限つたのは遺憾であるけれども、限られたる範圍に於いては、箇々の歌美しく、詞書との調和よく、歌の排列に有機的の美

しき連絡があり、歌の分類と順序立とが自然で面白く、而して全體が出來た上に、和漢二篇の堂々たる序文で關防の門を据ゑて輪奐の落着を見せたすばらしさは、天にも地にもない美觀である。此の期の歌に限り、古來個人の家集を顧みずして、唯だ此の集を仰ぎ、此の集に赴く、また故あるかなである。

一〇

構成的に見た『古今集』の全體觀は、ざつと右に述べた通りである。吾等は次ぎに作者と歌とについて、極めたる概略を語るであらう

平安朝に於ける和歌の特殊相は已にはやく弘仁の參議篁に現はれた。彼れの作は實生活に卽して流離の身を歎き、無常の世を傷む情本位のものであつたが、『古今集』に大成された、調子の美しい、品位の高い、餘意に富んだ姿は、立派にその中に備へられて居た。貞觀元慶の遍照、業平、小町等は、篁の歌に見えた愛別離苦の情を專ら愛慾自然美の方面に發展させて、實生活に卽しつゝ、謂はゆる色につき花になつた一派とも云ふべきであらう。之れに次いで來たのが、延喜中心の古今集時代である。この時代の歌人等は、從來の歌人が唯だ我が

天賦に驅られ時代に動かされて、無自覺に情懷を吐露したのとは違つて、一種の歌論を立てて、之れを目標とするやうになつた。それは感情に對する知識の覺醒でもあり、前期の愛慾過重に對する反動でもあつたであらうが、主としては創新を悅ぶ天才紀貫之の指導によるのであつた。彼等が革新歌論の要旨の一つは、色につき花に走るあだ心の抑制であつた一つは、かうもあらばと想像する空想の世界を詠出することであつた。そしてもう一つは譬喩、懸詞、一筆双叙、その他の修辭を、目もあやに使ふことであつた。取統べていふと、情の感するまゝを表白するといふよりは、むしろ知識的に情を抑へ、一種の空想世界を構案して、その表現に巧緻なる細工を施すことであつた。かくして彼等の歌は自然に智巧的となり、非感情的となつた。而して一たび禁斷の智慧の木の實を喰つた者の歌には、何となく冷やかな智巧の影がさして、もう記紀萬葉の大樣な天眞爛漫振を見ることが出來なくなつた。

吾等は無論古今集時代の歌が悉く智巧的、非自然的、非天眞爛漫的になつたといふのではない。のみならず、新歌論の指導者紀貫之に於いても、往々にして極めて自然な情の發露を見出だすことが出來る。思ふに古今集時代の歌には、おのづから三種の別があつたであらう。一つはわざとらしい何等の修辭をも見せぬものである。例へば藤原敏行か

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

や、大江千里が

月見ればちゞに物こそかなしけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど

の類ひで、貫之が作の

思ひかね妹がり行けば冬の夜の

川風さむみ千鳥鳴くなり

や、躬恒の

山里は秋こそことに悲しけれ

鹿の鳴く音に目をさましつゝ

なども、此の部類に屬すべきものであるが、彼等の作の中でも、これらこそ特に永久價をもつ尊いものであらう

第二種は人目につかぬ程度なるいさゝかの巧みを見せたもので、床しくこそあれ、何等の厭味をも感ぜしめぬものである。例へば貫之が

君まさで烟たえにし鹽がまの

うらさびしくも見えわたるかな

わがせこが衣はるさめふるごとに

野邊のみどりぞ色まさりける

や、躬恒が

心あてに折らばや折らむ初霜の

おきまどはせる白菊の花

の類ひで、時代の推移に影響されぬ彼等の絶唱は恐らく此の邊にあるのであらう。

第三種はや〻こしき智巧を弄して、理智的の機構が藝術的情味を封殺したものである。

その極端な例は、貫之が

燃えもあへぬこなたかなたの思ひかな

涙の川のなかに行けばか

昔戀ふる涙しなくは唐衣

むねのあたりは色もえなまし、

や、躬恒が、

今までに逢坂山のもみぢ葉の

散らぬは關やさへてとめける

傳貫之筆

（紙色庵松寸）

の類である。これらは嗜好の一變した後代の目からは、見るにも堪へぬほど索寞たる厭味のものであるが、さすがに此の新流風の行はれ始めた世盛りには、世を擧げて歡迎し讃歎したのであらう。左の躬恒、貫之が贈答の如きは、

草も木も吹けば枯れぬる秋風に
　咲きのみまさる物思ひの花
（躬恒の贈れる）

ことしげき心より咲く物思ひの
　花の枝をやつら杖につく
（貫之の答へたる）

當時の歌壇を率ゐた二人の主將の得意を思はしめるものである。とにかく貫之の最大得意はこの智巧的な詠みぶりにあつたら

しく、彼れの歌には此の種の作が當時の誰れのよりも多いが、またその中には輕からぬ興味を感ぜしむるものもある。此の方面の技巧の手が込んでゐて、しかも面白いのは、

今年より春知りそむる櫻花
　散るといふことはならはざらなむ

櫻ちる木の下風は寒からで
　空に知られぬ雪ぞ降りける

等であらう　貫之の作は數が多く評判の高い割合に絶唱の少ない憾みがあるが、左にその名作の數首を擧げて見る

夏の夜のふすかとすればほとゝぎす
　啼く一聲に明くるしのゝめ

川風の凉しくもあるかうち寄する
　波とともにや秋は立つらむ

逢坂の關の清水にかげ見えて
　今やひくらむ望月の駒

春やいにし秋やは來らむおぼつかな

かげの朽木と世を過ごす身は
絲によるものならなくに別れ路の
心ぼそくもおもほゆるかな

躬恒の歌は貫之に比して、智巧に於いて劣り、情味に於いて優る傾きがあつた。彼れには當意卽妙の奇才があつた。醍醐天皇が曾て夜遊のお催しのあつた時に、躬恒を召して、「月を弓張といふ意（こゝろ）は」と問はせられると、躬恒は御聲に應じて、

照る月を弓張としもいふことは
山邊をさしていればなりけり

と答へ奉つた。天皇が御感あつて大袿（おほうちき）を賜はると、彼れは畏つて肩にかけつゝ

白雲のこの肩にしもおりゐるは
天つ風こそ吹きて來ぬらし

と、悦び申しを奏したといはれる。これは恐らく彼れが生涯第一の名譽で、また折といひ、姿といひ、智巧の歌に取つて最上の代表であらう

淡路にてあはと雲居に見し月の

近き今宵はところがらかも

の如きも折に合つた佳作である、尙ほ左に彼れが名作の數首を擧げる。

山高み雲居に見ゆる櫻花
心のゆきて折らぬ日ぞなき

住の江の松を秋風吹くからに
聲うちそふる沖つ白波

わびしらに猿な啼きそ足曳の
山のかひある今日にやはあらぬ

わが戀は行方も知らずはてもなし
逢ふをかぎりと思ふばかりぞ

ひき植ゑし人はうべこそ老いにけれ
松の木高くなりにけるかな

殊に「聲うちそふる沖つ白波」の名詞止は、當時としては異風の調子で、遙かに『千載』『新古今』に暗示を與へたかの觀がある

二

紀友則の歌は貫之よりも智巧の癖が少なく、大體貫之、躬恒等に似てより穩かなものであつた

花の香を風のたよりにたぐひてぞ
　鶯さそふしるべにはやる

久方の光のどけき春の日に
　しづ心なく花の散るらむ

宵々にぬぎてわがぬる狩衣
　かけて思はぬ時のまもなし

敷妙の枕のしたに海はあれど
　人をみるめは生ひずぞありける

壬生忠岑の歌の味も、他の撰者三人とほゞ同じと云つてよい。

春日野の雲間をわけて生ひ出で來る

草のはつかに見えし君はも

落ちたぎつ瀧の水上年つもり
　老いにけらしな黑き筋なし

山里は秋こそことにわびしけれ
　鹿のなく音に目をさましつゝ

獨りしておもへばくるしいかにして
　おなじ心に人を敎へむ

風吹けば嶺にわかるゝ白雲の
　たえてつれなき君がこころか

吾等は左に『古今』から『後撰』『拾遺』にかけて、代表的の名歌をわづかばかり抜きあつめて見る。

わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に
　もしほ垂れつゝわぶとこたへよ（在原行平）

秋風の吹上にたてる白菊は

花かあらぬか波のよするか（菅原道眞）

見わたせば柳さくらをこきませて
都ぞ春の錦なりける（素性法師）

今來むといひしばかりに長月の
有明の月を待ちいづるかな（素性法師）

花ちれる水のまに〳〵とめ來れば
山には春もなくなりにけり（淸原深養父）

あひにあひて物思ふころのわが袖に
宿る月さへぬるゝがほなる（伊勢）

三吉野の山の白雪つもるらし
ふるさと寒く衣うつなり（坂上是則）

わびぬればしひて忘れむと思へども
夢といふものぞ人だのめなる（藤原興風）

梓弓おして春雨けふ降りぬ
明日さへふらば若葉つみてむ（讀人不知）

わがせこが衣の裾を吹きかへし
　うらめづらしき秋の初風（讀人不知）
ありぬやと心みがてら逢ひ見ねば
　戯れにくきまでぞ戀しき（讀人不知）
人の親のこゝろは闇にあらねども
　子をおもふ道にまどひぬるかな（藤原兼輔）

あたら夜の月と花とをおなじくは
　心知れらむ人に見せばや（源信明）
行くさきを知らぬ涙の悲しきは
　たゞ目の前におつるなりけり（源済）
さりともとたのむ心にはかられて
　死なれぬものは心なりけり（大中臣能宣）
水の面に照る月なみをかぞふれば
　今宵ぞ秋のもなかなりける（源順）

里遠み雲路かきわけ水莖の
　あとかと見ゆる雁は來にけり（同右）

源順像（東京帝室博物館藏）

花薄まねくたもとはあまたあ
　れど秋はとまらぬものに
　ぞありける（淸原元輔）
歎きつゝ獨りぬる夜のあくる
　まはいかに久しきものと
　かは知る（右大將道綱母）
忍ぶれど色に出でにけりわが
　戀はものや思ふと人のと
　ふまで（平兼盛）
戀すてふわが名はまだき立ち
　にけり人知れずこそ思ひ
　そめしか（壬生忠見）
かくばかりへがたく見ゆる世の中に

藤原公任筆朗詠集　（岩崎男爵家藏）

うらやましくもすめる月かな

（藤原高光）

花の色に染めし袂の惜しければ

衣かへうき今日にもあるかな

（源重之）

小倉山あらしの風の寒ければ

もみぢの錦きぬ人ぞなき

（藤原公任）

春來てぞ人もとひける山里は

花こそ宿のあるじなりけれ

（同右）

かた山に畑燒く男の子かの見ゆる

深山櫻はよきてはたやけ

（藤原長能）

櫻がり雨は降り來ぬおなじくは

ぬるとも花の陰にやどらむ（藤原實方）

咲けば散るさかねば戀し山ざくら

　思ひ堪へせぬ花の上かな（中務）

八重むぐらしげれる宿のさびしきに

　人こそ見えね秋は來にけり（恵慶法師）

一二

二十一代集中の八代集と呼ばれ、その八代集中の三代集と崇められる中の『後撰』『拾遺』である。彼等もさすがに多くの名歌を持つてゐたが、『古今』に對しては最初から一種の叩頭者であつた。彼等は構成の立派さに於いて『古今』に劣り、操守の氣高さに於いて『古今』に劣つたのみならず、見識に於いて殊に甚だしく劣つてゐた。『古今』は上代に對しては『萬葉集』を締め出し、當代を高く標置しては最も多く撰者自身の作を取り入れたが、之れに對して『後撰』は撰者の詠をば一首も取り入れなかつた。而して『拾遺』は柿本人麿その他の、必ずしも優れざる萬葉人の作を、讀み誤りつゝ、數多く取り入れた。かくし

て『後撰』と『拾遺』とは、ひたすら『古今』の後塵を拜して、『古今』の定めたる題材に據り、『古今』の示したる調子を守りつゝ、而して内容の大部分を『古今』の撰に漏れたる古今歌人の作に仰ぎ、その空位を萬葉人と後人との作によつて補ひつゝ、辛うじて二十卷千數百首の大歌集を作り上げた。

かくして相次ぐ二代の歌集が『古今』を摸倣しつゝ段々下りに下つて行つた後を承けて、此の頽勢をいさゝかなりとも挽回して、獨立の面目を發揮したのは『後拾遺集』であつた。

片假名古寫本（田中四郎氏藏）

『後拾遺集』は『拾遺集』を隔たること八十餘年にして、白河天皇の應德三年に、藤原通俊が撰進したものである。通俊は、此の集に載せた

年の内は散らぬ櫻と見てしかな

さてもや風のうしろめたきと

その他の三四首の示すところによると、歌道の名手ではなかつたらしいが、選擇編成の方針については、一種の見識を持つてゐたのであらう　その見識の一つは、取材の範圍を天暦以後に限つて、當代を本位としたことであつた　他の一つは此の時代に發生した新風に重きを置いたことである　讀者は此の集が能因法師、相模、赤染衞門等の三十餘首を採錄してゐる間に於いて、特に和泉式部の最多數を採つて居ることを見出だされたであらう。　また曾根好忠の九首を採つて居る中に、

鳴けや鳴け蓬が杣のきり〴〵す
過ぎ行く秋はげにぞかなしき

の一首が入つて居ることに注意されたであらう　そも〳〵和泉式部はその放縱なる生活の爲めに時の人の指彈を受けた者であつた　好忠は狷介孤獨の高あがりやで、寛和元年（一六四五）の二月十三日に、圓融院が船岡山で子の日の御遊を催された時、召しもなきに烏帽子狩衣姿で推參して、衣の領を取つて引き出された男である　殊に此の歌は、藤原長能が「狂惑のやつ也、蓬が杣といふことやある」と云つて罵つたといふ札つきの歌である。　かういふ女の歌を數多く載せ、かういふ癖のある男の惡まれ歌を取るについては、撰者に於いて必

ず一種の見識があつたのであらう

『後拾遺集』は、その序文に於いて「天暦の末より今日に至るまで、世は十つぎあまり一つぎ、年は百年あまりみそぢになむ過ぎにける」と云つて居る通り、天暦の五歌仙以來白河天皇の御宇に至る百三十年間の歌の中から選んだものである。而して好忠は、その劈頭の大中臣能宣や源順等とも交りを結んだものであり、和泉式部は遙かに下つて中程なる長保、寛弘の頃に榮えた女性で、赤染衞門や紫式部と共に、『後拾遺』に於いて始めて勅撰歌集入選の榮を擔つたものである。從つて王朝末期の應德年間に成立した歌集に、百年前乃至數十年前に詠まれた好忠及び和泉式部の歌の採り入れられたのを取つて、革新氣運の發生を論ずるのは、時代錯誤の嫌ひがある、また通俊が此の破格の取扱は一面時勢の變遷に基いたものでもあらうが、とにかく通俊の編纂意識には一種異常な、高い新らしい或ものがあつたのであらう。その高い新らしい編纂意識の現はれの中、當代を本位とした方面は暫らく措いて專ら新風發生を重要視した方面についていふと、吾等は圓融、花山から一條朝にかけて現はれた歌界の新氣運もしくは新しい大事業を、三人の天才者の文動に於いて見出だすことが出來ると考へる。一人は圓融朝の前後に活動した謂はゆる曾丹の曾根好忠で、これは主として『古今集』以來の舊格式に對する用語形式上の叛逆であつた。第二の一人は一條朝

に榮えた和泉式部で、これは實行實感の活き〳〵した表現によつて、「あらましかば」の空感をうはべ美しく粧ひ詠む『古今』以來の流風に對抗したものであつた。第三の一人は同じく一條朝の紫式部で、これは勅撰歌集等とは全くかけ離れたとであるが、吾等は彼女の『源氏物語』に於ける七百九十四首の歌をば、多くの人物の境遇に卽しつゝ、その多趣多様なる心々を詠み別けた、云はゞ劇的の氣分を持つた一團の歌として、空前絶後の妙味を見せたものと思ふのである。而して純なる空想の所産ではあるが、特殊の環境に圍繞された人物に同情して詠んだ爲めでもあらう、歌人が我が事を詠んだ歌よりは遙かに深く眞情の人を打つものがあり、また『金葉』『詞花』の兩集よりは遙かに多き約八百首の殆んど全部が、他の前後の物語の挿歌とは比較にならぬ程の藝術的價値を持つてゐるので、之れを勅撰歌集や家々の集の歌と同格に取扱つて、王朝歌壇の一種の異彩と見做したいと思ふのである。

曾丹は好んで古語俗語を用ゐて奇癖の言ひつらねを試みた。前に引いた「蓬が杣」は彼れの代表第一の作として屢〻引用されるもので、多くは作者の眞意を紏さず專ら嘲笑の種として取扱はれて居るが、おもふに彼れの意は『童蒙抄』に云へるが如く、「蓬のむれ立てるが杣山の木のむれ立てるに似た」といふのであらう。「そま」の原意は明らかでないが、松岡靜雄氏の『日本古語大辭典』には、細葉の意と解してゐる。假りに之れに從へば、葉

の幅の狹き針葉樹の意で、松、檜、栂、樅等の針葉喬木を指すのであらう。而して好忠は恐らく蟋蟀が蓬の藪の中で餘りにかしましく鳴き立てるのに興味を感じ、同時に盆栽家が鉢の中の尺にも足らぬ松や欅が、高山に雲を凌ぐ風姿を見せて居るのに興ずるにも似たる幻覺を感じて、「鳴け／＼きり／＼すよ。お前に取つて蓬の藪は、奧山の喬木柚木の大森林にも思はれるであらうが、その大森林をも搖り動かすばかりに鳴くがよい　秋の逝くのは、ほんとに悲しいんだからな」と云つたのであらう　そして地を這ふやうな小譬喩に安んじて、空想の飛躍の味を知らぬ秀能等が、此の飛び離れた大譬喩に目をまはして、狂人の沙汰だと憤慨したのであらう。かう見ると、曾丹が奇癖の歌は必ずしも語句の末にのみ跼蹐して居たのではなくして、深く趣味空想の根本義にまで立ち入つたものであらうとも思はれる。

かくいへばとて、無論好忠が新らしい自家の建前を振りかざして、全面的に『古今集』や貫之に反抗したといふのでない。『古今』の調子は、概して王朝、鎌倉以來武家時代一ぱいを支配してゐた。殊に好忠の前後に於ける『古今集』の勢力は、勅撰歌集に於ける貫之等の名の頻出でも知られるし、また惠慶法師が紀時文から貫之集を借りたのを返すとて、

一卷に千々の黃金をこめたれば
　人こそなけれ聲は殘れり

と詠んだのが、『後拾遺集』に載せてゐるのを見ても察せられる　おそらく、彼れは公任と共に、

凡そ歌は心ふかく姿きよげにて、心にをかしき所あるを、すぐれたりといふべし。事多く添ひくさりてやと見ゆるが、いとわろきなり　一筋にすくよかになんよむべき。心姿相具すること難くは、まづ心を取るべし。つひに心深からずは姿をいたはるべし。（新撰髓腦）

と考へたであらう　事實彼れの歌も、多くは古今式、貫之式、乃至新撰髓腦式に詠まれたので、現にその代表名歌の一つなる

由良のとをわたる舟人楫をたえ
ゆくへも知らぬ戀の道かな

の如きは、之れを『古今集』の中に入れても誰れ一人怪しまぬものであらう、唯だ彼れには負けぬ氣の非雷同性があつた。而して

藤原定家筆

その性質が周圍の歌人達の如く『古今』の格式に對して一心頂禮をさゝげることを許さぬところから、事ある毎に主角を現はして、その物凄き鋒鋩に俗流をひやりとさせたのであらう。而して「なぞ〳〵物語しける所に」と題して詠んだ

わが事はえもいはしろの結び松
　千年をふとも誰れがとくべき、

の如きは、恐らく彼れが時勢に先んじて世に知られぬ不平を託した自嘲自慰の聲であつたであらう

惠慶集
（前田侯爵家藏）

好忠の異を樹てる奇癖は從來專ら語句の上にのみ見られてゐたがまことは語句の局部ばかりではなく、多くは立意、構成、趣味の上にも及んでゐた　而してその主なる狙ひどころは貴族生活に對する平民生活、都會趣味に對する田舍趣味にあつたかのやうに見える

はゝこ摘む彌生の月になりぬれば

開けぬらしなわが宿の桃
わらび生ふる矢田の廣野にうちむれて
折りくらしつゝ歸る里人

の如きは、「はゝこ草」「わらび」の點出によつて、田園の趣味を見せたのであらう。

閨の上に雀の聲ぞすだくなる
出でたちがたに子やなりぬらむ

淺ちふも雀がくれになりにけり
うべ木のもとは木暮かりけり

冬飼の手飼の駒も放ちてむ
岡べの小笹はえぬとならば

閨の上の雀の巣は月卿雲客趣味の想像し得ぬところである。田舍くさく、穢くろしげではあるが、とにかく新らしい趣味であらう。「聲ぞすだく」はそぐはぬやうで、をかしいが、これは感覺轉換の一種で、「香が聞こえる」といひ『源氏』の「夕顏」に「翁びたる聲にぬかづくぞ聞こゆる」と云つてあるのと同じく、理法を超越した修辭の味である。三四寸伸びたばかりの淺茅を「雀がくれ」は新らしく愛らしくて、とても面白い、草の伸びによつて

木の葉の茂みに驚くのも自然で、同時に奇抜である　小笹の生えぬのがもどかしさに、「早く生えぬと馬に蹴散らかさせるぞ」などは、百姓の言ひ草を聞いたのでもあらうが、殿上の風流者のとても考へつかれぬ味の野趣で、また曾丹ならでは出來ぬ新表現であらう。

鷺立てる五月の澤のあやめ草
　よそ目は人の引くかとぞ見る
山賤の畑にかりほす麥の穗の
　くだけて物を思ふ頃かな
わが蒔きし麻苧の種をけふ見れば
　千枝にわかれて蔭ぞ涼しき
轡むしゆら〳〵思へ秋の野の
　やぶのすみかは長きやどかは

着眼が時流とすッかり異つてゐて、それが相應はしい獨得の表現を得てゐることが解るであらう　同時に其の表現の佶屈粗野に見えるのは、作者に風雅流麗な調子が出來ぬ爲めではなくして、出來るものがわざとのすさみなることが解るであらう。

招くとて立ちもとまらぬ秋ゆゑに

あはれ片よる花すゝきかな

のやうな面白き雅調を詠ずる好忠彼れである。藤原公任が壬生忠岑の「春來ぬと人はいへども鶯の啼かぬかぎりはあらじとぞ思ふ」を映して「卯の花の散らぬ限りは山里の木の下闇はあらじとぞ思ふ」と詠じたやうに、

冬來ぬと人はいへども朝氷

むすばぬ程はあらじとぞ思ふ

と、好い氣持で詠んでも居る好忠彼れである。要するに彼れは一方古今調を悦んで十二分に手に入れながら、その性格の根底に潜んで居る非雷同性の刺戟するまゝに、より〳〵異を樹てゝ自ら快しとしたのであつた。而してその優れたる大分は異風な題材の表現をも可なりの程度に仕上げさせたが、餘りの風變りに眩いた周圍から冷眼視されつゝ不遇の一生を終へたのであつた。而してまた、この時勢より進み過ぎた先驅者が、やがて後代に知己を得て、經信、俊頼等に受け繼がれ、『金葉』『詞花』兩集に於ける一大勢力となつたのであつた。

吾等はまた彼れの『曾丹集』に於いて、始めて「家集」といふものの面白味を會得したやうに思ふ。彼れ以前の個人の歌集、謂はゆる「家の集」は、多くは特色の稀薄な、讀み甲斐のないもので、貫之、躬恒、順、公任等のでも、勅撰集に選まれた歌に引かされて、家集に赴くと、案

外の平凡さに、讀み進む勇氣を失ふのが常であるが、曾丹が家の集は、勅撰集から目を移すと、個人的特色の著しさに、却つて讀みまさりするやうに思はれる

曾丹に次いで曾丹以上の强烈な個人性を持ち、その家の集もまた『曾丹集』以上の魅力を持つものは、和泉式部である。

一三

和泉式部は全身戀であつたかのやうに見える。從つて彼れが家集の約千五百首は殆んど悉く戀の歌であつた。此の點に於いて、この戀愛歌の女性選手は、貞觀期の男性選手在原業平に比して遙かに純にまた遙かに熱烈であつた。彼女の歌の大部分はその場〳〵に於ける實心境の卽詠であつたが、極めて稀なる題詠も、他人の實心境歌以上に戀愛歌の色彩を帶びてゐた。彼女は「蟲」と題して、

その事といひても鳴かぬ蟲の音も

聞きなしにこそ悲しかりけれ

と詠んだ「戀」と題しては、

つれ〴〵と空ぞ見らるゝ思ふ人
　　天降り來むものならなくに
見えもせむ見もせむ人を朝ごとに
　　立ちてはむかふ鏡ともがな

と詠んだ。播磨の聖（ひじり）に結緣を乞うて送つたといふ

暗きより暗き道にぞ入りぬべき
　　はるかに照らせ山の端の月

も、おそらく戀の惱みの苦しさに、救ひを求めたのであらう　彼女の歌の中の最も名高き一つは、藤原公任がその子の定賴に、式部を推賞して「こやとも人をいふべきに」といふ歌を詠める人ぞと教へたといふ、

津の國のこやとも人をいふべきに
　　ひまこそなけれ蘆の八重ぶき

の一首であつた　最も名高きもう一つは、貴船に詣でた折に詠んで、明神感應の和吟を得たといふ、

物思へば澤の螢もわが身より

あくがれ出づるたまかとぞ見る

の一首であつた。彼女の戀愛は多元主義であつたが、觸るゝところ常に炎を生ずるの槪があつた、而して最高より最低に及ぶいろ〳〵の對手を得て、その都度々々の實感を自由に大膽に表現した。彼女は當時の男女の多くが空想的に詠んだ戀の歌を、身を以て書いたのである。彼女は

人の身も戀にはかへつ夏蟲の
あらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

の一首が示すやうに、命にかへて戀をしたであらう。同時に

ともかくも言はゞなべてになりぬべし
音に泣きてこそ見せまほしけれ

の一首が示すやうに、言語に現はし切れぬ深きものを感じたのであらう。吾等は此の歌に、『萬葉』の「言にいへば耳にたやすし、すくなくも心のうちに我が思はなくに」に似たところがあり、維摩が一默の深い味があるやうに思ふ。

和泉式部の歌は戀愛一相で單調であつたけれども、戀の歌としては他に比類なき變化を持つてゐた。

世の常の事とはさらにおもほえず
はじめて物を思ふ身なれば

は、三十歳にして始めて理想の愛人を得た時の感じである。

竹の葉に霰ふる夜はさら〳〵に
獨りはぬべき心地こそせね

は、特別な外境に深く動かされた感じである

春の日のうら〳〵見れど我ればかり
ぬれ衣きたるあまのなきかな

重ねつゝ人の着すればぬれ衣を
いとほしとだに思ひおこせよ

は、濡衣を着るべき理由はありながら、餘りに多く着せらるゝを歎いた心である

絶え果てばたえはてぬべし玉の緒に
君ならむとは思ひかけきや

賴むべきかたもなけれど同じ世に
あるは有りとぞ思ひてぞふる

は、疎くなつた男との間を辛うじて繋ぐ心細い縁の絲に、おづ〳〵と縋つてゐる心である。

きのふけふ行き逢ふ人はあまたあれど
見まくほしきは君ひとりかな

は、或人ひとりに心を捉へられてゐる心である。

何事も心にしめて忍ぶるを
いかで涙のまづ知りにけむ

身よりかく涙はいかで流るべき
海てふ海は潮やひぬらむ

あかざりし昔の事を書きつくる
硯の水は涙なりけり

は、まゝならぬ戀路の既往を振りかへつて、涙の神祕を耽味する心である。

花見ても日をば暮らしつ青柳の
いと苦しきは夜にぞありける

は、戀に生きる者が、紛るゝ物なき戀の時間を過ぐしかぬる心である

あはれなる事をいふには徒らに

ふりのみまさる我が身なりけり

は、戀を語るには、そろ〳〵相應はしくなくなる年の積りを歎く心である

試みにいざ語らはむ世の中の

これに慰むことやあるとも

は、世に倦んだ女の、戀を弄ぶ心である。

山を出でて暗き道にぞたどり來し

今一たびの逢ふことにより

は、法の道に入つた者が、入り了せずして、愛慾の道に復歸した心である

ふれば世のいとゞ憂き身の知らるゝを

けふのながめに水まさらなむ

は、涙が雨と爭ひ降る現在のつらさに、洪水を祈つて、その中に溺れようといふのである。

すて果てむと思ふさへこそ悲しけれ

君に馴れにし我が身と思へば

は、「なほ尼にやなりなましと思ひ立つにも」と、詞書のしてあるところを見ると、おそらく愛人に親しんだゆかりゆゑに、我が身體髮膚までをいとほしむ心であらう。

以上の歌群は悉く空想の作ではなくして、身を以て詠じた實境の歌である。これを見ても、和泉式部の愛の體驗がいかに廣く、深く、切なるものであつたか、從つて彼女がいかに高き意味に於いて戀愛の歌人であつたかが解るであらう。尙ほ右の歌どもに添へて記さねばならぬのは、娘の小式部を喪つて後、その筆の跡を見出だして泣いたといふ

もろともに苔の下には朽ちずして

うづもれぬ名を見るぞ悲しき

の一首であるが、まことに惻々として人を動かすものがある

和泉式部の歌が始めて出會はした意外な批評は、『紫式部日記』のそれであつた　紫式部は云つて居る。

(和泉式部の)歌はいとをかしきこと、もの覺え、歌のことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざンめれ、口に任せたる事どもに、必ずをかしき一節の目にとまる、詠みそへ侍り。それだに人の詠みたらむ歌難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌のよまるるなンめりとぞ、見えたる筋に侍るかし。はづかしげの歌よみやとは、覺え侍らず

解りにくいはあるが、大體の意は、和泉式部の歌は隨分と面白い　尤も歌の故實や理法を辨へての、しかとした詠みぶりとは思はれないが、浮かぶまゝを、片端から詠む中にも、屹度一ふ

し、人の目を惹く所がある。しかし他人の歌を批難してゐる所などを聞くと、要するに口先の歌で、深い心得のあるのでないらしい、といふのであらう。いかにも學殖を恃む紫式部らしい批評で、その中、故實理法を辨へた歌人でないこと、口に任せて詠む中に必ず人の注意を惹く一味を添加することは確かであらうが、口先で詠み散らす(「口にいと歌のよまるゝ」が此の意味ならば)といふのは、どうであらうか。吾等は、和泉式部がもし此の批評を聞くならば、恐らく「わたしは口では詠むが、物覺えや、こゝとわり(故實や法格)で歌は詠みませんよ。わたしはこの生身で時々の實感を詠むのです」と答へるであらうと思ふ。

和泉式部には數多く詠んで精錬の足らぬ氣味があつた。また調子の美しさに於いて、同時代並びに『古今』時代の歌人の作に劣るところがあるであらう。けれども彼女は生きた生活を如實に詠むといふ、當代の歌人の誰れもが殆んど持たぬ特色を持つてゐた。適切にいふと、曾根好忠が、一代を風靡した流麗典雅主義に對し、新語擅用の新旗幟を飜して、形式上の革新を企てたやうに、和泉式部は一世に流行した「あらましかば」を詠む空想主義に對し「ありまゝを」詠ずる新旗幟を飜して、實質上の革新を企てたのである。而して此の點から、彼女の光輝ある特色が、王朝の歌謠史上に空高く揭げられて、上代に於ける在原業平と後代に於ける西行圓位とに呼應するやうになつたのである。

一四

紫式部が我が身を詠じた歌は、數が少なくその質もさまで優れたものではなかつたが、『源氏物語』の中で、多くの人物に成りかはつて詠んだ歌は、七百九十四首の多きにのぼり、しかもそれが一群として千古無比の優れたものであつた。思ふに大時代物としては、已に歴史、叙事文の中から拔き出された—記紀の歌—が、一群團として歌謠史上に重要視されてゐる。古今の大作物語の中に挿入された歌を取り出だし、之れを一團の歌群として歌謠史上に取り入れるのに、不思議はあるまい。無論嚴密にいへば先づ『竹取』『宇津保』から『狹衣』『とりかへばや』に至る物語全部に現はれた歌謠を取りまとめて、系統的に取扱ふべきであるが、『源氏』の歌が前後に比類なく優れてゐるので、假りに是れだけを取り出して見ることにしたのである。

抒情詩、叙事詩、劇詩を詩の三體といふ。抒情詩は個人の主觀の情を抒べるものである。叙事詩は作者の主觀を交へずして客觀の事實を公平に叙するものである。劇詩は作中の人物各〻に主觀の情を歌はせ、而して全體としては、客觀的に公平に叙するものであるか

くして劇詩はまた主客兩觀詩とも云はれるのであるが、吾等は『源氏物語』は立派に此の主客兩觀詩の體樣を具へてゐて、作者は、あの五十餘帖にわたる多數の人物の愛慾の徑路を客觀的に公平に辿つて行きつゝ、同時に主要なる人物をしては、その行路の要所々々に於いて、切なる感情を短歌に託せしめてゐると思ふ。『源氏』に於いて、短歌は少なくとも前後の地の文(散文)の繫ぎをなし、時としては層々高まり來たれる興味の絶頂を示し、また時としては人物の心情活動の旋廻點を示して居る　而してそれらの歌は、身分としては貴賤貧富、境遇としては順境逆境、居處としては都會田舍、感情としては喜怒愛憎等、それら限りなき事象交錯の間に詠まれたので、要するに作者は、男になり、女になり、公卿に、殿上人に、神官に、僧侶に、女房に童に成りかはつて、或時、或場合に於ける或人の特別な心境を詠み出でたのである。云はゞ百萬の心(ミリアッド・マインデッド)もてる或一人の百人藝ともいふべく、『古今集』の春、夏、秋、冬、戀、賀、誹諧、雜等の各部に於ける多數の歌人の役目を、一手に引受けたやうなものでもある。

この百人藝に於ける紫式部の扮裝振は鮮かなものであつた。彼女が最初に扮して歌つたのは重病の桐壺更衣が帝と最後の別かれを惜しむところであつた。

限りとて別かるゝ道の悲しきに
いかまほしきは命なりけり

最初の一首に特に力をこめたのでもあらう、麗人斷腸の思ひが、文字の間に波うつて居るやうに見える。

彼女はやがて勅諚を奉じて老母を見舞ふ靫負命婦と老母とになつた。二役併演で、彼等が別かれに臨んでの贈答は、かうであつた、

鈴蟲の聲のかぎりをつくしても

長き夜わかずふる涙かな（命婦）

いとゞしく蟲の音しげき淺茅生に

露おきそふる雲の上人（老母）

二人の心境が相應はしく詠みあらはされてゐる上に、緣語や一筆双叙の添加味までが、實によく出來てゐる

その中に、彼女は多情な若殿上人と嫉妬女とに身を替へた。言ひ募つた揚句、女に喰ひつかれた指を屈めて、男が

手を折りて逢ひ見し事をかぞふれば

これ一つやは君が憂きふし

といふと、女も負けずに、尻取文句で面白く引き取つて、

憂きふしを心ひとつにかぞへ來て
　こや君が手を別かるべき折

と答へた。「喰はれた指を折つて數へて見ると、お前のつらさは數へきれないわ」「わたしだッて、あなたのつらさを、今まで我慢しつくして來だんですもの、此の邊が手の切り時でせうよ」などは、實に皮肉の利いた、冴えた應酬ぶりである

彼女はやがて、夕顏の花咲く陋巷に無邪氣な女を見出だした源氏と女との二役を演じたが、洛外の淋しい別莊に女を連れ出さうとして、源氏が

古もかくやは人のまどひけむ
　わがまだ知らぬしのゝめの道

といふと、女は

山の端の心も知らで行く月は
　うはの空にて影やたえなむ

と答へた。「昔の人も戀ゆゑには、かうも迷つたものであらうか、私はまだ朝の未明の相合車の道行をした經驗はないが」「誘ひ出す人の心も知らずに出かけて、私はあの月のやうに中途で影が消えるのかも知れませんよ」二役併演の贈答の相應はしい味と云ッたら、無い。

彼女はまた十八歳の源氏に扮して、常陸宮の遺見なる末摘花の君といふ沈黙娘を訪れた。いろ／＼と話しかけるが、たえて返事がない。そこで詠んだ。

いくそたび君が無言にまけぬらむ
　物ないひそといはぬたのみに

「君のだんまりには何度負けたことだらう。黙ッてろと云はれないのを頼みに、つい話しかけ話しかけして」は、此の場合、實に嵌まつた當意卽妙ではないか。

藤壺の宮の落飾を聞いて、源氏が「御出家の御境涯は羨ましいが、私は東宮の御上に心ひかれて、とても思ひ切れません」といふ意味の歌を上げると、藤壺の答はかうであつた。

大かたの憂きにつけては厭へども
　いつかこの世をそむき果つべき

「何となくいやさに、世に背いて尼にはなりましたが、子の東宮の居られる世を、いつになつて背き切れますことやら」は、趣向、語擇み、表現、實に三拍子を切り揃へてゐる。同時にこれにつゞいた詞の「かつ濁りつゝ」（東宮を思つては出家して澄んだ心も、端から濁り／＼するのですと助け合つて、歌文連絡の醍醐味を見せて居ると、吾等は思ふ。

彼女はやがて、須磨へのさすらひを前にして、朧月夜内侍に別かれを告げる源氏に扮した

朧月夜は禁裏への御遠慮から、今監視中の身である。源氏の歌は

逢ふ瀬なき涙の川に沈みしや

流るゝ水脈のはじめなりけむ。

今度流され行く其の水脈の源をたづねると、ろく〳〵逢はれもせぬ契りのつらさに泣いた涙でありましたよ」といふのである。これは俊成の女が源氏物語第一と推稱した歌であるが、絡み合つた曲の多い技巧を見せた新古今集振の歌としては、まことに源氏物語中の隨一であらう。

源氏はやがて明石の入道に迎へられて其の娘を戀する身となつた。木立の遠く霞んで見える、娘の住む山莊に宛てた消息が、これである。

遠近も知らぬ雲井にながめわび

かすめし宿の梢をぞとふ

「知らぬ他鄕にさすらふ身のわびしさにたへかねて、父御のほのめかされた山の手の木立の御住居に、此の音信をさし上げます」といふ意であるが、調子といひ、餘情といひ、實によい。娘が羞恥んで返歌を肯んじないので、今度は作者が入道に成りかはツて詠まねばならなくなつた。

眺むらむおなじ雲井をながむるは

　思ひもおなじ思ひなるらむ

娘が詠まぬので代詠をいたしますが、君が悵然として眺めて居られるであらう、その同じ空を、娘もぼんやりと眺めてゐる所を見ると、娘の心持も、大方君と同じなのでせうよ」は、臨機の取さばきを見せた歌であるが、此の場合としては、面白さ無類である

舞臺は筑紫に飛んで、さて肥後の豪族大夫監といふ荒くれ武人が、玉鬘に迫つて來た。「鏡の明神に誓をかけて、姫君は必ず大事にかしづきまする」などといふ　そして柄にもないまづい歌を詠む　紫式部は此の田舍武士にも成りかはらねばならなかつた

君にもし心たがはゞ松浦なる

　鏡の神をかけて誓はむ

よく詠んだつもりの拙劣な歌として、わざと辻褄を合はなくしたのであらう「心たがはゞ神罰を受けむ」か、「君もし疑はゞ、神をかけて誓はむ」かの、いづれかでなければ、物にならぬので、これは「心たがはゞ＝誓はむ」と云つてわざと不照應のまづさを見せたのであらうと思ふ　小說家は名歌の代作をするのみならず、時としては拙い歌の代詠をもせねばならぬ、さういふ場合に於いて、場合相應な拙劣な歌は、小說上としては一種の名歌となるので

ある。『源氏』の作者は屢々かういふつらい役目を勤めねばならなかつた。而して其の爲めに、その手腕を疑はれることも、時々あつた樣に見える「常夏」の卷に於ける近江の君の

草わかみ常陸の海のいかがさき
いかであひ見む田子の浦なみ

や、之れに對する中納言といふ女房の返歌の

ひたちなる駿河の海のすまの浦に
波たち出でよ箱崎の松

の如きも同じ種類で、當の人物相應に詠んで、あらはに可笑味を見せた、わざとの戲歌である。吾等が自分の好みで、ひそかに『源氏物語』第一と思つてゐるのは、「若菜」の上なる紫の上が

目に近くうつれば變はる世の中を
行末遠くたのみけるかな

の一首である　歌は思ひ設けぬ女三宮の降嫁によつて、長く保つて來た紫の上の正妻の地位が移動しようとするのに面接した驚きと悲みとを言ひ現はしたものであるが、『萬葉』に見るが如き平明率直な表現の裡に、無限の含蓄があつて、しかもそれが『古今』の如き美

しい調子と品位とを見せて居る趣は、實に何とも云はれぬ妙味である　加之この千古の大作の女主人公半生の誇りが、刻下に消え去らうとする光景に沿うて、藤原氏、平家、源氏、北條、足利、織田、豐臣、德川等の大氏族のみならず大時代、大國家、覆滅の轉機を想ひ浮かべさせる意義の深さは、實に言語道斷ともいふべきものであらう。

『源氏物語』が人生無常の悲哀を示した名歌は限りもなく多い。

わが宿は花もてはやす人もなし
何にか春のたづね來つらむ（幻）

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に
年も我が世もけふや盡きぬる（幻）

長き世をたのめてもなほ悲しきは
たゞ明日知らぬいのちなりけり（浮舟）

の如きも、廣く誦かれた散珠の數顆であるが、その惻々と人に迫る悲凉の味は、これが物語の作家が作中の人物に成りかはッた空想の作かと驚かれるばかりである。

最後に類ひ稀れなる嫉妬の表現として、薫大將が浮舟の匂宮に通じたことを聞き知つて、浮舟に寄せた

波こゆる頃とも知らず末の松
　まつらむとのみ思ひけるかな

の一首を擧げたい。巧みに『古今』を蹈まへて、謀られながら、我れ一人と信じつゝ、女の待ち焦るゝ容子を夢想してゐた貴公子の、憤りを籠んだ嫉妬が、何と美しく、品位高く、修辭のあや豐かに言ひ現はされたことであらう。

吾等の私情管見を以てすれば、『源氏物語』の持つ七百九十四首は、恐らく勅撰歌集の或二部若しくは三部にも値するであらう。他人に成りかはつて作つたのは、業平にも、和泉式部にも、殊に多く赤染衛門にもあるが、『源氏』ほど多くの人に成りかはつて、各〻の人と場合とを活かし、しかも藝術的價値の豐かなものを作つたものはない。平安朝の和歌史に對して、私情の新挿入を試みた所以である。

一五

『後拾遺集』より五十年を經て『金葉集』が撰ばれ、更に二十餘年を經て『詞花集』が撰ばれた。『金葉』の撰者は源俊頼で、『詞花』の撰者は藤原顯輔であつた。二集ともに前代

の勅撰集よりは半減されて十卷となり、歌は主として『後撰』以後の作家より選び、殊に多く當代の歌人より選んだが、當代本位の興味の殊に濃厚なのは『金葉』であつた。撰者の父經信の二十六首、撰者の三十五首を收めたるが如きは、『八雲御抄』に「天下に肩をならぶるものなくて、俊頼數年を經たり」と仰せられた勢力と見識とを見せたものであらう。『詞花』は俊頼とは流派を異にする六條家の第二祖顯輔の撰に成つたが、十首以上取り入れられたのは、曾根好忠、和泉式部及び、俊頼の三人者だけであつた。吾等は之れによつて拾遺時代の敗殘者曾丹に對する認識改變と、當代に於ける俊頼の壓倒的勢力とを知ることが出來るであらう。

『金葉』『詞花』二集を支配する基調の一半は、『古今』以來、八代集を通貫してゐる上品な題材と風雅な調子とであつたが、此の時代の産物として二集を特色づけたのは、斬新奇拔な詠出ぶりであつた。それは曾て曾根好忠の世間に白眼視されつゝ、臆しながら狹い範圍に試みたものが、晴れの舞臺に於いて、廣く、堂々と試みられたと云つてもよいであらう。『古今』の美しい調子は、平賀元義、橘曙覽等の極めたる少數を除けば、大體に於いて、また根本に於いて明治の前半までを支配したと云つてもよい。此の二集の中で名作視される

待ちし夜の更けしを何に歎きけむ

思ひ絶えても過ぐしける身を（越中）

音に聞く高師の濱のあだ波は

かけじや袖のぬれもこそすれ（一宮紀伊）

木のもとをすみかとすればおのづから

花見る人になりぬべきかな（花山院御製）

こゝろみによその月をも見てしがな

わが宿からの哀れなるかと（同右）

の如きは、その通有性に光つてゐる作と云つてよいであらう。けれども當時の見識ある作家は、舊來の穩雅に飽き足らずして、何等かの新風を試みようとした。或る者は詞の新しさに於いて、或る者は題材の新しさに於いて、或る者は言ひまはしの曲に於いて、或る者は趣向の奇拔さに於いて新しきを求め、また或る者は古きに還り、或る者は遠きに探り、或る者は卑俗に赴くなど、好みはいろ〳〵であつたが、古きに飽きて新しきを求むるのは、恐らく彼等の一致した心底の要求であつた。

梅の花匂ふあたりはよきてこそ

いそぐ道をば行くべかりけれ（良暹法師）

散りまがふ紅葉ほにあげて行く舟を
　秋もて行くと人や見るらむ（藤原基俊）
小萩原匂ふさかりは白露の
　いろ〳〵にこそ見えわたりけれ（僧正行尊）
の如きは、趣向の曲を求めたのであらう
風はやみとしまが崎を漕ぎ行けば
　夕浪千鳥たちゐ鳴くなり（神祇伯顯仲）
ゆか近しあなかま夜半のきり〴〵す
　夢にも人の見えもこそすれ（藤原基俊）
の如きは萬葉調の暗示を受けたのであらう。
奥山の岩根がくれのもちつゝじ
　ねばや〳〵と見ゆる君かな（藤原基俊）
の如きは、俗語の興味を取り入れたのであらう　藤原基俊は俊頼に對抗して新風を譏つた
人であり、また傳統を重んじた稽古の博識で
物ごとに改まれども戀しさは

きたふる年にかはらざりけり
夏の夜の月待つほどの手ずさびに
岩もる清水いく掬びしつ
むかし見しあるじ顔にも梅が枝の
花だにわれに物語りせよ
契りおきしさせもが露を命にて
あはれ今年の秋もいぬめり

等の雅調を遺した人であるが、猶ほ右に擧げたやうな「あなかま夜半のきり〴〵す一や一ねばや〳〵」の如き新風を試みた。これでも新しきを求むる當時の大勢が察せられるであらう

俊頼の父大納言經信は琵琶の名手として聞こえた風流家で、曾丹の遺風を傳へて新風を起こした先驅の革新者と視られる。彼れが作の最も優れたのは趣向の妙致を見せた叙景であつた。小倉百人一首に收められた

夕されば門田の稲葉おとづれて
蘆のまろやに秋風ぞ吹く

は、定家が『近代秀句』にも載せられて、その代表名歌と見られて居るが、

賤の女が蘆火たく屋も卯の花の
　咲きしかゝればやつれざりけり

月清み瀬々のあじろによる氷魚は
　玉藻に冴ゆる氷なりけり

山深き杉の村立見えぬまで
　尾の上の風に花の散るかな

大井川岩波高し、筏士よ
　岸の紅葉にあからめなせそ

沖つ風吹きにけらしな住吉の
　松のしづ枝を洗ふ白波

の如き、いづれも趣向のある巧みな叙景で、しかもたゞの寫實ではなく、神をつかんで新しく料理した叙景である。無論古きに遡れば『萬葉集』にも已に「ぬは玉の夜の更けゆけば楸生ふる清き川原に千鳥頻鳴く」（赤人）「樂浪の比良山風の海ふけば釣する海人の袖かへる見ゆ」（憶良）等の立派な叙景の歌があつて、必ずしも經信等の作を珍しとするには足らぬ

が、猶ほ此の類の歌を數多く詠んだ點に於いて、またそれが時代一部の流行をなした點に於いて、新味を稱ふべきであらう。

けれども經信には新風の名作はあるが、それは範圍の狹い、迫力の弱いものであつた。その他の歌人等は尙更である。是等の點から見て、詠歌の範圍の廣く八方に伸びて、傍若無人に革新の迫力と見識とを見せたのは、俊頼であつた。彼れは恐らく豐富な學識を有たなかつたであらうが、その豐かならざる學識にもいさゝか役せられずして、之れを我が新風發揮に驅使したかのやうに見える。定家は云つて居る。「彼朝臣はすべて證本をひかへ、道理を正して歌をよまぬ人にて侍る也　其の身堪能至りて、言ひと言ふ事、皆秀歌の體也。……また年老いて後、いよ〳〵此の道に、傍らに人無しと思ひて、心の泉の湧くに任せて、風情のより來るに從ひておぢず憚らず言ひつゞけたるが、そしり難すべきこともわりも思ひつゞけられず、あな面白、かくこそは云はめと見ゆ」と云つて居るのは、過褒の嫌ひはあるが、彼れが新たなる歌人として一代を率ゐた權式を、如實に道破したものである

彼れが趣向や言ひまはしに苦心したことは、

猶ほもなほ言ひてもいはむ今日もけふ
　思ふおもひの積もるつもりを

卯の花のみな白髪とも見ゆるかな

賤が垣ねも年よりにけり

などを見てもわかる　叙景を巧みにしたことは、

白川の春の梢を見わたせば

松こそ花の絶えまなりけれ

などを見てもわかる　巧みに趣向した叙景の面白さは

村雲や月のくまをばのごふらむ

晴れゆくたびに照りまさるかな

草の葉にはかなく消ゆる露をしも

形見におきて秋の行くらむ

烏羽玉の黒髪山に雪ふれば

名もうづもるゝものにぞありける

等に於いて見ることが出來るであらう　定家はその『近代秀歌』に於いて、俊頼の八首を擧げ、

山櫻咲きそめしより久方の

雲ゐに見ゆる瀧の白糸
おちたぎつ八十氏川のはやき瀬に
岩こす波は千代の數かも
の二首については、「晴れの歌、秀歌の本體と申すべきにや」と言ひ、
鶉なく眞野の入江の濱風に
尾花波よる秋の夕暮
ふる里は散るもみぢ葉に埋もれて
軒のしのぶに秋風ぞ吹く
の二首については、「幽玄に、おもかげかすかに、さびしきやうなり」といひ、
明日も來む野路の玉川萩こえて
色なる波に月宿りけり
思ひ草葉末にむすぶ白露の
たま〳〵來ては手にもたまらず
については、「面白く見處ある、上手のしごとと見ゆ」といひ
うかりける人を初瀬の山おろし

はげしかれとは祈らぬものを

とへかしな玉櫛の葉にみ隠れて
　鵙の草ぐきめぢならずとも

については「心深く、言葉心に任せて、まねぶとも言ひつゞけ難くまことに及ぶまじき姿也」と云つて居る　いかにもさうであらう　而してこれは俊頼が歌の秀逸を撰び得たものでまた彼れの意を得た評言でもあらうが、しかしながら俊頼を見る定家の眼は狹かつた　一體、定家は父の俊成を繼いで新古今風を大成した巨匠ではあるがその趣味は狹隘で、而して彼れはその躰づいた狹隘なる趣味によつて、あらゆる歌人の一切の歌を律したやうに見える　彼れの『近代秀歌』には經信、俊頼、顯輔、清輔、基俊及び父俊成の六人を擧げ、而して經信の三首、俊頼の八首、顯輔の三首、清輔の四首、基俊の二首及び俊成の六首を擧げて居るが顯輔のからは

葛城や高間の山の櫻花
　雲ゐのよそに見てや過ぎなむ

秋風にたなびく雲の絕え間より
　もれ出づる月の影のさやけさ

などを擧げ、清輔のからは

冬枯の杜の朽葉の霜の上

落ちたる月の影のさやけさ

ながらへばまたこのごろや忍ばれむ

うしと見し世ぞ今は戀しき

などを、而して基俊のからは、

あたら夜を伊勢の濱荻折りしきて

妹こひしらに見つる月かな

契りおきしさせもが露を命にて

あはれ今年の秋もいぬめり

などを擧げて居るのを見ると、すべてが同じ一人の同じ氣分で作つた歌のやうで、これでは評された歌人の中に、他の方面の特色を認められぬことを不平に思ふものもあるであらう而してその不平を最も多く感ずる者は俊頼であつたであらうと思はれる。彼れは自家の歌集を名づけて『散木弃歌集』(また『散木奇歌集』とも書いてある)と云つた。「散木」は彼れが木工權頭であつたから名づけたので、木匠が鋸斧に切り棄てられて散らかつた木端

のやうな歌の集と云つて、自嘲兼自尊の誇らしい氣持を寓(よ)せたのであらう　勅撰歌集には彼れが作の中の比較的癖の少ないのを取り入れてあるが、家集の『散木弃歌集』を見ると、覇氣縱横の種々相が現はれてゐて、定家型の一流を以て律すべきものではなかつたらしい　彼れは用語に於いて不羈自由の極を見せた。彼れは「九月九日に菊して顏なでよと人の申しければよめる」と詞書して、

ちりごにて萎めるかほか花見ればなづともきくの驗(しるし)あらめや

と詠んでゐる　顯昭法橋はその『散木集註』に註して「ちりごは落期なり　かほか花とは萬葉に詠みてかほか花ともかほ花ともよめり　その花を我が顏によそへて衰へ老いた

傳源俊頼筆　元永本古今集

れば、撫づとも菊の不老の藥も不可有驗とよめるなり」と云つて居るが、「ちりご」「かほか花」「きくの菊利く」等、その用語振の大膽さには驚かれる。「語不驚人死不休」と云つた杜子美の言は、彼れが異つた意味に於いて首肯するところであらう。彼れにはまた「待郭公」と題して、

これ聞かむこせのさ山の杉のうれに

雨もしのゝにくきら鳴くなり

といふのがある。同じ顯昭の註に、顯輔卿が「くきら」とは何鳥ぞと尋ねると、俊賴が答へて、東南院の已講覺樹が物語に、天竺に五月ごろ里に出て來て鳴く鳥がある、ひどく好い聲の鳥で、その名を倶喜羅といふと云ッたが、多分郭公のことであらうと答へたと書いてある。聞き耳の新知識の會體の知れぬ印度の鳥を、無造作につかまへて來ては我が歌の新姿を飾る。彼れの邁往振は恐らく古今無双であらう。

彼れは或る時修理太夫行宗から往生要集を借りた。そしてまだ寫し了へぬ中に返却を乞はれたので、言ひつかはした旨を詞書して、

樊於期が荊軻にかうべかしけるも

さこそはつひに返さゞりけむ

と詠んで居る　漢語を無遠慮に用ゐた例とすべきであらう

彼れはまた「不逢戀」と題して

逢ふことのかたなの刄をもあゆむかな

人の心のあやぶまれつゝ

と詠んである。またその戀の歌の中に、

信濃なるすがの荒野にすむ熊の

おそろしきまでぬるゝ袖かな

といふのがある。戀の歌に刀の刄や荒野の熊は物騒で恐ろしいが、恐らく彼れは萬葉の歌人が戀を歌つた「君が行く道の長手をくりたゝみ燒きほろぼさむ天の火もがも」「さ寢らくは玉の緒ばかり戀ふらくは富士の高嶺の鳴澤のごと」の如く、或は烈しい、或は土くさい歌の特別な味を移したのであらう。「初戀」と題して、

風吹けばたぢろく宿の板じとみ

破れにけりな忍ぶこゝろは

と歌つたのは、破格の大膽さで、しかも實を穿つたものである　また

朝おきて口にはなもと唱ふれど

心は君を戀ひつゝぞをる

の如きは、佛教隆盛の世に隨分思ひ切つた出意表の表現であるが、同時に『古今』の「せむ方なみぞ床なかにをる」を踏まへたらしい誹諧の味もあつて、面白い、

胸はもえ袖は涙にしをれつゝ

火水に入れるこひもするかな

の如きも、幽玄體の行はれ始めた世に大膽無類の作といふべきであらう。卷物に揮毫を賴まれたのを返すとて、

芥ゐてきたなき溝の水莖は

かき流せどもしどろもどろに

と詠んだ如きは、基俊等の唱ふる傳統本位の優雅主義を嘲るかのやうに、新らしい大膽な用語である。

俊賴はかやうに用語、題材、趣向の全般に亙つて、盛んに傳統を無視したやうな新風を試みたが、同時に彼れは傳統的正格をも立派に手に入れて、しかもその中に新味のある數々の名作をも詠み出でたのであつた。定家が『近代秀歌』に於いて幽玄と稱へた「鶉なく」「ふるさとは」の二首は、已に上に擧げてあるが、『散木弃歌集』の卷頭なる元日の心を詠んだ

庭もせにひきつらなれるもろ人の

たちゐる今日や千代の初春

の如きは、優に、丈高くして同時に新意を含んだ作である。淀の川尻で遊女どもが船をこぎよせる所の繪に題した、

歌ひくる蘆間の聲はちりならぬ

心もうごくものにぞありける

の如きは微妙な人情に故事を絡んで誹諧味を見せた正調ともいふべきものであらう

俊頼はまた連歌に好いたらしく、『金葉集』には始めて連歌の一部門を立てゝ、其の十九首を擧げて居る。彼れが『散木弃歌集』の最後に、自分が上の句下の句のいづれかをつけた五十五首といふ多數の連歌を載せて居るところを見ると、この部立は恐らく彼れが嗜好の結果であつたのであらう。『金葉集』の連歌の部には、最初に、「居たりける所の北の方に聲なまりたる人の物いひけるを聞きて」と詞書きして、

東人の聲こそ北に聞こゆなれ　(永成法師)

みちのくによりこし(來、越)にやあるらむ　(律師慶範)

といふのが載せてある『散木弃歌集』の中の一首には、鶴と鷺との並んで居るのを見て、六

波羅別當といふ僧が

鳥と見つるはうさぎなりけり

と下の句を詠みかけたのに對して、俊頼が

木の實かとかきはまぐりも聞こゆれど

と上の句を置いたといふのがある。そも〳〵記紀時代には片歌對片歌、或は短歌對片歌の如く詠みつぐ形式の贈答はあつたが、まだ短歌を二分して、上下を詠みつぐといふ事はなかつた　短歌の上下詠みつぎの始めて見えたのは『萬葉集』で、それは集の中に唯だ一首あるのみであつたが、それが平安朝の日記や物語の中にぽつ〳〵試みられるうちに、此の革新歌人の俊頼朝臣により、勅撰歌集の一部門として獨立させられたのは、やがて次ぎの時代に『筑波集』が出で、つゞいて『新筑波集』の出で來たる史的開展の一段階とも見るべきもので、非常に面白いことである。

當時の連歌の中心興味は、後世の連歌が、あらぬやうに引きはづしつゝ、匂ひ、ひゞきによつて不卽不離の附け方をするのとは違つて、上の句下の句の意味がよく連絡するやうにつけるところにあつた。但し、それは素直に出來た同一人の作とは見えずして、一人の與へた難題を、他の一人が巧みにかはして解決するところ、言ひ換へると、他の難題に對し、詰め開きの

機轉を見せて、留飲の下がるやうな解決を與へるところにあつた。俊頼が此の道に好き且つ巧みであつたことは、その作の中に、人々の附け得なかつたのを引受けて、手輕に面白く附けた幾多の例があるのを見ても、察せられる。思ふに彼れは歌に於ける此の方面の天才でもあつたのであらう　吾等は彼れの『散木弃歌集』に於いて、此の巧みな詰め開き歌の五十五聯を見ることが出來る、而して之れによつて彼れが連歌史上の重要な存在であつたことをも察することが出來る

かやうな事情で、吾等は俊頼の歌に於いて、傳統本位の優雅な歌と革新本位の奇抜の歌とを併せ見ることが出來る　而して彼れが革新本位の歌は遙かに曾根好忠の創試を承け繼いだものであつたが、それは曾丹のに比べて遙かに廣く、深く、大膽に、また積極的氣分を帶びて一世を睥睨する底のものであつた　但しこの積極的の昂揚した天才的氣分は、彼れが作のあらゆる方面に通じた特色であつた　それは彼れの歌が、その敵手たる基俊門下の俊成を隨喜せしめたのを見てもわかる　定家をして「言ひと言ふ事皆秀歌の體也」と評せしめたのを見てもわかる　けれども俊頼の歌には、概して題詠を主として、表現の美と奇とを極めようとする傾きがあつた　此の傾きは彼れの父なる帥大納言經信が筑紫の大宰府で薨じた時に、その亡骸に侍して都に上る途中で詠んだ六十首を見てもわかるであらう

墨染の衣を袖にかさぬれば
　目もともにきる(着、霧)ものにぞありける

彼れが作の中で、その眞情の最もよく現はれたのは、恐らく『弃歌集』の第九なる「恨躬耻運雑歌百首」と題したものであらう

三日月の影にたゞよふかげろふの
　ほのほかにても世を過ぐすかな
足手なき蟹の大野にはなたれて
　する方もなき身をいかにせむ
あやしとや人は見るらむわびごとを
　たてぬきにして織る身とおもへば
誰れとかはわきてもいはむ我がために
　恨めしからぬ人しなければ
世の中のありしにもあらずなりゆけば
　涙さへこそ色かはりけれ
世の中を思ひつゞけて詠むれば

身はくづをるゝものにぞありける

影のみや立ちそふものと思ひしに歎きも身をば離れざりけり

三奏本 金葉和歌集（平瀨陸氏藏）

吾等は彼れの經歷のいかなる部分が此の悲痛なる長白を敢てせしめたかを知らぬが、とにかく、これは一句一涙の眞情を湛へつゝ、何等の厭味もなき詞あしらひの中に典雅幽玄の風韻を味はゝしめるものである。俊頼が作の時代を超越した至極味は、おそらく是れであらう。

左に『金葉』『詞花』の二集に見えた此の時代の特色ともいふべき風趣はりな數首を擧げて見る。

山彦のこたふる山のほとゝぎす
　一聲なけば二聲ぞ聞く（能因法師）
天の川横ぎる雲やたなばたの
　そらだき物の烟なるらむ（藤原顯季）
秋の野の花見るほどの心をば
　行くとやいはむ止まるとやいはむ（赤染衛門）
山深み落ちてつもれるもみぢ葉の
　かわける上に時雨ふるなり（大江嘉言）
小萩原にほふさかりは白露の
　いろ〳〵にこそ見えわたりけれ（僧正行尊）
數ならぬ身にさへ年のつもるかな
　老は人をもきらはさりけり（成尋法師）

一六

『詞花集』が撰せられて後三十八年にして、文治三年に『千載集』が撰進された。假名の序が据ゑられたが、それは『古今』の序には遙かに劣つて、『後拾遺』の序にいさゝか優るものであつた。採擇の範圍は正暦から文治に至る百九十年間に亘つたが、選は當代を本位とした可なりに嚴しいものであつた。撰者は皇太后宮大夫俊成唯だ一人で、彼れは『古今』を撰じた紀貫之にも似たる意氣を以て此の集の撰にあたつたかのやうに見える。

藤原俊成はその天分を意識して着々大をなした偉才である。彼れは九十一年の長き生涯を以て、恵心僧都の謂はゆる「一目之羅不能得鳥、萬術助觀念成往生大事」の言を實現したのであらう。彼れは二十五歳にして、古典派の泰斗藤原基俊の門に入つた。彼れが家集の『長秋詠藻』に、「前左衛門佐基俊といひし人に古今の本を借りて返すとて」と詞書して、

君なくはいかにしてかははるけまし
古今のおぼつかなさを

の一首を擧げ、また基俊の返しとして、

書きたむる古今の言の葉を
殘さず君に傳へつるかな

藤原俊成假名消息

の一首を擧げて居る。思ふに彼れは温順なる秀才門下として、傳統尊重の意義に關し、また『古今集』に關して、その師から瀉瓶の皆傳を受けたのであらうが、それにも拘はらず作の實際に就いては、師の敵手たる俊頼に私淑してゐたのであつた。吾等は定家が「亡父は師匠金吾(基俊)の言はれしことなれど、歌よむ人、俊頼をもどきては、三十一文字はいたづらごとになりなむとぞ申され侍りし」と云つてゐるのによつて、此の間の消息を知ることが出來る。

彼れはまた和歌は歌としてのみ詠むべきものではなく、宗教的の心構を以て詠むべきものであると考へた。それは彼れが『古來風體抄』の序に於いて、天台止觀に倣つて說を立てつゝ

この道に心を入れん人は、萬代の春、千年の秋の後は、皆このやまと歌の深き義によりて、法文の無盡

（保坂潤治氏藏）

なるを悟り、往生極樂の緣を結び、普賢の願海に入つて、この詠歌の言葉をかへして、佛を讃め奉り、法を聽きて、あまねく十方の佛土に往詣し、先づは娑婆の衆生を引導せむとなり。

と云つて居るのを見ても察せられるであらう。彼れはまた身を謙つて人に對し世に對した。而して又神佛を敬ひ畏れた。彼れは西行が『御裳濯川歌合』の卷頭に、判者の序として、

かつは此の道の先賢の亡き影にも、見思はれむこと、その恥限りなし。いかに況んや、住吉明神より始め奉りて、照らし見そなはすらむこと、その恐れ幾ばくぞや

と言つて居る『千載集』に最も多く載せられた歌の數は、俊頼五十二首、俊成三十六首、西行法師十八首、基俊俊惠、清輔、道因等二十首以上で、俊成が第二位になつて

ゐるが、頓阿が『井蛙抄』の傳ふる所によると、俊成は初め自作たゞ十一首を選入したので、勅諚によつて更に二十五首を加へたといふことである。彼れが和歌佛道の輕重に惑うて、住吉明神に參籠し、和歌の道の外に別に佛道を求むべからずといふ夢想を蒙つて、專心歌道に精進したことは、已に上に述べたところである。彼れはまた詠歌の態度、環象、心境にまで思ひを凝らして、夜更け人定まつて後、燈火を細め、煤けたる直衣を着、古き烏帽子を耳まで引き入れ、脇息に倚つて、桐の火桶を抱きつゝ、和漢の古名句を微吟しては、神來を待つたと云はれる。新古の歌風に兼ね通じ、理說と實際とを明らめ、藝術に宗教を加味し、人丈の前に謙虚して常に向上を怠らず、あらゆる方面に精神修養の羅を張り盡くして後、寂寞無人聲の森閑たる境地に在つて感興の到來を待つ。かうまで手の籠んだ用意をして藝術の神に仕へた歌人が、古往今來にまたとあるであらうか。俊成は實に意識的、綜合的、求道的、不退轉的なる藝術の使徒であつた。

俊成の苦心は立派に報いられた。而して彼れは一代の巨匠として九十年の長き生涯に多くの名作を詠み出だした。彼れが詠歌道に於いて希求したところは、主として優雅、新奇、品位、餘韻等にあつたのであらう　彼れが度々の歌合の批判に於いて加へた評語は「姿詞優に侍る」「心詞をかしく侍る」「風體をかしき樣に侍る」「姿よろし」「心詞わりなし」「耳に

立つ所なし」「滞る所なく言ひくだす」（是等は取りすべて心、詞、耳ざはりなどの優雅なる意であらう）「心珍しく侍る」「旨趣珍重」「ふるまひたる所あり」（是等は取りすべて趣向の新奇なる意であらう）「事理叶へり」「心詞相叶ひて侍る」（内容外形の相應する意であらう）「おもかげ覺え侍る」（光景の現前する意であらう）「歌のたけあり」「長高く見ゆ」「心深く見ゆ」「姿さびあり」「強く聞こゆ」「心幽玄に」（莊嚴、寂寥、幽遠などといふ特別味の加はることであらう）「詞寄せあり」（古名句引用による義趣重疊の意であらう）等に、ほゞ盡きるやうであるが、彼れ自身の用ゐた是等の評語によつて察すると、彼れが和歌に於いて好み、求め、而して悅んだ風味は心、詞、調子の優美なること、常套ならぬ新奇の味はひあること、深き奥行、高き品位のあること餘情のあること等で、而してそれらの中の最高は恐らく是等の屬性を具したる上にほのめいた幽玄味であつたのであらうと思はれる。彼れが多くの判詞の中で「幽玄」の語をめつたに使はず、而して西行の歌などに對してすら、

心なき身にも哀れは知られけり
　　鴫立つ澤の秋の夕暮

津の國の難波の春は夢なれや
　　芦の枯れ葉に風わたるなり

等の、わづか二三にのみ許して居るところを見ると、彼れは此の一語に甚深微妙なる特殊の意義を託してゐたやうに見える。而して彼れが此の語に託した意義は、恐らく『古今集』の眞名の序文にある「或事關二神異一或興入二幽玄一」のそれの意味ではなく、また室町應永の世阿彌が『十六部集』に於いて「美しからんをもて幽玄と知るべし」と云つた意味でもなくして、美しき事象、美しき詞あしらひの裡に、微妙な餘韻の縹渺と漂つてゐることであつたであらう。而して彼れはその歌人としての心地を此の幽妙境に達せしめ、その歌に此の幽妙味を漂はしめんが爲めに心掛けたことは、西行法師の如く山水の美景を見て自然の眞を表現することでもなく、在五業平、和泉式部の如く、胸に燃ゆる愛情を活き〳〵と抒べることでもなく、また俊賴の如く潑剌たる奇想を無遠慮に投り出すことでもなくして、空想で捏ちあげた事象を、閑室に於いて心を潛めつゝ、調子のよい趣の深い妥當語に表白することであつた。言ひ換へれば主觀的沈潛によつて題詠に美しき餘情の生命を與へることであつた。かくして吾等は彼れの幽玄思想に二つの要點を見出だすことが出來る。一つは靜的主觀ともいふべき、こんもりした、森とした、氣品の高い幻象を成立たせることである。これは前に述べた深夜孤燈の下に桐火桶を擁した歌人が淋しい懸命の姿を思ひ浮かべることによつて、容易に領かるべきことである。他の一つは品位の高い餘情に富んだ妥當語を選び用

ゐることである。彼れが言葉の感觸に對していかに鋭敏であつたかまた言葉の選擇と精錬とについていかに苦心したかは、西行が『御裳濯川歌合』の判に於いて、かの天才法師の

願はくは花のもとにて春死なむ
そのきさらぎの望月のころ

に對して、「願はくは」と置きて「春死なむ」といへる、うるはしき姿にはあらず」といひ、

山賤の片岡かけてしむる野の
さかひに立てる玉のをやなぎ

について、「末の句、をの字や少しいかゞ」さもよみて侍るかとよ」などと云つてゐるのを見ても察せられる。かくして彼れは片言隻句に對しても、常に此の種の苦心を拂ひつゝ、渾然たる靜的主觀を表現して、一代巨匠の貫祿を示したのであつたが、同時に彼れの歌が單調になり活躍味の乏しきものになつたのは、當然の結果であらう。吾等は彼れの歌を俊賴のに比べて、險怪なる詞の無きかはり、その典雅一點ばりの單調さに一種の物足らなさを感ずる。和泉式部の後に彼れを讀んで、その熱のない抽象ぶりに一脈の淋しさを感ずる。また彼れの歌は風雅眞面目の一方で、微塵も諧謔、激情等の變はつた味を見せなかつた、彼れの歌には笑がない。連歌、誹諧歌等は、彼れの夢にも試みようとしなかつたところであらう

吾等は次ぎに彼れが代表名歌を擧げるであらう

頓阿が『井蛙抄』は、俊成が最初に自選して『千載集』に入れた十一首を「殊に玄之玄」なるものとして載せてゐるが、その中に左の數首がある。

三吉野の花のさかりをけふ見れば
　越のしらねに春風ぞ吹く

夕されば野べの秋風身にしみて
　うづら鳴くなり深草のさと

思ひきやしぢのはしがきかきつめて
　百夜も同じ丸ねせむとは

住みわびて身をかくすべき山里に
　あまり隈なきよはの月かな

また定家の『近代秀歌』には、先人の秀歌として

またや見む交野(かたの)のみのの櫻がり
　花の雪ちる春のあけぼの

世の中よ道こそなけれ思ひ入る

山のおくにも鹿ぞ鳴くなる

いかにせむ室の八島に宿もがな

戀の煙を空にまがへむ

等の六首を擧げて居るが、その中には、前の十一首の中の「思ひきや」「住みわびて」の二首をも取り入れて居る　吾等は是等を通觀して、まづ作者の空想した特殊の心象が特殊の形式に表現されてゐることを感ずる。またその表現法が『古今』『後撰』『拾遺』あたりとは大分趣を異にして、新らしい技巧を見せ、語句の隈々に、一寸は理解し難き餘情の陰影があつて、そこに此の卿特有の味が潜んでゐるやうに思ふ。無論彼れの歌にも、三代集風の極めて素直な名歌が無いではない。

戀せずは人は心もなからまし

物の哀れもこれよりぞ知る

さりともと思ふ心も蟲の音も

よわり果てぬる秋の暮かな

四方の海を硯の水につくすとも

わが思ふ事は書きもやられじ

また彼れの作の中には、新しい技巧の曲を韜んで、美しい神々しい風致を、さもなきが如く見せたのもある

春はまづ鳰の海をやわたるらむ
　　霞をよする志賀の浦風

山櫻塵に光をやわらげて
　　この世に咲ける花にやあるらむ

けれども、作者が自家の本領として、自らも得意とし、人も許した風體は、やはり前に擧げた『千載』自選の十一首、定家の選んだ六首のやうな味のもので、意味が文法的に素直に現はされずして、句のつゞき離れに不自然めいたところがありしかも考へぬいて空想的に纏めると、不思議な餘情のあやを通ほして、幽玄な別世界が浮かんで來るといふ質のものであらう。彼れの歌にはちよッとした作にもその傾きがある。例へば

花も露もいかに心をくだけとて
　　秋に野分の吹きはじめけむ

夏虫のはかなき身よりいかにして
　　暗きを照らす契りありけむ

過ぎぬるか夜半のねざめの時鳥

聲は枕にある心地して

の如きは、簡單なやうで、すぐには理解し難くしかもそこにまた特別な味があるといふものであらう。此の傾向の更に烈しく發展して、人迷はせの曲情曲抒となつたのが『新古今集』の本流で、同じ集の代表作家として、その時代を支配した定家、家隆等は、『千載集』に於いてはやくもその險晦なる姿の片鱗を見せてゐる。例へば定家が

冬來ては一夜ふた夜を玉笹の

葉わけの霜のところせきまで

いかにせむさらで憂き世はなぐさまず

たのみし月も涙おちけり

の如き、家隆が

暮れにとも契りて誰れが歸るらむ

思ひたへたるあけぼのの空

の如き、或は鴨長明が、集の中に唯だ一首載せられて、大歎喜に昂奮したといふ

思ひあまりうちぬる宵のまぼろしも

浪路をわけて行き通ひけり

の如き、いづれも、文法、論理乃至歌道の常識には副はぬもので、『萬葉』『古今』を悦ぶ頭ではとても早速は理解し難いものであるが、歴史進歩の間に於ける浸潤作用の恐ろしさは、病的ともいふべき、かやうな表現を容易に理解するのみか、之れに一種の美趣をも認めて、誇りの時樣と感ずるやうになつたのである

而して俊成は實に此の時樣を大成した人であつた。定家、家隆等ほど極端に至らざる程度に於いて、穩かに此の新樣式を成就した人であつた。從つて、彼れが歌の最大特色は、史的開展の點から見て、特にこの點に見出ださるべきであらうが、吾等は猶ほ此の時代の流行を超越した素直な彼れの作に於いて、彼れが歌の最も美しい一面を見出だしたいと思ふ。『千載集』の雜の部に、「花ざかりに法成寺にまゐり、金堂の前の花の散るを見てよみ侍りける」と詞書して、

ふりにける昔を知らば櫻花
　ちりの末をもあはれとは見よ

の一首が載せてある。五代前の道長が建立した大伽藍に詣で、折しも盛りを過ぎた花の散る光景に打たれ、末葉の小さき身を憐みつゝ曩祖の大を偲んで、櫻花に呼びかけたのであら

う象徴諷喩の技巧は盡くしながら、殆んど無技巧ともいふべきほどあッさりと詠み出でてあるが、形式のいやみは微塵もなくして、暗示は實に限りもなく深い　また『長秋詠藻』の中に「述懷」と詞書して、

枯れ〳〵になり來し藤の末なれど
　まだ下枝とは思はざりしに

の一首がある。院政以來藤氏の運命の急轉直下に沈默の首を俛れた老歌人の、泣いても泣き切れぬ哀切の情が、象徴に假裝して、實に淡々と表現されてゐる。そも〳〵時代の波に乘つた流行は、時が去ればやがて低落するが、時流を超越した作の尊さは萬古不易である。俊成が歌の最も高き一面は此の二首に見るやうな、題詠を離れ、流行を超越したところにあるであらう。

俊成は自家の天分を自覺して良心的藝術的に精進した集大成の巨人である。彼れは人としては忠實であつた。歌人としては諸流を併せて新しき一流を立てた。藝道の統率者としては一代の人望を集めて無數の俊英を育て上げた。而して歷史的には平安朝と鎌倉時代とを繫ぐ大橋梁となつた。王朝歌道の最後を輝かしく飾つた點に於いて、彼れは實に時代の寄託に背かなかつた偉人といふべきである。

吾等は左に『千載集』時代の流行を代表した歌人等の代表作のいさゝかを紹介するであらう

朝夕に花待つほどは思ひねの
　夢の中にぞ咲きはじめける（崇德院御製）

山櫻ちゞに心のくだくるは
　散る花ごとにそふにやあるらむ（大江匡房）

櫻さく比良の山風吹くまゝに
　花になり行く志賀の浦浪（藤原良經）

ながむれば思ひやるべき方ぞなき
　春のかぎりの夕暮の空（式子内親王）

おほけなく憂世の民におほふかな
　わがたつ杣の墨染の袖（慈圓）

思ひわびさても命はあるものを
　憂きにたへぬは涙なりけり（道因）

卯の花のさかりなるらし袖たれて
　遠方人の波をわけ行く（俊惠）

さぞかしと親のいさめを思へども
　ことわりなくもぬるゝ袖かな（俊惠、被叱親戀）

時鳥啼きつる方をながむれば
　たゞ有明の月ぞ殘れる（後德大寺實定）

天つ空一つに見ゆる越の海の
　浪をわけても歸る雁がね（源頼政）

秋風の身にしむ事をそよ〳〵と
　うなづく荻ぞもろ心なる（同右）

以上いづれも當代を代表する名歌人の作で、それ〴〵の特色を持つては居るが、概していふと、『金葉』『詞花』の奇を競つた衒飾氣分が柔められて、立派な一種の調和を見せてゐること、名詞止め、本歌取、初句の呼掛、その他いろ〳〵な形式上の技巧を見せてゐること、自然に對する親しみを見せてゐること、乃至題詠の面白味を極度に發揮してゐること、等が知られるであらう　そして凡べてが、をかしさ、優しさ、珍らしさ、艶やかさ、言葉の寄せ、長の高さ等の面

白味を具へてゐる中に、俊成一人が幽玄の一味に於いて、特に優れて居ることが知られるであらう

一七

『古今集』から『千載集』に至る變遷を大まかに通覽すると、『古今』から『後撰』『拾遺』と段々劣りに劣つて行つたのが、『後拾遺』に至つて、更に甚だしく劣りながら、同時に新らしい傾向の萠芽を見せた　而してその未熟な萠芽が『金葉』『詞花』と年經る中に、著しき存在となつて、傳統的の古雅な流派と對峙したが、此の新舊二つの對峙が俊成釋阿の博大なる調和的手腕によつて一種の特色ある調和を成したかのやうに見える。即ち『千載集』は『古今集』の流れが一たび衰へて、また盛り返した一種の隆盛期、言ひ換へると、相反する二系統の調和によつて現じた一種の複合期の所産で、それは歌集として見て、とても『古今集』と並び得るものではないが、しかしながら歌その物には意味深き一種の特色があつて、必ずしも『古今集』に劣るものではなかつた　殊に『千載集』を重からしめたのは、俊成が調和と餘意とを二大眼目とした幽玄本位の歌であつたが、同時に彼れと相並んで

『千載集』を重からしめ、のみならず當代の和歌を上下三千年の文學史上に重からしめたのは西行法師の歌であつた。王朝の和歌は、俊成、西行の二人を有することによつて、他のあらゆる文學の衰廢した末期に於いて掉尾の偉觀を見せたといふことが出來るであらう

思ふに俊成の歌は、要するに歌匠の歌であつた。彼れが新舊の二流を調和し、佛道の一味を加へ、神儀の來格を祈り、語感を精考し、身邊を整備し、純一無雜の精神態度を構成して、良歌を得ようとしたのは、天晴れ名匠の心構であつた、而して彼れはその希望に相應ひたる多くの名歌を得た けれども彼れが歌人としての苦心は、閑室に閉ぢ籠り、月並の歌枕を對象として、之れに一種の微妙な主觀の氣息を吹き込まうといふにあつた。從つて彼れの歌には概していふと、實地に探られた自然の姿もなければ、新しい生活の輝かしい影もない。例へば雨の夜の草庵に時鳥を聞いて、白樂天を思ひ、清少納言を偲ぶ といふ、唯だ是れだけに、詞の上の餘情を添へたので、しかもそれは山時鳥を聞いた場合を空想しての美しい虛構である。無論これも詩歌の一境地で、詩歌國の一角をかやうな種類の歌が占領するのは面白いことであるが、或大歌人一生の詠歌が悉く是れでは心細いことであらう。居ながらにして名所を知つた王朝の歌人は多くはこれであつたが、俊成もやはりその一人で、殊に彼れはその流儀を合理化して、その空想の虛構に主觀の迷彩幻影を與ふるところに、絕大の價値を見

出だした者であつた。

西行法師はかういふ名匠達が覇を唱へた時代に生れて、その實見と實感と實行とを歌つたのである。彼れは、和泉式部が、戀の歌を題詠する廷臣才媛達の間に於いて、實驗された戀愛を大膽に歌つたやうに、その見たる自然と、感じたる世捨人の寂しき心とを歌つたのである。無論彼れは同時代の題詠歌人に對して楯をついたのではない。彼れは自身しば〳〵題詠を試みた。而してまた俊成や、俊惠や、寂蓮や、大原の三寂や、定家、家隆等を尊敬しつゝ、親しみをも感じてゐたことは、彼等と詠みかはした贈答を見ても知られる。また老年に及んで自撰した『御裳濯歌合』をば、慈鎭和尚に清書を請ひ、俊成に判を求め、また『宮河歌合』をば定家に判をさせ、而してこの二卷の歌合をば、家隆を訪うて、

圓位は往生の期已に近づき侍りぬ。この歌合は愚詠を集めたれども、祕藏のもの也。末代に貴殿ばかりの歌よみはあるまじき也。思ふ所侍れば付屬し奉る。(古今著聞集)

と云つて與へたといふのでも知られる。思ふに西行は後鳥羽院の仰せられた通り、生得の歌人で、流派や詠み方などには殆んど介意しなかつたのであらう。而して面白き事、心深き事、哀れなる事、有りがたく出來難き事、それらのすべてを、ぶつかるまゝに摑まへては、自然に容易にふつ〳〵と詠み出でたのであらう。彼れは多くの矛盾を一身に具へてゐた。而し

てそれらの矛盾に苦しみながら、卽念卽忘したるが如く心外に抛ち去つて、往々矛盾その物

傳頼阿作　西行法師木像　（京都帝室博物館藏）

に一種の興味を感ずるやうな事すらもあつた。彼れは弓箭の道に達しながら、弓箭を棄てた。うつくしき妻と子と親友とを持ちながら、それらをも棄てた。限りなき引力を持つ都會をも棄てた。同時にそれらを捨てながら、それらに心を惹かれて、その惹かるゝ事に興味を感じてゐたかのやうにも見える

　世の中を捨てゝ捨て得ぬ心地して
　　都はなれぬ我が身なりけり

　捨てゝいにし憂き世に月のすまであれな
　　さらば心のとまらざらまし

彼れは凡べてを棄てようとしたであらうが、その棄てかねたもの、棄てようともしなかつたものに、和歌の道があつた、花鳥風月があつた、佛道神道があつた

而して和歌と自然と神佛と、是等の三つをば骨と肉と血との如く離るべからざる三必隨と

して、拜みつゝ、慰みつゝ、詠みつゝ、七十三年の生涯を終へた。彼れの棄てゝ、辛うじて棄て得たのは、恩愛のほんの一部であつた。棄恩すらもその通りである。入無爲などは懸けても及ばぬことで、恐らく夢にも思はなかつたことであらう　彼れの足跡は筑紫から奥州に及んで、到る處に名歌を殘した。世に一富士見西行の語がある。之れを見ても、濟世に專念し執着を恐れて、東海道を幾往返しつゝ、一度も富士を仰ぎ見なかつたといふ高僧とは、全く異なる彼れの心境が窺はれる。彼れはまた勅撰歌集の企を聞いて、自選歌を俊成の許に送つた。また『千載集』が成つたと聞いて、東國の旅から引返したが、途中で登蓮法師に逢つて、わが「鴫たつ澤」の歌が選に入らぬよしを聞き、その集見るに足らずと云つて、もと來た道に歸つたと云はれる。彼れは氣に入つた景色風土の處には、庵を結んで暫ら

京都圓山双林寺　西行法師の墓

く逗留した。かくして庵を結び捨てむすび捨てゝは、暫らく形影相とむらうた附近の一つ松などにも名殘を惜しみつゝ遊行をつゞけ、而して死ぬる日にまで好みを云つて、釋迦如來の入滅の翌くる日、愛する櫻の花盛りなる建久元年二月十六日を以て、大往生を遂げた

願はくは花のもとにて春死なむ
　そのきさらぎの望月のころ

こゝをまたわが住みうくてうかれなば
　松はひとりにならむとすらむ

彼れの信仰も、恐らく台言、淨土、難行道、易行道、神道、佛道、いづれをも必ず勝れたりとして執着したのではあるまい。彼れの宗教に對するは恰も景色に對するが如く、善しと感ずれば何等の芥蔕もなく拜んだので、また譬へば五戒の一義に邪淫を說く當時の僧侶が、歌道に於いていろ／＼な曲戀を誇りかに詠み出でたるが如く、その時々の興味のまゝに、面白く考へ面白く詠み出でたのであらう。彼れが伊勢に詣でて、或時は、

何事のおはしますをば知らねども
　かたじけなさに淚こぼるゝ（大神宮御祭日によめる）

と詠み奉り、或時は—高野の山を住みうかれて後、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに、大神宮

御山をば神路山と申す、大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける」と詞書して

深く入りて神路の奥をたづぬれば
　　また上もなき峰の松風

と書いて居るのなどが、彼れが此の囚はれぬ、自由な、眞摯な心境を證明してゐるものである。とにかく西行は出家沙門の勤行を理想的、徹底的に修め了せたものではあるまい。また歌の道を格式正しく修め得たものでもあるまい。彼れの道行は、いづれも中途半端で、唯だ我が好める所に縋り、尊ぶ所を奉じ、氣の向くまゝに足を運んで、遊樂とも修行ともつかぬ、同時に修行でもあり遊樂でもある長期の生活をつゞけたのであつたが、とにかく眞に就き、善を尊び、美に憬るゝ、自由なれども欺かず僞らざる眞摯眞情の生活が、その人特有の言葉に表現された所に、此の法師上人の歌特有の風味と價値とが生じたのであらう。而してそこが近くしては和泉式部に、少し遠くしては在原業平に似通ひ、遙かに遠くしては『萬葉』や記紀の歌人達に似通ひながら、彼等のいづれにも見られなかつた徹底した風流、宗教心の融合等の高尚な風味が加はつて、彼れの歌が、題詠に跼蹐してゐる同時代の歌人の間に伍して遙かに秀でて居るのみならず、上は萬葉の巨人等と相對して讓らず、下は明治、大正、昭和の歌界にまで不滅の教訓を垂るゝこととはなつたのであらう。

一八

西行法師の歌が、王朝の數多い名歌人達の間に群を拔いて偉いのは、眞情を歌つた點にあり、唯一無類なる自己の生活を歌つた點にあり、また自由に獨自の道を往いた點にある。纏めていふと、我れ獨り得た生活を、自由に、自分の言葉に現はした點にある　而してその獨自の生活が高尙で、脫俗で、その上に特別な寂しい美しさを有つてゐたので、その歌が單に自然で、生きてゐて、面白いのみならず、高致逸響ともいふべき無類の品位を有つやうになつたのである

但し西行とても時代の子である　彼れの歌にもおのづから千載、新古今時代の特色が宿つてゐた　例へば

降りつみし高嶺のみ雪とけにけり
　清瀧川の水の白なみ

の如きは、當代に流行した名詞止めの立派な現はれである。

とめ來かし、梅さかりなる我が宿を

うときも人は折にこそよれ

の如きは、同じく當時流行した初句切れの呼掛である。　また

いかゞすべき、世にあらばやは世をも捨てゝ

あな憂の世やとさらに思はむ

の如きは、一方初句切れの咏歎であり、同時に、「どうしたものであらう。　自分は一たび世を捨てゝは見たが、遁世の後も更に憂き事が多くある。　しかしながら、已に世を捨てた身であつて見れば、もう此の上に世の捨てようがない。　もしこれが俗世間にある身であつたならば、あゝいやな世の中だと云つて、もう一度捨てようものを」といふが如き複雜な思想を疊み込んだもので、『千載集』や『新古今集』の一特色を成してゐる密叙式ともいふべき流行を分前したものである。

西行法師消息

西行法師の歌は、この通り時代の特色を分前しては居るが、同時に彼

（高野山金剛峯寺藏）

れには、他の眞似られない獨自の特色があつた。而して其の一つは自分のほんとに思ふ事を正直に、素直に、時としては無造作に詠み出だすことであつた。これは誰れもが悉くする事で、改めて特色呼ばはりをする値打の無い事のやうに思はれる　けれども『古今』以來の題詠歌人が、概ね定められた題目について机上の空感を粉飾して言ひ現はすのを常としてゐた事を考へると、此の尋常事の、實は立派な非尋常事であつたことが頷かれるであらう。而して順德院が、西行の歌について、「たゞ詞を飾らずしてふつ〳〵と

言ひたるが聞きよきなり」と仰せられたのは、此の平凡に似て實は非凡なる特色をめでさせられたのであらうと拜察される。

特色のもう一つは、彼れの生活が唯一無類であり、殊にその思想に奥深い寂しい味はひがあつて、それが極めて妥當なる詞に現はされたことであつた。王朝に生きた無數の歌人の中には、花月の風流に身をやつした者が多くあつた。戀愛の道に耽り溺れた者も多くあつた。佛道に潛心した僧侶や、家を出で世を離れた隱逸者も少なくなかつた　また武道に達しながら同時に歌道に堪能なる、例へば源義家、平忠盛、源賴政、平忠度等の如き武將もあつた。

吹く風をなこその關と思へども
　道もせに散る山ざくらかな（源義家）

霞めたゞもろこしまでも敷島の
　やまとのみかは花の面かげ（平忠盛）

有明の月もあかしの浦風に
　波ばかりこそよると見えしか（同）

深山木のその梢とも見えざりし
　櫻は花にあらはれにけり（源賴政）

秋風の身にしむことをそよ〳〵と
　うなづく荻ぞもろ心なる（同）
さゞ波や志賀の都はあれにしを
　むかしながらの山櫻かな（平忠度）

しかしながら、武門に生れて武藝に達し、月卿雲客に伍して和歌を善くし、君恩を蒙り、朋輩に親しまれ、妻子に懐かしまれながら、二十三歳の若さで、家を出で、世を遁れ、五十年間六十餘州を雲水して、淋しさに堪へつゝ、自然を愛し佛に仕ふる清淨の一生を送る、といふやうな人は我が國に未曾有であつたであらう。而して此の絶無稀有の尊い、味はひ深き生活を美しく歌つたのが、西行の歌であつたのである。皮肉家の平賀源内は、その『そしり草』の中に西行を評して、

まことに古今桑門（よすてびと）多しといへども、西行如きの有徳の法師は稀なるべし。西行の和歌は禪定の修行なり。

と云つてゐるが、まことに彼れの和歌は風流即修行、善即美の極意を得たものであつた。西行の歌は自然人事の兩方面にわたつて、多くの奥深い興味を持つて居るが、最も深く人を打つのは、道心と花月風流の情と世間關係の俗情との絡み合つた、悲しい、痛ましい、奥床し

い味ひのものであらう。例へば前にも擧げた

捨つとならば憂世を厭ふしるしあらむ

我れには曇れ秋の夜の月

の如きは、月を見て、振り捨てた俗生活を思ひ出すのが苦しさに、至愛の月に曇れよかしと求めたので、此の特別な感情の代表的な現はれとも見るべきものであるが、

思ひ出づることはいつもといひながら

月にはたへぬ心なりけり

隈もなき折しも人を思ひ出でて

心と月をやつしけるかな

花見ればその謂はれとはなけれども

心のうちぞ苦しかりける

の如き、いづれも同一の味で、花鳥風月に關するはかなきすさびも、此の一義が加はると、掬ぶに盡きぬ深邃なる興趣が湧いて來るやうに見える

自然の景物の中で西行の最も愛したのは春の櫻、秋の月であつた。櫻の歌に、かういふのがある。

吉野山梢の花を見し日より
　心は身にもそはずなりにき
あくがるゝ心はさても山櫻
　散りなむ後や身にかへるべき
引きかへて花見る春は夜はなく
　月見る秋は晝なからなむ
花ちらで月はくもらぬ世なりせば
　物を思はぬわが身ならまし
身をわけて見ぬ梢なくつくさばや
　よろづの山の花のさかりを
花にそむ心のいかで殘りけむ
　捨てはてにきと思ふわが身に

いづれも、花に對する至深の愛を見せて、一首々々に分けて見てもそれ〳〵に面白いが、纏めて一團と見れば、櫻花愛の種々の心理が、まるで花のやうに繚亂と結ぼほれて居るやうである

月の歌には、かういふのがある。

まこととも誰れか思はむ獨り見て
　後に今宵の月を語らば

月のため晝とおもふがかひなきに
　しばし曇りて夜を知らせよ

古を何につけてか思ひ出でむ
　月さへ變はる世ならましかば

いとふ世も月澄む秋になりぬれば
　ながらへずはと思ふなるかな

詞には盡くされぬ月の美趣、月の光を引立てようとする愛情、月を想出の鏡とする心、月ゆゑに命を貪る風雅の慾心、それ〴〵に面白く、月に對する無上の愛を現はして居るが、殊に前にも引いた

行方なく月に心の澄み〳〵て
　果てはいかにかならむとすらむ

の如きは、生涯を月見に抛つて悔いぬ徹底的な自然愛の現はれたもので、西行ならではとて

も詠み得べきものではない

西行の歌に於けるえならぬ尊さの一つは、自然との道交ともいふべきものの人を引きつける味である

今朝見れば露のすがるに折れ伏して
　起きもあがらぬ女郎花かな
うち具する人なき道の夕されば
　聲たておくるくつわ蟲かな
わが世とや更け行く月を思ふらむ
　聲もやすめぬきり〴〵すかな
わきて見む老木は花も哀れなり
　今いくたびか春に逢ふべき
こゝをまた我が住み憂くてうかれなば
　松はひとりにならむとすらむ
谷の間に獨りぞ松は立てりける
　われのみ友はなきかと思へば

大方の露には何のなるならむ
　袂におくは涙なりけり

いづれも物か人かの境を忘れて、ほろりとさせる味のものであるが、殊に最後なる「大方の露」の一首は、俊成が評して「詞淺きに似て心ことに深し」と云つたものである。まことにあどけない、子供の片言のやうであるが、大人も味はひ盡くされぬ風情がある。『八雲御抄』に謂はゆるふつ〳〵と詠むとは、かういふ歌を指すのであらう。

西行が人生觀を歌つたものには、かういふのがある。

　世の中を夢と見る〳〵はかなくも
　　なほおどろかぬわが心かな

いづこにも住まれずはたゞ住までもあらむ
　柴のいほりのしばしなる世に

大波に引かれ出でたる心地して
　助け舟なき沖にゆらるゝ

遙かなる岩のはざまに獨りゐて
　人目おもはで物おもはばや

うら〳〵と死なむずるなと思ひとけば

　心のやがてさぞとこたふる

安らか調子の中に尊い人間味の漂うてゐる趣は、實に言語道斷である。

吾等は最後に、特に修辭の味を見せた二三首を掲げるであらう。

惜めども鐘の音さへかはるかな

　霜にや露のむすびかふらむ

昔見し宿の小松に年ふりて

　あらしの音を梢にぞ聞く

數ならぬ身をも心の守りがほに

　うかれてはまた歸り來にけり

瀬戸わたる棚なし小舟心せよ

　霰みだるゝしまき横ぎる

西行法師の歌は、まづ、かういふものであつた、彼れは歌の樣式に於いて大體『千載』『新古今』の流れに棹さしたが、その詠むところは、當代の題詠歌人等とは全く異なつて、自己の

生活と自然、人間の眞とであつた　俊成が諸流兼學、歌論の渉獵、宗教への參向、環境の整備、創作心の統一と、萬術を盡くしながら、狹隘なる主觀に穴籠りしたのに對して、彼れは個心を洞開して、廣く自然人間に直接し、道交した　彼れは家庭を離れ、名利を離れ、社會を離れて、天地間の、小さいけれども同時に限りなく大きい人間となつた　彼れが凡べてを捨てゝ、捨て得なかつたものは和歌と佛道とで、此の二つを通ほして、天地萬物との、及び已に捨てたる社會生活との交渉をも持つてゐたが、佛道と和歌とについて、いづれを先とし、いづれを重んずるかといへば、彼れは恐らく第一に和歌を置いたであらう。俊成は和歌への執着を一種の罪障と疑ひつゝ、住吉明神の示現を祈請したが、西行は何等の疑念もなく佛道、和歌の二者を兼愛した。而して優れる愛はむしろ和歌にあつたかのやうに見える。『沙石集』の傳ふる所によると、西行が遁世して後、吉水の慈鎭和尚が天台眞言の大事を尋ねると、彼れは答へて、

先づ和歌を御稽古候へ　和歌を御心得なくは、眞言の大事は御心得候はじ

と云つたといふことである。道德、宗教、藝術は人生の三大重要事であるが、西行は少なくとも情的、本能的には藝術第一主義者、卽ち和歌第一主義者であつたであらう。從つて和歌は西行に取つて中心第一の生命であつたのである。

西行は武人で、一種の大宮人で、法師で、歌人であつた。而して佛道に磨きをかけられた歌

人たる事を中心第一の建前として、尊いすぐれた二千首に近い和歌を遺した。彼れは『千載集』時代の調子を本としたが、それに囚はれずして、自由に三代集以來の歌風樣式を我が藥籠中のものとしつゝ、そこに自己一流の歌風を樹立した。彼れは王朝四百年の歌風の精粹ともいふべき體樣を自得し、而して萬葉人の心と佛者の愛とを以て、之れに光輝ある活を與へたかのやうに見える。身分、修養、藝風、すべてに於いて王朝の生粹を得、同時に前朝の美を兼ねた西行法師、圓位上人によつて最後を飾られたのは、王朝の歌道に取つて、實に絕大の幸福であつた。

第十九　源氏物語以後

この「第十九」を『平安朝文學史』の最終章とするについて、特に讀者諸賢の御許しを乞はねばならぬことがある。

上卷の序文にも一言してある通り、著者は初めから「新」「完」「警」の三標準を立てゝ、これらの標準に資格した文學を特に親切に精密に取扱はうと考へたのであつた。そして此の卷に於いても、前章の「第十八」までは、ほゞ此の豫定の計畫を遂行して來たつもりであるが、こゝに當面した重大な難關は、殘されたる文學と紙數との調和し難き矛盾である。說き殘された文學が餘りに多くして、その解說が到底許されたる殘餘の紙面に收容し切れないことである。無論これは著者の淺慮と認識不足とによることで、『源氏物語』以後の文學が、いかに切りつめても、わづか數十頁の中に約說し得ぬことは、初めから解り切つたことではあるが、しかしながら事こゝに至つた以上、著者の非力では如何ともし難いのである。それで窮した揚句に考へた途は唯だ一つ、『源氏物語』以後の極めて主なる文學のみにつ

き、例の三標準に照らし合はせつゝ、數十頁の間に大省略の概說を試みて、他日、此の全史の列から離れた形式で、別に補足の一卷を公にしようといふことである

『源氏物語』以後、即ち一條朝以後の國文學の主なるものは、歌謠、小說、實錄、日記の四種であつた。その中歌謠の一種は、短歌の本流と催馬樂、今樣等の傍流との兩方面に亘つて、已にほぼ此の時代の最後までを略說した これから吾等は殘されたる三種の文學について、大要を述べるであらう 而して他日を期する補足の一卷に於いては、是等の三種について、改めて詳述したる上、歌論漢文學、佛教思想等、傍系の、もしくは第二義的と視らるべき文學群についても、解說を試みたいと期して居る。

一

『源氏物語』は前代の殆んどあらゆる文學から其の精粹を攝取した、而して其の攝取するや、常に之れを移揚して、取られた原作よりは遙かに面白く、美しく、立派にした。『源氏』以後の文學は殆んど悉く『源氏』を崇拜して之れを摸倣した、而してその摸倣するや、概ね眞似劣りの結果を見せて、原作よりは遙かに見劣りのする、行き過ぎた、もしくは横逸れした、病的

のものとした。『源氏』の影響は物語、日記、歴史のあらゆる方面に及んだが、それが散文文學のみならず、歌謠の方面にまでも及んだことは、『源氏』が『伊勢』や『古今』と相並んで、歌學教養の寶典とされたことを見ても知られるであらう。また藤原定家が須磨の巻に

曉かけて月いづる頃なれば、まづ入道の宮にまうで給ふ。

とある一節の一部を取つて、

春はたゞ霞むばかりの山の端に
あかつきかけて月いづるころ

といふ得意の一首を成したことを見ても知られるであらう。『源氏』の後に出でた數多くの散文文學の中で、『源氏』を取りながら、摸倣の跡を全く見せずして、而して移揚にちかき怪手腕を見せたものは、恐らく『大鏡』たゞ一篇であらう。全く『源氏』の埒外に立つて摸倣の片影をも見せなかつたものは、恐らく『今昔物語』たゞ一篇であつたであらう。

吾等はまづ物語小說系の文學を一瞥したいと思ふ。

『源氏物語』以後の小說として、その全貌もしくは主なる部分の今日に傳へられて居るものは、『狹衣物語』『濱松中納言物語』『夜半の寢覺』『堤中納言物語』及び『とりかへばや物語』の五篇である。けれども『更級日記』が、作者の讀んだ物語として、『在中將』『とほき

み』『芹川』『しらゝ』『あさうづ』『長恨歌』『かばね尋ぬる』等の名を擧げ『狹衣物語』が『みづから悔ゆる』『かくれ蓑』『唐國』『大津の王子』『蘆火たくや』『伏籠の少將』『袖ぬらす』『大井』『玉の緒』『かはほりの宮』等の名を擧げて居るところを見ると、たとひ其の中の『在中將』が『伊勢物語』のことであり、『芹川』『唐國』が『源氏』以前のものであるとしても、寛弘以後に現はれた小說は相當の數に上つたであらうと想像される　殊に『拾遺百番歌合』が『夜寢覺』『御津の濱松』『朝倉』の三篇を『更級日記』の作者、菅原孝標の女の作とし、『更級日記』の奥書が此の三篇の外更に『みづから悔ゆる物語』をも同じ女の作として居るところを見ると、一人にして名高い四篇の小說を作つた女流作家もあつたわけで、平安朝末期の文運が、數量より見て、必ずしも長保寛弘の全盛時代に劣らなかつたことを思はせられる

ひそかに思ふに、後冷泉天皇の御治世(寛德―治曆、一七〇五―一七二八)十數年の前後は、數量より見て王朝に於ける小說全盛の時代であつたのではなからうか　假りに『更級日記』の奥書の記すところを事實として、『自ら悔ゆる物語』を孝標の女の作とし、而して、『狹衣物語』が第一卷に於いて眞先に此の物語を引いて居るところを見ると、『狹衣物語』の出來たのは、恐らく『更級日記』の作者の作なる『寢ざめ』『濱松』『朝倉』『自ら悔ゆる』等が

行はれた後のことであらう　さて此の四篇が孝標女の作であるとして、彼女が是等の小說を書いたのは何年ごろ、彼女の何歲時分であつたかといふに、それは恐らく後冷泉天皇の康平二年(一七一九)卽ち彼女の五十二歲以後であつたであらうと想像される。

『更級日記』には康平二年までの事が書いてあるが、それ以後に屬する彼女の消息は全く不明である。卽ち五十二歲以後については、彼女の生死すらも明らかでないのであるが、假りに其の後幾年か存命してゐたとして、さて問題は、彼女が小說を書いたのは五十二歲までの日記時代であつたか、或は五十二歲以後であつたか、それとも兩方に跨つてゐたであらうかといふことである。　それについて先づ考ふべきは、『更級日記』が何時書かれたかといふことであるが、吾等は彼女が五十二歲以後になつてから、十三歲の童女時代以來を追懷して書いたものであらうと思ふ　童女時代の日記の文章が少しも童女らしくない事が、その一つの理由である。約四十年間の記事がほゞ同樣の文致で書かれてゐる事が、第二の理由である。全部を通讀して見て、續けて書いた文章の、初めは堅苦しかつたのが、段々凝がほごれて、後の部分ほど油が乘つて來たやうに感じられることが、第三の理由である　永承元年、三十九歲の記事の中に、「二三年、四五年へだてたる事を、次第もなく書きつゞくれば」とあるのが、第四の理由である。思ふに彼女は手控の歌などを便りにして、長い既往を想ひ出し

思ひ出し書きつゞけたのであらう。而してその長い既往が、二三年、四五年を飛ばし〳〵書かれながら、内容は旅行、小說耽讀、夢物語、物詣、宮仕、自然愛賞、家庭の悲喜さま〴〵と、可なり多方面に亘つて、細々した事まで書き並べられて居る間に、あれほど好きな小說の創作に關する事が、少しも書き込まれてゐないのは何故であらうか。思ふに是れは身邊の雜事に追はれて、實際創作の筆を執らなかつた爲めであらう。或は書きたいとは念じながら、あやふやな希望を筆にするのに氣がさして、わざと其の事に觸れなかつたのであらう。また「とほきみ」―「しら、」―「あさうづ」―「長恨歌」などいふ、恐らく書きなぐりの小篇であらうと思はれるものに言ひ及びながら、『狹衣』や『堤中納言』などの堂々たる長篇、もしくは著しい特色を持つた名作の名を擧げなかつたのは、恐らく是等の作がまだ世に出なかつた爲めであらう。かくして文學の血統に惠まれた彼女は、大作『源氏』に傾倒して創作の野心をそそられながら、兒戲にも等しき群小作家の物語群を睥睨して胸の高鳴を感じながら、身邊の事情に制せられて、日記の筆すら容易に執り得なかつたのが、五十一歲の康平元年に、はからず夫に死に別かれて、悲歎に沈みながら、同時に放たれたる心の自由を感じつゝ、先づ『源氏物語』へのあこがれ、等身佛への祈願に始まる四十年の長い思出を書いたのであらう。而してそれは彼女に取つて過去を具象化する樂しみでもあり、懺悔の心安めでもあつたであ

らうが、主としての本意は、創作の筆馴らしかた〲新舊生活の境界標を建てるにあつたのであらうと想像される。藤原宣孝の死は紫式部をして家庭に死して文學に生きさせた、而して王朝の文學は之れが爲めに世界的名作の所有を誇ることが出來た。孝標女の運命も亦之れと同じく、橘俊通の死は彼女を家庭的に殺して文學的に活かしたのであらう、而して王朝末期の文學は之れが爲めに日記、小說合はせて五部の名篇に光ることとは成つたのであらう。是等の事情の想像によつて、吾等は、『源氏物語』が出でて後五六十年の間に於いて、群小作家の、恐らくは『源氏』を摸倣した低級な短い物語が數多く出來たのであらう、而して其等の後を承けて、幼い時分から『源氏』を崇拜しつゞけた才女の老寡婦によつて、少なくとも四篇の長篇小說が矢繼早に創作されたのであらう、而して是等に少しく後れて『狹衣物語』や『堤中納言物語』が現はれ、又更に後れて『取りかへばや物語』が現はれたのであらうと考へる。

二

以上は、吾等が昭和十四年の二月頃まで心ひそかに考へてゐたことであつた。そこへ突

然現はれ出でて吾等を驚かしたのは、雜誌『短歌研究』の二月號に發表された池田龜鑑、萩谷朴兩氏の類聚歌合二十卷本發見の報告であつた『類聚歌合』は近衞公爵家所藏の寫本であるが、さしあたり必要な事は、此の歌合の中なる後冷泉天皇の天喜三年五月三日に行はれた媒子内親王家庚申夜歌合が作者の名を具した十八篇の物語から十八首の歌を引いて居り、而して其の中に『堤中納言物語』の第五篇『逢坂越えぬ權中納言』に小式部作の銘を打つて、その『堤中納言物語』に在るのと同じ歌を引いて居ることである　此の『類聚歌合』の記すところを眞とすれば、『堤中納言物語』の中の少なくとも一篇『逢坂越えぬ權中納言』は、後冷泉天皇の天喜三年以前に行はれてゐた筈で、而して天喜三年(一七一五)は『更級日記』の作者が丁度四十八歲の年であつた、『逢坂越えぬ權中納言』が天喜三年以前に出來たとすれば、他の九篇をも含めて、『堤中納言物語』一部が天喜三年以前に出來たといふ事も、想像される。　殊に『逢坂越えぬ權中納言』の外に、今は散佚した、作者の知れてゐる左の十七篇

『霞隔つる中務宮』(女別當作)『玉藻に遊ぶ權大納言』(宣旨作)『菖蒲かたひく權少將』(大和作)『よそふる戀の一卷』(宮少將作)『波いづかたにと嘆く大將』(中務作)『あやめも知らぬ大將』(左衞門作)『映す水泡の大將』(少將君作)『淀の澤水』(甲斐作)『あらば逢

ふよのと嘆く民部卿』（出羽辨作）『菖蒲うらやむ中納言』（讃岐作）『岩垣沼の中將』（宮小辨作）『浦風にまがふ琴の聲』（武藏作）『浪越す磯の侍從』（出雲作）『蓬の垣根』（少納言作）『なこそ心にと嘆く男君』（式部作）『をかの山訪ぬる民部卿』（小左衛門作）『言はぬに人の』（小馬作）

が、此の『類聚歌合』の中に歷々と列擧してある所を見ると、『源氏』以後天喜三年に至るまでの數十年は、少なくとも物語文學の出現に於いて、また特に少なくとも短篇小說の出現に於いて輝かしい時代であつたことが想像される　思ふに『更級日記』の作者は、一方『源氏物語』に心醉して反覆熟讀する間に於いて、是等の短篇をも讀んだのであらう、而して是等の短篇をば齒牙にもかけずして、家庭の煩累から解放されると同時に、一意『源氏』の跡を慕つて長篇の構成に心を潛めたのであらう

かくして『源氏物語』以後の小說變遷に關する吾等の考察は一變した、それは『更級日記』の作者が長篇作成の先鞭を着けたことに關する考察が變はつたのではなく、唯だ『堤中納言物語』の成立年代に關する考が一變し、之れに連れて、『源氏』以後及び以前に於ける短篇小說群の位附（くらゐづけ）に關する考察が激變したのである

吾等は讀者の許しを得て、暫らく氣まぐれな想像の翼に身を委ねる

讀者は『源氏物語』以前の短篇小說、例へば『枕の草子』や『源氏』に引かれて居る『梅壺少將』『埋木』『道心すゝむる』『月待つ女』『松が枝』『交野の少將』『狛野』『正三位』や『かげろふ日記』の作者が「世の中に多かる古物語」と云つた多くの短篇小說——これらは恐らく『源氏』や『宇津保』に對してはもとより、『落窪』に對しても比較にならぬほど短いものであつたであらう。——が、文字通り全く失はれて居ることを知られるであらう同時に『源氏物語』以後の短篇小說も亦『更級日記』『狹衣物語』及び近衞家所傳の『類聚歌合』に引かれたものが、類聚に引かれた『逢坂越えぬ權中納言』唯だ一篇を除いては悉く失はれたことを知られるであらう。而してそれらの中の唯だ一つが『堤中納言物語』といふ團體文學の群の中に入れられたるが爲めに幸うじて散佚を免れたことを知られるであらう。思ふに『逢坂越えぬ權中納言』は『堤中納言物語』に合綴された十篇の中で、その特色の最も稀薄な穩質のものである。それが必ずしもそれ以下とは思はれない『類聚歌合』の仲間なる他の十七篇が悉く散佚した間に在つて、安全に保存されたのは、一つには團體結合の力によつたので、二つには他と變はつた特異性を持つてゐたからであらうと思はれる。吾等が謂はゆる特異性とは、『堤中納言物語』が短篇小說の開山であつたことではなく、風變はりな人生の斷面を捉へ來たつて、皮肉な、銳利な、耽溺的、諷刺的な表現を與へ

ることと言ひ換へると、異樣な興味を漁り、異樣に描寫して、讀者に異樣な感覺を與へることである。思ふに此の個々獨立した異樣の同類が結合して、當時には類例なきがッしりしたスクラムを組んだことと、これが王朝二三百年間に於けるあらゆる短篇小說が失はれた間に在つて、よく散佚を免れた理由であらう。

『堤中納言物語』の「異樣」は、小式部等『源氏』以後の作家の創案に成るものではあるまい。天喜より溯ること約百年、天曆時代に出來た『大和物語』が、はやくその中に『堤中納言物語』の異樣趣味を備へた二三章を有して居たことは、上卷に於いて吾等の已に說いたところである。此の趣味はその後、或は顯流となり、或は潛流となつて、『源氏物語』以後に傳はつたことであらう。吾等はその傳統をたづねつゝ、曾て『堤中納言物語』の濫觴が或は『大和物語』や『源氏物語』にあるのではないかとも考へた。而して例へば『源氏』に於ける空蟬が身代り小袿や、軒端の荻の一條は、「花櫻折る少將」の粉本になつたのではないかとも考へた。けれども飜つて思ふに、天曆の『大和物語』以來數多く出でて、やがて悉く散佚したる短篇の中には、之れに類した皮肉めいた斷面描寫が幾らもあつたことであらう　而して『源氏物語』は、先行文學の『伊勢』を『大和』を『宇津保』を『落窪』を遠慮なく取り入れて、見違へるばかりに移揚したやうに、これらの散佚した短篇の斷面描寫

をもほしいまゝに取り入れて、之れを引き立てたのではなからうか。かう思ふと、空蟬のみならず、雪の朝に於ける末摘花のえならぬ鼻の發見、源典侍に對する源氏頭中將の鞘當、近江君を內大臣の養ひそこね、のみならず、匂宮と中君とが鴛鴦の語らひの隣室に於ける薰大將對大君の神妙な差向ひなど、いづれも『堤中納言物語』の作者が好みさうな材料であるが、是等は寧ろ『源氏』が、天曆から長德長保期までに現はれて亡び去つた先行の短篇小說から得て換骨し移揚したものであらう。のみならず、更に想像を逞しくすると、『宇津保』や『源氏』に於ける前後をぼかす每卷讀切の形式も、是等の先行短篇の斷面描寫から得たものではなからうかとも考へられる。

彼れ是れ考へ合はせた上で、吾等の想像に浮かんで來る見通しの概觀は、かうである。『大和物語』の出來た天曆頃から、多くの短篇小說が次ぎ〳〵に書かれたであらう　それらの短篇の中には、人生の或る斷面を捉へて來て皮肉な觀察描寫を試みたものもあつたであらう。而してそれらの短篇は上流男女の間に極めて輕く讀み去り忘れ去られて、その中のほんの一部分の名稱だけが、『枕の草子』や『源氏物語』の中に、辛うじて跡を止めたのであらう　また『源氏』以後にも、似寄りの短篇小說が數多く書かれたであらう　而してそれらのほんの一部が、同じやうに天喜の『庚申六條齋院歌合』や『更級日記』や、『狹衣物語』

やに、辛うじて作の名のみを留めたのであらう。かくの如く『源氏』の以前以後、天暦より院政直前に至る百餘年の間に現はれ出でた、而して作者としては『庚申歌合』の十八名のみが奇蹟的に知られた無數の短篇小說が、少數の長篇の前に、悉く光を奪はれて忘れ去られたのであらう。而してそれらの無數の短篇小說の中で、皮肉な觀察により風變りな斷面描寫を試みた十章より成る短篇小說『堤中納言物語』のみが、その保有する特異の興味と同味者の結束とによつて、永久の存在を贏ち得たのであらう。で、吾等は考へる、平安朝の短篇小說に、もし靈があつたならば、かうも云つたであらうと。「吾々は凡べて且つ讀み且つ忘れられる果敢なき運命の玩具文學である。但し、個々の作としては仕方ないが、せめて吾々短篇仲間の面影を傳へる爲めに、永久に忘れられぬ幾篇かを殘さうではないか。それには一度讀めばとても忘れられぬやうな怪奇の特異性を有つた作を十篇位、結束させて長篇の向うを張るがよい。そしてそれに屈竟なのは「花櫻折る少將」「蟲めづる姬君」「逢坂越えぬ權中納言」に「はいずみ」など、まあ君等だ。吾々が選手の十君、よろしく吾々の代表を賴むぞよ」と。恐らくこんな事であつたであらうが、この短篇小說群の一念凝つたる留魂錄が卽ち『堤中納言物語』であつたのである。

平安朝の文學讀者は、小說に於いて事大主義であつた。彼等は長篇のみを永久に傳へよ

うとして、短篇をば當座限りの玩具とした。之れを江戸の文化文政期の前後にたとへると『稻妻表紙』『弓張月』『八犬傳』『田舍源氏』『膝栗毛』などのみを子孫相傳の藝寶とし、黄表紙、洒落本の全部を散佚させて、唯だ怪談を結合した『雨月物語』のみを保存したといふやうな不思議な現象を、平安朝の詞藝史上に現じた因緣は、かうである

三

かくして『源氏物語』以後に現はれた最初の現存小說は、形式內容の兩方面に特異性をもつ短篇十章を結合した『堤中納言物語』である「堤中納言」は作者の名でも、結合者の名でもないらしい　その中の一篇『逢坂越えぬ權中納言』の名が『庚申歌合』によつて作者の名と共に傳へられた奇蹟から得た氣まぐれの思ひつきではあるが、堤中納言物語は、恐らく權中納言物語を寫し誤つたので、もとばら／＼になつてゐた十篇を、『逢坂越えぬ權中納言』を最初にして綴ぢ合せた人が、卷頭の一篇の名によつて代表的に呼んだのであらう　權の草册か堤の草册に變はるのは、極めて自然で想像し易いことだからである

かやうに『堤中納言物語』は王朝に出でた多くの短篇小說の代表者で、またその奇警な

る取材、觀察及び描寫によつて、『源氏物語』以後の小說中最も著しい新味を見せたものである　而してその內容は「花櫻折る少將」「このついで」「蟲めづる姬君」「ほど〳〵の懸想」「逢坂越えぬ權中納言」「貝合はせ」「思はぬ方にとまりする少將」「はなだの女御」「はいずみ」「よしなしごと」といふ洒落れた名題の、それ〴〵獨立した十篇を寄せ集めたものである　その中「逢坂越えぬ權中納言」が最近小式部といふ女性の作と知られただけで、他の九篇も全部同じ小式部の作であるか、或は十篇がそれ〴〵異なる十人の作であるか、或は其の中に同じ人の作を幾篇でも含んでゐるのか、全く不明であるが、趣向や文體に概して類似してゐるところがあり、殊に『庚申歌合』が一人一作を取つて居る間に於いて、『堤中納言物語』の十篇からは「逢坂越えぬ權中納言」以外に、一篇をも取つてゐない

逢坂越えぬ權中納言　（富士谷本）

所を見ると、十篇全部が、或は小式部といふ、八九百年の間全く其名を知られなかつた一女性作家の作であらうかとも想像される。もしさうだとすると、小式部は一朝にして無から有の大存在となり、清少納言、紫式部等と雄を競ふべき文豪の一人とはなるであらう。

『堤中納言物語』の文章が『源氏物語』や『枕の草子』などに似てゐて、同時に文章としては彼等を摸倣しながら及ばぬところがあるのを見ると、必ず『源氏』以後に出たものであらう。また王朝眞盛りの作には豊かに有つて、鎌倉には殆んど無い修辭のある所を見ると、鎌倉時代にはどうしても下し得ぬ作であらう。最初の「花櫻折る少將」の最初なる、

月にはかられて夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ち歸らむも遠きほどなれば、やう／＼行くに、小家などに、例音たふものも聞こえず、隈なき月に、所々の花の木どもも、ひとへに紛へぬべく霞みたり。

などは、『源氏』に倣つて及ばぬものである。第二なる「この序」の冒頭なる、

春の物とてながめさせ給ふ晝つ方、臺盤所なる人々、「宰相中將こそ參り給ふなれ、例の御にほひいとしるく」などいふほどに、つい居給ひて、「よべより殿にさぶらひしほどに、やがて御使になむ。東の對の紅梅のもとに埋ませ給ひし薫物、けふの徒然に試みさせ給ふとてなむ」とて、えならぬ枝に、白銀の壺二つ附け給へり

などは『枕の草子』にも、『源氏』にも倣つて、而して及ばぬものである。「このついで」は、香合せをした後のすさびに、寄り合つた人々が、例へばボッカッチョの『デカメロン』などの趣向の如く、順々に出意表の面白い物語をするといふのであるが、その第一番に、中將の君といふが、目の前の火取から聯想したと云つて、或人が女の許に忍んで通ふ中に、子まで出來たが、本妻に憚つて絶間がちになつてゐた。それがたまたま訪ねて歸らうとすると、小さい子が後を追ふ。連れて行かうとするのを見て、女が詠んだ。

子だにかくあくがれ出でば薫物の
　ひとりやいとゞ思ひこがれむ

男はそれを聞いて、子を返して自分もそのまゝ泊つた。といふ一鎖の話をする　その最後に、

兒をかへして、そのまゝになむゐられにしと。いかばかり哀れに思ふらむと、おぼろげならじといひしかど、誰れともいはで、いみじく笑ひまぎらはしてこそ止みにしか。

と書いてある。此の「と受け」三度の繰返しは、それ〳〵の部分に重きを措く心持を見せる振分歸重、英語ならば、respective emphasis とでもいふべき特別な修辭で、『源氏物語』や『和泉式部日記』などの王朝盛期の文學に屢々見えるものである。例へば『和泉式部日

記』に、

なほあやしかりける身かな、こはいかなることぞと　あはれに故宮のさばかりのたまひしものをと、悲しう思ひ亂る。

とあるのと同じ修辭で、これだけによつても、少なくとも此の一篇だけは鎌倉期の産でないことを證據立てられるであらう。

卷頭の「花櫻折る少將」は、少將が夜更けての歸り途に、櫻咲く荒れたる宿で、小柄な美しい姫君を垣間見た。その後家來の光末から、それが故源中納言の姫君で、やがて叔父の大將が後見して內裏に奉らうとしてゐることを聞き、夜深く忍び入つて盜み出した。奥の間に衣を被いてゐる小さい女人がそれと、まんまと車に抱き乘せて、我が家に連れ込んだが、老婆の皺枯聲で、「誰れぢや、けしからん」と云つたので、すッかり驚いた。

その後いかゞ。をこがましうこそ。御容貌（おんかたち）は限りなかりけれど

と云つて、縫はつた止め方に筆の冴えを見せて居る。「その後（のち）がどうなつたか。馬鹿らしい話いくら容貌が立派でも、こんな失敗をやるやうではねい。」

これは卷頭二篇のほんの一部の筋である。大體『堤中納言物語』は表現の技巧に於いて至らぬところが多く、眼高手低の遺憾は到るところにあるが、とにかく內容、形式、着眼、趣向

書きこなし、題のつけ方、すべてに於いて巧みに異常味を發揮した點を買ふべき異彩の文學である

四

『更級日記』の作者の作と稱せらるゝ『自ら悔ゆる物語』の名が『狹衣物語』に引かれて居るところを見ると、『堤中納言物語』に次ぎ『狹衣物語』の前に現はれたのは、『更級』の作者の書いた物語であつたであらう。『更級日記』の奥書は、此の作者の製作した物語として『よはのねざめ』『みつのはままつ』『みづからくゆる』『あさくら』の四篇を、此の順序で擧げて居るが、成立の年代によつたのか、作の價値によつたのか、世間の評判によつたのか或は量の長短によつたのか、とにかく此の順序立に一種の心理的自然があつたとすると、失はれた『自ら悔ゆる』と『朝倉』とは恐らく散佚しても最も惜しからぬものであつたであらう。從つて殘れる二篇は、長さか、價値か、最初の試みか、いづれかによつてその存在の最も悦ばるべきものであつたであらうが、吾等は孝標女が小說の世界に躍り入つた最初の試みは恐らく『夜半の寢覺』で、『濱松中納言』は彼女の放つた二の矢であつたであらうと

想像する。

『夜半の夜覺物語』は『小夜の寢覺物語』ともいひ、又簡單に『ねざめ』とも云つた。關白左大臣の子で、中宮の兄なる中納言と、源氏の大臣の乙娘なる中の君との間に於ける複雑な、あやにくな戀の進展を中心として、當時の貴族社會の實際生活＝と云はんよりも寧ろ『源氏物語』などを粉本として、作者が空想的に構成したる貴族生活＝を寫したものである　試みにその中心を成した筋の一部を述べると、主人公の中納言は才藝容貌兼ね優れた若盛りの公卿で、源氏の大臣は彼れに長女の大君を妻はさうとしてゐた。その頃次女の中の君は親戚なる僧都の家に方違ひしてゐたが、ある明月の夜に琴を弾いてゐる所を、折しも僧都の庵の隣なる乳母の家に病を養つてゐた中納言がかいま見て、假初の契りを結んだ。中納言は女を僧都の姪と思つてゐた、そして自分をばその姪の愛人と聞く式部卿宮の中將と僞つた。やがて中納言は姉の大君と結婚したが、僧都の家の女が忘れ難く、妹の中宮に託して僧都の姪を宮中に召さしめた。それは無論似ても似つかぬ人違ひであつた。男はやがて女を自分の妻の妹と知り、女は男を姉の大君の夫と知つた。中の君は、また一夜にして懷姙し、石山に人目を避けて產をした。父なる源氏の大臣はそれらを苦にして病氣になり出家しようとして廣澤の池のほとりに隱居した。その後、中の君には二人の新しい競爭者

が現はれた。それは帝と中納言の叔父の左大將とであつたが、勝は遂に左大將に歸した。帝は寡婦となつた中納言の正妻の大君が死んだ。左大將もまた一人の娘を殘して死んだ。その中に中納言の姫を尙侍として容れようとなされたが、中の君は拜辭して、代はりに繼娘を奉つた。中納言はその間、中務卿の姫君や朱雀院の女一の宮との橫逸れした戀に悒鬱の氣分を紛らしたが、まだ中の君に對する戀を捨てかねて機會を窺つた。その後、中の君は宮中を退いて左大將の邸に住んだ、そして身邊の惱ましさから遂に病氣となり、廣澤に隱れて出家しようとしたが、果たさず、そこへ中納言は相かはらず執念の愛を寄せて通ひ、帝もまた御位をかけての熱心な御愛を寄せさせられた。……

中心の筋の一部だけでも、まづ此の通りやゝこしいものであるが、讀者は之れを讀んで、絕えず『源氏物語』を聯想されたであらう。例へば、僧都の家に於ける彈琴の條が、光源氏の北山に於ける、及び薰大將の宇治に於ける垣のぞきの條を粉本とした構成であるのを始めとして、源氏と藤壺、玉鬘に對する妻爭ひなど、殆んど事每に『源氏』の影が見え透いて居る位であるが、これは恐らく作者が源氏愛の四十年間に蓄積した胸一ぱいの資料が、殆んどそれ丈で移植され、遺繰された結果の現象であらう。卽ち『夜半の寢覺』は專ら『源氏物語』を眼中において構成され、趣向され、內容を與へられ、文致を定められたもので、唯だ其の間に

書道の初心者が、臨摹の際にいさゝか自分の特色を出さうとする位の程度の獨創味を加へたものであらう。構成上のわざとらしさが著しく目につくばかり、人物も文章も無事一方で、缺點も少なく同時に迫力も少ないのは、その爲めであると吾等は思ふ。

手本と見比べつゝ、久しい貯蓄を愼み深く使用して第一作を試みた老女作家は、やがて第二作に着手した。而して初陣の經驗によつて模倣と大事取との窮屈な心境を脱した彼女は、俄に獨創力の旺盛を感じて、驥足を八方に伸べようとした。「濱松中納言物語」は、かういふ心境のもとに書かれたので、その舞臺を遠く唐土にまで延長し、九州、吉野、瀨戸の内海と廣く駈け廻つて、人事萬蝶を國際的に開展せしめたのは、恐らくその結果であらう。

「濱松中納言物語」は、主人公の中納言が唐土にあつて日本を戀ひつゝ、「日の本の御津の濱松今宵こそ我れを戀ふらし夢に見えつれ」と詠んだのに因んで名づけられたのであらう。中納言は幼くして父を喪つた。而して母の再嫁した大將の家に養はれた。大將に數人の娘があつた。その大姫は絶世の麗人であつたが、中納言と相思の仲となつた。大將は大姫を式部卿宮に奉らうとしてゐたので、ひどく立腹して、その中を割いた。中納言は快々として亡き父君を戀ひ慕つてゐる中に、父君は今、唐の帝の第三皇子に生れ變はつて居るといふ夢を見た

中納言は遂に思ひ切つて唐土に旅した、而して高陽縣に母后と共に住む第三皇子に逢つた。『濱松中納言物語』は六卷本であつたらしいが、久しく前後の二卷を失つた四卷本として傳はつて來た。最近、最後の一卷が尾上博士所藏の五卷本によつて補はれたが、最初の一卷はまだ見出されずに居る。その現存卷一の冒頭は、

孝養の志深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしく遙かに思ひやりし浪の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふ方の風なむ殊に吹き送る心地して、唐土のうんれいといふ處に、七月上の十日におはしまし着きぬ。

の一鎖を以て始まつて居るが、此の

濱松中納言物語　（尾上八郎博士藏）

物語が大體『源氏』まがひの『源氏』に劣つた文章で書かれて居りながら、多少の新樣を出だし始めて居ることは、此の方丈記式、東關紀行式ともいふべき調子の一部を見ても察せ

られる。『狹衣物語』の冒頭の

少年の春は惜めとも留まらぬものなりければ、彌生の二十日あまりになりぬ。

なども、同じ時代の變はつた空氣を呼吸して出來た調子か、或はひよッとすると『濱松中納言』の冒頭の「孝養の志深く思ひ立ちにし道なればにや」の暗示を受けたのではないかと思ふ。

さて中納言は無事に父の生れ替りの第三皇子に謁した。そしてその母后が、別かれて來た大君に似てゐる所から、慕ひ寄り相契つて一人の男子を設ける。三年の後、その若君を伴つて歸朝する。この唐の后の生母といふのが日本人で、尼になつて吉野に居る、その尼君に后から手紙を託されて來たので、吉野を訪ねて逢ふ。その尼君には帥宮との間に生れた姫君があつたが、その姫君は、唐の后が中納言戀しさに母君の腹に宿つたのだといふことを夢に知つて、その姫君を要したが、姫は已に式部卿宮の胤を宿してゐたので、しやうがなかつた『濱松中納言物語』は、かういふ中心の筋に、やゝこしい添加を施したものである。而してその添加は、主として舞臺の擴張と趣向のわざとらしい複雜化とにあつた。是れは作者が『源氏物語』に對して幸うじて加へようとした優勝點でまた恐らくは我が處女作の『寢覺物語』に對して、著しき變化と進境とを見せようとした點であつたのであらう。まこと

に此の物語の舞臺擴張には、一種の新味と壯觀とがあつた。その趣向にも變幻、出沒、出意表の妙があつた。しかしながら擴大された遠國には、その國土に固有なる何等の特色もなく支那の高陽縣はいさゝかも變はらぬ日本山城の京都乃至洛外であつた。而して强ひて求められた變化は、その不自然を糊塗し、罅隙を塞がんが爲めに、夢幻、轉生、その他の超自然的、不合理的のわざとらしい技巧を施さねばならなかつた。而してその他は、大體に於いて、王として『源氏物語』の遙かに見劣りする模倣である。無論『寢ざめ』も『濱松中納言』も引き離して見れば一方の立派な長篇で、作者の手腕もとにかく非凡であつたのであるが、大作『源氏』の後に出でた哀れさは、實に同情に値するものであつた。

同じ作者の手に成つたらしい『自ら悔ゆる』『朝倉』の二篇は、恐らく比較的短いものであつたであらう、而して自分を象徵した、特殊の意味をもつ、引締つた作ででもあつたかのやうに想像されるが、過言は愼まねばならぬ。

とにかく菅原孝標女は平安朝に於ける非凡な作家であつた。彼女は常に身を以て文學を書いた。彼女は最もわざとらしい物を書いた時に於いて、最も彼女らしい物を書いたやうに見えた。彼女は『更級日記』に於いて、小娘として、家刀自として、宮仕人として、妻として、母として、寡婦としての思出を書いた。物語に憧るゝ、家族の身の上を案ずる、夢幻にぼう

ツとなる、信仰に入りつ出でつする人生の諸相に片はしから失望する、失望しながらいよいよ強く執着する、いろ〳〵な特殊の心境を書いた。　その藝術味に於いては『蜻蛉』『和泉』『紫式部』のいづれの日記にも劣るけれども、その心境の複雜さと、振幅の廣さと、殊に一事に熱しては轉々去々する昂奮的去來性と、もう一つ人生の諸相に右往左往しながら、鵜鳥の繋はるやうに、文學から離れ得ない特殊性格とを、正直に美しく書き現はした點に於いては前後無比の味を持つてゐると云つてもよい。

彼女はわが一生を日記化して後、今度は物語の創作に驀進して、恐らくはつゞけざまに長短四篇の物語を書いた。　その文學に魅入られたやうな五十餘年の實生活、世間生活を卒業した後の小說創作專門の晩年、いづれを見ても、文藝味、空想味に於いて他の追隨を許さゐものがある。

たゞ彼女に取つて、幸福にして、同時に不幸なのは、『源氏物語』に擱まり過ぎたことである。　彼女は十三歲の幼女時代から『源氏』にあこがれた、而して一生の最後に『源氏』まがひの物語を書いた。『源氏物語』が無かつたら、恐らく彼女が無かつたであらう。　けれども『源氏物語』あるが故に、彼女の作は獨立の價値を失つた。　これは『源氏』以後の殆んどあらゆる文學の分擔した運命であり、同時に古今の同歎ではあるけれども、幸にして巨人

に値遇し不幸にして巨人を離れ得なかつた人の運命は、哀しいものである。

五

『狹衣物語』は『庚申夜歌合』にその名を擧げられた十八篇、『堤中納言物語』の十篇、乃至『更級日記』の作者によつて連續的に作り出された『夜半の寢覺』『濱松中納言』等の行はれた後を承けて、後三條、白河兩帝の御代時分(一七二八―一七四五)に書かれたものであらう。作者としては、古來紫式部の女大貳三位と六條齋院宣旨とが擬せられて居る外に、男性作家の想像說もあり、そのいづれにも確證はないが、六條齋院宣旨說が最も多分らしく思はれる。宣旨は、三谷榮一氏によると、藤原定輔に嫁したる源賴國の女だといふことである。『狹衣物語』の作者は深く『源氏物語』を愛し、而して『源氏』の手法を巧みに手に入れたものらしく、優れた部分々々を不用意に讀むと、紫式部の筆かと思はしめられるところが無數にある。大體は『源氏』の描いた世界を優柔化し、傳奇化し、複雜化し、放埒化し、統一化したもので、うち沈んだ、神經質の、力なき源氏物語ともいふべきものである。

『狹衣物語』は、狹衣大將が青年期から源氏宮を戀ひ始めたが、到頭思ひを達し得なかつた

事、同時に、その傍ら多くの女性に親しんだが、源氏宮に對する未練と神經質の逡巡性とが妨げをなして、いづれも物にならず、遂に遁世を決意して世を遁れようとしたが、源氏宮に酷似した宰相中將の妹を見出だして、やうやく愛情の落着を得、同時にうち頻る奇瑞によつて帝位を讓られ、中將の妹を后に容れて皇子を生んだといふ事を中心の筋にした物語である。

狹衣大將は今上の御弟堀河大臣の子である。源氏宮は先帝の皇女であるが、三歳の時に孤兒となつて、堀河大臣に養はれた。青年になつた狹衣は宮に對して熱愛を感じ始めた、久しく躊躇した後に到頭うちあけたが、宮は恥ぢ恐れるばかりで應じなかつた。かくして狹衣が生涯にわたる苦悶の戀愛が始まるのである。その中に狹衣は飛鳥井姫君が仁和寺の威儀師に勾引かされて行く

狹衣物語（深川本）

狹衣物語繪卷殘鐵（谷森淳子殿藏）

所を助けて、姫と親しい仲になつたが、源氏宮に對する未練から、本名も名乘らずに居る中に、今度は姫が乳母の奸計により、式部大輔道成に欺かれ、筑紫船に乘せられて內海を行く途中で入水した。次ぎには帝から女二の宮を賜はらうとしたが、また源氏宮に對する未練から御受けせずに居る中に、いつしか相契つて、宮が身重となられた。母后は單衣の隙から宮か乳の黑みを見出だし、驚いて自分の姫娠したことにして世間をつくろはれたが、歎きの餘り遂に薨せられた。その中に御代がはりがあつて、源氏宮は新帝に召されたが「神代よりしめ引きそめし榊葉を我れより外に誰れか折るべき」といふ賀茂明神の恐ろしい神託があつて中止された。かくして源氏宮は賀茂の齋院となられたが狹衣はその後も度々歩みを運んだけれども、無論志を遂げられなかつた。

これは『狹衣物語』の中心の筋の、ほんの一部であるが

此の一部に於いても、讀者は目ばやく『源氏物語』に對する模倣、換骨、綴合の跡を見出だされるであらう。例へば、狹衣大將は光源氏と薫大將との合成人である。源氏宮は源氏の從妹の權齋院と宇治の大君との合成人であらう。また飛鳥井姫は浮舟を中心として綴り合はされた人物であらう。總じて此の物語に寫すところは、人物も時代も、宇治十帖に似通つた、時代の降り坂に見るを常とする、頽敗的な、優柔不斷な、風流に溺れた、自恃の氣力の無い、その辟外界の機勢に支配されては、意久地なく、大それた事をも平氣で爲出來すといふ、だらしのない似而非風雅性に魅入られてゐたやうに見える。愛慾生活に關する美しいけれども、無氣力、無節制な描寫はいふまでもなく、一女性の入内を神託の歌で止め、奇瑞を折重ねて人臣を帝位に即かしめるなどは、此の人心弛緩期の世相の自然に反映したものであらう。但し形式に於いては『源氏』以後の、恐らく隨一で、人物の性格描寫などに見るべきものが殆んど無いに拘はらず、文章は殆んど『源氏』に近きものであり、構成の統一は恐らく『源氏』を凌いで居る。巧みに眞似た美しい、力のない、そして危險性のある小說、それが『狹衣物語』であつた。

傳へられた物語で、最後に出來たのは『とりかへばや物語』であつたであらう。權大納言で大將を兼ねた人が、腹の異ふ男女二人の子を持つてゐた。その姉が男のやうに、弟が女

とりかへばや物語　古寫本

のやうであつたのを、父の大將がひどく歎いて、「取りかへばや」と云つたといふので、名づけたのである。今傳はる『とりかへばや物語』は王朝の末期に出來たものに鎌倉の手が加はつたものであるらしい。

此の物語の名題が既に奇異であるが、内容は更に奇異で、そのわざとらしき趣向や記述ぶりには、一種の嫌厭を感せしめる所さへある。大納言は二人の性癖に從つて男を女裝させて女に育て、女を男裝させて男に育てた。かくして男女それぞれに榮えて、男裝した女は侍從になり、女裝した男は宣耀殿の尙侍となつた。さて二人とも同性から頻りに婚を求められるが、無論成立たぬ可笑しみのある中に、侍從（女）は中納言となつて右大臣の四

の君を娶つた。　その四の君に宰相中將が通つて子を生ませる。　宰相中將はまた或折に中納言の女なることを見出だして相契つた。　その中に中納言は右大將となつたが、その右大將がいつしか宰相中將の胤を孕んで、宇治に隱れて產をする。　この通り滑稽が段々進展して、最後に二人は本物の男女に還元して榮華を極める。　といふので、筋は怪奇を極めつゝ、文章は『源氏』に倣つたといふ風のものである。　人物に見るべき個性がなく、內容に人生の暗示がなく、唯だ想像された抽象的の概念を骨子として、模倣的な風流文字を並べたものである。　簡單な能狂言にでも仕組んで觀客の爆笑を買ふべきものを、强ひて延べ長めて物語にしたといふ風のものである。　要するに獨自の文體をも持たず、人生記錄の本分をも忘れて、只管趣向の奇拔と變化とを求めた文學の末路を見せたのが、此の『とりかへばや』であるが、しかしながら之れを婦女子の如き文武の男子と、思ひあがつた才媛とが似而非風雅と愛翫とに日を送つた當代の影とすれば、また時代自らの描いた一種の戲畫と見ることが出來るであらう。

創建の意氣に燃えた『睡覺記』、『聾瞽指歸』、『竹取物語』に始まり、大作『源氏物語』に央したものが、模倣を事とし末技を弄した『とりかへばや物語』に於いて淋しい挽歌を奏でつゝ、遙かに『平家』を中心とした鎌倉の軍記群が、新時代の曙光を浴びて乾立した雄姿を

望む。小說の方面に於ける平安朝文學の末期の有様は、これであつた。

六

『源氏物語』以後の王朝文壇に於いて、說話、史實の記載を事とした文學の主なるものは『今昔物語』『榮花物語』及び『大鏡』の三篇である　此の三者の本領、性質には大いなる相違があつた。『今昔物語』は印度、支那及び日本の傳說を分類して斷片的に書き並べたものである。『榮花物語』は道長を中心とした藤原氏の榮花を、專ら『源氏』の筆致に倣つて物語風に寫したものである、『大鏡』は一面支那の歷史の體に倣ひ、一面その獨創なる劇的問答式の仕組によつて、同じく道長を中心とした藤原氏の榮花を述べたものである。成立の前後は不明であるが、大體『今昔』『榮花』『大鏡』の順序で、かなり長い年代の間に書かれたものであらう。

『今昔物語』は權大納言源隆國の作と傳へられて來た。確實な根據があるのではないが他に所傳が無いので、暫らく之れに從ふと、隆國は白河天皇の承曆元年(一七三七)に七十四歲で歿して居るから、此の物語はそれ以前に出來たのであらう　けれども此の物語の卷二十

五に「源頼義朝臣罸安倍貞任等語」があり、その次ぎに「源義家朝臣罸清原武衡等語」といふ本文の失はれた一項の目次がある所を見ると、此の物語は奥州後三年の役が全く終はつた後、即ち堀河天皇の寛治元年(一七四七)以後に書かれたので、從つて、少なくとも義家、武衡の物語その他の或部分は隆國の歿後に書かれたことになるわけである。是等の事情を綜合して考へると、『今昔物語』の前半或はその大部分は隆國の筆で、後半或はその少部分は隆國と好みを同じうする後人の書きつぎであるかも知れぬ。而してその書きつぎ人は、或は文筆によつて後三條天皇の御寵用を辱うした隆國の次男隆綱などであるかも知れぬ。然らざれば後三年役後の或る時期に於いて、佛教を尊び說話に好く筆達者な文人によつて纂輯されたものであらう。大事を取つて云へば、『今昔物語』は堀河朝に成つたと見るのを安全とすべきであらう。

『今昔物語』は三十一卷より成立つて居るが、此の半端な卷數と最後に置かれた近江國の巨木傳說とを見ると、作者が無限に書き繼ぐ筈の計畫を、半途で中止したかのやうにも思はれる。卷次內容の分配は最初に天竺が五卷、次ぎに漢土が五卷、あとは全部本朝になつて居り、いづれも大體佛道奉仕の爲めに書いたかのやうに見えて居るが、本朝の部が卷の進むに從つて、奇怪、淫靡、殺伐なる民間說話を止めどもなく書き並べるやうに見えるのは、本朝の部

今昔物語集　（文理科大學藏）

に入つて後、作者の嗜好が信仰本位から次第に好事本位に移つて、その好笑、恠訝、不可思議を愛する下手物趣味が旺盛になつて來たのであらう。とにかく信仰、好事の相反するが如き二つの趣味が不思議に調和してゐるところが此の物語に特殊なる面白味の一つである。次ぎに文體について、周圍のあらゆる文學が『源氏物語』の影響を蒙つて居る間に在つて、『今昔物語』一つが、不感の態度を取りつゞけたのは不思議な現象であるが、それは主として『今昔』の作家が文章に凝らなかつた爲めであらう。思ふに說話蒐集家兼記述家としての彼れの建前は、分量本位、興味本位、理解本位、通俗本位、現代本位であつた。彼れは天竺、震旦、本朝の三國に亘つて出來る

だけ多くの說話を集めようとした。その說話は、彼れに取つて美醜、善惡、趣味の高下に拘はらず、面白くなければならなかつた、改過遷善の感化を與へると、愛慾の情を唆ると、恐怖に戰慄せしむると、可笑しさに破顏せしむるとに拘はらず、讀者をして見ずに居られぬやうな引力を感じさせるものでなければならなかつた。一讀直解のわかり易いものでなければならなかつた、そして是等を實現するが爲めに、その文章は現代的で、通俗で、簡易で、短文句でなければならなかつた。是等の點からして、彼れは恐らく沙門景戒が立派な漢文の出來る文才を持ちながら、通俗易解の低級な文章を以て『日本靈異記』を書いたのに私淑したであらう　彼れが『靈異記』に私淑して、之れに倣つたことは、その材料を『法苑珠林』や『法華驗記』『往生極樂記』よりも、更に多く『靈異記』より取つて居るのを見ても解るその標題の名つけ方が、『靈異記』の『沙門憑願十一面觀音像得現報緣第三』と『今昔物語』の「信濃國盲僧誦法花開兩眼語第十八」との對照の示すが如く、一「緣」「語」の一語が異なるだけで、あとは文脈調子全く同一であるのを見ても解る。また『靈異記』の本文を讀み下しにしたのが、『今昔』の文章に酷似して居るのを見ても解るであらう『今昔』の作家はまた、原材の漢文に對して通俗化を試みたるが如く、國文に對しても大膽なる通俗化を試みた　彼れは『伊勢』や『源氏』に對して雄を競はうとしなかつたのみ

ならず、それらの古典の名文に對して臆面もなき添削を試みた。思ふに『今昔』の作家は上手でもなく下手でもない程度の文章力を持つてゐたのであらう。而して自分を標準として、一方に於いては自分より拙い文章に加筆して自分の程度に引き上げ、他の一方に於いては自分以上の名文を遠慮なく添削して自分の程度に引下げたのであらう。而してそれは專ら品位の高い難解な名文を平易化して當時の俗衆に耳近からしめんが爲めであつた

例へば彼れは一平將門發謀反被誅語一の一章に於いて『將門記』の

此等方を失うて立ち巡るの間、還つて順風を得。時に新皇本陣に還るの間、吹下に立つ貞盛秀郷等、身命を棄てゝ力の限り合戰す。爰に新皇甲冑を着け、駿馬を疾めて、躬自ら相戰ふ。時に現に天罰あり、馬は風飛の歩を忘れ、人は梨老の術を失ふ。新皇暗に神鏑に中たり、終に託鹿の野に戰ひ、獨り蚩尤の地に滅ぶ。（總漢字を讀み下しに改む）

を、左の如く書きかへて居る

後には貞盛秀郷等還つて順風を得たり、身命を惜まず合戰ふ　新皇駿馬を疾めて自ら合戰ふ　時に現に天罰あつて、馬も走らず、手も覺えずして、遂に箭に當たつて、野の中にして死にぬ

これは難解な虛飾の文字を除いて、文脈を素性よく解り易くしたのであらう　彼れはまた

「在原業平中將行東方讀和歌語」一の一章に於いて、『伊勢物語』の東下りの一節に、

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはをらじ、東の方にすむべきところ求めむとて行きけり……

とある所を

今昔、在原業平中將と云人ありけり。世の好者にてなむありける。然るに身を要無き者に思ひ成して、京には不居じと思ひ取て、東の方に可住き所やあるとて行きけり。本より得意と有りける人一兩人を伴ひて、道知れる人も無くて迷ひ行きけり。而る間參河の國八橋といふ所に至りぬ。

云々と變へて居る。原文が『伊勢』であるだけに、改められた『今昔』の文章も、『靈異記』まがひの普段の調子とは趣を異にして居るが、品位や風致の點から見て、格段の價値低下であることは誰れにも解る。『今昔』の作者にも、それの解らぬ筈がない。けれども彼れは少しも之れに介意しなかつた。異つた建前を持つてゐるからである。『今昔』の作者は、たとへば文章界の蚯蚓であつた。彼れは蚯蚓が土を分解して平坦化するやうに、高下のあらゆる文章をならして、その藝術價値を均平した。從つて彼れの文章の妙は、典雅莊嚴の妙ではなくして平談俗語の妙である。その行文の味は抑揚、波瀾、頓挫、照應にあらずして、面白い話

前九年合戰圖（殘缺）

を莞爾ともせず、さら〳〵と話し進む所にある。かくして『今昔物語』は、『伊勢物語』の上乘味とは比較にならぬが、たとへば『伊勢』が「昔男ありけり」で頭を揃へて居るやうに、『今昔』と『語り傳へたるとや』とで、三十一卷、九百餘項の前後を切り揃へたところに齊整連立の美しさがあつて、一種の説話集とも見るべき『江談抄』の類とは、すッかり違つた、文學としての貫祿を持つことにはなつたのである。

最後に述べたいのは『今昔物語』に於ける、強い、男性的な、筋骨の逞しい文致である。『今昔物語』には前後に

（東京帝室博物館藏）

通じて一種特得の文體がある　けれども、それは首尾に通じて全く同一であつたのではない。それは或は書き繼いだ作者が違つた爲めでもあらう或は、同じ作者が書き進む中に、特殊の題材に刺戟され、若しくは取材した原文の影響を受けた結果でもあらうとにかく『今昔物語』の文章は、終はりに近づくに從つて段々に活氣を見せて來た、同時に文句の連續する面白味を見せて來た　例へば卷第二十五「平維茂罰藤原諸任語」の中に、

　餘五さこそは有らめと思て、軍も皆返し遣て、緩みて居たるに、十月の朔頃の程に、丑時ばかりに、前に

大きなる池の有るに居たる水鳥の、俄に譟しく立つ音のしければ、餘五驚て、郎等共を呼んで、軍の來たるにこそ有りぬれ。鳥の痛く騷ぐは。男共起きて調度負へ。馬どもに鞍置け　櫓に人登れ、など俸て、郎等一人を馬に乘せて、馳せ向つて見て來とて遣つ。郎ち返り來て云く、此の南の野に□幾許とは否不見給ハ、軍眞黑に打散つて、四五町許りに見え候ぞと。　餘五此を聞て、此許被壓ぬれば、今は限りなめり。然れども一切れ支へて可戰き也と云て、軍の寄り可來き道々に、各四五騎許り楯を突いて待懸けさす。

とある如きがそれで、天竺、震旦、乃至本朝の最初の部とは、文章の風趣がすツかり變はつて居ることが見出だされる。同時に、こゝに至ると、鎌倉の軍記がもう目近に迫つて來たことが感ぜられる。思ふに『今昔物語』の作者が時代に超越した此の種類の文章を書いたのは『伊勢』『源氏』式の流麗典雅な文章に嫻はなかつた爲めであらう。鎌倉の男性的な剛爽な文章が、『靈異記』のやうな粗雜な文章もしくは、風雅ならざる俗語を用ゐ馴れた者に、寧ろ近づき易くして、『伊勢』『源氏』の門からは絕對に入るべからざるものであつた爲めであらう　即ち『今昔』の作者は、たまたま時代生粹の文章を能くせざるが爲め、偉にして時代に超越した文體の魁をなし得たわけであるが、とにかく四百年間のあらゆる王朝文學の中、次ぎの時代を豫想することに於いて、最も水際立つた先陣振を見せたのは『今昔物語』

榮花物語巻第十八

たまのうてな

であつた。特に『今昔物語』の武人を寫した部分であつた立ち寄らば大樹(おほき)の蔭とはいふが、大樹に立ち寄らぬ小さい孤立者にも、大いなる功名の道は開かれる。

七

廣汎な部類にわたる大説話集の魁『今昔物語』について、假名の歴史『榮華物語』が現はれた。『榮華物語』は宇多天皇から堀河天皇の寛治六年(一七五二)に至る十五代、二百年の歴史であるが、その精しいのは村上天皇以後の百五十年間である。更に委曲を盡くした中心記載は道長の一生で、全四十卷中の二十八卷を占めて居る。さて此の全部を一人の作とすれば、その書かれたのは論なく寛治六年以後と定まるべき筈であるが、此の物語の前の三十卷と後の十卷とが自ら一團を成して、その間に境界があるやうに見える所から、古來作者と成立年代とについていろ〳〵の説が立てられた。作者については、或は全部を赤染衛門の作といひ、或は藤原爲業の作といひ、或は上半赤染衛門、下半出羽辨といひ、外にまた三人作の説もある。成立年代については、或は上半萬壽五年(一六八八)以後長元七年(一六九二)以前、

下半寛治六年以後嘉祥二年(一七六七)以前といひ、或は全部寛治六年以後に成つたともいふ。前三十卷後十卷の二團對立についても、いろ〳〵の說があるが、此の物語の作者の崇拜した『源氏物語』が、最後の宇治十帖を前の四十餘帖からそれとなく分離せしめたのに倣つたのであると云ふ藤岡作太郎博士の說が穩當であるやうに見える。

榮華物語（萩野由之博士書入本）

『榮華物語』が漢文の國史、六國史の後を承けて假名の歷史を創製したのは、新機運に目覺めた新しい試みであつた。殊に當代文學の中に王座を占めた小說『源氏物語』の組織と文體とを取つて、國風の新體歷史を作らうとしたのは、歷史編成に對する一種の新らしい高雅なる趣味の發露であつたけれども此の物語には、歷史的にも文學的にも輕からざる缺點がある。眼光の偏狹なるこ

とが、その一つであらう　藤原氏一家の私事に淫して、刀伊の入寇、前九年、後三年の役の如き國家の大事件を記さぬ如きは、その甚だしき例である　偏愛不公平もその一つであらう餘りにも藤原氏本位なる媚態と褒貶とが、その著しき例である。『榮華物語』は二百年間の日本歴史と見るよりは、寧ろ道長中心の藤原氏禮讃文學と見るべきものであるがしかしながら藤原頌と見ても猶ほ甚だしき不足を感ぜしめるのは、其の表現の纖弱にして力なく獨立性の無いことである。之れを通觀して、風雅な美しい文章ではあるが、人物が粒立たず、事件が浮き上がらず、調子に迫力がなく、人を形容するに小說中の人物を用ゐて藤原伊周の美貌を光源氏の如しといひ、或は『紫式部日記』の文を我が物にして、無斷に長々と引用する如きは、此の作の見識と風格とを甚だしく引下げるものであらう。

要するに『榮華物語』は新しき意見を持つた努力の長篇であり、殊に史料の供給の點に於いては一種の寶庫ともいふべきものであるけれども、力の乏しき描寫と尊からざる風格との爲めに、歷史としても、文學としても、高き地位を許されぬものとなつたのは惜しむべきことである。またやがて現はれた『大鏡』によつて光を奪はれたのは、氣の毒なことであつた。

八

『榮華物語』を白鷺に譬へるならば、『大鏡』は隼であらう。『大鏡』の作者は、公平な眼識と、細やかな趣味と、負けじ魂と、滑稽皮肉の愛嬌と、尙ほその上に圓轉滑脫の社交性とを持ち合はせた男性であつたらしい。彼れは自身或は藤原氏であつたでもあらう。そして藤原氏の極めたる榮華を悅んだでもあらうけれども、その目に餘る橫暴に對し、殊に朝家に對し奉る傍若無人の、時としては奸策を弄して迄の橫暴に對しては、少なからず憤慨したであらう。また臭きに蓋し、醜きに日を蔽うて、ひたもの禮讃頌德を事とした先行歷史文學『榮華物語』に對しても、憤ろしき歯痒さを感じたであらう　かくして彼れは考へたかのやうに見える。自分は文筆ある者の誇りとして、又義務として、時代の正しき姿を見せた、立派な鏡ともいふべき歷史を書くであらう。藤原氏に對しても、その美しき榮華は十分に頌へつゝ同時に假籍すべからざる惡事をば容赦なく攻擊するであらう。但しその攻擊は正攻法によらずして、諧謔、反語、皮肉を交へた揶揄飜弄の變法によるであらう。文人としての紙上攻擊は、それでなくちや面白くない。だが、それをやるには、今迄の眞面目くさつた年代押しの

史實並べでは氣が利かない。『日本紀』や『榮華物語』の眞似ではつまらん。シラフでクダが捲けるものか。是れは一つ、芝居掛りにして、猿樂ふ體で、存分にあばれてやるに限る。さて其の芝居のやり方は、あの『源氏物語』の雨夜の品定めの、あれだ――婦人の上中下三階級を論ず」なんて、袴を着ては、ねッからつまらなくなる御說法が、光源氏、頭中將に雲上の太鼓通人、左馬頭に藤式部丞と、かう四人の顏を揃へて、睦言の懺悔話を並べさせると、天晴れ天下の名芝居になるではないか。自分もあれで行かう――やッぱり四人藝で。かうッと！百七十六年間の事を述べるんだから、先づしやべり役の大年寄、小年寄二人は百九十歲に百八十歲位がよい。そこへ若いのを二枚加へて、一人は青侍の相槌をうつ刺戟役、進行係、あとの端役は眼中に入れないことにして、もう一人は其等の談話を筆記する歷史家の我輩だ。これで雨夜の品定めと同じ四人、――さあ揃つたり、柝を撃て！――といふので、さて雲林院の講壇に登つたのであらうと想像する。

此の芝居制を取つた傍ら、『大鏡』の作者は、一つは便利のため、一つは一種の古典的品位を添へるために、內容を帝王篇と攝關篇とに二分した。恐らく司馬遷の『史記』が本紀、世家、列傳の三分案に基いて、帝王篇を本紀に當て、藤氏攝關篇一つに世家、列傳の二つを兼ねさせたのであらう――が、此の作者は負けじ魂の獨創屋である。『史記』に對しても、『源氏』に

對しても、うツかり借りて來たもとの種明かしなどをする人間ではない。

支那第一の歷史家の案を取り、本朝第一の小說家の試みを手に入れ、其等をばすツかり換骨奪胎して、さて彼れは此の苦心の結果を、何と名つけたものかと考へたであらう。そして『古事記』も『日本紀』もまだ負はなかつたすばらしく大きい光りのある名をつけて、『大鏡』と呼び、そして卷頭の序篇に於いて、翁二人大はしやぎで、その宣傳をして居るが、それによると、『大鏡』は史實を正しく見せる大きな鏡といふ

大鏡　菅公左遷（千葉胤明氏藏）

意味であるらしい　在來の說に、佛の大圓鏡智の意味だなぞとよく云つて居るが、さうではあるまい　また坪井九馬三博士の『史學研究法』には、歷史の一種に鏡物と云つて、古來の

治亂興廢を鑑みる爲めの教訓にするのがある。此の種の歴史の我が國に於ける最初のものは『大鏡』であると云つてあるが、恐らくさうでもあるまい。—大鏡— の意は、むしろシェークスピアが『ハムレット』の中で云つてゐるのと同じく、—自然に對して明鏡をさゝぐる— の意であらう。彼れは帝王篇と攝關列傳との間に置いた挿話の中で、

こゝらのすべらぎの御有様をだに鏡をかけ給へるに、まして大臣などの御事は、年頃闇に向ひたるに、朝日のうらゝかにさし出でたるに逢へらむ心地もするかな。……あかく磨ける鏡に向ひて、わが身のかたちを見るに、且つは影はづかしく、またいと珍しきにも似給へりや。

といひ、次ぎに

あきらけき鏡にあへば過ぎにしも
　　今行くすゑのことも見えけり

すべらぎの跡もつぎ〲かくれなく
　　あらたに見るふる鏡かも

の贈答歌を載せてゐる。此の本文の暗示で、作者自身の考へた中心意義が、大圓鏡智でもなく、資治の龜鑑でもなくして、史實を如實に映し傳へる明鏡であることが理解されるであら

う。又彼れが此の名題の下に、いかなる心構で說法を進めたかは、或は「翁らが說く事は日本紀を聞くとおぼすばかりぞかし」といひ、

世繼はいと恐ろしき翁に侍り。眞實の心おはせむ人は、などか恥かしとおぼさゞらむ。世の中を見知り、浮かべ立てゝ、持ちて侍る翁なり。

と言つて居るのを見てもわかる。彼れは諧謔まじりの中にも、此の意氣を以て、一方に藤原氏を睥睨し、兼ねて『榮華物語』を睨みすゑつゝ、此の複雜多趣味なる新歷史を書いたのであつた。

『大鏡』は道長の薨去した前々年の萬壽二年に、洛外紫野雲林院で菩提講の始まる前の退屈凌ぎに、百九十歲(或は百五十歲)の大宅世繼と百八十歲(或は百四十歲)の夏山繁樹とが、文德天皇以來の、藤原氏の方では冬嗣以來の百七十六年間の史談を試みて、參會の僧俗男女に聽かせる。その傍らで、二十歲ばかりの若侍が合槌を打ちつゝ翁等を勞はり勵ます、そして作者がそれを筆記するといふ趣向で書いた、云はゞ劇的問答式に工夫された新體の歷史である。作者については、古くは藤原爲業と云はれたが、別に道長の四男能信といふ說もあり、近年になつて、井上通泰博士の源道方說と、關根正直博士の道方の子經信說とが現はれた。能信でない事は、作の中の能信に關する記事の樣子を見ても察せられる　道方、經信の兩說も

推測で明證のある事ではない。明證の見出だされるまでは、まづ古きに從つて藤原爲業の寂念法師とすべきであらう。成立の年代に就いては、久しく萬壽二年(一六八五)の成立を疑ふものもなかつたが、萩野由之博士が、此の作の中に、道長の薨後でなければ明瞭する筈の無い諡號の事が書いてあることを見出だして、先づ萬壽四年の道長薨後に引下げられた。次ぎに『大鏡』の中に、醍醐天皇の皇后穩子を「大后」と申し、村上天皇の皇后安子を「中后」と申して居るが、これは白河天皇が御母なる後三條天皇の皇后茂子を「今后」と尊び呼ばれたのに對する尊稱であるといふ、同じく萩野博士の發見によつて、又白河天皇(一七三二―一七四五)以後に引き下げられた。また『今昔物語』の中に『大鏡』と同じ事實がほゞ同じ文章に書かれてゐるのが二三ある、その前後本末を考へると、『今昔』の方が原本らしいといふ、これも同博士の説によつて、今度は後三年役の鎭定後、即ち堀河天皇の寛治五年(一七五一)以後に引き下げられた。而して一方最下限は、高倉天皇の嘉應二年(一八三〇)に出來た『今鏡』に、『大鏡』を「古き物語」と云つてゐるので、嘉應よりは遙か以前に出來たことが明らかであり、更に長承三年(一七九四)に筆寫された『打聞集』に『大鏡』に據つた記事が少なからず出て居るので、その以前に溯り得ることも明らかである。かう押し狹めて見ると、『大鏡』の出來たのは堀河天皇の嘉保(一七五四)以後崇德天皇の大治(一七八六)頃まで

の間、大體から見て鳥羽天皇の御治世(一七六七―一七八二)十六年の前後二三十年の間であつたと考へられる。恐らく『大鏡』の作者は、『竹取物語』が、主なる人名によつて、事件を百數十年前の文武朝に擬し、『伊勢物語』が七十年前の貞都早々の時代に擬したことなどに暗示を得、作の年代にまで諧謔の手を伸べて、道長が生涯の全盛期を標準と定めつゝ、

今年萬壽二年乙丑とこそは申すめれ。

などと、とぼけたのであらう。

大鏡宣耀殿の女御（千葉胤明氏藏）

文學としての『大鏡』に誇るべき特色は、第一に、立派な國語、時代語で事實を活かして書いたことである。これは特に六國史に對し、また『榮華物語』に對しても誇り得べきことである。第二に、六國史などが記事を切れ〲に臚列したのに

對し、引きつゞけて面白く讀めるやうに書いたことである、入興可讀の風味ともいふべきであらう　第三に、劇的趣向の工夫及びその徹底である　第四に、人物事件を生かした力ある描寫である　第五に、公平なる批評である

『大鏡』の中、藝術的に見て最も優れて居るのは、小一條院敦明親王が道長の壓迫に堪へかねて、われから東宮の御位を辭せらるゝ條であらう　これは第一に、事柄が面白くして時代思想の中樞を歴々と露出して居り、第二に、東宮、皇后、道長、能信、俊賢、爲光と、誂向きの立派な人物が揃つて居り、第三に、文章臺詞が實によく出來てゐる上に、第四に、世繼がまづ『榮華物語』でも書きさうな世間流布の穩かな顚末紹介をすました所へ、若侍が、我れに異聞があると云つて、巧みに讀者に表を背せつゝ、道長の奸佞をこきおろすといふ二段組織がいかにも此の作の劇的問答式の特色を活かして居り、そのまゝ演じても立派な一幕物になりさうな出來であるが、今それを委しく說明し批評することが出來ぬのを遺憾とする　こゝには短きを取得に、道長傳の中、道隆の南院にて、香運中の道長が上位の甥、伊周と射を爭ふ條の一節を擧げるであらう

帥殿の、南の院にて、人々集めて弓遊ばしゝにこの殿渡らせ給へれ

譯

或る日帥殿伊周が、南院で人々を集めて、弓を射て遊

ば、思ひかけず怪しと、中關白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて、下﨟におはしませど、さきに立て奉りて、まづ射させ奉りたまひけるに、帥殿の矢數今二つ劣り給ひぬ　中關白殿、また御前に候ふ人々も、今二度延べさせたまへと申して、のべさせ給へりけるに、安からずおぼしなりて、「さらばのべさせ給へ」と仰せられて、また射させ給ふとて、仰せらるるやう「道長が家より御門后立ち給ふべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに、同じものの中心には中たるものか　次き

んで居られると、そこへ此の殿(道長)が見えられました思ひかけぬところへ、變な奴が來たと、兄君の中關白殿(道隆)が驚かれましたが、煙たいものには慇懃にの譬へで、それからいろ〳〵とお愛想をされまして、官位は卑いが先きに立てゝ、まづ殿に先の矢を射させられましたが、一勝負の結果は、帥殿が二本の負となりました中關白殿が、また周圍に居る取卷の人々も、帥殿に負けさせまいと思つたのでせう。

「もう二遍御延べなさいまし。」

と云つて、到頭延べることにしてしまつたので、入道殿(道長)は、むッとされて、

「では、御延べなさい。」

と云つて、改めて射るとて、先づ誓はれました

「道長が家から、帝后が立たせらるべきものならば、此の矢よ中たれ！」

と、云ふと同時に放たれると、ぽッつりです。　同じ中た

に帥殿射たまふに、いみじう臆し給ひて、御手もわなゝくけにや、的(まと)のあたり近くだによらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。また入道殿射させ給ふとて、「攝政關白すべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに初めと同じやうに、的の割るゝばかり射させ給ひつ。饗應しもてはやし聞こえさせ給へる興もさめて、事にがくなりぬ。父大臣(おとゞ)帥殿に、「何か射る、な射そ〳〵」と制せさせ給ひて、事さめにけり入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。その折は左京大夫と

るにしても、かう眞中にあたるといふことが、あるものでせうか。次ぎに帥殿が射られると、これはすッかり氣おくれして、御手もぶる〳〵された結果、的の近くにも寄らず、あらぬ虚空を射られたので、見てゐる父の關白殿が眞靑になられました。やがて入道殿が又射らるゝとて、今度は

「道長が攝政關白すべきものならば、此の矢よあたれ！」

と、第二の呪詛を放つて、さて射られると、初めと同じやうに、的の割るゝばかり眞中を射抜かれました。今までちやほやと愛想をされた興味も失せて、苦々しい氣分になる。父の大臣(おとど)は、弓を取つて立たれた帥殿に、

「なぜに射る。止(よ)せ〳〵。」

と制されて、一座がすッかり白けて了ひました。入道殿は矢を返してやがて悠々と立ち出でられました。これは殿が左京ノ大夫と云はれた時のことでありま

ぞ申し〻。——す。

雅にして同時に强き文章の調子、剛邁不屈の道長、目上上官を鼻に掛けながら弟を怖るゝ關白道隆、我儘ッ子の美男秀才伊周、それ〴〵の性格の活き〳〵した描寫、娘によつて政權を掌握しようとする外戚政策の影の力强き暗示など、此の短章は、『大鏡』の價値と新味とについて重大なる意義を教へるであらう。

平安朝の文學に對する『大鏡』の新しき寄與は一二にして止まらない　歷史と文學とを縒り合はせた新しき樣式、史實に對する嚴正なる批判、皮肉諧謔の活用、世相、事件、人物の生き〳〵した描寫、王朝文特有の優雅な味を失はずに男性的の强さを加へた文體などが、先づその主なるものであらう『源氏』以後の文學に於いて『大鏡』が王朝の雅調を基本としてその上に加へた、此の品位ある特殊の强さは『今昔物語』が粗野樸訥に磨きを掛けた强さと相對して、鎌倉文學への二つの異つた近づき方を示すものである。

此の時代の末、高倉天皇の御代に、『大鏡』の流れを汲んだ『今鏡』が現はれた。『小鏡』或は『續世繼』とも稱せられる。『大鏡』の躰裁に倣つて、問答體に後一條天皇から高倉天皇の嘉應二年に至る百四十六年間の歷史を述べたものであるが、とても『大鏡』と並べらるべきものではない

九

かくして殘つたのは日記文學たゞ一種となつた。『源氏物語』以後に於けるその方面の隨一は菅原孝標女の『更級日記』であるが、前章小說の部に於いて、彼女の作といはれる小說に附帶せしめて、一通りの說明をすましたので、こゝにはたゞ、その中から優れた文章の一節を引くにとどめる。初瀨詣をする折に宇治川の渡りで、客の多さに船人の心驕りした樣子を書いたところである。

藤原定家筆　更級日記（御物）

ひたぶるに佛を念じ奉りて、宇治の渡りに行きつきぬ。そこにも猶ほしも此方ざまに渡りする者ども立ちこみたれば、舟の楫取りたる男ども、舟を待つ人の數も知らぬに心おごりしたるけしきにて

袖をかいまくりて、顔におてゝ、竿におしかへりて、とみに舟も寄せず、うそぶいて見まはし、いといみじうすみたるさまなり　むごにえ渡らで、つく〴〵と見るに、紫の物語に、宇治の宮の女どもの事あるを、いかなる處なれば、そこにしも住ませたるならむと、床しく思ひしところぞかし　げにをかしきところかなと思ひつゝ、辛うじて渡りて、殿の御領所の宇治殿に入りて見るにも、浮舟の女君の、かゝる處にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。

彼女の筆は、人事、自然、いづれに於いても至れるものとは云はれぬ。例へば自然の特別なる場合を記すにも、

月いみじう明きに、空は霧りわたりたれど、手に取るばかりさやかに澄みわたりたるに風の音、蟲の聲、とりあつめたる心地するに、箏の琴かき鳴らされたる、横笛の吹きすまされたるは、なぞの春とおぼゆかし

といふやうな不合理な搔き寄せ描寫があつて、明るいのか、曇つてゐるのか、霧が一面におりて居るのか、空が一面に澄み切つて居るのか、印象の浮かべやうの無いのがあるが、しかしながら、處々に見どころもあつて、こゝに引いた一節の如きは、まづよい出來の標本とすべきであらう　とにかく稀有の性格を持つてゐた主人公が、珍しくいろ〳〵の境遇に出遭つた、そ

の心境の風變はりな轉々ぶりを誠實に寫したところが、此の日記の貴いところである。『十六夜日記』を望んで居るものは、『讃岐典侍日記』である。讃岐典侍は源三位頼政の女で堀河天皇の側近に奉仕した女房であつた。此の日記は堀河天皇の嘉承二年（一七六七）に於ける御不例、御崩御から諒闇を通ほして鳥羽天皇の御大嘗會に至るまでを委曲に寫したものであ る。鳥羽天皇の御代の始め數年の間に出來たものらしく、恐らく『大鏡』と前後して書かれたものであらうが、力の無い冗漫なもので、先だてる女流日記の雄篇と肩を並べ得るやうなものではなかつた。

女流の和様日記とは全く系統を異にしたものではあるが、鎌倉期の新らしい文學との關係から見て、最後に一瞥を與へねばならないのは、漢文日記――といふよりは漢字ばかりを用ゐた和漢折衷の日記――の行方である。王朝の中期以來公卿達の間に行はれた日記は、不思議な和様漢文の例へば小野宮右大臣實資の『小右記』、或は藤原道長の『御堂關白記』に見るが如き、悠長な平和氣分を漂はしたものであつたが、王朝の末期に入るに及んで、いつしか風霜の氣を帶びて來た。武家時代が近づいて、刀槍の影、矢叫びの音が、次第に長袖者流の文字にも影響して來たのであらうが、そのよき代表は關白藤原兼實の日記『玉葉』である

藤原兼實筆蹟

『玉葉』は後に『玉海』とも呼ばれた。二條天皇の長寛二年(一八二四)から土御門天皇の正治二年(一八六〇)に至る六代、三十七年間の日記で平治の亂の少し後から源平の爭亂、平家の滅亡を經て鎌倉の初期までを含んで居るが、長袖者流の操る平和な文字の間に、物騷な世情が潮騷のやうにひた〳〵と押寄せて來る樣子が、何とも云はれぬ面白さである。

十日辛酉天晴。今曉入道相國(淸盛)入洛。武士滿洛中。世間又物騷云々。(治承四年五月)

簡單ながら、そゞろに源平爭亂の、再び起こりかけて來た物騷さを感せしめる。

九日庚子天晴。靜賢法印來、談世間事等。……凡賴朝爲體、威勢嚴肅、其性强烈、成敗分明、理非斷決云云。今度獻使者所觸申者、三郞先生義廣上洛也。又義仲等不遂平氏、亂朝家、尤奇怪、而忽被行賞之

條、太無謂云々。 申狀等有其理歟。（壽永二年十月）

大頭公の姿が突然大寫しに出た丈でも、讀者はふと目を瞬るであらう 況んや先陣走狗の役目を勤めた旭將軍が、やがて後ろに控へた奸雄の爪牙にかゝつて斃られんとする兆候の見え始めたるに於いてをや。

十日己巳天晴。 入夜藏人右衛門權佐定長來仰。 院宣云、平氏首等、不可被渡旨思食而九郎義經、加羽範賴等申云、被渡義仲首、不被渡平氏首之條、太無其謂。 何故(不？)被渡平氏哉之由殊欝申云々。 此條如何可計申者、申云。 論其罪科、與義仲不齊、又爲帝外戚等。 其身或昇卿相、或爲近臣、雖被遂誅伐、被渡首之條、可謂不義云々

（壽永三年二月）

平家に對する復讐の念に燃えて平等を主張する義經、範賴と、平常の道理を說く月輪關白との詰開きは、吾等をして手を汗を握らしめるものがある『玉葉』は長袖の日記であるから無論戰亂に直面した記事はないが、その間接に得た聞書にも、やはり月卿雲客の間に活世間の波動の傳はつて來た特殊の趣が見えて、王朝眞盛りの公卿日記とは、すツかり違つた風味を感ぜしめるものがある。 またその文章は四角な漢字だけから成立つては居るものの、讀み下して耳に訴ふれば、やはり一種の日本文で、『古事記』や『靈異記』が、總漢字でありな

から、國文であるのと、ほゞ似たるところがある　たゞ日記の習ひ、藝術的には無用な行事や人名などが多分に介在して居るので、文學的讀物たることは出來ぬが、それらの夾雜物を除き去つて、精粹を揃へるならば、優に一種の藝術品たることが出來るであらう。

『玉葉』と殆んど同時に出來て、全く違つた武人の立場から同じ世態を寫した漢文の日記は、『吾妻鏡』である『吾妻鏡』は源頼朝が兵を擧げた治承四年から惟康親王將軍の時代までの八十七年に亘る鎌倉幕府の日記である。其の初めの部分は多分頼朝に近侍してゐた文筆者が書いたのであらう、林道春の想像した通り、その中に或は大江廣元などの筆に成つたところがあるかも知れぬ。『吾妻鏡』は普通鎌倉時代の史料とされ、文學としても鎌倉期に取り入れられるのを常とするが、頼朝擧兵の治承四年(一八四〇)から幕府成立の文治二年(一八四六)までの七年間は平安朝の領分に入るべき筈で、已に文治三年に成つた『千載和歌集』が平安朝の文學として取扱はるゝ以上、其の日〳〵に分割して書かるゝ日記の平安朝の部分が、その朝の領内に入るのは當然のことであらう。

『吾妻鏡』は『玉葉』の如き一種の事實日記で、空想の文學ではない。また備忘を目的とした記錄で、娛樂のための讀物ではないから、文學として見ては、大部分が無味乾燥なる夾雜史料であるが、しかしながら其の選まれたる部分について見ると、その簡樸剛爽の文致には、

新興時代の氣息を聞くが如く、鎌倉武人が銕の如き筋骨心膽が凝つて文字となつたかと思はれるところがある。もし「玉葉」を以て微かに武家時代を覗いたものとすれば、これは新時代の牙營に入つたものといふべきであらう。

吾等はまづ源頼朝が、旗揚げの日を定めて、宗徒の身方を語らふ部分を見るであらう。

六日。丙戌。召邦道、昌長等、於御前有卜筮。又以來十七日寅卯刻、點可被誅兼隆之日時訖。其後工藤介茂光、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、宇佐美三郎助茂、天野藤内遠景、佐々木三郎盛綱加藤次景廉以下、當時經廻士之內、以殊重御旨輕身命之勇士等、各一人召抜閑所、令議合戰間事給。雖未口外、偏依恃汝、被仰合之由、毎人被竭慇懃之御詞之間、皆喜一身抜群之御芳志面々欲勵勇敢。是於人雖被禁獨歩之思、至家門草創之期、令求諸人之一族給御計也。然而於眞實之密事者、北條殿之外、無知之人云々。

(治承四年八月)

漢字で書いてはあるが、全く時代振の國文である。而して行文の間に武人の魂が宿つて、君臣金鐵の契りの成立つ場面を、目の前に見るやうである。

次ぎに頼朝が土肥の杉山に穩るゝ所を、讀下し式に書きかへると、かうである。

廿三日。……數千の强兵武衞(頼朝)の陣を襲ひ攻む。而して源家の從兵を計るに、彼れの

大軍に比べ難し。皆舊好を重んずるに依つて、只だ命を輕んじ死を効す。然る間佐那田余一義忠、幷びに武藤三郎及び郎從豐三家康等、命を殞す。景親彌〻勝に乘り、曉天に至る。武衞杉山の中に逃れしめ給ふ。時に疾風心を惱まし、暴雨身を勞かす。景親之れを追ひ奉り、矢石を發するの處、家義景親の陣中に相交はり乍ら、武衞を遁し奉らんが爲めに、我が衆六騎を引き分けて景親と戰ふ。此の隙を以て、杉山に入らしめ給ふ

（治承四年八月）

梶原平三景時仰せに依つて、初めて御前に參る。去年窮冬の頃、實平相具して參る所也。文筆に携はらずと雖も、言語を巧みにするの士也。專ら賢慮に相叶ふ。

實に素朴な、氣の利かぬ文章であるが、武人の魂は、『平家物語』や『源平盛衰記』よりも却つて此の中に於いて、さながらに現はれてゐるやうにも思はれる。賴朝が始めて梶原景時を召したところを、

と書いてある。別に武人的の事柄といふではないが、賴朝と景時と君臣値遇の心持を是れ以上に寫すことは出來まいと思ふほど、妥當に書いて居る。

もう一つ、賴朝が池の尼の恩に報ゆる爲めに、尼の子大納言賴盛を鎌倉に招いだ、その時に賴盛が、當時賴朝に親切を盡くした彌平宗清を伴はうとしたのを、宗清の辭した所を、かう書

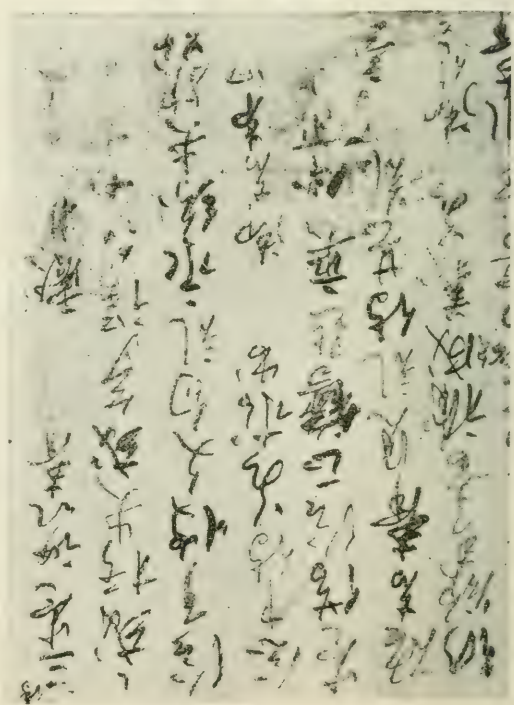
いてゐる。

此の宗清は池禪尼の侍也。平治に事有りし刻み、志を武衛に懸け奉る。仍つて其の事を報謝せんが爲めに、相具して下向し給ふべきの由、仰せ遣らるゝの間、亞相城外の日、此の趣を宗清に示すの處、宗清云はく、戰陣に向はしめ給はゞ、進んで先陣に候ずべし。而るに倩ら關東の招引を案ずるに、當初の奉公に酬いられんが爲めか。平家零落の今、參向の條、尤恥ぢ存ずるの由を稱へ、直ちに屋嶋の前の内府に參る。（元暦元年六月一日）

これが漢文風の原文には「宗清云、令向戰場給者、進可候先陣。而倩案關東之招引」といふ風に書いて居るのであるが、漢文にはなつて居らず、國文としても稚拙なものであるが、それでゐて、宗清が武士道の表現は上もなく妥當で、迫力は無類である。此の特殊無類な面魂の文章を、文學史より除き去ることが出來るであらうか。

吾等は『吾妻鏡』を以て我が王朝文學史の最後を飾ることを、面目と思ふ。

吾等は最後にもう一つ、鎌倉の畫期的なる主要文學『方丈記』の先蹤を成した點から見て、慶滋保胤（寂心法師）の「池亭記」を擧げたいと思ふ。保胤寂心は古く村上、圓融の朝に榮えた詞人である。而して「池亭記」は圓融天皇の天元五年（一六四二）に成つた漢文である。

今にして過ぎた昔の漢文の短篇を擧げるのは穩かではないが、次期の大作を喚び起した特

殊の因縁についていふのである。左に讀下し式に書きかへて、「池亭記」のほんの一部分を擧げる。

春は東岸の柳あり、細煙嫋娜たり　夏は北戶の竹あり、淸風颯然たり。秋は西窗の月あり、以て書を披くべし。冬は南簷の日あり、以て背を炙るべし。予行年漸く五旬に垂んとして適〻小宅あり……

若し餘暇あれば、僮僕を呼び、後園に入り、以て糞し、以て灌ぐ　我れは吾が宅を愛して其の他を知らず。

慶滋保胤消息

の如き、まざ〱と『方丈記』を思はせるところがあるが、之れを見ても、此の漢文の小篇が次期の大作との有機的關係に於いて、特殊なる文學史的價値のあることを認むべきであらう。

原富太郎氏藏（國寶）

十

吾等は一時代の持つ文學史的價値を定むるに、一承二成三傳一の三標準があると考へる。一承一は如何に前代を承け繼いだかの問題である。一成一は如何なる新らしき事業を成し遂げたかの問題である。而して一傳一はいかなる遺産を次ぎの時代に譲り渡したかの問題である。

吾等はまた考へる。一時代が前代の文學を承け繼いで、其のまゝ持ちこたへて行けば、一通りの恥かし

からぬ文學時代と云はれるであらう　前代以上に文運を振ひ起こせば、名譽の興隆時代と云はれるであらう　未曾有の新らしき文學を、たとひ一種でも興せば、面目ある時代と云はれるであらう。偉大なる名著大作を、せめて一篇でも出だせば、同じく面目ある時代と云はれるであらうと、

文學の方面より見たる平安朝は、是等の大部分を保有して、更に其の上に出た時代であつた。平安朝が奈良朝より承けたる文學は和歌(萬葉集)と、歷史(古事記と日本紀)と、風土記と、氏文と、祝詞と宣命と漢詩(懷風藻)とであつた。平安朝は和歌に於いて、長歌及び旋頭歌の價値を墮したけれども、猶ほそれらの形式を維持して、また新時代獨自の殊風を添加したとも見られる。短歌に至つては此の時代特殊の種々相を發揮したるのみならず、歌人、歌集、歌論、歌謠の各方面を綜合して、古今無比の盛觀を呈したのであつた。歷史は、漢文の方では『日本紀』に對して質に於いて劣つては居るけれども、とにかく『續日本紀』以下の五國史が出來た。國文の方では全く體樣を異にして、『榮華』及び『大鏡』等の、文學的に趣向された名作が現はれた。風土記、氏文、祝詞、宣命は、類似の作が多少はあつても、先づ潔く無しといふのを至當とすべきであらうが、これは時勢流行の變化の爲めで、その方面に於ける平安朝文人の素質力倆の低下した爲めではない　漢詩は、唯だ一つ百二十首を有する『懷風藻』

に對して、『凌雲集』『文華秀麗集』『經國集』以下無數の詩文集があり、これは量、質のいづれもに於いても比較を絶した相違であつた

前代を承けた方面は右の通りであるが、此の時代の創始では、第一に物語の小說があり、次ぎに日記があり、隨筆があり、歷史物語、說話集があつて、その中には國寶文學として日本の誇りとなるものもあつた。『伊勢物語』『枕の草子』『源氏物語』『大鏡』、これら數篇の名が、もう此の時代に創始された文學のいかに偉大なるかを暗示するであらう　同時に、一種類の創始だにあるに、三種四種の創始を持ち、しかも其の各〻に、古今に稀有なる、或は世界に誇るべき大作、傑作を持つて居ることが、いかに平安朝文學の偉大なるかを明示するであらう

鎌倉文學に對する相傳の關係については、そのまゝの摸倣ともいふべき擬古の小說については暫らく云はず、『今昔物語』の一部の軍記に對する、『源氏』その他の物語が、『平家物語』の優美な古典ぶりの部分に多くの暗示を與へたる、日記が殆んど連續ともいふべき程度に文體を手渡ししたる、殊に和歌が、『古今』以來の諸傾向を集成して、『千載』より『新古今』に推移せしめたる、あの源平の爭亂期に、よくも斯程までにと驚かるゝばかりの讓り渡しぶりで、まづ最も美しき過渡期の姿を見せたものといふべきであらう

平安域に首都を定めさせられた桓武天皇は、或る文人に想像された神託に於いて、其くも

儒佛二道に神明の左右を計らせて、大いに新文化を興隆しようと仰せられた　佛教では、傳教、弘法、漢學では豐年、岑守、眞道、篁等が、先づ海嶽の恩寵を蒙り、無數の龍象文學がその後を繼ぎ、それ〴〵の道に於いて此の朝の四百年を輝かしたのは絶大の偉觀であつたが、同時に此の二大文化が假名の國文學の左右を計つて絶大の結果を現はしたことは、已に吾等が『源氏物語』や西行圓位の歌などに於いて見たところである。

　桓武天皇はまた、平安奠都後六ヶ月目の延暦十四年四月の曲宴に於いて、

　古の野中ふる道あらためば
　　あらたまらむや野中古道

といふ古歌を誦せさせられ、また百濟王明信に代はつて、

　君こそは忘れたるらめにぎ玉の
　　たわやめ我れは常の白玉

と詠ませられた。　聖唱に對する私釋は實に畏れ多いことではあるが、天皇は新都奠定の初めに於いて、野中の古道にも譬ふべき奈良朝の素樸の道、『古事記』『萬葉集』に見えた剛健な樸野の道を改めようと思はせられたのであらう。　而して之れと共に明信に代はらせられた御製を通ほして、美しいたわやめにも似たる優麗典雅の文化、それを此の都、此の朝の特

殊不變の常道としようと望ませられたのであらう。簡樸なる野中の古道を改めて、たわやめ、白玉にも似たる優美の常道を開拓し、成就する。これが若し桓武聖帝の望ませられたところであり、同時に平安時代の希求願望したところであつたならば、平安朝の文學はいみじくも此の豫願された理想を實現したものと云はねばならぬ。吾等は吾等のたふとき文祖、空海、篁、遍昭、業平、道眞、小町、貫之、清少納言、紫式部、俊成、西行等を代表とする多くの歌人文人達のすぐれた天禀と尊き努力とによつて、奠都聖帝の大御心を成就し、前朝を立派に紹ぎ得たるのみならず、光輝ある當代の文業を大成して、新しき時代に傳へ得たことを感謝するものである。

平安朝文學史　下卷　終

索　引

ア

イ

ウ

エ

オ

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ワ

キ

ヱ

ヲ

昭和十四年七月十三日印刷
昭和十四年七月十九日發行

日本文學全史卷四
平安朝文學史　下卷

不許複製

著者　五十嵐力

發行者　大野孫平
東京市麹町區九段一丁目七番地
株式會社東京堂専務取締役

印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町一〇八番地

發行所　東京市麹町區九段一丁目七番地　株式會社　東京堂
振替口座東京二七〇番
電話九段(33)自四一一〇番至四一一九番

製本　中村庄吉

(共同印刷株式會社印刷)